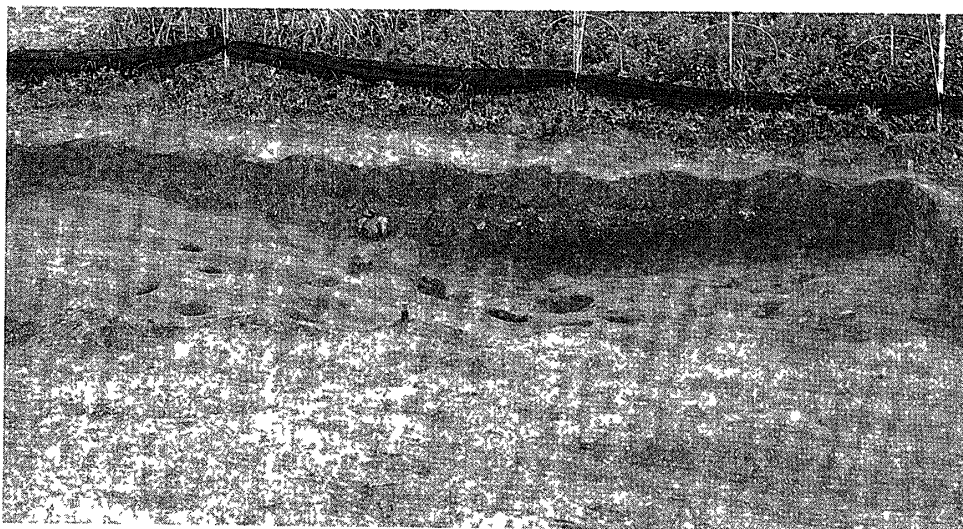




◀遺跡遠景
(北側より)



◀S・Tトレンチの層序



◀P-26クリット
第Ⅱ層出土の遺物

序

沖縄本島南部の糸満市に所在する真栄里貝塚は、同遺跡出土の土器や石器の性格から弥生前期に比定される公算が大きくなり、沖縄考古学界は今、弥生文化の南島地域への波及も視野に入れねばならない新たな局面を迎えつつある（註1）。

弥生文化の南島地域への波及については、弥生文化を構成する遺物や遺構等の確認はいうにおよばず、その定着の過程も検証していかねばならないか、そのためには有効な資料の蓄積が必要であり、学界の承認を得るにはなお時間が必要かと思う。しかし、関連資料は徐々に増加しつつあり、遠くない将来において朗報に接することかてきるものと期待している。

ところで、弥生文化の当地方への波及・受容の問題を解決するには、その直前の段階、つまり縄文晩期後半、特に終末の状況も検討する必要がある。換言すれば、わか南島地域に同文化を受容する条件が整っていたか否かの検証である。縄文時代の狩猟・漁撈・採集中心の生活形態から稲作農耕社会への移行は質的転換を意味するし、このような転換が可能であったかどうかの吟味は不可欠だからである。

近年、当地方の縄文晩期後半の時期に新たな動きのあったことが判明しつつある。つまり、九州地方からの新たな波及であるか、これについては以前にも何度かふれたことがある（註2）。沖縄地方における縄文晩期遺跡の調査件数は現在ではかなりの数に上っている。しかし、そのような調査件数とは裏腹に、内容解明の点でははなはた遅れが目立ち、土器型式にしても室川上層式土器と宇佐浜式土器の二型式が知られているだけであった。これ

らの土器は晩期前半を代表する型式であるか、近時、あらたに仲原式が設定され、ようやく後半の一点が判明するようになった。

以上はいずれも在地土器で、この種の遺跡は沖縄諸島の場合、一般に内陸部の丘陵上かそれに連なる緩斜面あるいは平地に形成され、海岸寄りの場合でも宇佐浜遺跡のように臨海砂丘地ではなく、その背後の丘陵上に形成される傾向が強い。

ところで、前述のように在地土器とは別に近年、九州晩期後半の土器文化が南島地域に波及している事実が知られつつあるか、その端緒となったのか渡嘉敷島阿波連浦貝塚における試掘調査（註3）である。同貝塚出土の土器には黒川式系と認定できるものか2点含まれていた。

この種の九州系土器は従来も検出されてはいた。しかし、底部が尖底器形であることから正体を見失い、性格把握の点で正しく認識することかてきなかったという経緯がある。ところで、阿波連浦における九州系土器の確認以後、上記のような視点に立って従来の資料を再度チェックしてみると、この種の九州晩期系に含めうるものか結構出土しているのである。従って、これまで単純に仲縄編年の後期として捉えてきた遺跡や遺物について見直し迫られており、現在その見直し作業を急いでいるところである。この種の南下晩期土器文化の遺跡は海岸砂丘地に立地するという特徴をもっている。

前述のような遺物・遺跡のあり方から、沖縄諸島にも九州地方晩期縄文文化の波及しているのはほぼ確実とみられ、目下の最大関心事となっている。おそらく、このような晩期九州文化の南漸があって、そしてその延長線

上に弥生文化の波及かあるのではないかとみている。つまり、まず九州晩期後半の文化が波及し、それによって九州地方と同一あるいは類似の文化状況が沖縄の側にもつくられ、弥生文化受容の基本的条件が整備され、しかるのち稲作を伴う新たな文化が波及するという図式であるか、もし、当地の晩期後半が九州と類似の文化状況下にあったならば、後続の弥生文化もそれほど抵抗なく受入られたのではなからうかと推測されるのである。九州地方晩期縄文文化の南島地域への波及は現在の資料からすると黒川式以後と考えられる。

ここで注目されるのか黒川式土器文化の性格である。この土器は凡九州的な広がりを持ち、九州地方における影響力は大きいものがあるといわれる。このような観点から黒川式土器文化の性格解明は九州はかりでなく、わか南島にとっても重要かつ緊急の課題だと考えられる。

この種の問題解決のためにも、まず、南島における晩期後半の実態を掌握する必要がある。この観点から今回、その手掛りを得るために実施したのか兼久原遺跡の発掘調査であるか、次項以降に述べるように本遺跡は大半が破壊され、末端部かわすかに残存するという最悪の状態であった。しかし、重要な資料を若干得ることかてき、目的の一歩を果たすことかてきた。ここに、兩年度における発掘調査の概要を報告したい。

発掘および帰学後の遺物の整理、実例図の作成、報文の執筆等の指導には本学非常勤講師の中村愿かあたり、下記の分担に従って作業を進めた。なお、本文の執筆者名はそれぞれの文末に記した。

トレンチ H・M・N 大 濱 憲 二

トレンチ O 知 念 奈美子

トレンチ P・Q 多和田 真 喜

トレンチ S・T 金 城 利 枝

石器等の石質については沖縄県教育センター主事の大城逸朗氏、貝類の同定には県立真和志高校教諭知念盛俊氏のご指導をいただき、現場では県文化課の安里嗣淳・金武正紀両氏並びに宜野湾市教育委員会の呉屋義勝氏から懇切な助言・協力をいただいた。

発掘に際しては、地主の仲村盛仁・松門盛光・宮城利弘・仲村盛真・松門信牛・石川真栄・宮城繁政の7氏からご快諾をいただき、また、安里政彦・佐喜真博の両氏は快く宿舎を提供された。

以上の方々のご協力により、予定とおり、無事調査を終了することかてき、かつ一応の成果を挙げることかてきた。ここに明記して感謝申し上げる次第である。

なお、第1次調査の成果については昭和59年度の九州史学大会（於九大）において口頭発表（4）を行ったので、付記しておく（高宮、1985年8月）。

註

- 1 小田富士雄「沖縄における九州系弥生前期土器—真栄里貝塚遺物の検討—」『南島考古』第9号、沖縄考古学会、1984
- 2 高宮廣衛「沖縄編年のいわゆる後期遺跡について—弥生文化との関連において—」『日本史の黎明—八幡一郎先生頌寿記念考古学論集—』六興出版 1985
- 3 「縄文晩期の土器、渡嘉敷村阿波連浦貝塚で出土」『沖縄タイムス』1980年6月19日
- 4 高宮廣衛・中村 愿「沖縄県宇地泊兼久原遺跡の調査概要」『九州史学会大会公開講演・研究発表要旨』昭和59年

I 位置と環境

宇地泊兼久原遺跡は沖縄本島の中部と南部の境目、やや中部よりの西海岸に位置する砂丘遺跡である。行政の上では沖縄県宜野湾市宇地泊 896～899 番地に所在する。

略南北に細長く延びる沖縄本島の地勢は、北部地域の古世代や中世代から新世代第三紀にかけて形成された数百メートルの峰々で構成されている。そして、山地がそのまま海岸線に迫るあたりに、わずかな平野部をもつものに対し、中・南部は第四紀の隆起石灰岩（琉球石灰岩）の数段の段丘からなり、標高百メートルを最上段として個々の段丘はフラットな面をもちながら海岸線へと移行している。

沖縄本島はいわゆる北高南低の地勢を呈しており、先史時代の人々の痕跡も、北部では海岸線の狭い沖積平野部にかきられるのに対し、中・南部においては、各段丘の縁辺部や崖下に、時期を異にした住み分けの様相が見られ、一見、遺跡の数とともに盛行しているかのように見受けられる。

中部の琉球石灰岩は、沖縄本島の脊梁の軸線に対し、全体的に西に傾斜しており、それに起因する段丘の縁辺部下段や西側海岸線沿いに湧水が点在し、それから派生する河川も西流しながら、東ノナ海にそそいでいる。宇地泊兼久原遺跡の位置する宜野湾市は標高100 m の脊梁部に、北東方向に長さ6 km、南東方向に幅2 km の単調で広大な石灰岩台地をもち、そこには、米海軍の普天間飛行場が位置している。この保水性のよい石灰岩は下層の基盤にあたる島尻層群のノルト（クチャ）との不整合面に地下水を作り、西側段丘下の

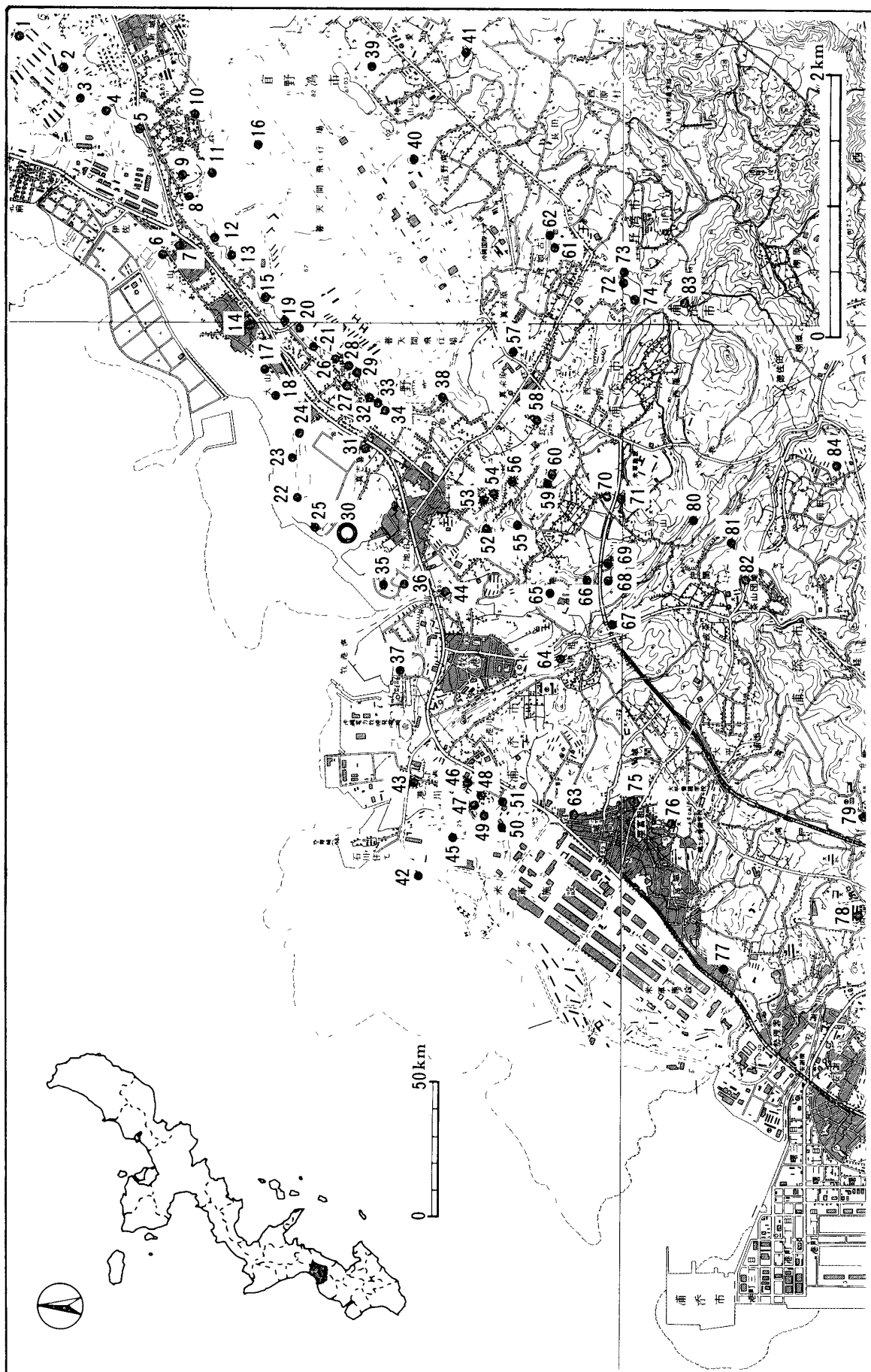
至るところに湧水地（カー）をかもしたしている。その数は67箇所におよび、本島内においても水資源の豊富な地域にあたり、最近まで生活用水をはじめ、海岸線の沖積平野部には水イモの田園が北4 km の北谷町の境目までつづき、生産高の60％を誇っている。また、清涼飲料水の工場も当地に位置し、その恩恵にあずかっている。

当地域は、先史人の生活の痕跡も多く、『宜野湾市の遺跡』や『うらそえの文化財』を見ると、散布地を含め84箇所の遺跡が確認されており、遺跡の宝庫でもある（第1図）。

南隣の浦添市との間には東から西に流れる牧港川があり、両市の境界になっているが、その川の生い立ちは古く、石灰岩の断層の切れ目に起因するらしく、対岸の浦添市側には切り立った断崖を走らせている。浦添市には地の利をうまく取り入れた、伊祖クスク・浦添クスクなど、琉球王朝（中山）出自の著名なクスクがたたすみ、比屋良川と合流する河口は牧港と称され、首里城に遷都される15世紀ころまで、海外交通の拠点として活用された痕跡を残している。

宇地泊部落は牧港河口の右岸に位置し、古くから当部落民は、この牧港を拠点に毎事に従事したらしく、それに関する伝承を古老は伝えている。

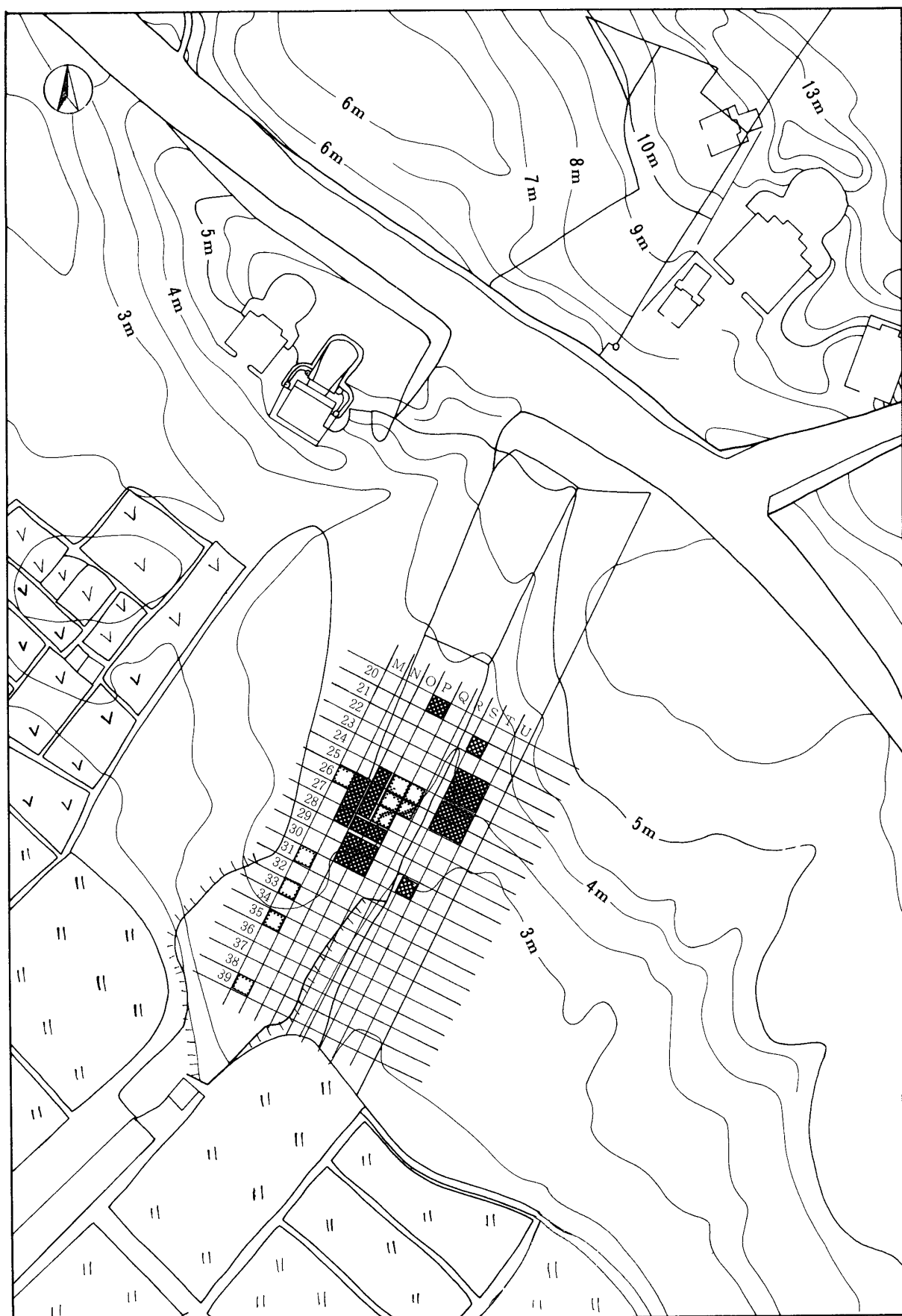
宇地泊兼久原遺跡は宇地泊部落の北側に位置している。河口の右岸には標高十数メートルの石灰岩段丘の台地が二箇所、東ノナ海上に突出した形態をしており、その突出部の北側には旧真志喜部落、南側には宇地泊部落が



第1図 宇地泊兼久原遺跡と周辺遺跡

	史 跡 名			史 跡 名			史 跡 名	
1	菩天間下原洞窟遺跡		29	大山富盛原南方遺跡		57	佐真下ナカサクカマ青磁出土地	
2	安仁屋トゥノヤマ遺跡		30	宇地泊兼久原遺跡		58	真栄原アカリイサカマ遺跡	
3	新城下殿遺跡		31	真志喜石川遺物散布地		59	嘉数トゥノヤマ遺跡	
4	喜友名北方遺跡		32	真志喜遺跡		60	嘉数遺跡	
5	喜友名貝塚		33	真志喜富盛原遺跡		61	我如古ヤクノカマ遺跡	
6	大山名利瀬原遺物散布地		34	真志喜蔵当原遺跡		62	我如古クスク遺跡	
7	大山洞窟遺跡（旧石器）		35	宇地泊ヒートゥモー遺物散布地		63	コウクスク	
8	伊佐上原遺跡群		36	宇地泊遺物散布地		64	伊祖城	
9	喜友名前原遺跡		37	牧港第二貝塚		65	真久原遺跡	
10	喜友名スハタキ遺跡		38	大謝名久永地原遺物散布地		66	チチフチャー貝塚	
11	喜友名ウフノー遺物散布地		39	赤道渡呂寒原遺跡		67	伊祖の高御墓	
12	大山岳之佐久原北方遺物散布地		40	宜野湾クノヌウタキ遺跡		68	当山クラカー散布地	
13	大山岳之佐久原南方遺物散布地		41	愛知ウフトーモー遺跡		69	当山洞穴遺跡	
14	大山後原遺物散布地		42	嘉門貝塚		70	嘉数テラカマ遺跡	
15	大山ウフオーフ遺物散布地		43	東空寿遺跡		71	嘉数前原遺物散布地	
16	喜友名アノ、一洞窟遺跡		44	牧港貝塚		72	我如古ヤクノカマ遺跡	
17	大山後原遺物散布地		45	港川散布地		73	我如古クスク第二洞窟	
18	大山水賀志原遺跡		46	下港川遺跡		74	我如古クスク遺跡	
19	大山宇久保原遺跡		47	港川貝塚		75	親富祖第二遺跡	
20	大山勢頭原遺跡		48	第二下港川遺跡		76	親富祖遺跡	
21	大山第三洞窟遺跡		49	城間第一洞穴		77	仲西貝塚	
22	真志喜荒地原遺跡		50	城間第二洞穴遺跡		78	内間遺跡	
23	真志喜安座間第一遺跡		51	城間第三洞穴遺跡		79	尺岬ククス	
24	大山樋川原遺物散布地		52	嘉数内城原洞窟遺跡		80	ようとれ北方散布地	
25	真志喜クスクヌハナ遺跡		53	大謝名前原遺物散布地		81	浦添城	
26	大山富盛原北方遺跡		54	大謝名黄金森クスク遺跡		82	浦添原遺跡	
27	大山前門原遺跡		55	嘉数ウチクスク遺跡		83	拝山遺跡	
28	大山貝塚		56	嘉数比屋良川沿い遺物散布地		84	ノノクスク	

第1表 周辺遺跡の地名一覧



第2図 地形実測図 (1/750)

は一次調査区
 は二次調査区

それぞれ位置している。両部落の間には海岸砂丘の沖積低地が広がり、その南面する緩斜面に宇地泊兼久原遺跡は立地している。遺跡の前面には、ティーチカーやウンアミンカーなどの湧水から流れる小川が西流し、この一帯も水イモの田園風景が広がっている。

北背後の段丘には真志喜中学校が位置し、段丘下には台地から流出した赤土（島尻マーノ）を砂地が覆うように重なって、遺跡の傾斜面を形成している。その結果、砂地は遺跡の背後では薄く、前面にゆくにしたい厚くなる。（中村）

参考文献

小西健二 「琉球列島（南西諸島）の構造区分」 『地質学雑誌』第71巻第840号 日本地学会 1965年
中川久夫 「琉球列島新生代地史の諸問題」 『琉球列島の地質学研究』第2巻 木崎甲子郎編 1977年
木村政昭・杉野静弘 「沖縄本島中城湾の音波検査——中城トーム構造について——」 『琉球列島の地質学研究』第6巻 沖縄地学会編 1982年
氏家 宏 『ノリス沖縄の自然5 琉球弧

の海底』 1985年 新星図書出版
宮城栄昌・高宮廣衛 『沖縄歴史地図〈考古編〉』 1983年 柏書房
角川日本地名大辞典編纂委員会 「47 沖縄県」 『角川日本地名大辞典』 1986年
宜野湾市教育委員会 『宜野湾市の遺跡』 宜野湾市文化財調査報告書 第4集 1982年
浦添市教育委員会 『うらそえの文化財』 浦添市文化財調査報告書 第1集 1980年

Ⅱ 調査の概要

1 調査にいたる経過

調査は1984年と翌85年夏の2回にわたり実施した。

トレンチは予備調査の際、遺物が比較的分布していた箇所、しかも旧地形の状態をととめていると思われる丘陵部を中心にもうけた。クリットは2×2mを単位とし、東西軸をアルファベット、南北軸は算用数字をあてた（第2図）。

第1次調査は1984年8月6日～8月24日までの19日間おこなった。途中台風10号の接近や通過によって、終了予定日か5日ほどおくれた。

まず、遺跡の南北の範囲を確認するため、Mトレンチに飛石状に5か所テストピット（M-26、M-31、M-33、M-35、M-39）を設定し、各クリットごとに発掘をおこない表土下約2.5mまで掘り下げたが、全体が攪乱を受けており、しかも地下水の流入がみられたため、そこを放棄した。8月10日からは東側のP-20クリット、さらに8月13日からはP-25クリットを設定し発掘作業を進めた。

P-25クリットでプライマリーな包含層を確認できたので、その周辺部に拡げることと

し、P-26、P-27、Q-25、Q-26クリットをもうけ、第1次調査の全力を投入することとした。

第2次調査は1985年9月3日～9月17日までの15日間実施した。たまに雨天の日もあったか、調査日程を狂わすほどではなく、予定の日程で終了することかてきた。

第1次調査の結果から、P・Qトレンチの北東側と南西側に包含層かのひることか予想されたので、西方向にはN-26・27・28クリット、O-25・26・27クリット、さらに南側方向へO・P-28クリット、O・P-29・30クリットをもうけ、包含層の拡かりを確認する

ことにつとめた。

北東側にはS-21クリット、S-30クリット、T-23クリットを設定した。S-21・30クリットは攪乱を受けていたので放棄し、プライマリーな包含層の残るT-23クリットを中心に、その南側を集中的におこなうこととし、S・T-23・24クリット、S・T-25・26クリットの4×4mの2か所へ拡張した。S・Tトレンチで径4mほどの半円形状の落ち込みか2基確認され、円形竪穴住居址の可能性が考えられ、東側へ拡張することを考慮したか、地主との関係や調査の日程上、次回に回すこととした。(金城)

2 調査の組織

第1次発掘調査(1984年8月6日～同年8月24日)

調査責任者 高宮廣衛・中村 愿
実習生

玉城安明・下地 傑・安里和美・大城広江・仲村ゆりか(以上4年)、多和田真喜・仲宗根 求・宮里信勇・古堅宗明(以上3年)、伊礼清忠・砂川恭成・野波 勉・玉城千秋・金城利枝(以上2年)

特別参加

大吞善晃(九州大学学生)・古堅勝美(中国大考古学研究会)

第2次発掘調査(1985年9月3日～同年9月17日)

調査責任者 高宮廣衛・中村 愿
実習生

玉城安明・下地 傑・仲宗根 求・宮里信勇(以上4年)、伊礼清忠・砂川恭成・野波 勉・宮良泰作・金城利枝(以上3年)、大

浜憲二・知念奈美子・金城 弘・松堂 敦
(以上2年)

特別参加

大城 剛・島袋 洋・照屋 孝・山内盛尚・下地安宏(以上O・B)、与那嶺 豊・山岸伯安・山城保勝(中国大考古学研究会)

Ⅲ 調査の内容

1 層 序

第1・2次調査の結果、旧地形の状態をととめていると思われた、南北に延びる砂地丘陵部の大半は攪乱を受けていた。その範囲はMトレンチ、N-26～28クリットを斜めに横切る南西部から、O・P-28クリット以南の地域に広がる。攪乱部は50cm～1mほどの石灰岩礫が無造作にみられ、そのすき間には赤土粘土層がブロック状にみられることから、一見して区別できた。また、攪乱部の層序は、Mトレンチで第Ⅰ～第Ⅴ層に区分できることから、局所的な攪乱ではなく、大規模な採砂後、廃棄土砂を投棄したものと考えられる。

プライマリイな包含層はO・P・Q-25

～27クリット、S・T-23～26クリットの範囲に辛うじて存在していた。基本的な層序は耕作土の第Ⅰ層で、背後の北側から流入した赤土を含む暗褐色粘土砂層、貝殻を多量に含む文化層の淡灰褐色粘土砂層の第Ⅱ層、無遺物の基盤砂層である黄褐色砂層の第Ⅲ層に大まかに分けることかてきる。文化層の第Ⅱ層は、特に貝殻の集中するO-25～27クリット、P・Q-25・26クリットの中央部などは、木炭片を多量に含み黒色を帯びている。S・T-23～26クリットの東壁面を中心とする落ち込み部分の包含層は、砂利層と砂層の相違、遺物の大小や量により区別でき、分層が可能で、よってS・Tトレンチは4層に区分した。

2 土器分類の基準

全クリットの土器総数は、6,727点で、その内訳は口縁部228点、胴部6,453点、底部46点である。

器種は、鉢形土器・壺形土器・マリ形土器の3種に分けられる。鉢形土器の器形については、肩部に屈曲のみられるのかあり、この屈曲の有無を基準に分類した。また口唇部形態にも特徴があり、口唇部にフラットな面をもつものや、内外面に若干肥厚するものなど第4表以下にみられるような、9種類が確認できた。胎土は、砂質・泥質・中間タイプの3種に分類でき、混入物については、角閃石英・長石、サンゴ、赤色粒がみられ、これらの混入の量によって細かく18種に分類を行った。

以下、器種・口唇部形態・胎土・混入物の諸特徴について述べる。

器 種

鉢形土器

鉢形土器は最大径か口縁あるいは胴部にみられるか、ここでは主に肩部の屈曲の有無によって分類した。全体の38%を占める。また、この分類の中には浅鉢形の可能性をもつ土器破片もあるか、とりあえず本項で取扱うことにした。

鉢形Ⅰ類土器 → 肩部に屈曲がみられ、その屈曲が明瞭なもの。 A・B

鉢形Ⅱ類土器 → 肩部に屈曲がみられるかルースなもの。 C・D・E

鉢形Ⅲ類土器 → 口頸部が直線的な形態をとるもの。 F・G

A 口唇部から肩部の屈曲までの長さが長い(3.5cm以上)。口唇部形態では後述の(=)

に属するものか39.1%で、続いて(イ)に属するものか21.7%となっている。

B 口唇部から肩部の屈曲までの長さか短い(3.5cm未満)。Aと同様(ニ)に属するものか41%で、(イ)に属するもの及び(ト)に属するものかそれぞれ27.2%、13.6%となっている。

C 器形をみると肩部の屈曲を意識しているが、稜か不明瞭である。口唇部形態は上記と同様(ニ)に属するものか35.4%で、(ハ)以外の形態かみられる。

D 指頭による連続圧痕文か口縁部あるいは頸部を囲繞しており、稜は比較的明瞭。(ニ)・(チ)に属する口唇部形態のみみられた。

E 器面調整によって屈曲部は意識されているものの稜は不明瞭である。たとえば、口縁部は横方向、肩部以下は縦あるいは斜め方向への調整を施す。口唇部形態は(イ)及び(チ)のみみられた。

F 屈曲かみられず、口縁部か外反する。口唇部形態の(ニ)に属するものか29.4%で、(イ)に属するものか26.5%となっている。

G 屈曲かみられず、胴上部から口縁部にかけてストレートにのびる。口唇部形態は(ニ)に属するものか53.8%と最も多く、続いて(ト)に属するものか20%となっている。

壺形土器

全体の6.1%を占める。口唇部形態は(ト)に属するものか主体で、57.1%を占め、他に(イ)・(ニ)に属するものもみられる。

壺形Ⅰ類土器 →頸部の稜か明瞭なもの。

H・I

壺形Ⅱ類土器 →頸部かしまらず、直口するもの。

壺形Ⅲ類土器 →無頸壺のもの。

H 頸部に稜がある。

I 頸部に稜がない。

マリ形土器

いわゆるマリ状の器形と碗状の器形があり前者は口径・胴径の大きさにあまり差異がなく、後者は口縁部に最大径かみられる。全体的に小型である。全体の5.7%を占める。

口唇形態は(ニ)に属するものか53.8%で、続いて(ト)に属するものか23%となっている。

口唇部形態

口唇部形態は下記のように(イ～リ)に分類できる。

イ 断面は方形を呈するか外面側に粘土か突出する形態で、鉢形やOP-28出土の壺形に見られる。出土量は土器総数の14%である。

ロ 断面は方形を呈し、(イ)とは逆に粘土か内面側に突出するタイプである。Qトレンチ、STトレンチの鉢形に見られる。4.8%の出土量となっている。

ハ 口唇上部かフラットな面を呈し、内外面に粘土か突出するものである。PQ・STトレンチに見られ、全体の3%を占める。

ニ 口唇部上部かフラットな面をもつのか特徴である。またフラットな面をもちながら外面あるいは内面に強い稜かみられるものも含まれる。分類した器種のほとんどに見られ、全体の43.8%と量の最も多い形態である。

ホ 丸みをおひた口唇の外面に粘土か突出しているものである。全体の1.7%と少量である。

ヘ (ホ)と逆で内面に粘土の突出かみられる。全体のわずか1.3%である。

ト 丸みをもつ口唇部である。鉢形及び壺形に見られ、全体の19.7%を占め、(ニ)の次に多く見られる。

チ 口唇部か外面あるいは内面におりまけら

れたようになり、先端部を舌状に尖らせている。そのため稜かはっきりする。全体の44%を占める。

リ 舌状口唇である。マリ形に多く、全体の7%みられる。

胎 土

胎土は前述したように砂質・泥質・中間タイプに分類される。

砂質は器面の手ざわりがサラサラあるいはサラサラしており、もろく混入物を多く含む3タイプの中では、最も多いタイプ(80.3%)である。

泥質は胎土か細かく粘性を持ち微量の混入物を含む。全体の9.4%で、鉢形Ⅱ類Cや壺形・マリ形に主に見られるタイプである。

中間タイプは砂質・泥質に分類しにくく、堅緻で重量感がある胎土だが、10.3%と出土量も少なく、全器種の中でも散在して見られる程度である。

混 入 物

混入物として角閃石、石英・長石、サンコ、赤色粒がみられ、これらの混入量によって下記のように分類した。

角閃石を主体とするもの

- 1 角閃石のみを含むもの。
- 2 角閃石を主体とし、石英・長石を含むもの。
- 3 角閃石を主体とし、石英・長石・サンコを含むもの。
- 4 角閃石を主体とし、石英・長石・赤色粒を含むもの。
- 5 角閃石を主体とし、石英・長石・サンコ・赤色粒を含むもの。

石英・長石を主体とするもの

- 1 石英・長石のみを含むもの。
- 2 石英・長石を主体とし、角閃石を含むもの。
- 3 石英・長石を主体とし、角閃石・サンコを含むもの。
- 4 石英・長石を主体とし、角閃石・赤色粒を含むもの。
- 5 石英・長石を主体とし、角閃石・サンコ・赤色粒を含むもの。
- 6 石英・長石を主体とし、赤色粒を含むもの。
- 7 石英・長石を主体とし、サンコを含むもの。

サンコを主体とするもの

- 1 サンコのみを含むもの。
- 2 サンコを主体とし、石英・長石を含むもの。
- 3 サンコを主体とし、角閃石・石英・長石を含むもの。

赤色粒を主体とするもの

- 1 赤色粒を主体とし、角閃石・石英・長石を含むもの。
- 2 赤色粒を主体とし、角閃石・サンコを含むもの。
- 3 赤色粒を主体とし、角閃石・石英・長石・サンコを含むもの。

(中村・金城・大浜・知念・多和田)

器種 一 レ ン ジ	鉢形								小計	壺形				小計	マリ形	合計
	Ⅰ		Ⅱ				Ⅲ			Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ			
	A	B	C	D	E	不明	F	G		H	I					
M・H	2				1			8	11		1			1	4	16
N	1		3			5	7	22	38				1	1	1	40
O	4	1	7	1	1		1	2	17						2	19
O・P		3	2	1			1	10	17		2			2	1	20
P・Q	4	12	9	1			2	12	40	5		1		6	1	47
S・T	12	6	10	1			23	25	77		3		1	4	4	85
合 計	23	22	31	4	2	5	34	80	201	5	6	1	2	14	13	228

第2表 各トレンチ器種別出土状況

3 各トレンチの状況

a H・Mトレンチの内容

層 序

H・Mトレンチは全体的に攪乱を受けており、プライマリイな包含層はみられないか、5層に区分てきた。特に50cm～1mほどの石灰岩礫を含む淡黄色砂層の第Ⅳ層の下部からは、大型の土器片や貝製品が見られることから、それらの採集につとめた。下部については、海底堆積物の枝サノコの露出や地下水の流入をもって、包含層の有無を確認した。

土 器

本区において総数352点の土器片が得られた。それらは砂質・泥質・中間タイプに分類することかてきる。内訳は砂質の土器が主流を占め、次いで泥質、中間タイプとなる。

口縁部16点、底部4点の資料が得られ、そのうち口径・底径推算可能な資料は7点である。器種は鉢形を呈するものが主流を占め他に壺形、マリ形かみられる。

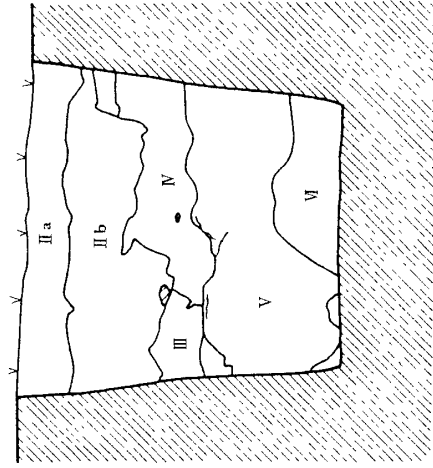
以下、分類別に記述する。

鉢形Ⅰ類A

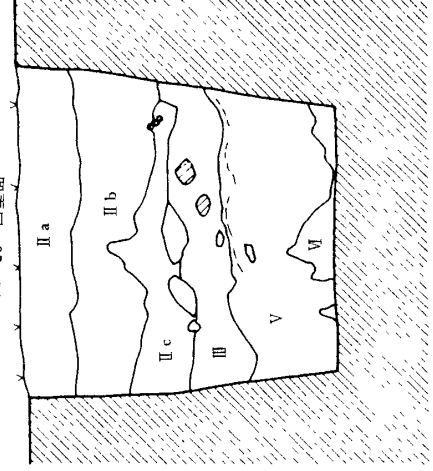
第4図1 口縁部が外反し、口縁部から胴部にかけて緩やかにカーフし、肩部で屈曲するものである。口唇部は(=)のタイプに属する。断面には頸部と胴部に接合部かみられ、その部分で器壁かやや厚くなり、10mmとなる。器面調整は両面とも横方向のナテが行われており、外面は保存状態か悪く器面に凹凸かみられるか、内面は入念に施されており、器面に凹凸はみられない。焼成は極めて良好で堅緻である。器色は外面で赤褐色、内面で暗褐色を呈する。胎土は泥質で石英・長石を主に角閃石を混入する。M-39の表面採集。

同図3 口縁部と肩部に屈曲部をもち、肩部に弱い稜かみられる。口唇部は先細の(リ)に属する。断面には口縁部と肩部の屈曲に接合部か確認てきる。器壁もやや厚い。両面ともナテによる調整が行われており、外面は縦方向に入念に施しているか、内面は指頭圧痕か残り器面の凹凸を整える程のものではない。焼成は比較的良好で、器色は黄褐色を基調と

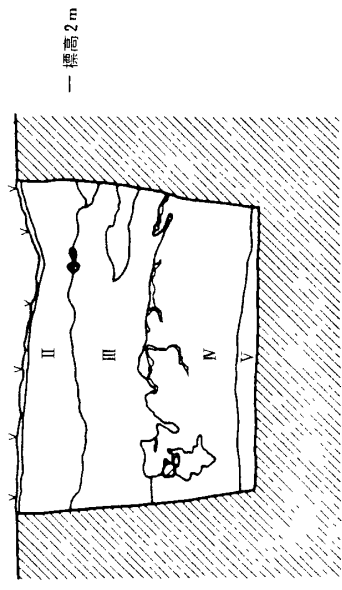
M-26 南壁面



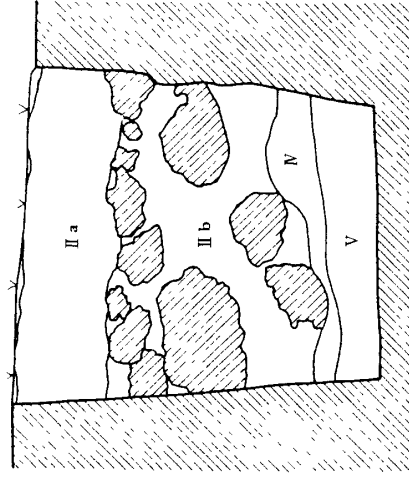
M-26 西壁面



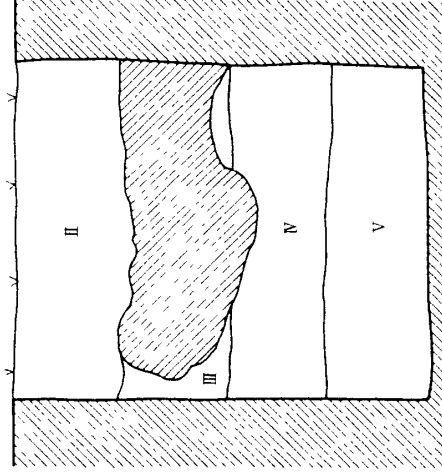
M-31 西壁面



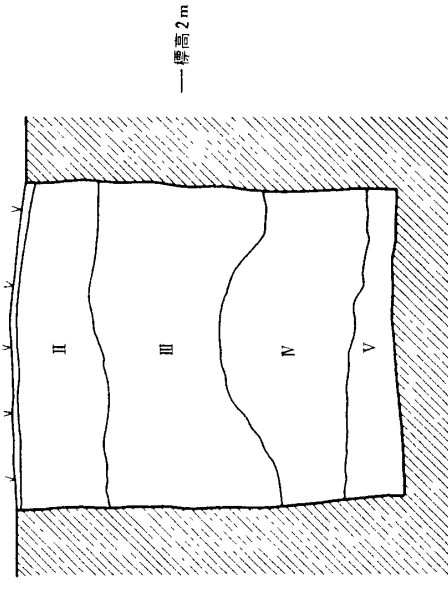
M-33 西壁面



M-35 西壁面



M-39 西壁面



第3図 Mトレンチの土層断面図



するが、外面は部分的に黒味がかり、内面はやや赤っぽい。胎土は砂質で、石英・長石を主体に角閃石を混入する。器壁はやや薄く、全体的に6mmを測る。M-26の第Ⅲ層からの出土である。

鉢形Ⅱ類 E

第4図2…口縁部は内側にしまり、頸部から胴部にかけては緩いカーブをえがきながら外側に脹らむ。そのため最大径は胴部にある。口径は24.5cmで、口唇部は平坦に形成された(=)に分類される。器壁は口縁部から胴部にかけてほぼ同じ厚さで7mmである。断面には輪積み接合部がみられる。器面調整は両面とも比較的丁寧に仕上げられており、いずれも横方向のナデ調整である。焼成は良く堅緻な土器で、両面とも暗褐色を呈する。中間タイプの胎土で、石英・長石を主体に角閃石を含む。M-26、第Ⅳ層の出土。

鉢形Ⅲ類 G

第4図4・5・7…口縁部から胴部にかけて直線的にのびるもので屈曲はみられない。口唇部の形態は3点とも(=)に属する。断面にはいずれも口縁部付近に接合部が確認でき、器壁も全体的にほぼ同じ厚さで、同図4・5が6mm、同図7が5mmである。同図4は両面に横方向、同図5・7の両面には縦方向のナデ調整が施されている。同図5の内面は指頭圧痕が残り、同図4・7の2点よりやや粗雑である。焼成は3点とも良好で、特に同図4・7は堅緻である。同図4の外面は灰褐色、内面は淡黄褐色を呈している。同図5・7の2点は両面ともそれぞれ黄褐色、赤褐色である。胎土は同図4・7の2点は泥質で、石英・長石を主体に角閃石を含んでいる。同図5は砂質で、角閃石を主に石英・長石、赤色粒を混

入している。4はM-39、5はM-26、7はM-35の第Ⅲ層の出土。

同図6…器壁が5mmと極めて薄いのが本標品の特徴である。口唇部形態は先尖りの(+)に属する。頸部付近の断面には接合部がみられ、胴部は接合面からの破損である。器面調整は両面に横方向のナデを施しており、特に外面は入念である。焼成は良好で、器色は両面とも黄褐色を呈する。胎土は砂質で、角閃石を主体に石英・長石を混入する。M-26第Ⅱ層の出土。











同図8…口縁部の外反が弱く、頸部から胴部にかけて曲線的にのびるものである。口唇部形態は(=)に属する。断面には肩部に接合痕がみられる。器壁は全体的にほぼ均一で6mmである。器面調整は両面にナデによる調整を施しており、特に外面は徹底されている。内面は指頭圧痕が明瞭にみられ、器面の凹凸を整える程のものではない。焼成は良好で、器色は黄褐色を基調とするが全体的にやや黒っぽい。胎土は砂質で、角閃石を主体に石英・長石を混入する。M-26第Ⅱ層の出土。

同図9…口唇部形態は(=)に分類されるが、やや細めである。口縁部の断面に接合部がみられ、器壁は全体的にほぼ均一で5.5mmである。器面調整は両面に徹底した横方向のナデ調整を行っており、器面に凹凸はみられない。焼成は比較的良好で、器色は黄褐色を呈する。胎土は砂質で、角閃石を主体に石英・長石を混入する。M-26からの出土。

同図10…本標品も口縁部から胴部へ直線的にのび、屈曲はみられない。口唇部は(=)に分類され、口縁部付近の断面には接合痕が認められる。外面は入念なナデ調整を施しているのに対し、内面は指頭圧痕が残り粗雑なナデ調整である。焼成は粗悪で脆弱である。胎土は砂質で、サンゴを主体に石英・長石が含ま

器種	器序		I	II	III	IV	V	器土	不詳	合計
	I	II	A		リ			二		2
鉢形		II	B							
	III	I	C							
		II	D							
		III	E			二				1
	III	I	F							
		II	G	チ・チ ・二	二・二 ・二・二 二・二・二		二		二	10
	壺形	I	H							
II		I			ト				1	
III		II								
III		III								
リ 形			リ		二				2	
合 計			4	6	3	1	1	1	16	

第3表 H・Mトレンチの器種別出土状況

口唇部形態	器種	鉢形							壺形			マ	合計	
		Ⅰ類			Ⅱ類				Ⅲ類					Ⅳ類
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	Ⅱ類			
イ														
ロ														
ハ														
ニ		1				1		8				1	11	
サ														
ハ														
イ									1				1	
チ								2					2	
リ		1										1	2	
合		2				1		10		1		2	16	

第4表 H・Mトレンチの口唇部形態と器種別
の関係

れる。M-26 第V層の出土。

同図11 口縁部から胴部にかけて直線的にのびるが、口縁部やや内彎する。口唇部形態は(チ)に属し、内側は稜をもち、外側はやや肥厚する。そのためこの内彎部分に接合部がみられ、器壁は9mmと厚くなっている。胴部はほぼ同一の器壁をもち7mmである。口径は14cmを測る。器面調整は両面とも横方向のナテを施しており、特に外面は徹底した調整を施しているのに対し、内面には器面に凹凸が残り粗雑な調整である。焼成は良好で、器色は両面とも濃い黄褐色を呈し、外面は部分的に黒味がかっている。中間タイプの胎土で、石英・長石を主に角閃石を混入する。M-26 第II層の出土。

同図12・13…口径は同図12が21cm、同図13は20.7cmである。口縁部の外反は弱く、頸部と胴部の間は直線的にのび、胴部から底部にかけて緩い弧状を描いている。最大径は胴部にある。口唇部は(ニ)に属し、特に同図12の口唇部には内外面にまたがるように「鞍状」の凸帯を1本貼り付けている。2本を対とする可能性もあるか判然としない。器壁は口縁部付近で6mmとやや薄く、胴部以下にいくにつれて厚くなる。断面には胴部の3か所に接合部がみられる。器面はナテ調整が施され外面の口縁部は横方向、胴部下半では斜め方向に入念に行われ、内面は指頭圧痕が確認でき調整は粗雑である。焼成は良好で、器色は赤褐色を基調としており、外面は広範囲にわたってすすけて黒っぽい。胎土は砂質で、石英・長石を主に角閃石、赤色粒がみられる。M-26第III層の出土。

同図12・13の2点は出土状況や器形、胎土混入物など共通の特徴をもち同一個体の可能性が高い。また、後述する乳房状尖底(第4図18)も共通の特徴から同一個体の可能性がある。

層 序			I	II	III	IV	V	盛 土	不 明	合計	
テンパー											
砂	角閃石主体	角閃石のみ									
		角＞石・長		鉢ⅢGチ・ニ				鉢ⅢGニ	3		
		角＞石・長＋サ									
		角＞石・長＋赤			鉢ⅢGニ				1		
		角＞石・長＋赤＋サ									
	石英・長石主体	石英・長石のみ									
		石・長＞角			鉢ⅠAリ・乳房状(2)・平底	マリ形ニ				5	
		石・長＞角＋サ									
		石・長＞角＋赤		マリ形リ	鉢ⅢG・ニ(2)				3		
		石・長＞角＋赤＋サ									
質	サンゴ主体	石・長＞赤									
		石・長＞サ									
		サンゴのみ									
		サ＞石・長					鉢ⅢGニ			1	
		サ＞角＋石・長									
赤色粒主体	赤＞角＋石・長										
	赤＞角＋サ										
	赤＞角＋石・長＋サ										
	中	角閃石主体	角閃石のみ								
			角＞石・長								
角＞石・長＋サ											
角＞石・長＋赤											
角＞石・長＋赤＋サ											
石英・長石主体		石英・長石のみ									
		石・長＞角		鉢ⅢGニ		鉢ⅡEニ				2	
		石・長＞角＋サ									
		石・長＞角＋赤									
		石・長＞角＋赤＋サ									
間	サンゴ主体	石・長＞赤									
		石・長＞サ									
		サンゴのみ									
		サ＞石・長									
		サ＞角＋石・長									
赤色粒主体	赤＞角＋石・長										
	赤＞角＋サ										
	赤＞角＋石・長＋サ										
	泥	角閃石主体	角閃石のみ								
			角＞石・長				壺ⅠⅠト				1
角＞石・長＋サ											
角＞石・長＋赤											
角＞石・長＋赤＋サ											
石英・長石主体		石英・長石のみ									
		石・長＞角			鉢ⅢGニ(2)		鉢ⅠAニ			3	
		石・長＞角＋サ									
		石・長＞角＋赤									
		石・長＞角＋赤＋サ									
質	サンゴ主体	石・長＞赤									
		石・長＞サ									
		サンゴのみ									
		サ＞石・長									
		サ＞角＋石・長									
赤色粒主体	赤＞角＋石・長										
	赤＞角＋サ										
	赤＞角＋石・長＋サ										
合 計				4	9	3	1	1	1	19	

第5表 H・Mトレンチの口縁部・底部の胎土別出土状況

テノパー		層 序	M					小 計	H						小 計	合計
			I	II	III	IV	V		I	II	III	IV	V	VI		
砂	角閃石主体	角閃石のみ														
		角>石・長		12	46	12	4	74		2	3	2	6		13	87
		角>石・長+サ											1		1	1
		角>石・長+赤	1	3	7	1		12					1		1	13
		角>石・長+赤+サ														
	石英・長石主体	石英・長石のみ			3	1		4				1			1	5
		石・長>角	4	18	70	34	1	127		3		7	11	3	24	151
		石・長>角+サ														
		石・長>角+赤		2	7	3		12					1		1	13
		石・長>角+赤+サ														
	サノコ主体	石・長>赤														
		石・長>サ														
		サノコのみ			6			6								6
		サ>石・長					1	1								1
		サ>角+石・長														
質	赤色粉主体	赤>角+石・長														
		赤>角+サ														
		赤>角+石・長+サ														
	小 計		5	35	139	51	6	236		5	3	10	20	3	41	277
中	角閃石主体	角閃石のみ	1		1			2								2
		角>石・長			6	1		7				1	1		2	9
		角>石・長+サ														
		角>石・長+赤														
		角>石・長+赤+サ														
	石英・長石主体	石英・長石のみ														
		石・長>角		2				2		1			1		2	4
		石・長>角+サ														
		石・長>角+赤			2			2								2
		石・長>角+赤+サ														
	サノコ主体	石・長>赤														
		石・長>サ														
		サノコのみ				1		1								1
		サ>石・長														
		サ>角+石・長														
間	赤色粉主体	赤>角+石・長														
		赤>角+サ														
		赤>角+石・長+サ														
	小 計		1	2	9	2		14		1		1	2		4	18
泥	角閃石主体	角閃石のみ														
		角>石・長	1	2	3	2		8			2				2	10
		角>石・長+サ														
		角>石・長+赤											1		1	1
		角>石・長+赤+サ														
	石英・長石主体	石英・長石のみ														
		石・長>角	2	2	12		1	17			1		5		6	23
		石・長>角+サ														
		石・長>角+赤			1			1								1
		石・長>角+赤+サ														
	サノコ主体	石・長>赤														
		石・長>サ														
		サノコのみ														
		サ>石・長			1			1								1
		サ>角+石・長														
質	赤色粉主体	赤>角+石・長														
		赤>角+サ														
		赤>角+石・長+サ														
	小 計		3	4	18	2	1	28			3		6		9	37
	合 計		9	41	166	55	7	278		6	6	11	28	3	54	332

第6表 H・Mトレンチの胴部の胎土別出土状況

壺形Ⅰ類Ⅰ

第4図14…短頸の壺形で、胴部から頸部へすばまり、口縁部で外反するため、胴部に最大径がある。口唇部は丸みのある(ト)に分類される。器壁は頸部で若干薄く5mmで、胴部は8mmを測る。頸部の屈曲部分に接合痕がみられる。器面調整は外面では横方向のナデが徹底されているが、内面は器面に凹凸が残り、それを整える程の調整ではない。焼成は良好で堅緻である。器色は両面とも橙褐色を基調とするが、外面は部分的に黒っぽい箇所が見受けられる。胎土は泥質で、角閃石を主に石英・長石を含むが、全体的に微量である。M-26第Ⅳ層の出土。

マリ形土器

同図15…口縁部から胴部にかけて直線的のびている。しかし、器壁が下方にいくにつれて徐々に厚くなっているため、緩いカーブを描いているようにもみえる。口唇部は平坦に整形する(ニ)に分類される。胴部の2か所に接合部がみられる。器面調整は外面では入念にナデ調整が施されており、調整によってつけられたと思われる弱い稜が胴部に2本みられる。内面にもナデ調整が施されているが外面ほどではない。焼成は良好で、器色は両面とも灰褐色を呈している。砂質の土器で、混入物は石英・長石を主に角閃石がみられる。H-27第Ⅳ層の出土。

同図16…口縁部は緩いカーブを描いて内彎する小型の土器である。口唇部は(リ)に属する。器壁は口縁部付近で若干薄くなり、他は全体的にはほぼ均一である。接合部からの破損で断面には口縁部付近に接合痕が確認できる。器面は両面とも横方向のナデが施されており入念である。焼成は良好で、器色は両面とも橙褐色を呈する。胎土は砂質で、石英・長石を

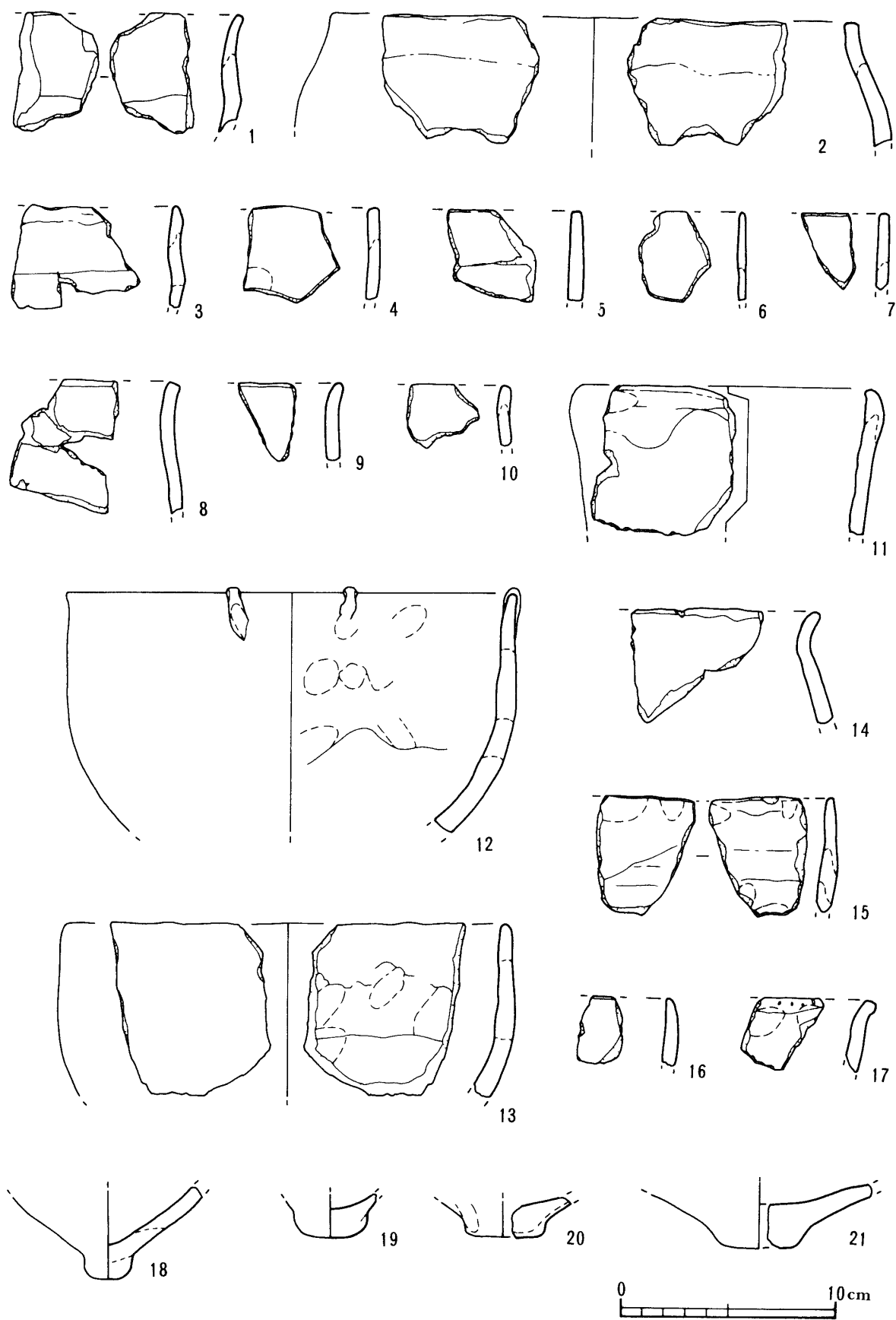
主体に角閃石、赤色粒が混入される。M-26第Ⅱ層の出土。

底 部

第4図18…先細の突出部をもつ乳房状尖底である。底径は2cm、底の厚さは1.6cmである。立ち上がりの部分は開きぎみで胴部にゆくにつれ丸味をおびる。器壁は全体的にほぼ均一で8mmである。断面には立ち上がりの部分と底部に接合部がみられる。そのことから底部の突出部は底部形成後につけられたものと推察される。外面には徹底したナデ調整が行われている。内面にも同様の手法を用いて調整を施してはいるものの器面に凹凸が残る。焼成は良好で、器色は外面で赤褐色、内面は黒褐色を呈している。胎土は砂質で、石英・長石を主体に角閃石が混入される。M-26第Ⅲ層の出土。

同図19…底面の広い乳房状尖底で、底径は3.5cm、底の厚さは1.5cmを測る。立ち上がりの部分はわずかに残り器壁は薄く6mmである。器面調整は外面には入念なナデが施されており、凹凸は見られない。しかし内面には凹凸が残り雑な仕上げとなっている。焼成は良好。外面で赤褐色、内面は黄褐色となる。胎土は砂質で、混入物には石英・長石を主体に角閃石が混入される。M-26第Ⅲ層の出土。

同図20…底径が3.8cmで底径の小さい平底である。底部の縁には若干丸みがあり、底の内面は平坦である。また、立ち上がりの部分は水平にちかい開きをしている。そのため底部の内面から立ち上がりの部分は直線的である。底の厚さが1.5cm、立ち上がりの部分で7mmである。内外の器面を観察すると、両面とも入念なナデ調整が施され、器面に凹凸はみられない。焼成は良く、外面で橙褐色、内面は



第4図 H・Mトレンチ出土の土器

濃い黄褐色で面によって異なる色調を呈する。胎土は砂質で、混入物に石英・長石を主体に角閃石が混入される。M-26第Ⅲ層の出土。

同図21…底径が4.6cmの平底である。底部の縁は丸みをおびており、立ち上がりの部分は大きく開きながら直線的にのびる。底面の厚さは2.2cmでやや厚く、立ち上がりの部分は6mmである。調整をみると外面では丁寧なナデ仕上げが施されている。内面は外面ほどの入念さはないが、同様の手法が用いられている。焼成は良好で、器色は両面とも赤褐色を呈している。泥質の土器で、混入物は石英・長石を主体に角閃石、サンゴがみられる。H-27第Ⅳ層の出土。

移入土器

第4図17…口唇部に刻目文を施している資料である。摩耗が著しく詳細は不明である。器形は頸部から胴部にかけて外側に若干開き口縁部はやや外反する。口唇部は(イ)に属し、器壁もこの部分でやや厚く7mmである。器面の保存状態が悪く、外側の頸部にのみ横方向のナデによる調整痕を確認することができる。焼成は比較的良好で、器色は両面とも橙

褐色となっている。胎土は砂質で、石英・長石を主体に角閃石、サンゴを混入する。M-26第Ⅴ層の出土。

貝製品

本区の貝製品は第5図の3点のみである。

第5図1…サラサバティ有孔製品である。殻口付近の螺塔部に1個の小孔が穿たれている。孔の直径は3mmを測り、外側から丁寧にあけられている。残存部をみると、殻軸は意識的に取りのぞかれていると思われるが、小破片のため判然としない。M-26第Ⅴ層の出土である。

第5図2・3…いずれもアツソデガイのそでの部分に内側から孔を1個穿っている以外ではほとんど手を加えておらず原形をとどめている。2点ともM-35第Ⅲ層の出土。法量は第7表に示す。(大浜)

図番号	孔の最大長 (cm)	孔の最大幅 (cm)	重量 (g)
第5図2	2	1.3	275
第5図3	2.6	1.5	210

第7表 Mトレンチの貝製品の法量

b N トレンチの内容

層 序

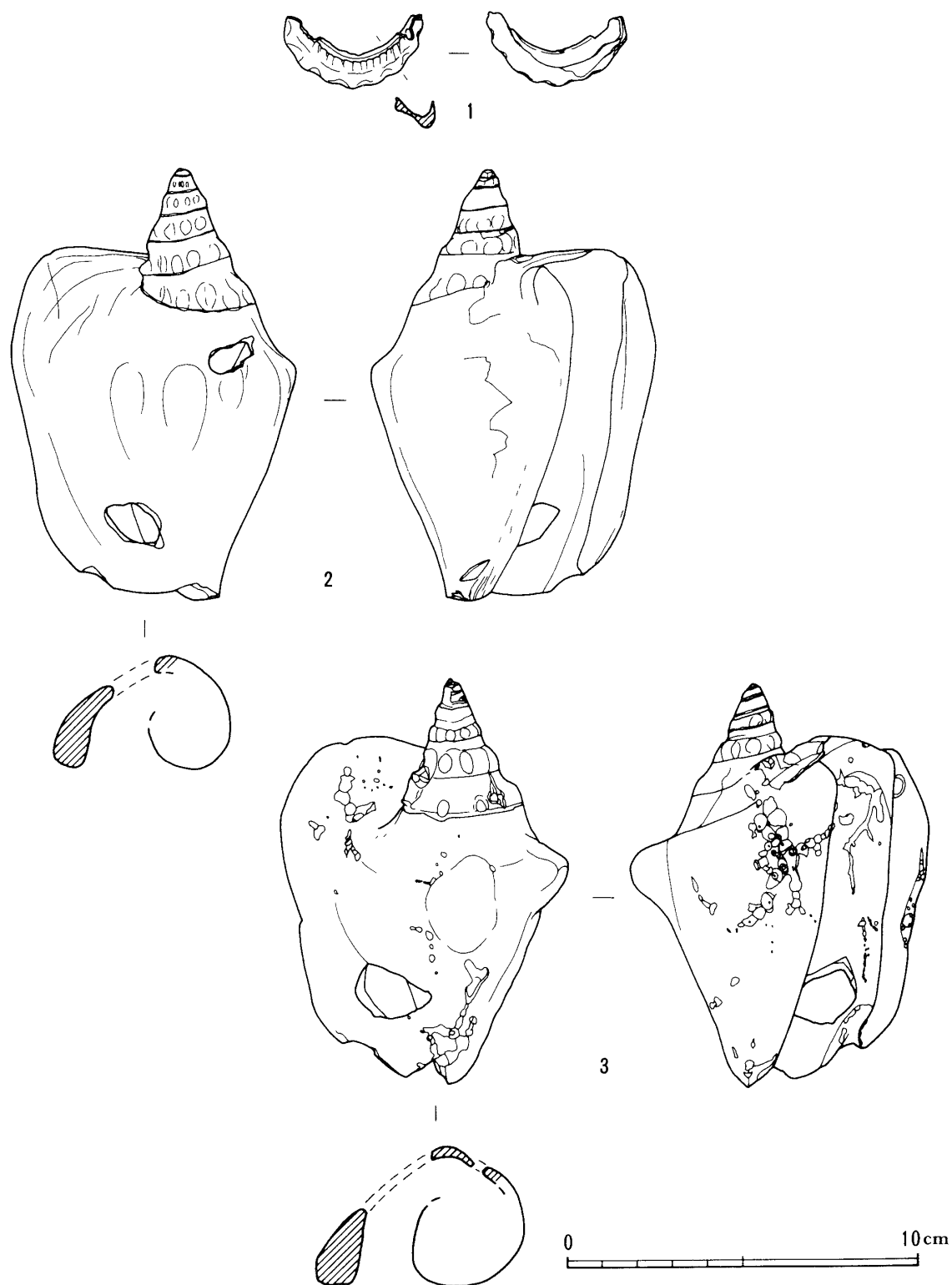
N-26～28グリットはN-26グリット北西角からN-28グリット北東角を結ぶラインを境に、北東部分にプライマリーな層序が確認できた。層序は、第Ⅰ層が耕作土の褐色混土砂層で30cmほどの厚さを有し、第Ⅱ層は淡灰褐色混土砂層の文化層で35cmを測り、中位レベルで遺物の出土量が多かった。特にN-26グリットの北東隅で目についた。第Ⅲ層は黄褐色砂層の無遺物層である。

土 器

本区からは総数621点の土器片が出土した。内訳は口縁部40点、胴部577点、底部4点である。

鉢形Ⅰ類A土器

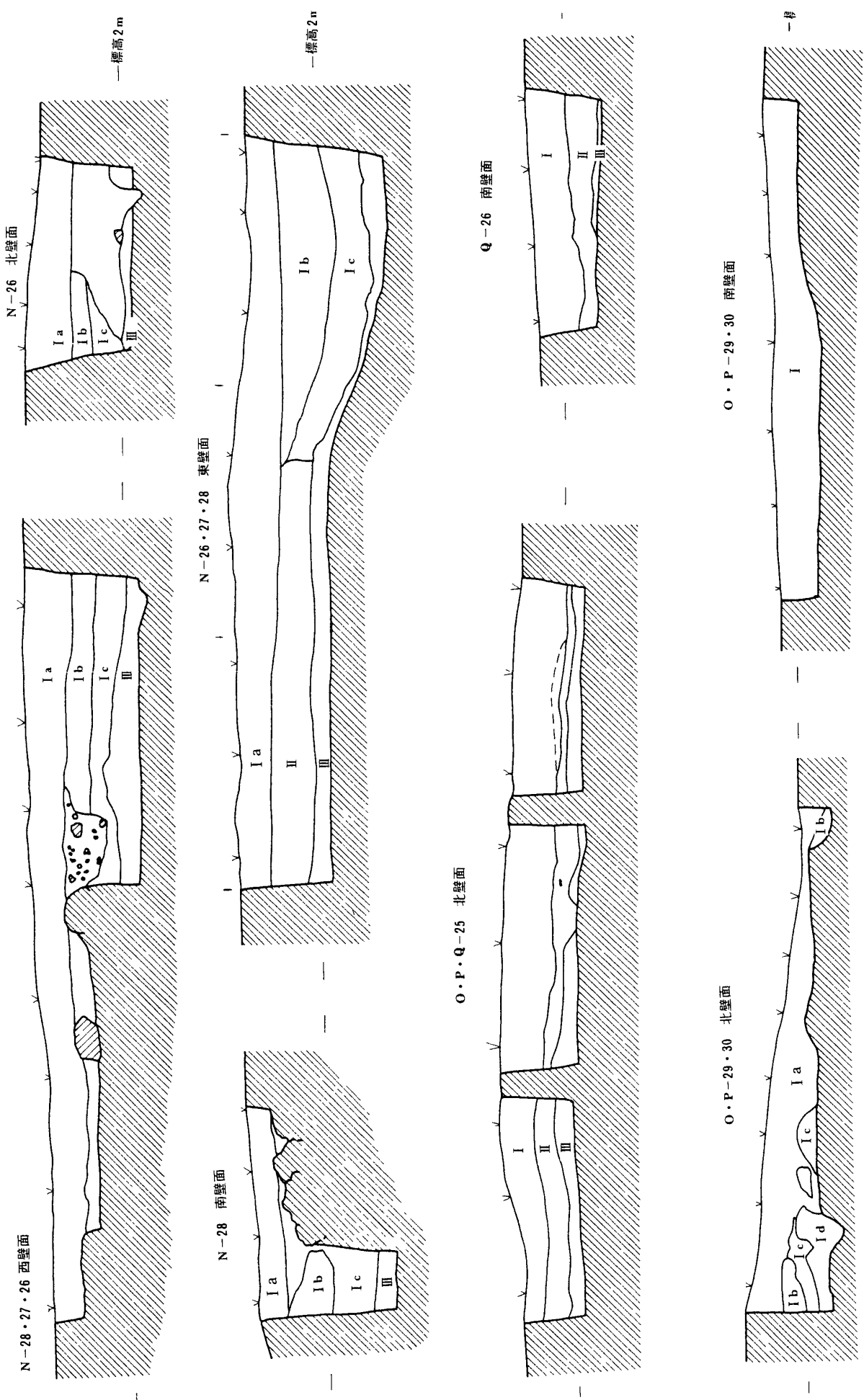
第8図1…頸部がしまり、肩部において張り出しを形成する資料である。内面の口縁上部と肩部の張り出し部分に輪積み接合部をもち段を有する。口唇部の形態は(イ)に分類される。器壁は7mm前後である。器面調整は、外面において口縁上部に接合部をナデつけた痕と思われる指頭圧痕を残すが全面的にはナ



第5図 Mトレンチ出土の貝製品

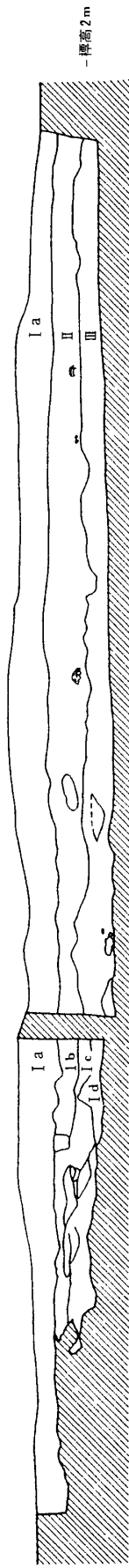
テによる調整（横方向）が比較的丁寧になされている。内面においてもナテによる調整が施されているが、外面に比べて雑で胴部の輪積み接合部や口唇部の指頭圧痕などが明瞭に

残る。胎土は砂質で、石英・長石を主体に角閃石を含み、堅緻である。器色をみると外面は黒褐色、内面は赤褐色を呈する。第Ⅱb層の出土。

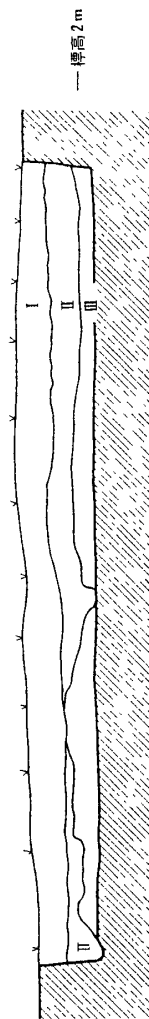


第6図 N・O・P・Qトレンチの土層断面図

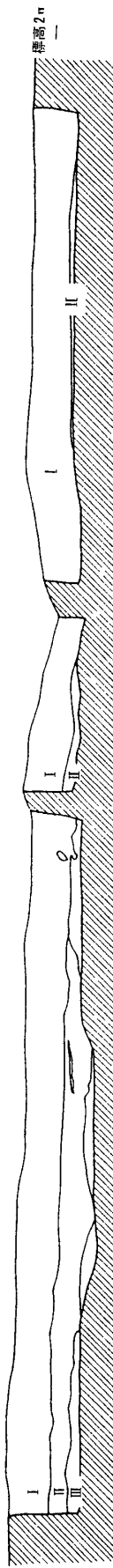
O-30・29・28・27・26・25 西壁面



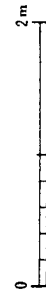
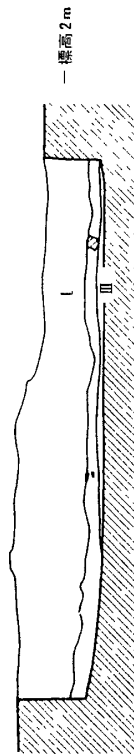
P-27・26・25 西壁面



P-25・26・27・28・29・30 東壁面












Q-25・26 東壁面



第7図 O・P・Qトレンチの土層断面図

器種		層序	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	合 計
鉢 形	Ⅰ 類	A		イ		1
		B				
	Ⅱ 類	C	チ	ト・イ		3
		D				
		E				
	Ⅲ 類	F		イ・ニ(6)ト リ(3)ホ		12
		G	ト・ニ(2)	イ(2)・ニ(9) ・リ(2)・ト (4)・ハ	ホ・ニ	23
壺 形	Ⅰ 類	H				
		I				
	Ⅱ 類					
		Ⅲ 類				
マ リ 形			ト			1
合 計			4	34	2	40

第 8 表 N トレンチの器種別出土状況

器種 口唇部形態	鉢 形							壺 形				マ リ 形	合 計
	Ⅰ 類		Ⅱ 類			Ⅲ 類		Ⅰ 類		Ⅱ 類	Ⅲ 類		
	A	B	C	D	E	F	G	H	I				
イ 	1		1			1	2						5
ロ 													
ハ 							1						1
ニ 						6	12						18
ホ 						1	1						2
ヘ 													
ト 			1			1	5					1	8
チ 			1										1
リ 						3	2						5
合 計	1		3			12	23					1	40

第 9 表 N トレンチの口唇部形態と器種別の関係

鉢形Ⅱ類 C 土器

第 8 図 2…口縁部が外反し肩部に接合面を有するもので、口唇部の形態は(チ)に分類される。器壁は 8 mm 前後である。内外面ともナデによる調整が丁寧に施されているが、内面においては、にぶい光沢を有するものの指頭圧痕のみうけられる部分もある。胎土は中間タイプで、角閃石を主体に石英・長石を含む。焼成は良く、内外面とも黄褐色を呈する。第 I a 層の出土。

同図 3…図上復元が可能な資料で口径は推定 18cm を測る。肩部の張り出し部に輪積み接合部を有し、同部分から下方へ直線的にのびる。口唇部は波状で外反を呈し、口唇部形態は(ト)に分類される。器壁は不均一で 7～13 mm を測る。器面調整は、外面は指ナデによる調整が徹底していないため起伏のある面を有する。また肩部の張り出し部では不明瞭ながら稜線を形成する。内面においてはナデ調整がなめらかに施されているが、接合面を明瞭に残す。胎土は泥質で石英・長石を主体に角閃石、赤色粒を含む。焼成は良く堅緻である。外面は暗褐色、内面は赤褐色を基調とするが、黒褐色をおびる箇所もみられる。第 II 層の出土である。

同図 4…図上復元を試みたもので、口径は推定 33.6cm を呈し、大形の資料である。口縁上端部がわずかにそり返り、口唇部の形態は(イ)に分類される。肩部はわずかなふくらみを呈し、内外面に成形時の不明瞭な稜線が観察できる。口頸部・肩部の張り出し部、胴部下に接合面を有する。内外面ともナデによる調整がなされ、接合部付近では指頭圧痕が顕著である。器壁は 8 mm 程度である。胎土は中間タイプに分類され、石英・長石を主体に角閃石を含む。焼成は良く堅緻である。外面は赤褐色を呈し、内面は黒褐色を呈する。第

層 序			I	II	III	合 計
テンパー						
砂	角閃石	角閃石のみ				
		角>石・長		鉢Ⅲ F ニ・ト・鉢Ⅲ G イ・ニ		4
		角>石・長+サ		鉢Ⅲ G リ		1
		角>石・長+赤		鉢Ⅲ G ニ		1
		角>石・長+赤+サ		鉢Ⅲ F イ		1
		石英・長石のみ				
	石英・長石主体	石・長>角		鉢Ⅰ A イ・鉢Ⅲ F ニ(2)・鉢Ⅲ G ハ・ニ(6)・ト(2)		12
		石・長>角+サ				
		石・長>角+赤				
		石・長>角+赤+サ		鉢Ⅲ F リ(2)・鉢Ⅲ G イ	鉢Ⅲ G ホ	4
		石・長>赤				
		石・長>サ				
		サンコのみ				
		サ>石・長				
		サ>角+石・長		鉢Ⅲ G ト	鉢Ⅲ G ニ	2
		赤>角+石・長				
		赤>角+サ				
		赤>角+石・長+サ				
中	角閃石主体	角閃石のみ				
		角>石・長	鉢Ⅱ C チ	平底		2
		角>石・長+サ		鉢Ⅲ F ニ		1
		角>石・長+赤				
		角>石・長+赤+サ				
		石英・長石のみ				
	石英・長石主体	石・長>角	鉢Ⅲ G ト	鉢Ⅱ C イ		2
		石・長>角+サ				
		石・長>角+赤	鉢Ⅲ G ニ	鉢Ⅲ F リ・マリ形ト		3
		石・長>角+赤+サ				
		石・長>赤				
		石・長>サ		鉢Ⅲ G リ		1
		サンコのみ				
		サ>石・長		鉢Ⅲ F ホ		1
		サ>角+石・長				
		赤>角+石・長				
		赤>角+サ				
		赤>角+石・長+サ				
泥	角閃石主体	角閃石のみ				
		角>石・長	鉢Ⅲ G ニ	鉢Ⅲ F ニ		2
		角>石・長+サ				
		角>石・長+赤				
		角>石・長+赤+サ				
		石英・長石のみ				
	石英・長石主体	石・長>角		鉢Ⅲ F ニ・鉢Ⅲ G ニ・乳房状		3
		石・長>+サ				
		石・長>角+赤		鉢Ⅱ C ト・平底		2
		石・長>角+赤+サ				
		石・長>赤				
		石・長>サ				
		サンコのみ				
		サ>石・長				
		サ>角+石・長				
		赤>角+石・長				
		赤>角+サ				
		赤>角+石・長+サ	平底	鉢Ⅲ G ト		2
合 計		5	37	2	44	

第10表 N トレンチの口縁部・底部の胎土別出土状況

テンパー			層 序	I	II	III	合 計
砂	角閃石主体	角閃石のみ			1		1
		角>石・長	6	63	2	71	
		角>石・長+サ		4		4	
		角>石・長+赤		3		3	
		角>石・長+赤+サ					
	石英・長石主体	石英・長石のみ	3	27		30	
		石・長>角	40	245	7	292	
		石・長>角+サ		10		10	
		石・長>角+赤	3	20		23	
		石・長>角+赤+サ		2		2	
	質	石・長>赤	1	6		7	
		石・長>サ		7		7	
		サンコのみ	2	11		13	
		サ>石・長		6		6	
		サ>角+石・長		6		6	
赤色粒主体	赤>角+石・長						
	赤>角+サ						
	赤>角+石・長+サ						
混入物なし			1	1		2	
小計			56	412	9	477	
中間	角閃石主体	角閃石のみ					
		角>石・長	1	19		20	
		角>石・長+サ					
		角>石・長+赤	1	3		4	
		角>石・長+赤+サ					
	石英・長石主体	石英・長石のみ		2		2	
		石・長>角		48	2	50	
		石・長>角+サ					
		石・長>角+赤	3	1		4	
		石・長>角+赤+サ					
	質	石・長>赤					
		石・長>サ					
		サンコのみ					
		サ>石・長					
		サ>角+石・長					
赤色粒主体	赤>角+石・長		1		1		
	赤>角+サ						
	赤>角+石・長+サ						
小計			5	74	2	81	
泥質	角閃石主体	角閃石のみ					
		角>石・長		2		2	
		角>石・長+サ					
		角>石・長+赤					
		角>石・長+赤+サ					
	石英・長石主体	石英・長石のみ		2		2	
		石・長>角	1	13		14	
		石・長>+サ					
		石・長>角+赤					
		石・長>角+赤+サ					
	質	石・長>赤					
		石・長>サ					
		サンコのみ					
		サ>石・長					
		サ>角+石・長					
赤色粒主体	赤>角+石・長						
	赤>角+サ						
	赤>角+石・長+サ						
小計			1	17		18	
合計			62	503	11	576	

第11表 N トレンチの胴部の胎土別出土状況

Ⅱ層の出土。

鉢形Ⅲ類 F

鉢形Ⅲ類 F は 12 点得られた。いずれも口縁部が直線的な形状を呈する資料である。

同図 5・口縁部がそり返る資料である。口唇部上面はフラットで外側にせり出す形態を示し、口唇部形態は(=)に分類される。器壁は 9 mm 前後。器面は内外面ともナテ調整が丁寧に施され、なめらかな面を形成する。ただし、口頸部付近では横位のヘラナテ痕のうかがえる箇所もある。胎土は泥質に分類され、石英・長石を主体に角閃石が含まれる。焼成はよく、外面は赤褐色を呈し、内面は暗褐色を呈する。第Ⅱ層の出土。

同図 6・7・口縁部がかかるいそり返りをもつ資料で、口唇部形態は(=)に分類できる。器壁は同図 6 は約 8 mm、同図 7 は 7 mm 程度である。両者ともナテによる調整が丁寧に施されているものの同図 6 は接合部が若干うがかえ、同図 7 の外面は研磨と見ても良いほどのナテが施されている。胎土は砂質で石英・長石を主体に角閃石を含み、焼成は悪い。同図 6・7 とともに外面は赤褐色を呈するか、内面においては同図 6 は黒褐色、同図 7 は暗褐色を呈する。2 点とも第Ⅱイ層の出土である。

同図 8・口縁部の上端が微弱な外反を示し、口唇部は(+)に分類される資料である。器壁は 5 mm 前後を測り、内外面ともナテによる調整が丁寧に施され、外面はにぶい光沢をもつ。胎土は中間タイプに分類され、サンゴを主体に石英・長石を混入する。焼成は良好で、内外面とも黒褐色を呈する。第Ⅱイ層より出土。

同図 9・口縁部がかかるい外反を呈する資料である。器壁は 7 mm 程度であるが、上方にいくにしたがい先細になる。口唇上面はフラットに形成され、形態は(=)に分類される。内

外面ともナテによる調整が施されているが、外面において縦あるいは斜めの擦痕をみることができる。胎土は中間タイプに分類され、角閃石を主体に石英・長石、サンゴを含む。焼成はよく堅緻である。器色をみると、外面は黄褐色、内面は赤褐色を呈する。第Ⅱ層の出土である。

同図 10・口唇部の外側が若干せり出すもので口唇部形態は(1)に分類される。器壁は 8 mm 前後。外面の器面調整はナテによる調整が丁寧に施されている。内面はナテ調整を施すが指頭圧痕が明確に残る。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石、赤色粒、サンゴを含む。焼成はよい。外面は赤褐色、内面は暗褐色を呈する。第Ⅱ層の出土。

同図 11・口唇部形態が(=)に分類されるもので、器壁は 7 mm 前後を有する。内外面ともナテによる調整が丁寧に施されているが、内面は弱く指頭圧痕が残る。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む。焼成は悪い。外面の器色は黒褐色、内面は暗褐色を呈する。第Ⅱイ層の出土。

同図 12・13・2 点とも口唇部形態は(1)に分類される。器面調整はナテによる調整が施され、同図 12 は内外面ともにナテ調整が施されているが、内面は調整が一定せず、凹凸を残す。特に同図 13 の内面は調整が雑であるため指頭圧痕の凹凸が残る。同図 12 は口唇部下約 1.5 cm の部分に孔を持つが、同部より欠損しているため、詳細は不明である。両者ともに胎土は砂質で、石英・長石を主体に角閃石、赤色粒、サンゴを含む。焼成は同図 12 はよいが同図 13 は悪い。器色は同図 12 は黄褐色、内面は赤褐色、同図 13 は内外面とも橙褐色を呈する。器壁は二者ともに 7 mm 前後である。出土は第Ⅱ層である。

同図 14・口唇部形態は(1)に分類される。器

壁は8mm前後。内外面ともナデによる調整が施され、外面は丁寧で研磨と見ても良いほどのにぶい光沢をもつが、内面は雑で凹凸が残る。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む。焼成は良好。外面は赤褐色、内面は黄褐色を呈する。口唇下約2.5cmに直径5mmの孔を有しており、孔は内外両面から穿孔され、焼成後になされたものと思われる。第Ⅱ口層の出土。

同図15…口唇部は(リ)に分類でき、器壁は7mm前後。内外面ともナデによる調整が施されている。胎土は中間タイプで石英・長石を主体に角閃石、赤色粒を有する。焼成は堅緻。外面は暗褐色、内面は橙褐色を呈する。第Ⅱ層の出土。

同図16…比較的そり返りの強い資料で、口唇部は(ニ)に分類される。器壁は約6mm。内外面ともナデによる調整が丁寧に施され、外面においてはにぶい光沢をもつ。胎土は泥質で角閃石を主体に石英・長石を有する。焼成は堅緻。内外面とも暗褐色を呈し、第Ⅱイ層の出土である。

鉢形Ⅲ類C

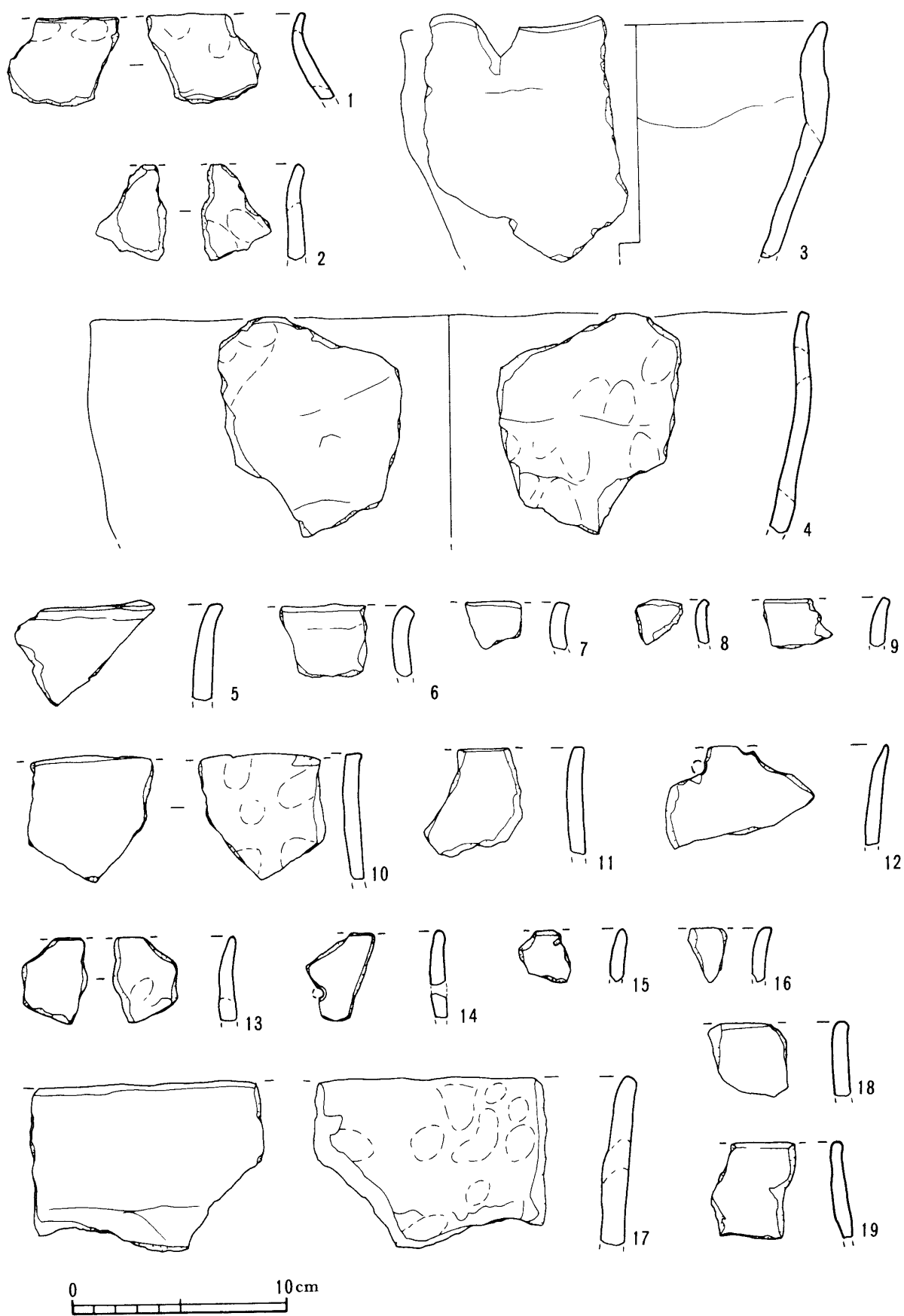
第8図17・18…口縁部は垂直に立ち上がる資料である。ただし、口唇部下端においてわずかにそり返りをもつ。同図17は口頸部に二箇所の接合面を有し、その内面部は凹状を形成する。口唇上面はフラットで、形態は(イ)に分類されるが、若干丸みをおびる。器壁は同図17は10mm前後、同図18は約8mmである。同図17の外面は横方向のナデによる調整が比較的丁寧に施されているが、内面においては、ナデ調整は粗雑に行われ、接合面に沿って指頭圧痕がうかがえ、部位によっては接合の痕も認められる。同図18は内外面ともナデによる調整が施され、外面は比較的

丁寧になされるものの、内面はかなり雑で凹凸を呈する。胎土、混入物としては、石英・長石を主体に角閃石、赤色粒、サンゴを含み砂質となっている。同図18は角閃石を主体に石英・長石を含み、砂質の胎土である。焼成は前者は良好だが、後者はもろい。器色は同図17の外面は暗褐色、内面は赤褐色で、同図18の外面は黄褐色、内面は黒褐色を呈する。2点とも第Ⅱ層より出土。

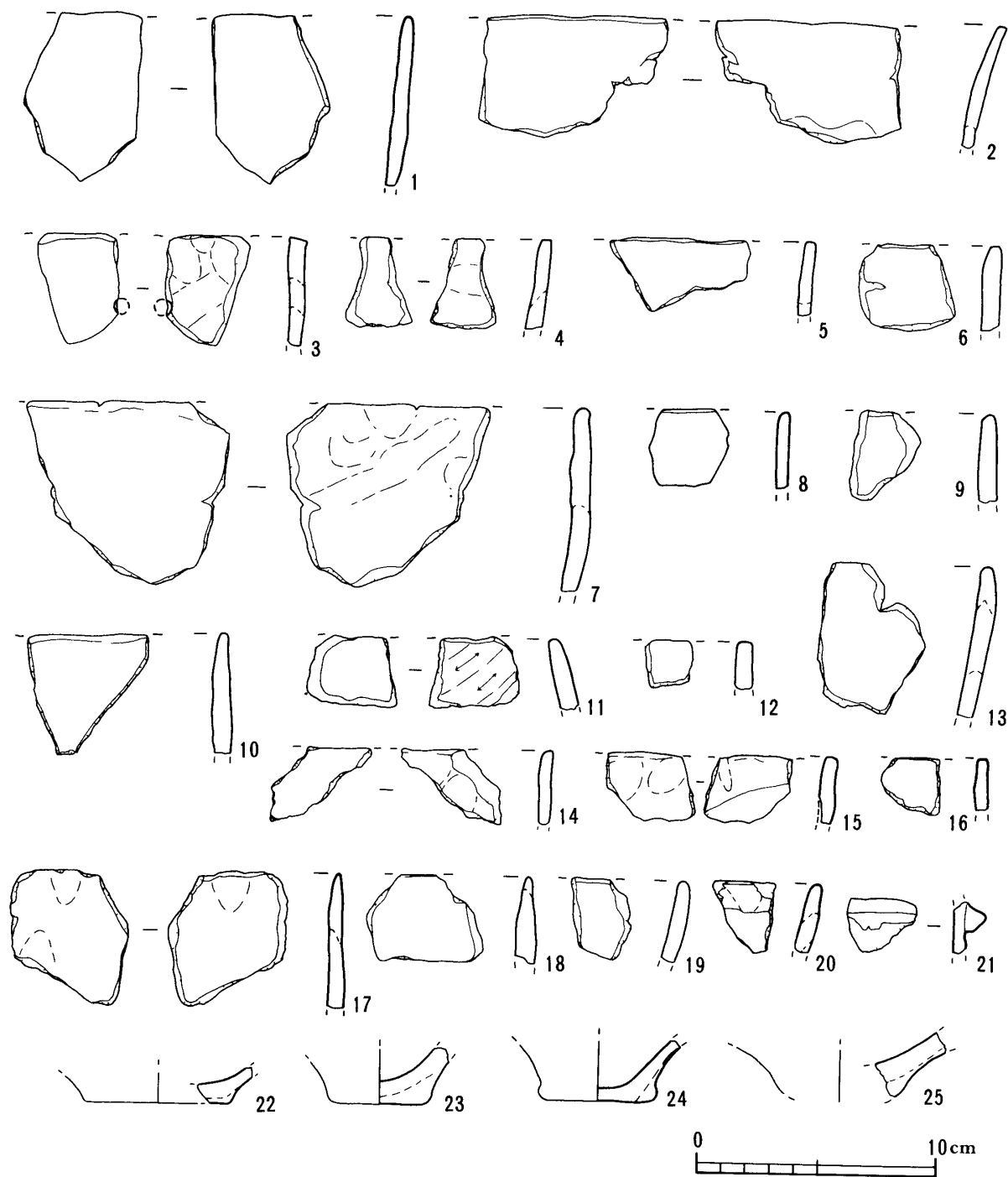
同図19…口縁が直線的に内傾を呈する資料で口唇部は(ト)に分類される。内外面ともナデによる調整が施され、外面は丁寧になされているが、内面は不十分であるため凹凸が残り器壁は5～8mmと一定しない。胎土は中間タイプで石英・長石を主体に角閃石を含む。焼成はよく堅緻で、器色は赤褐色、内面は橙褐色を呈する。第Ⅰa層の出土である。

第9図1…ほぼ直口を呈し、口唇部は(ト)に分類される資料である。胴部において2か所の接合面が観察できる資料である。器壁は7mm前後。器面は水磨をうけているものの、調整痕がうかがえ、外面はナデ調整が丁寧に施されるが、接合面においてはかかる凸面を形成し、内面は雑に仕上げられ凹凸を有する。胎土は泥質に分類され、赤色粒を主体に石英・長石、角閃石、サンゴを含む。焼成はよく堅緻。内外面とも赤褐色を有する。器質から第9図23の平底と同一の個体に属するものと考えられる。第Ⅱハb層の出土。

同図2…間延びしたそり返りをもつ口縁部で、口唇部は(ニ)に分類される資料である。器壁は約5mmを測り、薄手の部類にはいる。外面は横方向のナデによる調整が比較的丁寧に施されているが、内面は不十分で凹凸が残る。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石、赤色粒を含む。焼成はよい。外面の器色は黄褐色、内面は赤褐色を呈する。第Ⅱ口層の出土



第8図 Nトレンチ出土の土器



第9図 Nトレンチ出土の土器

である。

同図3…口唇部が内外面へ幾分せり出す資料で、形態は(イ)に分類される。器壁は7mm前後。内外面ともナデ調整が施され、外面は丁寧に施されているが、内面はやや雑で指頭圧痕が残る。胎土は砂質で石英・長石を主体に角閃石を含む。焼成は悪い。外面は赤褐色

内面は黄褐色を呈する。第Ⅱハ層の出土。

同図4…やや内彎ぎみの資料である。口唇部形態は(ニ)に分類でき、器壁は7mm前後である。内外面とも比較的丁寧なナデ調整が施されている。胎土は砂質に分類され、角閃石を主体に石英・長石を含む。焼成はよい。外面の器色は黄褐色、内面は赤褐色を呈する。

第Ⅱハ層の出土。

同図5・6…ほぼ直口を呈し、口唇部形態は(=)に分類される資料である。同図5の器壁は5mm前後で比較的薄手である。内外面ともナテによる調整が施され、外面は比較的丁寧であるが、内面はナテが不十分なため凹凸が残る。胎土は砂質で石英・長石を主体に角閃石を含む。焼成はよい。外面の器色は黒褐色、内面は暗褐色を呈する。第Ⅱ層の出土。

同図6の器壁は6mm前後である。外面のナテ調整は丁寧であるが、内面はナテが不十分である。胎土は砂質で石英・長石を主体に角閃石を含む。焼成は良好。外面の器色は黒褐色、内面は橙褐色を呈する。第Ⅱハ層の出土。

同図7…口唇部において外側に突状にふくらみをもつもので、形態は(ホ)に分類される。器壁は8mm前後である。外面は横方向のナテによる調整が丁寧に施され、部分によってはヘラナテ状の調整痕がうかがえる。内面は指ナテによる調整が雑で指頭圧痕が明瞭に残り、凹凸の面を残す。胎土は中間にちかい砂質で、石英・長石を主体に角閃石、赤色粒、サンコなどを含む。焼成は良好である。外面は暗褐色を基調に部分的に赤褐色をおび、内面は黒褐色を基調に黄褐色を呈する箇所もある。第Ⅱ・Ⅲ層の出土。

同図8…ほぼ直口を呈し、口唇部は丸状で形態は(ト)に分類される。器壁は5mm前後で薄手である。内外面ともナテによる調整が比較的丁寧に施されている。胎土は砂質に分類され、石英・長石を主体に角閃石を含む。焼成はもろい。外面の器色は赤褐色、内面は黄褐色を呈する。第Ⅱ層の出土。

同図9…口唇部は丸状で形態は(ト)に分類される。器壁は8mm前後。外面はナテによる調整が比較的丁寧に施されているが、内面は

ナテが雑に施され凹凸が残る。胎土は砂質に分類され、サンコを主体に石英・長石、角閃石を含む。焼成はもろい。外面の器色は暗褐色、内面は黄褐色を呈する。第Ⅱハ層の出土である。

同図10…先細になる口縁部の形態をもつものである。口唇部の形態が(ト)に分類されるもので、器壁は8mm前後。内外面ともナテ調整が施されているが、きれいにナテつけられるほどではなく、外面には凹凸が残りさらさらしている。胎土は砂質で、石英・長石を主体に角閃石を含む。焼成はもろい。器色は外面は黄褐色、内面は暗褐色を呈する。第Ⅱ層の出土。

同図11…やや内彎を呈する資料で口唇部形態は(=)に属する。口唇部から胴部にかけて徐々に厚みを増し、8mmとなる。内外面ともナテによる調整が比較的丁寧に施され、内面においてはスシ状の調整痕が右上から左下に走るが、口唇部においてはかなりナテつけられ、調整が丁寧である。胎土は泥質で、角閃石を主体に石英・長石を含む。焼成はよく堅緻。器色は外面は黒褐色、内面は橙褐色を呈する。第Ⅰ層の出土。

同図12・14・15…砂質に分類され、口唇部形態は3点とも(=)に分類される。石英・長石を主体に角閃石を含む資料である。器壁は同図14・15は6mm程度、同図12は約8mmを測る。器面はナテ調整され、外面はいずれも丁寧であるが、同図15は外面においても指圧痕がうかがえる。内面はいずれも雑であり、同図14の内面の指圧痕は特に顕著である。焼成は同図14・15はよいが、同図12は悪い。器色は同図15は外面黒褐色、内面赤褐色で、12・14は内外面とも黄褐色を呈する。出土地は同図12は第Ⅱハb層、同図14は第Ⅱロ層、同図15は第Ⅱ層である。

同図16…口唇部形態は(=)に属し、内外面ともナデ調整が施されており、部分によっては細かい擦痕もみられる。泥質で石英・長石を主体に角閃石を含む。器壁は6mm前後。焼成はよく堅緻で、器色をみると外面は黄褐色内面は暗褐色を呈する。第Ⅱ層の出土。

同図17…口縁部は直線的で先細になる土器で、口唇部は舌状の(リ)に分類される。器壁は7mm前後。内外面ともナデ調整が施され、外面は丁寧にナデつけられているが、内面はわずかに指頭圧痕をうかがうことができ、外面に比べると雑な仕上げになっている。胎土は中間タイプに分類され、石英・長石を主体にサンゴを含む。焼成は良く堅緻。外面の器色は橙褐色、内面は黄褐色を呈する。第Ⅱ層の出土。

同図18…先細の口縁部で口唇部は舌状を呈し、(リ)に分類される。器壁は8mm前後。内外面とも丁寧にナデつけられているが、わずかに凹凸面が残る。胎土はやや中間よりの砂質に分類され、角閃石を主体に石英・長石、サンゴを混入する。焼成は良好である。内外面とも黄褐色を呈する。第Ⅱ層の出土。

同図13・19…口縁部が若干内彎する資料である。同図13は口唇下、頸部、胴部において接合面が認められる。口唇部は(=)に分類される。器壁は8mm前後。内外面ともナデによる調整が丁寧に施されているが、内面において接合部箇所の上に凸面を形成する。胎土は砂質に分類され、サンゴを主体に石英・長石、角閃石を含む。焼成は悪い。外面の器色は赤褐色、内面は黄褐色を呈する。同図19の口唇部形態は(=)に分類され、器壁は7mm前後である。内外面とも雑なナデ調整が施され、粗いザラザラした面を呈する。胎土は中間タイプに分類され、石英・長石を主体に角閃石、赤色粒を含む。焼成は良好。外面の器色は黒

褐色、内面は黄褐色を呈する。同図13は第Ⅲ層、同図19は第Ⅰ層の出土である。

マリ形土器

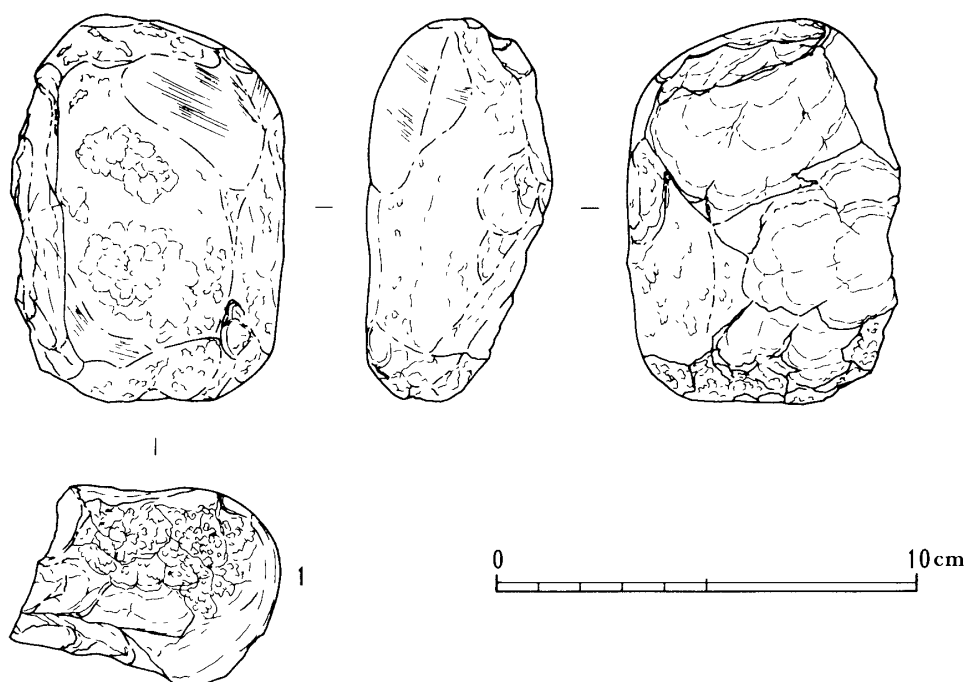
第9図20…本標品は小型で内彎する形状や内外面共に丁寧なナデが施される特徴からマリ形になると考えられる資料である。口唇下には5mmの幅で凹面を形成し弱い屈曲部をもつ。また、同部分直下に接合部を有する。口唇部は丸状を呈し、形態は(ト)に分類される。器壁は7mm前後。内外面ともナデによる調整が丁寧に施される。胎土はやや泥質の中間タイプで、石英・長石を主体に角閃石、赤色粒を含む。焼成は良い。器色は内外面とも赤褐色を呈し、所々黒褐色をおびる。第Ⅱ層の出土。

底 部

同図22…平底の一部で、底径推算は6cmを測る。底面からの立ち上がり部は若干外反する。内外面ともナデによる調整が比較的丁寧に施されている。胎土はやや中間タイプで角閃石を主体に石英・長石を含む。焼成はよい。器色は内外面とも赤褐色を呈する。第Ⅱ層の出土。

同図23…平底を示す資料である。底面からの立ち上がり部は若干外反し、底径は4cmを測る。内面はすり鉢状を形成し、器壁は9mm前後を呈する。内外面ともナデによる調整が施されているが、擦痕が散見される。立ち上がり部分の接合部においては、横位のヘラナテのような調整痕がうかがえる。胎土は泥質に分類され、赤色粒を主体に石英・長石、角閃石、サンゴを含む。焼成はよく堅緻。器色は外面は赤褐色、内面は黒褐色を呈する。第Ⅰ層の出土。

同図25…先端部は欠損しているものの残存



第10図 Nトレンチ出土の石器

部から乳房状尖底と考えられるものである。外面はナテ調整が比較的丁寧に施され、内面はナテ調整が施されているが、外面に比べ雑で石英・長石など大粒の混入物が表出し、さらさらしている。胎土は泥質に分類され、石英・長石を主体に角閃石を含む。焼成はよく堅緻。器色は外面は橙褐色、内面は黄褐色を呈する。第Ⅱロ層の出土。

移入土器

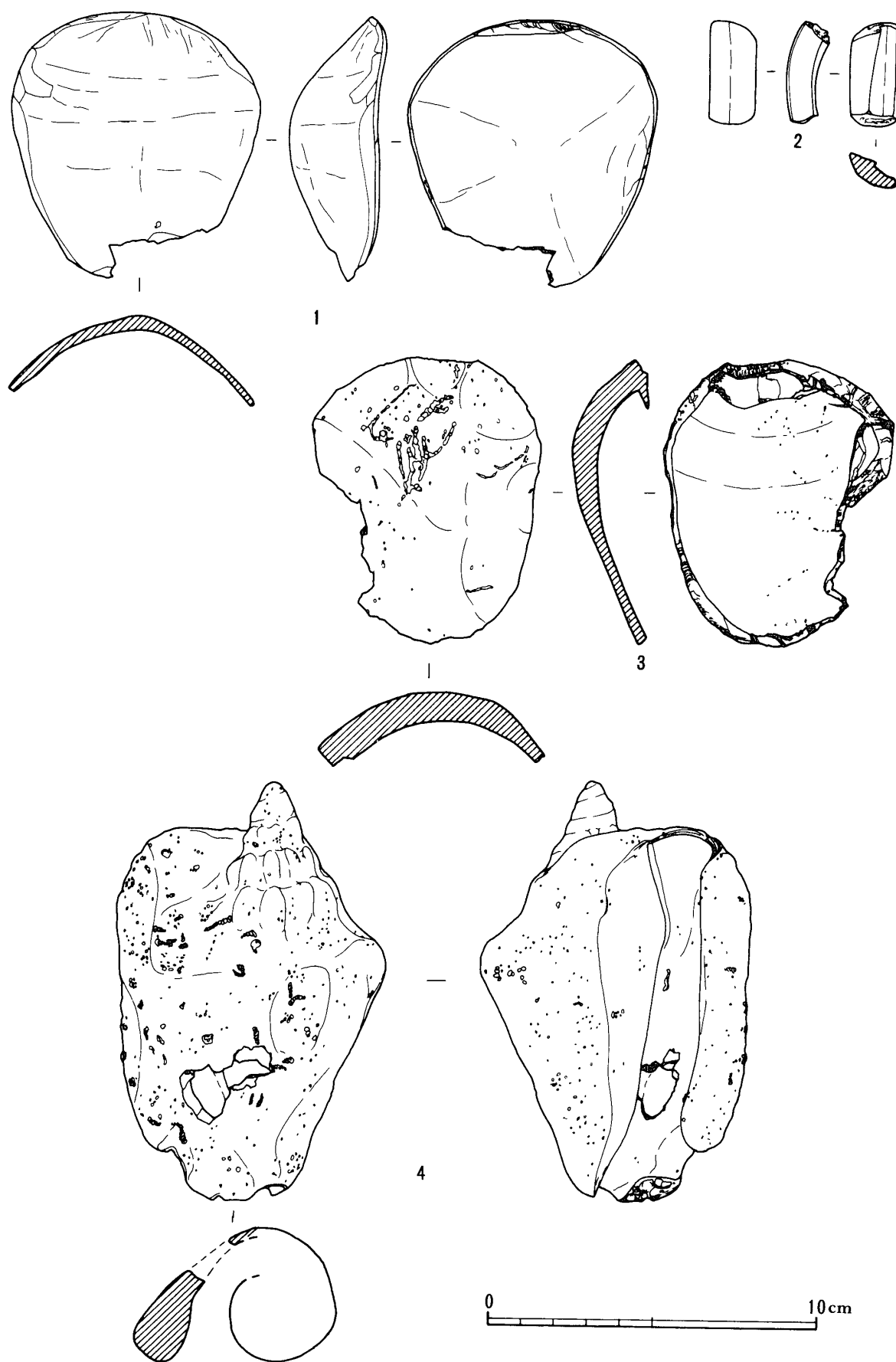
第9図21は胴部資料ではあるが、三角状凸帯を貼付する特性をもった資料で弥生土器かと考えられる。凸帯の一辺の長さは約1cmでシャープである。外面は凸帯の部分とその下部を若干残す程度であるが、ナテによる調整のあとがかえ、内面は左上から右下へ細い擦痕が走る。胎土は泥質で石英・長石を主体に赤色粒を有する。焼成はよく堅緻。外面は赤褐色、内面は黒褐色を呈する。第Ⅰbc層の出土である。

同図24・本資料は底径4.6cmで、底部の

成形技法のうかがえる平底である。平底の外周部に粘土紐を貼付・調整し、結果として立ち上がり部が若干くびれた様に張り出すものである。器壁は6mm前後。器面調整は外面はナテつけが丁寧に施され、なめらかな面が形成されている。内面は器面保持が悪く凹凸をなし、混入物が表出し、さらさらした面を形成する。弥生土器の壺の底部と考えられる。胎土は泥質で、3mm弱の石英・長石粒を主体に角閃石、赤色粒を有する。焼成はよく堅緻。外面は赤褐色、内面は灰褐色を呈する。第Ⅱイ層の出土。

石 器

第10図1の1点のみ出土である。形状は石鱗状を呈しており、表面及び背面には細かい打痕がみられ、さらに表面から側面にかけての一部に弱い研磨痕が観察される。すり石から敲石への転用と思われる。石質は本部石灰岩である。長さ9.1cm、幅5.8cm、重量400g。第Ⅱイ層の出土。



第11図 Nトレンチ出土の貝製品

貝 製 品

本区から検出された貝製品は第11図の4点で、その内訳は装飾品が1点、実用品が2点、有孔未製品が1点である。

装 飾 品

第11図2 イモカイ（アンボンクロサメ）の螺塔部付近の体層部を横切りにもちい研磨加工した貝輪である。殻軸の部分が若干残存する。研磨は丁寧に施される。法量は幅1.1cm、厚さ5mm、重量5gである。第Ⅱハ層の出土。

実 用 品

第11図1 コホウラの体層部を利用した製品である。内外共に全面研磨が施されるが、特に縁辺部分が丁寧に、稜が残るほとみかいている。

縦の長さ8cm、横の長さ7.6cm、厚さ5mm、重量35gを測る。第Ⅱ層の出土。

同図3 同図1と同様、コホウラの体層部を利用したものである。形状は同図1と類似するが、研磨痕はみられず、殻軸を取りのそいた荒割の状態の未製品である。

縦の長さ8.6cm、横の長さ6.9cm、厚い部分で8mm、薄い部分は2mm、重量は60gを測る。第Ⅱハ層の出土。

同図4 アツソテカイのそての部分に外側から孔を穿っている。孔は2回の打ち欠きで穿たれており左側は内側から、右側は外側からおこなわれ、特に右側は鋭く、殻軸まで破損がおよぶ。他の部分には加工痕はみられない。孔の長さ2cm、幅1.8cm、重量350gを測る。第Ⅱ層の出土。（大浜・金城）

c Oトレンチの内容

層 序

O-25~27クリットはO-27クリットの南西角の一部に攪乱がみられるものの、ほぼ全体的にプライマリイ層序であった。第Ⅰ層は茶褐色粘土砂層の耕作土で約25cmである。第Ⅱ層は灰褐色砂層で、全体的に20cm前後の厚さを測るが、出土遺物は南側半分に多く、同層の下位にいくにしたがい西壁よりに片寄る傾向がみられ、下面ではO-27クリットの西壁面よりに貝殻の集中が検出された。第Ⅲ層は黄褐色砂層の無遺物層であった。

土 器

本区において総数667点の土器片が得られたが、ほとんどは小破片である。そのうち、口縁部は19点、底部は7点である。器種は深鉢形17点とマリ形2点で、前者が圧倒的に多い。壺形は本区では出土がなかった。底部はすべて底径の小さい平底である。

鉢形Ⅰ類土器










5点が得られ、その内訳は、鉢Ⅰ類Aが4点（第12図1~4）、鉢Ⅰ類Bが1点（同図5）である。

鉢形Ⅰ類A

第12図1 口径が推算可能な資料で約29cmである。口縁部はゆるやかに外反し、肩部に屈曲を持ち、その部分から胴部へは直線的に移行する。口唇部の形態は先細の(リ)タイプである。また、口縁部の外反部分と肩部の稜の部分で接合を行っている。器壁は口縁部でやや薄く7mmであるが、頸部から胴部下端にかけては9mmでほぼ均一な厚さをもつ。外面の器面調整をみると頸部は横方向のナテ調整がなされ、胴部は斜め、内面は斜め方向の指頭圧痕がめたつ。焼成は良好で器色は内外面とも赤褐色を基調とするが、外面には黒味がかった箇所も見受けられる。胎土は砂質で石英・長石を主体に角閃石、赤色粒を混入する。第Ⅱ層の出土。

層序 器種			I	II	III	合 計
鉢 類	I	A	ニ(2)	リ・ニ		4
		B		リ		1
	II 類	C	リ	ニ(4)	リ(2)	7
		D		チ		1
		E		チ		1
形	III 類	F		ニ		1
		G		ニ	ニ	2
壺 類	I	H				
		I				
	II 類					
	III 類					
マ リ 形				イ・ト		2
合 計			3	13	3	19

第12表 Oトレンチの器種別出土状況

器種 口唇部形態	鉢形							壺形			マ リ 形	合 計	
	Ⅰ類			Ⅱ類		Ⅲ類		Ⅰ類		Ⅱ類			Ⅲ類
	A	B	C	D	E	F	G	H	I				
イ 												1	1
ロ 													
ハ 													
ニ 	3		4			1	2						10
ホ 													
ヘ 													
ト 												1	1
チ 				1	1								2
リ 	1	1	3										5
合 計	4	1	7	1	1	1	2					2	19

第13表 Oトレンチの口唇部形態と器種別との関係

同図2…小破片であるが、口縁部の外反の形状から本類に該当するものと考えられる。口唇部の内側はやや丸味をおび(ニ)タイプに属する。口縁部の外反は中央やや上部にある。器壁は全体的にほぼ均一で8mmである。器面は内外面とも横方向のナデ調整が施されており、特に外面は入念に行われている。内面は口縁部付近に指頭圧痕が一部残り、外面に比べてやや雑である。焼成は良好で、外面は黒褐色、内面は赤褐色を呈している。胎土は砂質で石英・長石を主に角閃石や赤色粒を混入する。第II層の出土。

同図3・4…2点とも、口唇部の形態は(ニ)に分類される。器壁は同図3が7mm、同図4は11mmで口唇部にいくにしたがい細くなる。内外面とも横方向の細かい擦痕がみられるが、内面は若干指圧痕がみられる。焼成は同図3は良好だが、同図4はもろい。2点とも砂質に分類され、石英・長石を主体に角閃石、サンゴを混入する。器色は内外面とも褐色を呈するが、同図4はやや暗い色調である。2点とも第I層の出土。

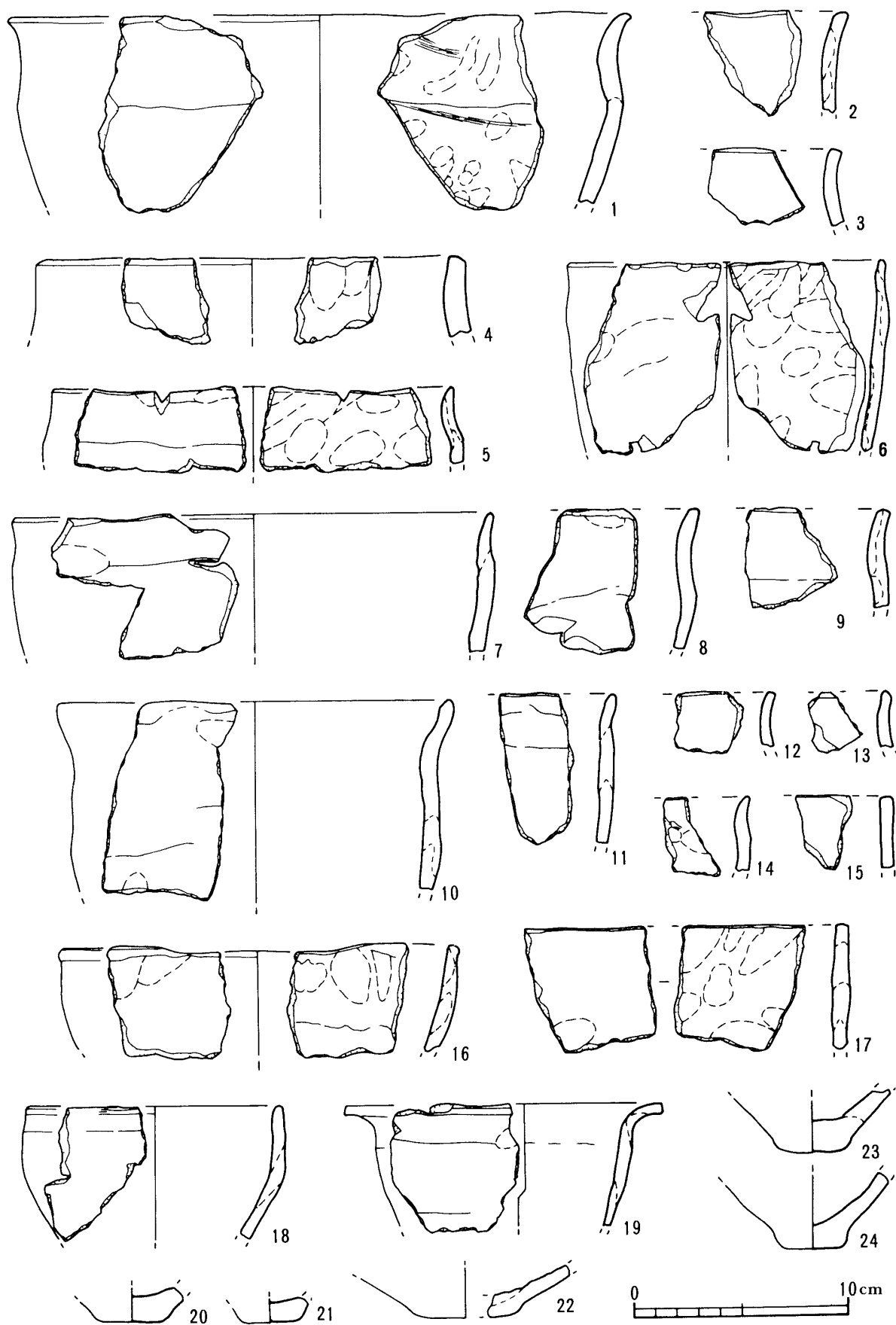
鉢形I類B

同図5…口径は推算18.8cmである。口縁部の外反度は弱い、肩部に屈曲を持つ。肩部に最大径があり、下方へ直線的に細まると思われる。口唇部の形態は(リ)タイプに属し、内面はやや丸味をおびているのに対し、外面は稜をつけて尖らす。断面には肩部の稜の部分に接合痕をみることができる。器壁は肩部から胴部にかけては7mmであるが、口縁部でやや細くなる。頸部外面に横方向のナデ調整痕が明瞭に残る。内面は指頭圧痕の凹凸が残る程の粗雑なナデである。焼成は良好で、器色は外面で黒褐色、内面で赤褐色を呈する。胎土は砂質で石英・長石を主に角閃石を混入する。第II層の出土。

層 序			I	II	III	合 計
テンパー						
砂質	角閃石主体	角閃石のみ				
		角>石・長	平底	鉢Ⅱcニ・平底	鉢ⅢGニ	4
		角>石・長+サ				
		角>石・長+赤				
		角>石・長+赤+サ				
	石英・長石主体	石英・長石のみ		鉢ⅢGニ		1
		石・長>角	鉢Ⅱcリ・平底	鉢ⅠBリ・鉢ⅢFニ	鉢Ⅱcリ(2)ニ(2)	8
		石・長>角+サ	鉢ⅠAニ(2)			2
		石・長>角+赤		鉢ⅠAリ・ニ		2
		石・長>角+赤+サ				
		石・長>赤				
		石・長>サ				
	サンコ主体	サノコのみ				
		サ>石・長				
		サ>角+石・長				
	小色粒主体	赤>角+石・長				
		赤>角+サ				
		赤>角+石・長+サ				
中間	角閃石主体	角閃石のみ				
		角>石・長	平底			1
		角>石・長+サ				
		角>石・長+赤				
		角>石・長+赤+サ				
	石英・長石主体	石英・長石のみ				
		石・長>角				
		石・長>角+サ				
		石・長>角+赤				
		石・長>角+赤+サ				
		石・長>赤				
		石・長>サ				
	サンコ主体	サンコのみ				
		サ>石・長				
		サ>角+石・長				
	小色粒主体	赤>角+石・長				
		赤>角+サ				
		赤>角+石・長+サ				
泥質	角閃石主体	角閃石のみ		鉢ⅡEチ		1
		角>石・長			平底	1
		角>石・長+サ				
		角>石・長+赤		鉢ⅡDチ		1
		角>石・長+赤+サ				
	石英・長石主体	石英・長石のみ		鉢Ⅱcニ		1
		石・長>角		マリ形イ・ト		2
		石・長>角+サ				
		石・長>角+赤				
		石・長>角+赤+サ				
		石・長>赤				
		石・長>サ				
	サンコ主体	サノコのみ				
		サ>石・長				
		サ>角+石・長				
	小色粒主体	赤>角+石・長				
		赤>角+サ				
		赤>角+石・長+サ				
合 計			6	12	6	24

第14表 Oトレンチの口縁部・底部の胎土別出土状況

層 序			I	II	III	合 計
砂 質	角閃石主体	角閃石のみ				
		角>石・長	66	49	21	136
		角>石・長+サ				
		角>石・長+赤	1			1
		角>石・長+赤+サ				
	石英・長石主体	石英・長石のみ				
		石・長>角	159	106	36	301
		石・長>角+サ	4		1	5
		石・長>角+赤	18	7	3	28
		石・長>角+赤+サ				
	サンコ主体	石・長>赤				
		石・長>サ				
		サンコのみ	1			1
		サ>石・長				
		サ>角+石・長				
赤色粒主体	赤>角+石・長					
	赤>角+サ					
	赤>角+石・長+サ					
小 計			249	162	61	472
中 間	角閃石主体	角閃石のみ				
		角>石・長	4	7	1	12
		角>石・長+サ				
		角>石・長+赤				
		角>石・長+赤+サ				
	石英・長石主体	石英・長石のみ	1	1	1	3
		石・長>角	8	14	4	26
		石・長>角+サ				
		石・長>角+赤	3	2	1	6
		石・長>角+赤+サ				
	サンコ主体	石・長>赤				
		石・長>サ				
		サンコのみ				
		サ>石・長	1			1
		サ>角+石・長				
赤色粒主体	赤>角+石・長					
	赤>角+サ					
	赤>角+石・長+サ					
	小 計	17	24	7	48	
泥 質	角閃石主体	角閃石のみ				
		角>石・長	14	21	6	41
		角>石・長+サ				
		角>石・長+赤		3		3
		角>石・長+赤+サ				
	石英・長石主体	石英・長石のみ				
		石・長>角	26	42	6	74
		石・長>角+サ				
		石・長>角+赤	1	2		3
		石・長>角+赤+サ				
	サンコ主体	石・長>赤				
		石・長>サ				
		サンコのみ				
		サ>石・長				
		サ>角+石・長				
赤色粒主体	赤>角+石・長					
	赤>角+サ					
	赤>角+石・長+サ					
小 計			41	68	12	121
合 計			307	254	80	641



第12図 Oトレンチ出土の土器

鉢形Ⅱ類土器

鉢形Ⅱ類に属する資料は9点で、そのうちCは7点、Dは1点、Eは1点である。

鉢形Ⅱ類C

同図6…口径が推算14.8cmの資料である。口縁部の外反や肩部の屈曲は、鉢Ⅱ類の中でもかなり弱いもので、胴部下はやや直線的に底部へ移行するものである。口唇部はフラットな面を持つ(=)タイプに属するが、水平を保つほどでなくやや波状を呈する。断面では、口縁部付近と肩部・胴部の屈曲部に接合痕をみることができる。器壁は口縁部でやや薄く4mm、頸部から胴部にかけてはほぼ均一で5mmである。器面調整は両面とも横方向のナデ手法を用いている。外面は特に入念な調整を行っているが、内面は絞や指頭圧痕を残す。焼成は良好で、器色は赤褐色を基調とするが、外面においては黒味がかかった部分が広範囲に認められる。胎土は砂質で、角閃石をはじめ石英・長石を混入する。第Ⅱ層の出土である。

同図7・14…出土状況や土器の特徴から同一個体の可能性が強い土器である。同図7は口径推定22.8cmで、中型の土器である。器形は前述の同図6と類似するが、肩部の屈曲は前者より強い。口唇部は(リ)タイプに属する。断面には肩部の稜の部分に接合痕が確認でき、同図7・14の2点とも輪積み接合部での破損である。器壁は口縁部でやや薄く5mm、頸部から胴部にかけてはほぼ均一で7mmである。器面調整をみると、内面は保存状態が悪く観察することは困難だが、外面の頸部に調整痕を確認することができ、横方向のナデ手法が用いられている。焼成は良好で、器色は外面で黒褐色、内面で暗褐色を呈する。胎土は砂質で、石英・長石をはじめ角閃石を混入する。第Ⅲ層の出土である。

同図8・9…この2点は、口縁部の外反が弱く、肩部は緩く屈曲する「く」字形の土器である。同図9の口唇部は(=)タイプに属し、内面はやや丸味をおびている。断面には肩部の稜の部分に接合痕が認められる。器壁は全体的にはほぼ均一で9mmである。同図8は口唇部の摩耗が著しく判然としない。器壁は8mmである。器面調整は同図8・9とも内外面に横方向のナデ調整が施され、丁寧な仕上げとなっている。焼成は良好で、器色は同図9の外面が黒褐色、内面が赤褐色を呈し、同図8は内外面とも橙褐色である。胎土は2点とも砂質で、石英・長石をはじめ角閃石を混入する。両者とも第Ⅱ層の出土である。

同図12・13…口唇部は(=)タイプ(12)、(リ)タイプ(13)があり、同図13はやや尖りぎみである。同図12の器面調整は横方向にナデ調整を行っており、器面の凹凸はみられない。胎土は泥質で、石英・長石のみみられる。器壁は同図13が7mmで、同図12がやや薄い。焼成は2点とも良好で、特に同図12の外面が黒褐色、内面は赤褐色を呈している。同図13は内外面とも茶褐色を呈し、胎土は砂質で、石英・長石を主体に角閃石が含まれる。同図12は第Ⅱ層の出土、同図13は第Ⅰ層の出土である。

鉢形Ⅱ類D

同図11…口縁部・頸部で緩やかな屈曲をもち、胴部はやや直線的にのびる土器である。頸部の屈曲部は凹状の横位のナデによって作られ、その結果、上下に不明瞭な稜が2本みられる。また、内面にも弱い横ナデによるくぼみができ不明瞭な稜が確認できる。いずれも整形の際に意識した感を受ける。口唇部の形態は(チ)タイプに属する。胴部は凸状の輪積み接合部の痕がみられるが、頸部の接合部は

内側から斜めに貼り付け、屈曲部を意識している。器壁は稜の部分で僅かに厚くなる以外は全体的にほぼ均一で7mmである。焼成は極めて良好で、堅緻な土器である。器色は両面とも橙褐色を呈し、光沢がある。胎土は泥質で、角閃石を主体に石英・長石と微量の赤色粒を混入する。第Ⅱ層の出土。

鉢形Ⅱ類 E

同図10・口径推定18.2cmで、中型の土器である。器形は前述の同図11と類似するが、前者に比べて屈曲部の幅とカーブの大きい土器である。特に、口縁部近くがキャリパー状に内彎する類例の少ない土器でもある。口唇部の形態は(チ)タイプに属するが、部分的に不定形であるため、形が異なる。口縁部の外縁に1本、胴部に2本いずれも不明瞭な稜があり、その部分に接合痕をみることができる。器壁は口縁部でやや厚く8mm、頸部以下は全体的にほぼ均一で6mmである。外面は口縁部と頸部には横方向、胴部には斜め方向のナデが施されている。内面にも全体的に横方向のナデが施されているが、指頭圧痕が残り器面の凹凸を覆うほどのものではない。焼成は良好で、堅緻な土器である。器色は両面とも暗褐色を呈する。胎土は泥質で、角閃石のみを混入する。第Ⅱ層の出土。

鉢形Ⅲ類土器

本区より得られた口縁部資料のうち鉢Ⅲ類の範疇に入る資料は4点でそのうち鉢Ⅲ類Fの資料は1点、鉢Ⅲ類Gは2点である。

鉢形Ⅲ類 F

同図19・口径が14.6cmで、小型の鉢形を呈する。口縁部は強く外側に開き、頸部でしまり、胴部で弱い脹らみをもつ特異な器形

である。口唇部の形態は(ニ)タイプに属するが、やや丸みをもつ。断面には、口縁部では内側から、頸部と胴部では外側からの接合痕をみることができる。器壁は口唇部から胴部まではほぼ均一で7mm、胴下部は薄く4mmである。器面調整は内面の口唇部と外面は横方向のナデ、内面の頸部から胴部にかけては凹凸が残る。焼成は極めて良好で堅緻である。外面の器色は黒褐色、内面は赤褐色を呈する。胎土は砂質で混入物には大粒の石英・長石や角閃石がみられ、これまでの土器の胎土とも異なる。第Ⅱ層の出土。

鉢形Ⅲ類 G

同図15・17・口縁部から胴部へ直線的にのびる器形と推定される。口唇部の形態は(ニ)タイプに属する。同図15・17は口唇部の両端はシャープな角をもつ。同図17の断面には口唇部下方へ1cm間隔の輪積み接合部をみることができる。器壁は2点とも全体的にほぼ均一で6mmである。器面調整は外面には横方向のナデが入念に行われているが、同図17の内面はナデが徹底せず、器面の凹凸が明瞭に残る。焼成は良好で、器色は同図15が褐色、同図17が淡褐色を呈する。胎土は砂質で、同図15は角閃石を主に石英・長石を混入し、同図17は石英・長石のみを混入する。同図15は第Ⅲ層、同図17は第Ⅱ層の出土である。

マリ形土器

本区より2点の口縁部資料が得られた。

同図16・口径推算18cmの土器である。口縁部はやや内彎し、緩やかなカーブを描きながら底部へ移行する。口唇部の形態は(イ)タイプに属し、部分的に形状が微妙に異なる。口唇部下方に外側から貼り付けを行った接合痕

をみることができる。器壁は張出した部分でやや厚く、口縁部で薄い。器面調整は外面では横方向に、内面では縦方向にナデが施され、特に内面は入念である。両面とも口縁部付近に指頭痕が明瞭に残る。焼成は極めて良好で、堅緻である。器面に光沢があり、器色は茶褐色を基調としており、内面は広範囲にわたって黒味がかっている。胎土は泥質で、石英・長石と角閃石を混入する。第Ⅱ層の出土。口縁部付近は5mm、胴部付近は9mmを測る。

同図18…口径推算12cmの小型の土器である。口縁部の立ち上がりは、直線的で頸部に1cm前後のかいり屈曲をもち、胴下半部が緩やかなカーブをえがきながら内彎してゆくマリ状の土器である。断面からみるとカーブの形状は頸部では内側から胴下半部では外側から積み上げられている。口唇部の形態は(t)タイプである。器壁は口唇付近は6mm、頸部以下はほぼ均一で8mmである。器面調整は内外面ともナデ手法を用いて入念に行っており、器面の凹凸はみられない。焼成は極めて良好で堅緻である。器色は両面とも黄褐色を呈し、光沢がある。胎土は泥質で石英・長石を主体に角閃石を混入する。第Ⅱ層の出土。

底 部

本区より7点の底部資料が得られた。そのうち図上復元可能な資料はすべて底径が3cm～3.6cmの底径の小さい平底である。2点是小破片のため割愛した。

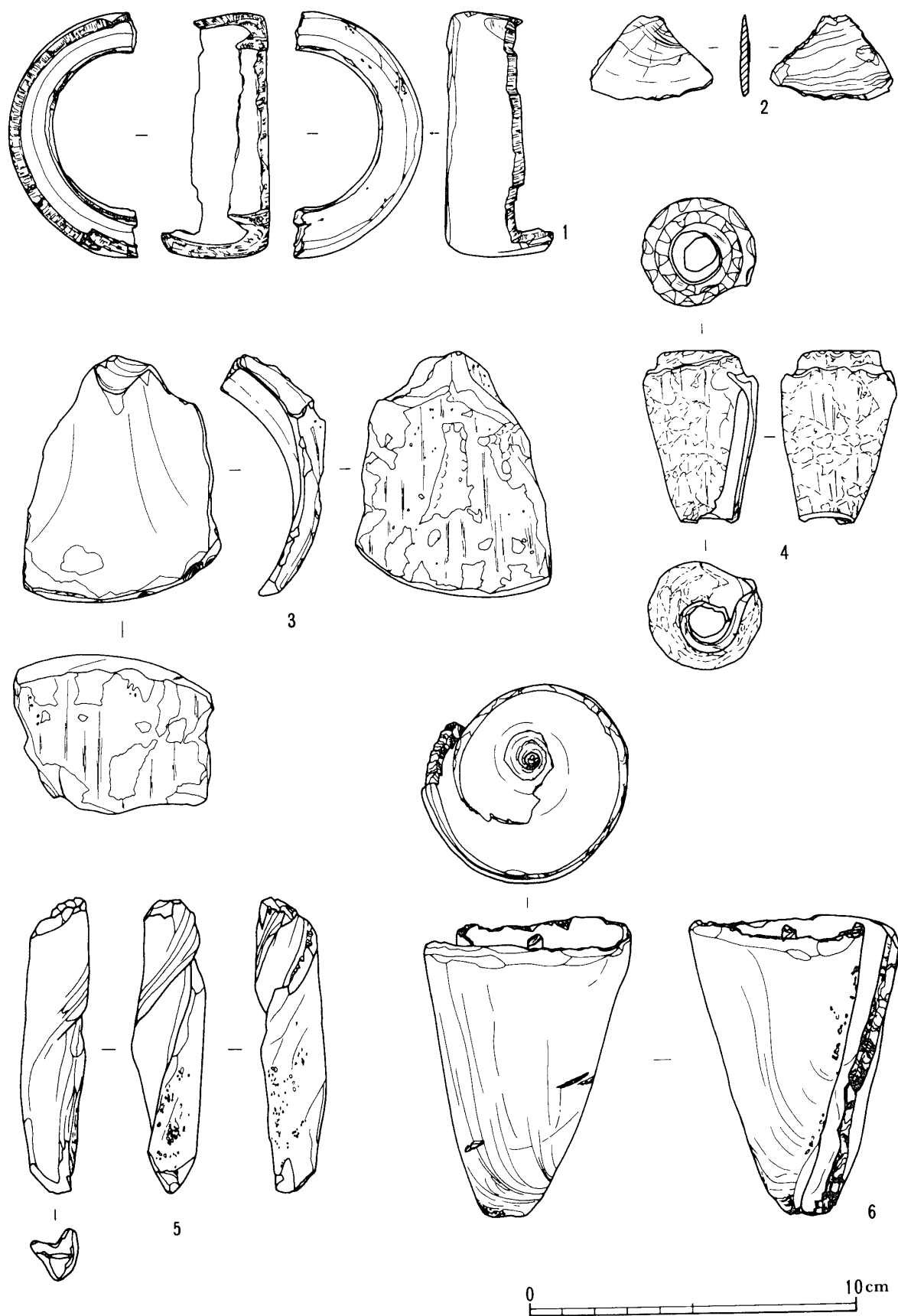
第12図20・21…2点とも底部の中央部分にくぼみがみられ、立上がり部分には弱いくびれをもつ平底である。底径は同図20が3.6cm、同図21が3cmで、2点とも接合部からの破損である。底面の厚さは同図20が1.2cm、同図21が1cmである。器面調整は2点

とも主に横方向のナデが施されており、特に同図20のくびれの部分のみ斜め方向のナデが行われている。焼成は2点とも良好で、特に同図20は堅緻である。器色は同図20は両面とも黄褐色を呈し、同図21の外面は暗褐色、内面は黄褐色を呈している。胎土は同図20が中間タイプで、角閃石を主体に石英・長石を含み、同図21は砂質で、石英・長石を主に角閃石を混入する。2点とも第Ⅰ層の出土。

同図22…底径は5cmで、外開きの強い平底である。器壁がやや厚く1.2cmである。断面には底部の外側に胴部下端との接合痕がうかがえる。器面調整は外側で縦方向のナデが入念に行われているのに対し、内面は器面の凹凸が明瞭に残り、雑な仕上げとなっている。焼成は極めて良好で、堅緻である。器色は両面とも黄褐色を基調にしているが、外面で暗褐色を呈する箇所が部分的にある。胎土は泥質で、角閃石を主体に石英・長石を混入する。第Ⅲ層の出土。

同図23…底径が3.2cmで径の小さい平底である。器形は立ち上がりの部分に弱いくびれがあり、立ち上がりの形状は外側に強く鋭角に開くものである。断面には底部と胴部下に接合部がみられ、底部の内側にも胴部下との接合部が認められる。全体的にはほぼ均一な器壁で8mm、底面は1.3cmを測る。焼成は良好で、器色は外面で橙褐色、内面で黒味がかかった褐色を呈している。器面調整は外面では縦方向に入念なナデを行っているが、器面の凹凸を整えるほどのものではない。胎土は砂質で、角閃石を主体に石英・長石を混入する。第Ⅰ層の出土である。

同図24…底径が3.2cmで、底径の小さい平底である。立ち上がりの部分には弱いくびれがあり、胴上部への立上りは鋭角である。底部の内面には弱いくぼみがあり、そこに指



第13図 O トレンチ出土の貝製品

頭圧痕がみられる。胴部下端の断面には接面がみられ、その部分からの破損である。器壁はほぼ均一で7mmで底面は1cmを測る。器面調整は両面とも横方向のナテが徹底されている。焼成は良好で、器色は両面とも黄褐色を呈しており、外面は内面に比べてやや黒っぽい。胎土は砂質で、角閃石を主体に石英・長石を混入する。第Ⅱ層の出土。

貝 製 品

本区より6点の貝製品が検出された。用途別にみると装飾品と実用品とに大別することができる。貝種をみると巻貝が4点、二枚貝が2点である。

装飾品

イモガイ科半截製品（第13図1）

本標品はイモガイ（アンボンクロザメ）の螺塔部付近の体層部を輪切りにした未製品である。殻頂部と体層部は入念な研磨が施され、直角の角をなし稜をもつが、切断部は荒い打ち欠きのままである。輪の半截部分の一部にも研磨がみられることから、その段階で放棄したものと考えられる。法量は最大長3.2cm、最大幅1.3cm、重量35.5gで現状から推察して外径3.5cmの大きさの貝を使用したものと考えられる。第Ⅰ層の出土。

イモガイ科装飾品（同図4）

本標品は貝の生前模様が残る極めて稀な資料で、模様と形状から素材はイモガイ科のクロミナシガイである。殻頂と下端を横位に切り、殻軸を除去したもので、管状を呈している。殻頂部は研磨により除去しているが、下端部はスリ切りによって切断している。殻口は成長線によって欠失しており、下端には研磨痕が認められる。長さ5.1cm、幅3.2cm、重量28gで、現状から約6.5cmの貝を使用

したものと思われる。第Ⅰ層の出土である。

イモガイ未製品（同図6）

体層部上位に擦切り痕を有するもので、貝種はアンボンクロザメである。体層部上部を貝輪使用の目的で切り取った残りと考えられる。擦切りは体層部の厚さの半分くらいにおよんでおり、あとは打割等の力を加え折り取ったようである。現在長9.6cm、最大径6.2cm、重量168g。第Ⅰ層の出土である。

実用品

貝鏃（同図2）

形状より推察して貝鏃とした資料である。クロチョウガイの腹部を利用したもので、1辺に丸みをもつ不整な三角形を呈している。周縁は内側からのチップングにより整形されている。その後、1辺には研磨を施した部分も認められる。法量は最大長3.7cm、最大幅2.4cm、厚さ3mm、重量2gである。第Ⅲ層の出土。

匙状製品（同図3）

夜光貝の外唇部付近を利用した製品である。殻軸から切断され、下方に刃部がもうけられる。刃部は丁寧な研磨が施されるが、両側面は割口が粗雑で研磨痕はみられない。法量は最大長7.4cm、幅5.5cm、厚さ0.8~1.3cm、重量は70gを測る。第Ⅱ層の出土。

貝製利器（同図5）

ホラガイ系のイトマキボラと思われる。貝種の殻軸を棒状に切取り殻軸の下端部に附刃にしたものである。刃部は研磨が施されており、殻軸の状況から腹面は凸状、背面は平面状をなすノミ形を呈している。刃縁にはすれ痕が認められる。殻軸の上端部から中央部付近にかけて螺旋状に沿って縦位の研磨痕がみられ、上端部で鋭角な研磨が施されている。上端部から中央部への研磨の順序がみられる。

本標品は長さ 8.9cm、幅 2.1cm、重量 50g である。第Ⅱ層の出土。

本遺跡出土品と類似の資料には、古座間味貝塚（注1）、大原貝塚（注2）、地荒原貝塚（注3）からの報告がある。（大浜）

注1 沖縄県教育委員会 沖縄県文化財調査報告書第43集 『古座間味貝塚範囲確認

調査報告書』 1982年3月

注2 沖縄県教育委員会 沖縄県文化財調査報告書第32集 『大原——久米島大原貝塚群発掘調査報告——』 1980年3月

注3 沖縄県・具志川市教育委員会 『地荒原貝塚——個人住宅建築工事に係る発掘調査報告——』 1986年3月

d O・P トレンチの内容

層 序

O・P-28、O・P-29・30 グリットの大半は攪乱を受けていたが、北側の O・P-28 グリットの第Ⅱ層の下部数センチにプライマリーな包含層が、痕跡をとどめていた。出土土器は大型片で、古式のものがみられた。

土 器

土器資料は口縁部 21 点、底部 3 点、胴部 496 点の総数 520 点である。口縁部資料中、図上復元が可能なものは 3 点のみである。残りは小破片であるが、可能な範囲で器形の分類を試みた。

器種は深鉢形が主で 18 点、壺形が 2 点、マリ形が 1 点である。底部は尖底と平底の 2 種である。土器片の器形別出土状況は第16表の通りである。胴部片は胎土・混入物を中心に分類を試み、結果は第19表の通りである。

鉢形土器

鉢形Ⅰ類B

第14図1 口縁部が外反し、肩部の屈曲部分に明瞭な稜をもつものである。また屈曲部は輪積み接合痕を残す。口唇部は平坦で、(イ)に分類される。器壁は口唇部で 6mm と薄く、肩部で 4mm と最も厚くなる。内外面は

ナデ調整が比較的丁寧で、内面では横位の調整痕が若干観察できる。胎土は中間タイプに分類され、混入物として石英・長石を主体に角閃石を含む。外面の器色は暗褐色、内面は黒褐色を呈する。焼成はよい。第Ⅱ層の出土。

同図2・口縁上部においてかるい外反を示すものである。口唇部の形態は(ニ)に分類され、器壁は 5mm 前後を測る。内外面はナデによる調整が丁寧だが、指頭圧痕が残る。胎土は泥質で、混入物として石英・長石を主体に角閃石を含む。器色は内外面とも赤褐色を呈する。焼成は良好。第Ⅰc層の出土。

同図3・軽い反りをもつ口縁部片である。内側の口縁下約 3cm の部分には、横方向のヘラ調整痕が残し、弱い段差が見られる。外面上部は横位の指ナデで調整を行う。口唇部は平坦で内側に傾き、(イ)に分類される。器壁は 6mm 程度ではほぼ一定している。胎土は中間タイプに属し、混入物として角閃石を主体に石英・長石、赤色粒を含む。外面の器色は暗褐色、内面は黒褐色を呈する。焼成は良好で堅緻である。第Ⅱ層の出土。

鉢形Ⅱ類C

第14図4・図上復元が可能で、口径は推定

18cmである。口唇部はほぼフラットだが、上方よりの圧力で、若干内側にせりだし、(ロ)に分類される。口縁部は強く外側へ屈曲するが、稜は明瞭ではない。肩部はルーズな逆「くの字」を形成し、屈曲はやや弱い。輪積み接合部を頸部・肩部・胴部の3か所にみることができる。外面の器面調整は肩部を境に異なり上方は横位のナデ調整、下方は斜め方向の粗雑なナデが施され、接合部には凹凸の面が残る。内面はナデによる調整が比較的丁寧だが、肩部の屈曲部分は不十分であり、接合痕を残す。器壁は7~9mmで肩部下はやや薄い。胎土は中間タイプで、混入物は角閃石を主体に石英・長石を含む。器色は内外面とも黄褐色で、肩部は黒色である。焼成はよい。第Ⅱ層の出土。

同図5…胴部から垂直にのび、口唇部直下で微弱な外反をもつもので、器壁は口唇部へいくにしたがい薄くなる傾向がある。口唇部形態は(ホ)に分類される。外面はナデによる調整が丁寧で、内面も同様な調整を施すが、浅めの指頭圧痕を残すため均一ではない。器壁は口唇部近くで7mm、胴部で9mmと厚い。胎土は砂質に分類されもろく、混入物として角閃石を主体に石英・長石を含む。器色は内外面とも赤褐色を呈する。第Ⅱ層の出土である。

鉢形Ⅱ類D

第14図6…口径が推算可能な資料で、23cmである。本資料は口縁部の一部が突出しており、楕円形をなす。口唇部は(ニ)に属する。頸部と胴上部に接合面が観察される。器面調整は外面の口縁部から頸部にかけて、横位のヘラナデが施され、胴部との境に不明瞭な稜が形成される。胴部においてはナデによる調整が丁寧で、内面もナデによる調整を施すも

の、不十分なために接合痕はやや凸面をもち残る。器壁は8mm前後。胎土は中間タイプに分類され、混入物として角閃石を主体に石英・長石、赤色粒を含む。器色は内外面とも赤褐色を呈する。焼成はよく堅緻。第Ⅱ層の出土である。

鉢形Ⅲ類F

第14図7…口縁部は胴部から直線的に移行し、口唇部近くで強く外反する薄手の土器である。口唇部は(ト)に分類される。外面は研磨手法とみても良いようなナデ調整が丁寧に施されるが内面はナデが粗雑で、指頭圧痕も見受けられる。器壁は6mm程度で薄い。胎土は砂質に分類され、混入物として石英・長石を主体に角閃石を含む。器色は内外面とも黄褐色を呈する。焼成は悪い。壁面からの出土。










鉢形Ⅲ類G

第14図8…口径推算39cmの大型の資料である。胴部から口縁部にかけて直線的に開口する器形である。口唇部は波状を呈し、断面の形態は(ト)に分類される。器壁は6~11mmを測り、厚さにむらがある。口唇部はナデ調整が丁寧に施され、鈍い光沢をもつ。口縁部の外面はヘラ状の工具により、数回にわたり左下から右上へ斜めに粗く調整され、一見、条痕文の様相を呈する。内面は横位に帯状にナデ調整を行い、ナデた部分は鈍い光沢を持ち、ナデの端の部分は微弱な稜線を形成する。また内面では指頭圧痕も比較的目立つ。胎土は砂質に分類され、石英・長石を主体に角閃石、サンゴを含む。外面の器色は赤褐色、内面は暗褐色を呈する。焼成はよい。第Ⅱ層の出土。

同図9…間延びした弱い反りをもつ口縁部破片で、口唇部は平坦な(イ)に分類される。外

層序 器種		I	II	III	壁 面	合計
鉢 形	I 類 A					
	B 類 B	ニ	イ・イ			3
	II 類 C		ロ・ホ			2
	D 類 D		ニ			1
	E 類 E					
	III 類 F				ト	1
	G 類 G	イ・ニ(2) ロ	ト(2)・ニ (3)・ヘ	ニ		11
壺 形	I 類 H					
	I 類 I		イ	イ		2
	II 類					
	III 類					
マリ 形 ト						1
合 計		6	12	2	1	21

第16表 O・Pトレンチの器種別出土状況

器種 口唇部形態	鉢 形							壺 形			マ リ 形	合 計
	I 類		II 類			III 類		I 類		II 類	III 類	
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	類	類	
イ 		2					1		2			5
ロ 			1				1					2
ハ 												
ニ 		1		1			6					8
ホ 			1									1
ヘ 							1					1
ト 						1	2				1	4
チ 												
リ 												
合 計		3	2	1		1	11		2		1	21

第17表 O・Pトレンチの口唇部形態と器種別との関係

側の器面調整はナテにより比較的丁寧に仕上げられている。口唇部下3.5cmの部位に一条横位のへう描きの様な線が認められ、稜を意識したものと考えられる。但し、浅くあまり目立たない。内面の調整は雑で、頸部と胴部の接点に接合部をもち、付近に指頭圧痕もみられる。器壁は7~8mm。胎土は砂質で若干もろく、混入物として石英・長石を主体に角閃石を含む。外面の器色は暗褐色、内面は赤褐色を呈する。第I層の出土。

同図10・11・13・口縁部が直線的に開口するものである。3点とも口唇部は(ニ)に分類される。同図10・13は口唇下約2cmの部分に接合面を有し、同部の内面は凹面を形成する。器壁は同図10・11は8mm前後、同図13は7mm前後を測る。器面はナテによる調整が施され、同図10の外面は比較的丁寧に、同図13の外面は鈍い光沢を有する。内面はいずれも雑で、指頭圧痕がうかがえ凹凸を呈する。胎土は砂質に分類され、同図11・13は石英・長石を主体に角閃石を含み、同図10は角閃石を主体に石英・長石を含む。器色は同図10は外面が黄褐色、内面は暗褐色、同図11の外面は暗褐色、内面は黒褐色、同図13の外面は黒褐色、内面は黄褐色を呈する。焼成は同図11は悪く、同図10・13は良い。同図11が第Ia層、同図10・13が第II層の出土である。

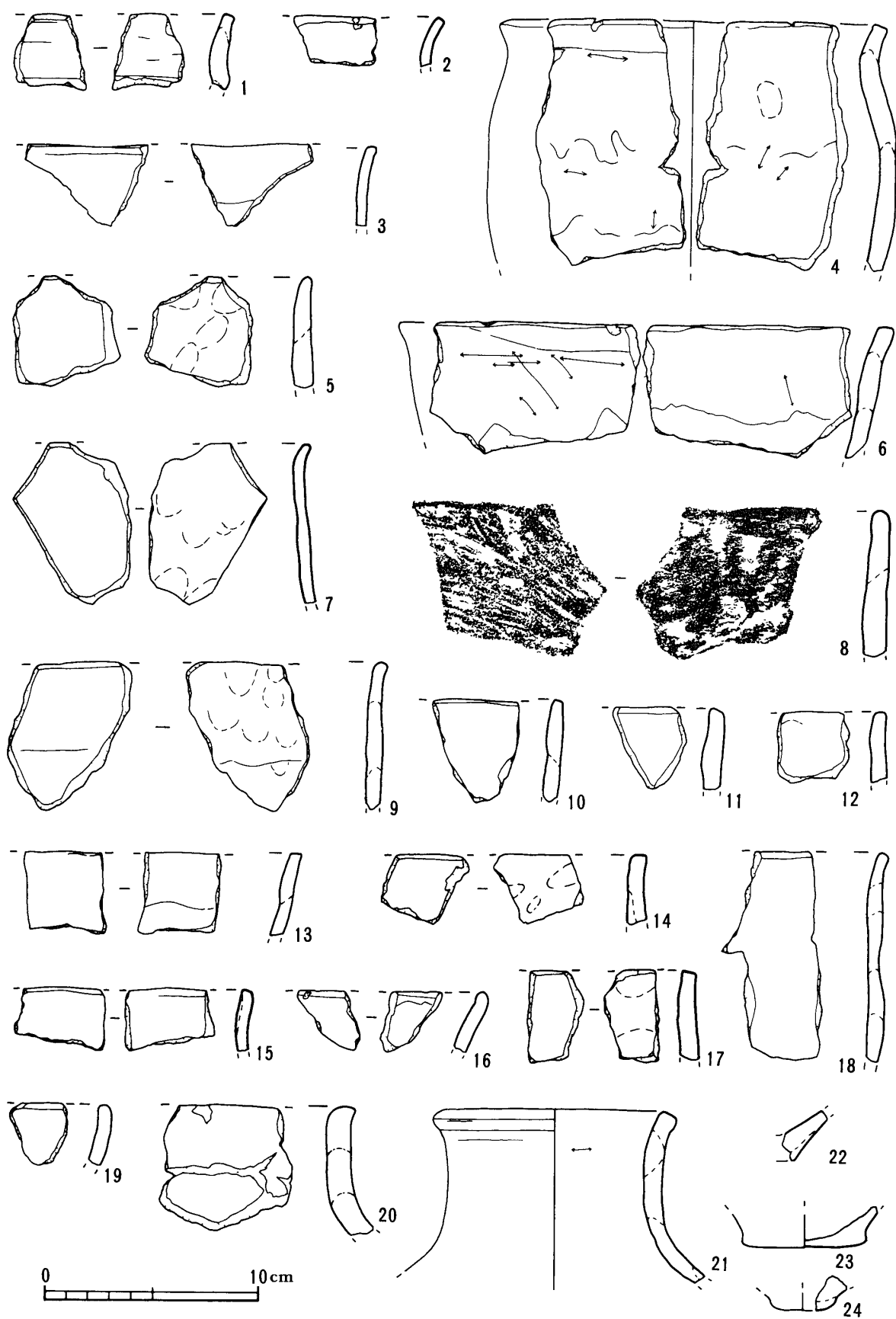
同図12・口縁上端部で微弱な外反を示し、胴部から口縁部へ直線的にのびるものである。口唇部の形態は(ニ)に分類され、器壁は7mm前後を測る。外面はナテ調整が丁寧だが、口唇部には指頭圧痕も見られる。内面のナテ調整は雑である。胎土は砂質に分類され、石英・長石を主体に角閃石を含む。外面の器色は黒色、内面は赤褐色を呈する。焼成は悪い。第II層の出土。

層 序		I	II	III	壁 面	合 計
テンパー	角	角閃石のみ				
	閃	角>石・長	鉢Ⅱcホ・鉢ⅢGニ・へ・尖底			4
	石	角>石・長+サ				
	主	角>石・長+赤				
	体	角>石・長+赤+サ				
	砂	石英・長石のみ				
	石	石・長>角	鉢ⅢGイ・ニ(2)・ロ	鉢ⅢGニ(2)	壺ⅠⅠイ	8
	英	石・長>角+サ		鉢ⅢGト	鉢ⅢFト	1
	・	石・長>角+赤				
	長	石・長>角+赤+サ				
	石	石・長>赤				
	主	石・長>サ				
	体	サノコのみ				
	質	サ>石・長				
	サノコ主体	サ>角+石・長				
	赤色粒主体	赤>角+石・長				
		赤>角+サ				
		赤>角+石・長+サ				
	中	角閃石のみ				
	閃	角>石・長	マリ形ト	鉢Ⅱcロ・平底		3
	石	角>石・長+サ				
	主	角>石・長+赤	鉢ⅠBイ・鉢ⅡDニ	鉢ⅢGロ		3
	体	角>石・長+赤+サ				
	石	石英・長石のみ				
	英	石・長>角	鉢ⅠBイ			1
	・	石・長>角+サ				
	長	石・長>角+赤				
	石	石・長>角+赤+サ				
	主	石・長>赤				
	体	石・長>サ				
	間	サノコのみ				
	サノコ主体	サ>石・長				
		サ>角+石・長				
	赤色粒主体	赤>角+石・長				
		赤>角+サ				
		赤>角+石・長+サ				
泥	角	角閃石のみ				
	閃	角>石・長		壺ⅠⅠイ		1
	石	角>石・長+サ				
	主	角>石・長+赤	鉢ⅢGト			1
	体	角>石・長+赤+サ				
	石	石英・長石のみ				
	英	石・長>角	鉢ⅠBニ			1
	・	石・長>角+サ				
	長	石・長>角+赤				
	石	石・長>角+赤+サ				
	主	石・長>赤				
	体	石・長>サ				
	質	サノコのみ				
	サノコ主体	サ>石・長				
		サ>角+石・長				
	赤色粒主体	赤>角+石・長	平底			i
		赤>角+サ				
		赤>角+石・長+サ				
	合 計	6	15	2	1	24

第18表 O・Pトレンチの口縁部・底部の胎土別出土状況

層 序		I	II	III	壁 面	合 計
テンパー						
砂	角閃石のみ	1	1			2
	角>石・長	50	23	4		77
	角>石・長+サ	1	2			3
	角>石・長+赤	2	1			3
	角>石・長+赤+サ		1			1
	石英・長石のみ	12	4	4	1	21
	石・長>角	157	76	30	2	265
	石・長>角+サ		2	1		3
	石・長>角+赤	10	10	4		24
	石・長>角+赤+サ					
	石・長>赤	2	3			5
	石・長>サ					
	サノコのみ	6	2	4		12
	サ>石・長	2		1		3
	サ>角+石・長	2	1			3
	赤>角+石・長	1				1
	赤>角+サ					
	赤>角+石・長+サ					
小 計		246	126	48	3	423
中	角閃石のみ					
	角>石・長	6	5			11
	角>石・長+サ		1			1
	角>石・長+赤	1	1	1		3
	角>石・長+赤+サ					
	石英・長石のみ	5				5
	石・長>角	19	10	2		31
	石・長>角+サ					
	石・長>角+赤	7		1		8
	石・長>角+赤+サ					
	石・長>赤					
	石・長>サ					
	サノコのみ					
	サ>石・長	1	1			2
	サ>角+石・長					
	赤>角+石・長		1			1
	赤>角+サ					
	赤>角+石・長+サ					
小 計		39	19	4		62
泥	角閃石のみ					
	角>石・長	1	1			2
	角>石・長+サ					
	角>石・長+赤					
	角>石・長+赤+サ					
	石英・長石のみ			1		1
	石・長>角	1	3	2		6
	石・長>角+サ					
	石・長>角+赤	1				1
	石・長>角+赤+サ					
	石・長>赤		1			1
	石・長>サ					
	サノコのみ					
	サ>石・長					
	サ>角+石・長					
	赤>角+石・長					
	赤>角+サ					
	赤>角+石・長+サ					
小 計		3	5	3		11
合 計		288	150	55	3	496

第19表 O・Pトレンチの胸部の胎土別出土状況



第14図 O・Pトレンチ出土の土器

同図14・17 口唇部が微弱な外反を呈する資料である。2点とも口唇部はフラットな面を有するが、断面の形態を分類すると、同図14は(=)、同図17は(ロ)に分類される。同図14は口唇部下1cmのところに接合面を有する。器壁はいずれも8mm前後である。器面調整はナデ調整が比較的丁寧に施されるが、内面はやや雑で指頭圧痕も見受けられる。胎土は砂質に分類され、混入物として石英・長石を主体に角閃石を含む。器色は同図14が内外面とも橙褐色、同図17の外表面は赤褐色、内面は黄褐色を呈する。焼成は前者は悪く、後者は良い。出土地は同図14が第Ic層、同図17が第Ib層である。

同図15・口唇部下の内側に弱い反りをもつ口縁破片である。口唇部上面はフラットで断面形態は(ロ)に分類できるが、均一ではなく(=)の形状を示す箇所もある。外器面はナデによる調整が比較的丁寧だが、内面は凹凸を残す。胎土は中間タイプに属し、混入物として角閃石を主体に石英・長石、赤色粒を含む。外面の器色は赤褐色、内面は黒褐色を呈する。焼成はよく堅緻である。第Ⅲ層の出土。

同図16・口唇部の内外に稜を有する資料で、口唇断面形は(ハ)に分類される。口縁部は外傾し、器壁は6mm前後。内外面ともナデによる調整は丁寧だが、口唇部はやや雑である。胎土は砂質に分類され、混入物として角閃石を主体に石英・長石を含む。器色は内外面とも暗褐色。焼成は良好。第Ⅱ層の出土。

同図18・口縁部から胴部にかけて直線的にのび、胴部の一部にわずかな脹らみをもつ資料で、接合部が4か所認められる。口唇部は(ト)に分類され、器壁は7mm程度。両面とも内外面はナデによる調整が丁寧だが、指頭圧痕が残る。胎土は泥質で、混入物として角閃石を主体に石英・長石、赤色粒を含む。器

色は外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。焼成は良い。第Ⅱ層の出土である。

壺形土器

壺形Ⅰ類Ⅰ

第14図20 頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる首の短い壺形で、口径は推定18cmとやや大形である。口唇部は若干外側へせりたしており、(イ)に分類される。器壁は1.2mm前後で厚手である。内外面ともナデ調整が施されているが、内面は接合による凹凸の痕跡をとどめ、幅は約2cmである。胎土は泥質に分類され、混入物として角閃石を主体に石英・長石を含む。外面の器色は赤褐色、内面は暗褐色を呈する。焼成は良好。第Ⅱ層の出土。

同図21・口径推算11.4cmの壺形の土器である。口唇部に脹らみをもち頸部の立ち上がりは直線的で、なで肩をなす土器である。口唇部は(イ)に分類され、同直下は幅6mm程のヘラ状の工具で数回に分けて横位にナテられ、脹らみ部分が誇張されて段をもつ。外面の器面調整は全体的に上下にヘラナテを行い、鈍い光沢をもつ。内面はナデ調整が比較的丁寧だが、光沢を持つほどではない。断面で見ると、口縁部の脹らみ部分、肩部への脹らみをもちはじめの部分および破損部の3か所に接合面が観察される。器壁は8mm前後。胎土は砂質に分類され、混入物として石英・長石を主体に角閃石を含む。内外面とも赤褐色で、焼成はよい。第Ⅰ～Ⅲ層の出土である。

マリ形土器

同図19・口縁部が丸みをもちながら内彎する資料である。口唇下約1.5cmの箇所に接合面を有する。口唇部は丸みをもつ(ト)に分類される。器壁は約7mm。内外面ともナデに

よる調整が比較的丁寧である。胎土は中間タイプに分類され、混入物として角閃石を主体に石英・長石を含む。器色は内外面とも黄褐色。焼成はよい。第Ⅰ層の出土。

底 部

第14図22…端部の欠如した尖底である。断面に接合面を残す。内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。胎土は砂質で混入物として角閃石を主体に石英・長石を含む。外面の器色は赤褐色、内面は暗褐色を呈する。焼成は悪い。本標品の器質は同図5と酷似しており、同一個体に属する可能性がある。第Ⅱ層の出土。

同図24…尖底の先端部に径約2cmの粘土塊をはりつけたもので、茸の傘状の形態をもつ乳房状尖底である。また同部の整形はかな

り雑に行われており、接合面が観察される。胎土は中間タイプに分類され、混入物として角閃石を主体に石英・長石を含む。器色は内外面とも赤褐色を呈し、焼成は良好である。第Ⅱ層の出土である。

移入土器

同図23…底径が推定5.8cmを測る平底の資料で、底面は丸味をもち、底面からの立ち上がり部は弱い張り出しをもち稜をつくる。外器面は丁寧なナデ調整をおこなうが、内面は器面の保持が悪く、アバタを呈し混和材の露出がみられる。胎土は泥質に分類され、混入物は2mm前後の大粒の赤色粒を主体に角閃石、石英・長石を含む。器色は内外面とも橙褐色で、焼成は良好。第Ⅱ層の出土。

(知念)

e P・Qトレンチの内容

層 序

P-25・26・27、Q-25・26グリットはかろうじて、攪乱をまぬがれており、プライマリーな包含層を確認することができた。層序は3枚が認められ、Ⅰ層の耕作土の表土層、Ⅱ層の包含層、Ⅲ層の基盤砂層に分けられる(第6・7図)。

P-20グリットについてはⅡ層の包含層がわずか数センチ残存している状態であった。

Ⅰ 層

厚さ30~40cmの暗褐色を呈する混砂土層の耕作土である。若干の現代遺物と土器などを含むが、小破片でローリングを受けている。

Ⅱ 層

灰褐色を呈した貝殻を含む混貝砂層の包含層である。層の厚さは一定していず、Pトレンチ側で最も厚く40cmを計り、Qトレンチの東側に行くにつれ漸次薄くなり、畦側で5cmを計る。同層の厚いところが、貝殻やそ

の他の遺物の出土量も多く、特にP-26グリットでは大型貝の集中地がみられた。

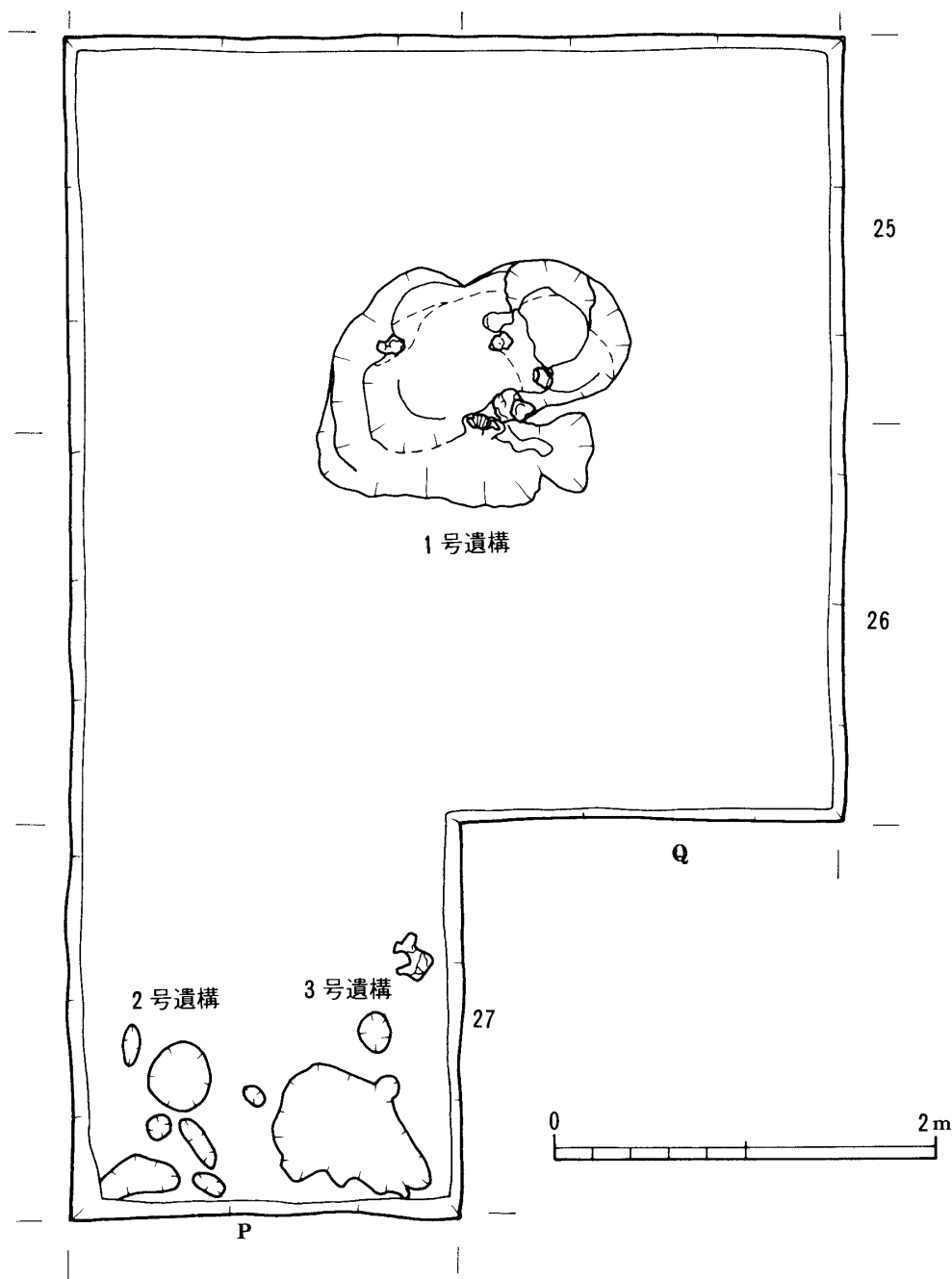
Ⅲ 層

淡黄褐色の砂層で無遺物の基盤層である。同層のP・Q-25・26グリットの中央部には、Ⅱ層から掘りこまれた、直径約1mの不整円形の遺構が検出された。

遺 構

P-25・26、Q-25・26グリットのほぼ中央部のⅢ層上面に、Ⅱ層からの落ち込みが確認された(第15図)。その形状は直径約1m、深さ約30cmのスリ鉢状の不整円形をなしている。これを1号遺構と名を付した。落ち込み内の出土遺物は土器が主で、貝殻も若干検出されたが、これといった特徴はなく、Ⅱ層と同様な状況であった。

P-27グリットの南側にも後世の掘り込みの間に、直径約30cmと10cmの円形状の落ち込みが検出されたが、いずれも5~6cmと



第15図 P・Qトレンチの遺構平面図

浅く、遺物の出土もみられなかった。

出土遺物

H-27クリット、P・Qトレンチの出土遺物は人口遺物と自然遺物に分けられ、人口遺物は土器が圧倒的に多く、貝製品は13点、石器は4点と少なく、自然遺物は多量の貝殻と、わずかな獣魚骨片が得られた。

土器

P・Qトレンチ出土の土器は、総数2092点で、その内訳は口縁部89点、胴部1984点、

底部19点である。その中には移入土器とみられる新しいもの（口縁部1点、胴部1点、底部1点）も含まれている。層序別の出土状況は第22・23表の通りである。

器種の分類を試みると、鉢形Ⅰ類は16点、鉢形Ⅱ類10点、鉢形Ⅲ類15点、壺形Ⅰ類5点、壺形Ⅱ類1点、マリ形1点に分けられる。

鉢形Ⅰ類土器

鉢形Ⅰ類土器は総数16点で、Ⅰ類Aは4点、Ⅰ類Bは12点にそれぞれ細分できる。

器種		層序		I	II	III	表面採集	合計
鉢	I 類	A	ニ	イ・ホ・ニ				4
		B	ニ・イ(2) ・ヘ	ヘ・ニ(4) ロ(3)				12
	II 類	C	ロ(2)・ト	リ・ニ ト(3)		ト		9
		D		ニ				1
		E						
	III 類	F		イ(2)				2
		G	ニ・イ	ロ(3)・ト ニ(4)・リ ホ(2)				13
壺	I 類	H	ニ	ト(3)		ト		5
		I						
	II 類	ア						1
	III 類							
マ	リ	形		ハ				1
合	計		12	34		2		48

第20表 P・Qトレンチの器種別出土状況

器種	口唇部形態	鉢 形							壺 形			マリ形	合計
		I 類		II 類			III 類		I 類		II 類	III 類	
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	類	類	
イ		1	2				2	1					6
ロ			3	2				3					8
ハ								1					1
ニ		2	5	1	1			4	1				14
ホ		1						2				1	4
ヘ			1										1
ト				5				1	4		1		11
チ													
リ			1	1				1					3
合計		4	12	9	1		2	13	5		1	1	48

第21表 P・Qトレンチの口唇部形態と器種別の関係

鉢形 I 類 A

第16図1～4がそれに含まれる資料である。同図1は図上復元可能な資料で、口径は23.5cmである。口縁部の上半はわずかに外反しており、肩部には逆くの字状の屈曲部をもつ土器である。口唇部はフラットな面をもち、やや外側に張り出しており、口唇部分類の(イ)に属する。器面調整は内外面ともに丁寧なナデが施されており、外面の口縁部は横方向に、屈曲部下の胴部では左斜め方向に、内面では絞りの痕跡を残すものの、全面に横方向の調整が行われている。胎土は砂質で、石英・長石や角閃石の混入物を含み、焼成は良く堅緻で、暗褐色を呈する。器壁は絞りの部分で7mmと厚く、口唇直下で5mmと薄い。P-25グリット、II層出土である。

同資料は宇地泊兼久原遺跡の資料の中でも、“逆くの字状”の屈曲部を明瞭に残すもので、黒川式土器の概念で捉えられるものである。

同図2～4は口縁部のみの破片であるが、そり返りの形状からI類A土器に含まれるものと考えられる。同図2・3の口唇部は丸みをもち、口唇部分類の(ロ)に含む。いずれも外面のナデは丁寧で、同図2は特に研磨ととれるほどのこまやかさである。内面はいずれも絞り痕を残すほどのナデである。同図2は砂質で角閃石やサンゴ砂を含み、器壁が7mmとやや厚い黄褐色の土器で、同図3は中間タイプでサンゴ砂を多量に、角閃石をわずかに含み、7mmと厚い土器である。前者はP-25、II層、後者はQ-25、II層出土である。

同図4は口唇部がフラットな面をもち、(イ)に含まれるものである。胎土は泥質で石英・長石、角閃石を含む褐色の土器である。外面のナデはやや甘く指頭痕を残し、内面はそれより荒い。Q-26、I層出土である。

層 序		I	II	III	表面採集	合計
テノパー						
質	角	角閃石のみ	壺IHト	鉢III Gニ(2)・ト		4
	閃	角>石・長	鉢IBロ・鉢II cニ・鉢III Gイ	鉢II cニ・リ・イ・鉢III Fニ・鉢III Gロ(2)・ニ・リ・壺IHホ		12
	石	角>石・長+サ	鉢II cニ・壺IHチ	鉢IAト・鉢IBロ・ニ		5
	主	角>石・長+赤		鉢III Gホ		1
	体	角>石・長+赤+サ				
	砂	石英・長石のみ		鉢III Gホ・ニ・ロ		3
	石	石・長>角	鉢IBニ	鉢IAイ・鉢IBへ		3
	英	石・長>角+サ	鉢IBイ	鉢IBイ	鉢II cニ	3
	・	石・長>角+赤				
	長	石・長>角+赤+サ				
	石	石・長>赤				
	主	石・長>サ				
	体	サノコのみ				
	質	サ>石・長	鉢IBロ			1
	サノコ主	サ>角+石・長	鉢II cト			1
	体	赤>角+石・長				
	赤色粒主	赤>角+サ				
	体	赤>角+石・長+サ				
	中	角閃石のみ	鉢II cト			1
	間	角>石・長				
	石	角>石・長+サ				
	主	角>石・長+赤				
	体	角>石・長+赤+サ				
	石	石英・長石のみ				
	英	石・長>角		鉢IBロ・ニ		2
	・	石・長>角+サ				
	長	石・長>角+赤				
	石	石・長>角+赤+サ				
	主	石・長>赤				
	体	石・長>サ				
	間	サノコのみ				
	質	サ>石・長				
	サノコ主	サ>角+石・長	鉢IBト	鉢IAト		2
	体	赤>角+石・長		鉢III Gハ		1
	赤色粒主	赤>角+サ				
	体	赤>角+石・長+サ				
泥	角	角閃石のみ				
	閃	角>石・長				
	石	角>石・長+サ				
	主	角>石・長+赤				
	体	角>石・長+赤+サ				
	石	石英・長石のみ	壺IIト			1
	英	石・長>角	鉢IAハ			1
	・	石・長>角+サ		マリ形ハ		1
	長	石・長>角+赤				
	石	石・長>角+赤+サ				
	主	石・長>赤				
	体	石・長>サ				
	質	サノコのみ		鉢IBホ・鉢III Fハ・壺IHト		3
	サノコ主	サ>石・長				
	体	サ>角+石・長				
	赤色粒主	赤>角+石・長		鉢II Dハ	壺IHト	2
	体	赤>角+サ		鉢II cリ		1
	赤色粒主	赤>角+石・長+サ				
合 計		12	34		2	48

第22表 P・Qトレンチの口縁部・底部の胎土別出土状況

層 序		I	II	III	P-20	P・Q中央	表面採集	合 計
テンパー								
砂	角閃石のみ	23	25		6	8	1	63
	角>石・長	321	299	1	16	14	21	672
	角>石・長+サ	6	4	1				11
	角>石・長+赤	6	9			1		16
	角>石・長+赤+サ							
	石英・長石のみ	53	65	2	14	12	1	147
	石・長>角	214	244	9	20	25	10	522
	石・長>角+サ	1	4					5
	石・長>角+赤	12	15			1	1	29
	石・長>角+赤+サ	1						1
	石・長>赤		9	1		1		11
	石・長>サ	3	5					8
	サンゴのみ	5	3					8
	サ>石・長	4	16			1		21
質	サ>角+石・長	9	20	4		1		34
	赤色粒主体							
	赤>角+石・長		1					1
	赤>角+サ							
	赤>角+石・長+サ							
	混入物なし	2	4		2			8
	小 計	660	723	18	58	64	34	1557
中	角閃石のみ	5	8		1			14
	角>石・長	10	11	1	2		1	25
	角>石・長+サ	1						1
	角>石・長+赤	4	3					7
	角>石・長+赤+サ	2	6					8
	石英・長石のみ	3	4	1		1		9
	石・長>角		1					1
	石・長>角+サ		4					4
	石・長>角+赤							
	石・長>角+赤+サ							
	石・長>赤							
	石・長>サ							
	サンゴのみ							
	サ>石・長		1					1
間	サ>角+石・長	1	1					2
	赤>角+石・長		1				1	2
	赤>角+サ							
	赤>角+石・長+サ							
	混入物なし	1	1					2
	小 計	27	41	2	3	1	2	76
泥	角閃石のみ	27	44	4	3	2	3	83
	角>石・長	23	31					54
	角>石・長+サ							
	角>石・長+赤	2	11					13
	角>石・長+赤+サ							
	石英・長石のみ	10	29	2	3	5	1	50
	石・長>角	6	27	2	5	1		41
	石・長>角+サ							
	石・長>角+赤	1	2			1		4
	石・長>角+赤+サ							
	石・長>赤		3		1			4
	石・長>サ							
	サンゴのみ							
	サ>石・長							
質	サ>角+石・長	1					1	2
	赤>角+石・長	3	18	1			1	23
	赤>角+サ		3					3
	赤>角+石・長+サ							
	混入物なし	17	54	1	1	5	2	80
	小 計	90	222	10	13	14	8	357
	合 計	777	986	30	74	79	44	1990

第23表 P・Qトレンチの胴部の胎土別出土状況

鉢形Ⅰ類B

口縁部から屈曲部にかけての幅が3.5cm以内と狭いもので、同図5～16がこれにあたる。なかでも、同図5～7は全体的な立ち上がりが開ききみになり、その形状から浅鉢形になるものかと考えられるが、この項で扱うこととした。

同図5は口縁部から屈曲部にかけての幅が3cmで、その間は弧状にそり返るものである。内外面ともに丁寧な、横方向のナデが施されるのが大きな特徴で、屈曲部の外面には稜を作り、内面は曲線的な面でおえている。口唇部は丸みをおび、(ト)に属する。器壁は全体的に6.5mmと均一な厚さである。胎土は中間タイプで、サンコを主体とし、石英・長石、角閃石を含む黄褐色の土器である。Q-25、Ⅰ層出土である。

同図6は図上復元可能な資料で、口径推算28.5cmを測る。口縁部から屈曲部にかけての幅が3.5cmで、屈曲部の近くからさらに強く外反する。屈曲部の内外面には明確な稜を持ち、そこは、接合面ともなっている。口唇部は丸みをもちながら内側へ膨らみ、弱い稜をつくる(ハ)のタイプに属する。内外面ともに丁寧なナデが横位に施されている。胎土は砂質で、焼成は良い。石英・長石を主体に、角閃石を含み、暗褐色を呈する。器壁は屈曲部上が5mmと薄く、他は7mmと厚い。Q-25、Ⅱ層の出土。

同図7は図上復元可能な資料で、口径推算33.3cmを測る。口縁部から屈曲部にかけての幅が2.5cmで、その間は弧状にそり返る。外面の屈曲部には明瞭な稜をもつが、内面はU字状の凹面で整えている。口唇部は一部丸みをもつ部分もあるが、フラットな面をもつ(ロ)に属し、内面に弱い稜をつくる。外面は丁寧なナデが横位に施され、内面も同様である

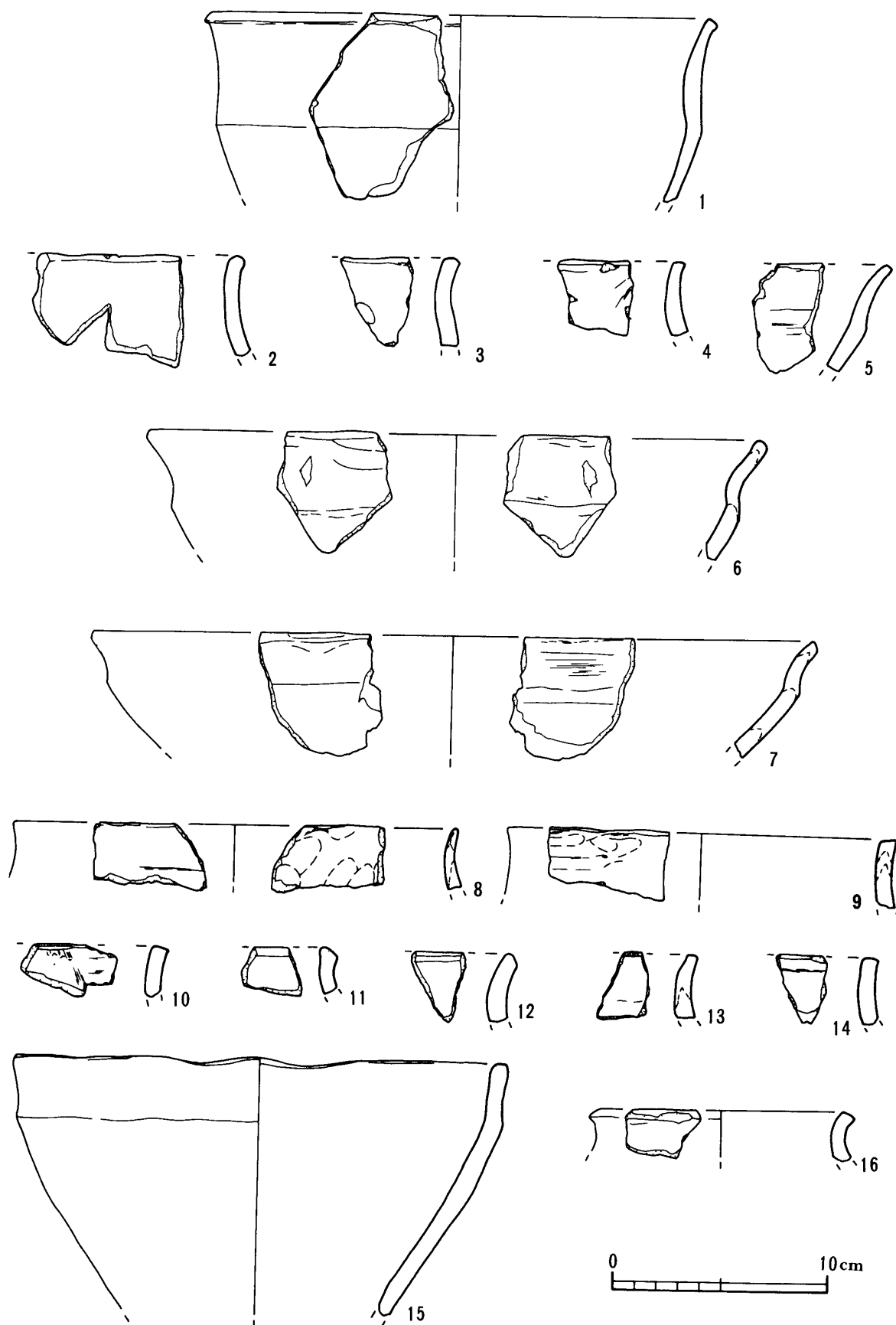
が、胴部下半部に見られる横位のケスリを消すほどではない。胎土は中間タイプで、石英・長石、角閃石をわずかに含む、焼成の良い暗褐色を呈する。器壁は口縁部で6mm、屈曲部下で7mmを測る均一な土器である。P-20、Ⅱ層の出土。

同図8は図上復元可能な資料で、口径推算20.9cmを測る。屈曲部の接合面で破損したもので、口縁部まではほぼ3cmと考えられる。口縁部は先細状にそり返る形状をとるが、口唇部はわずかにフラットな面をもち、(ニ)に属する。外面は丁寧なナデが横位に施されるが、内面は指頭痕を顕著に残す。胎土は中間タイプで、石英・長石、角閃石をわずかに含み、褐色を呈する。器壁は口唇部で4mm、屈曲部で6mmを測る。Q-25、Ⅱ層の出土。

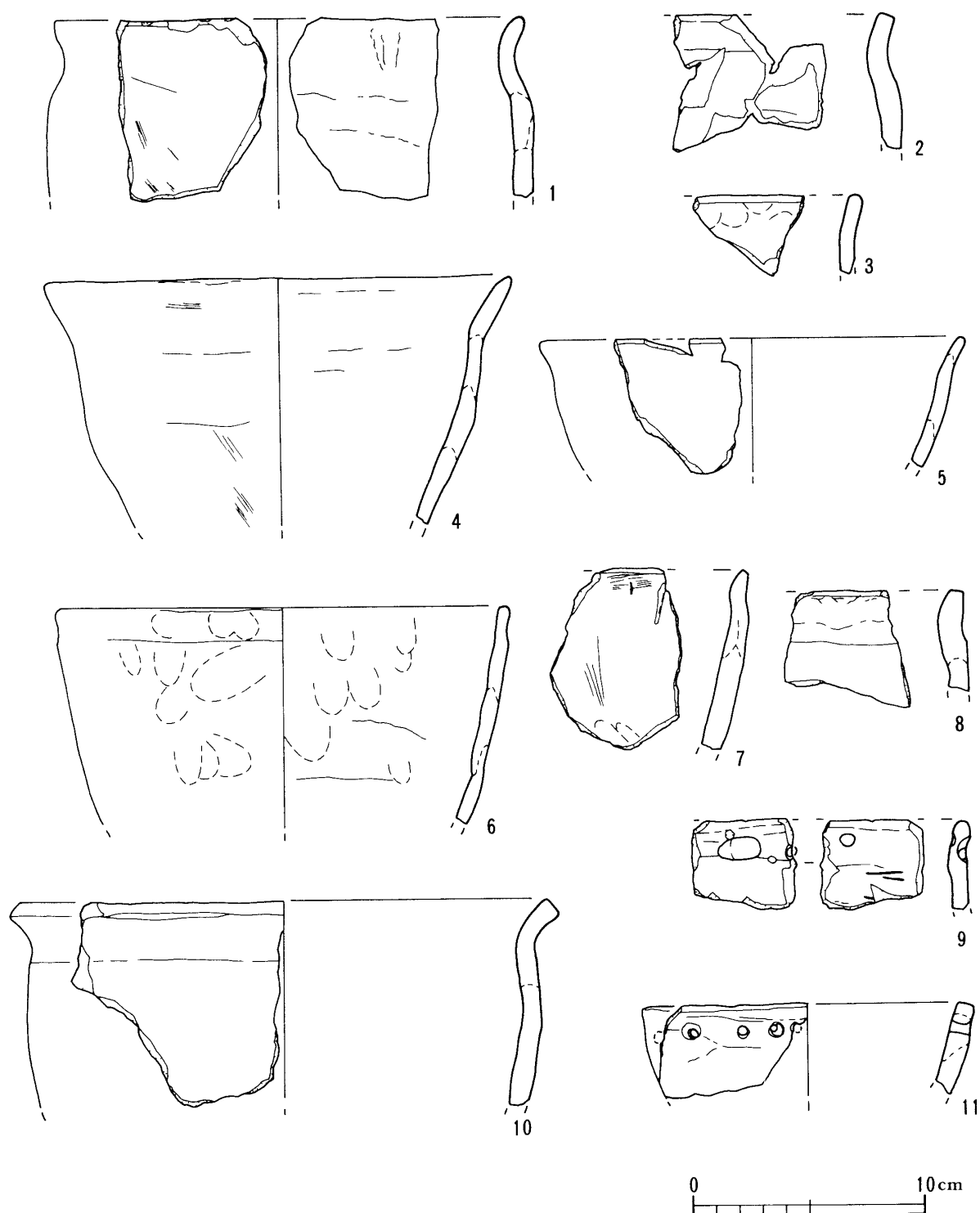
同図9は図上復元可能な資料で、口径推算18.2cmを測る。屈曲部の接合面で破損したもので、口縁部まではほぼ3.5cmと考えられる。口縁部は弱い反りをもつ。口唇部はフラットな面をもち、外側に張り出す(イ)に属する。外面は指頭痕や擦痕を残す荒いナデであるが、内面は光沢を有するほどの横位の弱い研磨が施されている。胎土は砂質で、石英・長石を主体に、角閃石、サンコを含む。焼成は良く、黄褐色を呈する。器壁は全体的に同じで、7mmを測る。P・Q-25中央部Ⅱ層の出土。

同図10は口縁部が弱くそり返えるものである。口唇部はフラットな面をもち、(イ)に属する。内外面はナデを施すが、外面の擦痕や内面の指頭痕を消す程ではない。胎土は砂質で石英・長石を主体に、サンコを混入し、褐色で、焼成は良い。器壁は7mmを測る。P-27、Ⅰ層の出土。

同図11は屈曲部の接合面で破損したものである。口縁部のそり返りの幅は2.5cmと短く、口唇部は斜めのフラットな面をもつ。内



第16図 P・Qトレンチ出土の土器



第17図 P・Q トレンチ出土の土器

側の張り出し下に稜をもつ(㍀)に属する。口唇部やそり返りの形態から浅鉢の可能性はある。内外面にはナデが施されるが、内面は指頭痕を残す。胎土は砂質で、サンコを主体に石英・長石を含み、黄褐色で、焼成は良い。器壁は

均一で6mmを測る。Q-25、II層の出土。

同図12はやや外反の強い口縁部で、口唇部は(㍀)に属する。器面調整は内外面共にナデを施すが、内面は光沢を持つほど丁寧である。胎土は砂質で角閃石を主体とし、石英・長石

を含む。表面は褐色を呈するが、内部は黒褐色で、硬質の土器である。器壁は口唇部が7mm、他は9mmと均一である。P-25、I層の出土。

同図13はやや外反の強い口縁部で、口唇部は(㊦)に属する。外面は横位の研磨、内面は丁寧なナデを施すが、弱い起伏を留どめる器面調整が行われている。胎土は砂質で、角閃石を主体とし、石英・長石、サンゴを含み、褐色を呈する。器壁は口唇部が4mmと薄く、肩部側が7mmと厚い。P-25、II層落ち込みの出土。

同図14は外反を示す口縁部の破片で、口唇部の外面下にヘラによる弱い肥厚部を作る。口唇部の形態は(㊦)に属する。外面の肥厚部はやや粗雑に、段下は丁寧なナデが施され、内面は指頭痕を残す。胎土は砂質で石英・長石、角閃石を含む、黄褐色である。器壁は段下で6mmと薄く、他は7mmを測る。Q-26、I層の出土。

同図15は口縁部から胴部下半まで残る資料で、口縁部は垂直に立ち上がり、胴部は直線的に細まる器形である。図上復元の口径推算は22.8cmを測る。口唇部から屈曲部までの長さが2.7cmと短く、直線的であるが、口縁部の横位のナデにより稜をつくりだしている。口唇部の形態は(㊦)に属する。外面の肩部下は斜めのナデが施され、一部光沢をもつ部分もあるが、胴下半部は凹凸の残る粗いナデで終えている。内面はあばたに近いほどの粗雑面である。胎土は泥質で、サンゴのみをわずかに含む褐色の硬質の土器である。器壁は口縁部で7mmと薄く、接合部の厚い部分で9mmを測る。P-26・27、II層の出土。

同図16は口径復元可能な資料で推算11cmを計る小型の土器である。。口縁部の外反度は強く短い。口唇部の形態は(㊦)に属する。器

面調整は内外面に丁寧な横ナデが施されるが、内面は絞り痕を残す。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む黄褐色である。器壁は口縁部近くが6mmと薄く、肩部が7mmと厚い。Q-25、II層の出土。

鉢形Ⅱ類土器

鉢形Ⅱ類は総数10点あり、その内Ⅱ類Cは9点、Ⅱ類Dは1点のみである。

鉢形Ⅱ類C

第17図1は図上復元が可能な資料で、口径推算は21cm、胴径推算は21.7cmと胴部にやや張がある。口唇部は丸みをもち、(㊦)に属する。口縁部はU字状に外反し、肩部の屈曲はルーズで稜はみられない。外面の口縁部は横位のナデが、肩部下は斜めの丁寧なナデが施されている。内面もナデを施すが口縁部の絞り痕や胴部の擦痕を残す。胎土は砂質でサンゴを主体とし、角閃石、石英・長石を含む黄褐色の土器である。器壁は肩部が8mmと厚く、他は7mmと薄い。P・Q中央部、第II層最下部の出土。

同図2は口縁部の外反や肩部の屈曲が弱い土器である。口唇部の形態は(㊦)に属する。器面調整は口縁部の外面は横位のナデ、肩部下は斜めのナデが丁寧に施されるのに対し、内面は成形時の指頭痕や擦痕を残す。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む。器壁は8.5~9mmとやや厚手の土器である。Q-25、第I層の出土。

同図3は口縁部の外反が弱い土器で、口唇部の形態は(㊦)に属するものである。器面調整は内外面共にナデが施されるが、内面には指頭痕を残す。胎土は砂質で、角閃石を主体に石英・長石を含む褐色の土器である。器壁は7mm。P-26、第II層の出土。

同図4は図上復元可能な資料で、口径推算

19.9cm を測る。器形は屈曲部が胴部の下半部にあり、しかも全体的に開ききみの鉢形土器で、類例資料はこの1点のみである。口縁部は直線的で、口唇部は先細の(リ)に属する。内外面共に荒いナテを施すが、成形時の擦痕やヘラ削りを横位に残す。胎土は泥質で赤色粒、角閃石、サンコを含む。内外面は黄褐色を呈するが、内部は暗褐色を呈する。硬質な土器である。器壁は口縁部や肩部で9mmと厚く、他は7mm前後である。P-25、第Ⅱ層の出土。

同図5は図上復元可能な資料で、口径推算18.2cmを測る。口縁部の外反や肩部の屈曲が弱く、稜は不鮮明である。外面の口唇部下に調整痕の弱い稜をもち、口唇形態は(=)に属する。内外面の調整はナテを施すが、凹凸を残す。胎土は砂質で角閃石を主体に、石英・長石、サンコを含む褐色である。器壁は口縁部で5mm、胴部は6mmと薄い。P-26、第Ⅰ層の出土。

同図6は図上復元可能な資料で、口径推算19.6cmを測る。口唇部から肩部の1.4cmには横位のナテによる凹部をもち、肩部から胴下半部にかけては直線的な鉢形土器である。口唇部の形態は(=)に属する。内外面のナテは甘く、接合面の凹凸を残す。胎土は砂質で石英・長石、角閃石、サンコを含む。内外面は褐色で内面は暗褐色を呈する。器壁は頸部で5mm、胴部は6mm前後と薄手である。表採資料である。

同図7は口縁部に幅1.8cmの凹部をもつ土器である。口唇部の形態は先細の(リ)に属する。外面は丁寧なナテが施されるが、内面は成形の凹凸を残す。胎土は砂質で角閃石を主体に、石英・長石を含む。内外面は褐色、内部は暗褐色を呈する。器壁は口縁部で5mmと薄く、胴部は8~9mmと厚い。P-25、第Ⅱ層の出

土。

同図8は口縁部に幅2.2cmの屈曲をもつ土器である。口唇部の形態は(イ)に属する。内外面共にナテが施されるが、特に内面は丁寧である。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む。外面は褐色、内面は黄褐色を呈する。器壁は口唇部で7mmと薄く、他は10mm前後とやや厚い。P-25、第Ⅱ層の出土。

同図9は口縁部に1.7cmの凹部をもつ土器である。口唇部の形態は(ト)に属する。内外面はナテが施されるが、外面は齧歯類の噛み痕、内面には一部、器面調整の擦痕を残す。胎土は中間タイプで角閃石をわずかに含む黄褐色である。器壁は肩部で8mm、口・胴部で7mmと薄い。P-27、第Ⅰ層の出土。

鉢形Ⅱ類D

第17図10は口縁部から胴部まで残る資料である。口縁部に最大径があり、口径推算23.5cmを測る。口縁部は横位のナデにより強く外反する。口唇部は幅広いフラットな面をつくり(ハ)に属する。外面の口頸部は横位、頸部下は荒い斜位のナテが施される。内面は全体的にナテを施すが、指頭痕を残す。胎土は泥質で赤色粒を含む褐色の土器である。器壁は頸部が7mmと薄く、胴部で10mmと厚い。P-25、第Ⅱ層の出土。

鉢形Ⅲ類土器

鉢形Ⅲ類土器は総数15点あり、その内Ⅲ類Fは2点、Ⅲ類Gは13点である。

鉢形Ⅲ類F

鉢形Ⅲ類Fは第18図1・2の資料で、口縁部が直線的な形状をもつものである。

第18図1は口径復元可能な資料で、推算22.8cmを計る。胴部は直線的であるが口縁部は軽く外反するもので、さらに上端の口唇

部も外に張り出す。口唇部の作りは雑であるが、(イ)に属する。外面は横方向の擦痕が散見され、内面はナデられているが接合面や指頭痕を残す。胎土は泥質でサンゴをわずかに含む褐色の土器である。器壁は口唇部下で6mmと薄く、胴部で8.5mmと厚い。P-26、第Ⅱ層の出土。

同図2は口径復元可能な資料で、推算27.4cmを計る。同図1と同様な形態をもち、胴部は直線的であるが、口縁部は軽く外反するもので、さらに上端の口唇部も外に張り出す。口唇部の形態は(ニ)に属する。全体に水摩を受け器面の保持は悪いものの、外面はかなり丁寧なナデが施されていたと考えられる。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む褐色の土器である。器壁は口唇部で4mmと薄く、胴部で7mmと厚い。P-25、第Ⅱ層の出土。

鉢形Ⅲ類G

第18図3～15がこの種類に含まれるグループである。

同図3は胴部下半まで残る大形破片で、図上復元が可能な資料である。口径推算は26cmを測る。口縁部は直線的で、胴部は間延びした膨らみをもつ。口唇部はフラットな面をもち、内側に張り出す(ロ)に属する。外面は丁寧な横位のナデが全面に施されるが、内面の口縁部は絞り痕、胴部は指頭痕や粗雑なナデが施される。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む黄褐色の土器である。器壁は口縁部で6mmと薄く、胴部の接合面で9mmと厚い。Q-26、第Ⅱ層の出土。

同図4は図上復元が可能な資料で、口径推算22.4cmを測り、口縁部は直線的に外側に開くものである。口唇部は外側に傾斜するフラットな面をもち、しかも両側に張り出す(ハ)に属する。口唇部や外面は横位に丁寧なナデ

が施されるが、内面は絞り痕を残す。胎土は中間タイプで赤色粒を主体に角閃石、石英・長石を含む褐色の土器である。器壁は全体的にほぼ7～9mmである。Q-25、第Ⅱ層の出土。

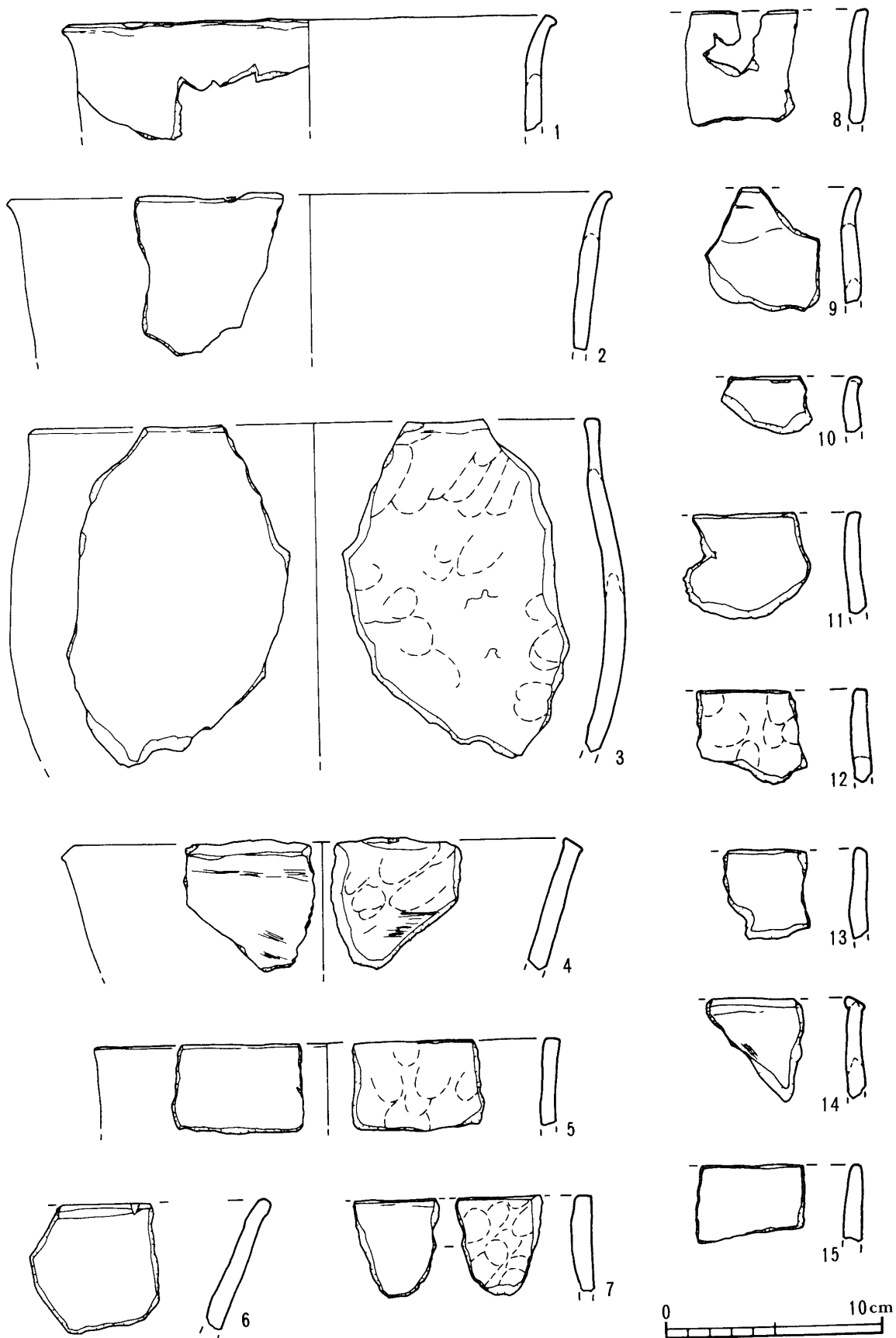
同図5は図上復元が可能な資料で、口径推算21.2cmを測り、口縁部の立ち上がりは垂直である。口唇部の形態は(ニ)に属する。外面は丁寧なナデが施されるが、内面は指頭痕を残すほどの粗雑なナデである。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む黄褐色の土器である。器壁は全体的に7mmである。Q-26、第Ⅱ層の出土。

同図6は直線的に外側に開く口縁部で、口唇部に弱い張りをもつ土器である。口唇部の形態は(ホ)に属する。水摩を受け、器面の保持は悪い。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石、赤色粒を含む黄褐色の土器である。器壁は8mm前後である。Q-25、第Ⅱ層の出土。

同図7は弱い反りをもつ口縁部である。口唇部の形態は(ニ)に属する。外面は丁寧なナデをほどこすが、内面は絞り痕を残す。胎土は砂質で角閃石を含む黄褐色の土器である。器壁は9mmを測る。Q-25、第Ⅱ層最下の出土。

同図8は接合部の肩部から弱い反りをもつ口縁部である。口唇部の形態は(ニ)に属する。外面は丁寧なナデが施され、光沢をもつ箇所もみられるが、内面は絞りの痕を残す。胎土は砂質で角閃石を含む淡黄褐色の土器である。器壁は6mmと薄い。P-25、第Ⅱ層の出土。

同図9は口縁部が弱い反りをもちながら先細になるものである。口唇部の形態は(リ)に属する。外面は丁寧なナデが施されるが、内面は粗雑である。胎土は砂質で角閃石、石英・長石を含む褐色の土器である。口縁部で5



第18図 P・Qトレンチ出土の土器

mmと薄く、胴部で7mmと厚い。Q-25、第Ⅱ層の出土。

同図10は口唇部が反り返る土器である。口唇部の形態は(ホ)に属する。内外面共に丁寧なナデが施される。胎土は砂質で石英・長石を含む黄褐色の土器である。P-27、第Ⅱ層の出土。

同図11は弱い反りをもつ土器である。口唇部の形態は(イ)に属する。内外面共にナデを施すが、外面はより丁寧である。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む黄褐色の土器である。Q-26、第Ⅰ層の出土。

同図13は直線的な口縁部で、口唇部は(ロ)に属する土器である。外面は丁寧なナデを施すが、内面は指頭痕を残す。胎土は砂質で石英・長石を含む褐色の土器である。器壁は7mm前後を測る。P-26、第Ⅱ層の出土。

同図14は弱い反りをもつものである。口唇部は斜めのフラットな面をもつ(ワ)に属し、内側の張り出し部には稜をもつ。内外面にはナデを施す。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む褐色の土器である。器壁は口縁部で6mmと薄く、胴部側で7.5mmと厚い。P・Q中央部、第Ⅱ層最下の出土。

同図15は先細で直線的な口縁部である。口唇部の形態は(ト)に属する。内外面共にナデが施されるが、いずれも成形の際の凹凸を残す。胎土は砂質で角閃石を含む黄褐色の土器である。器壁は口縁部で6mmと薄く、胴部で8mmと厚い。P-25、第Ⅱ層の出土。

壺形土器

壺形土器は口縁部が外反するⅠ類土器5点、直線的なⅡ類土器1点の6点がえられた。

壺形Ⅰ類H

壺形Ⅰ類H土器は第19図1～4・6にあたる。

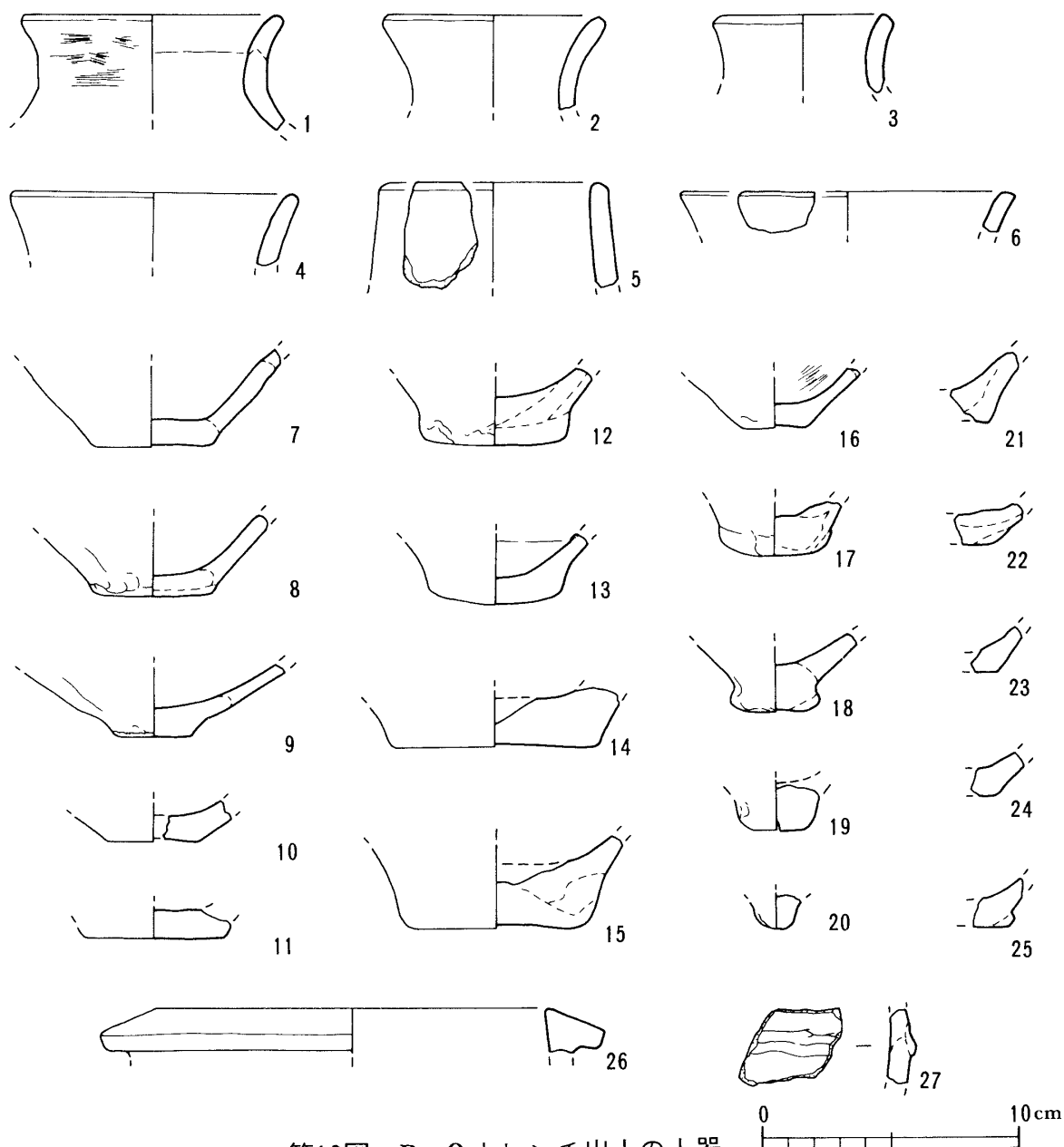
第19図1は口縁部がほぼ全部検出されたもので、口縁部から肩部にかけての資料である。口径推算は10cmを測る。頸部の下端に弱い立ち上がりがみられるが、稜は不鮮明である。口唇部の形態は(ト)に属する。外面は横位のナデが施されているが、内面は口唇部近くにナデを施すのみで、大半はアバタを呈し、接合部の稜を残す。胎土は泥質でサンコを含む褐色の土器である。器壁は接合部で9mmと厚く、肩部で7mmと薄い。Q-25、第Ⅱ層の出土。

同図2は図上復元の可能な資料で、口径推算8.5cmを測る。口縁部は外反の度合いが強い壺である。口唇部の形態は(ト)に属する。外面はナデが施されるが、内面はテンパーの露出がみられ、アバタを呈する。胎土は泥質で赤色粒のみを含み、外面は黄褐色、内面は淡褐色を呈する土器である。器壁は口唇部の近くで7mm、頸部で6mmを測る。P-20、表採資料である。

同図3は図上復元の可能な資料で、口径推算6.5cmを測る。口縁部は弱い反りをもつもので、口唇部の形態は(ホ)に属する。水摩を受け、器面の保持は悪い。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む黄褐色の土器である。器壁は8mmとやや厚い。P-26、第Ⅱ層の出土。

同図4は図上復元の可能な資料で、口径推算10.8cmを測る。口縁部は直線的に開くもので、口唇部の形態は(ト)に属する。外面はナデをほどこすが、内面は指頭痕を残す。胎土は砂質で角閃石を含む褐色の土器である。器壁は7mmを測る。P-26、第Ⅰ層の出土。

同図6は図上復元の可能な資料で、口径推算12.9cmを測る。口縁部は直線的に開くもので、口唇部の形態は(チ)に属する。内外面共に横位のナデを施す。胎土は砂質で角閃石、



第19図 P・Q トレンチ出土の土器

石英・長石、サンゴを含む褐色の土器である。
器壁は6mmを測る。P-27、第I層の出土。

壺形Ⅱ類

第19図5の1点のみの出土である。図上復元の可能な資料で、口径推算8cmを測る。口縁部の立ち上がりは直線的に内傾するものである。口唇部の形態は(ト)に属する。水摩を受けているが、外面はナデ、内面は絞り痕の後、ナデられている。胎土は泥質で石英・長石を含む褐色の土器である。器壁は9mmと厚い。第I層の出土。

マリ形土器

マリ形土器は第17図11の1点のみの出土である。

図上復元の可能な資料で、口径推算14cmの大きさである。口縁部は弱い内彎を形成する。外面は横位のナデによる弱い屈曲部をもち、その部分に5箇所の穴が穿たれている。穴は焼成前に穿たれたものと観察される。孔列土器である。口唇部はフラットな面をもつ(ハ)に属する。外面は横位に、内面は縦位のナデが施され、いずれも光沢をもつ部分がみら

れる。胎土は泥質で石英・長石を主体に角閃石、サンゴを含む褐色の土器である。器壁は9mmと厚い。P-26、第Ⅱ層の出土。

底 部

底部の総数は19点得られ、その内訳は平底9点、乳房状尖底10点で、尖底土器は見られない。その内平底の2点は移入土器とみられる。胎土・混入物について口縁部や胴部と同様な分類を行った。

平 底

第19図7は底径4.9cmを測る円盤貼り付けの平底である。全体的に粗雑なつくりであるが、底面からの立ち上がりは丁寧にナデられて成形されている。内面は指頭痕により平面をつくり凹凸を残す。胎土は泥質で角閃石を含む。外面は褐色、内部は暗褐色を呈する。底面の厚さは9mmで、胴部は7mmを測る。Q-25、第Ⅱ層最下の出土。

同図8は底径4.8cmを測る円盤貼り付けの平底である。底面からの立ち上がりは明瞭で、開きぎみの胴部へ移行する。内面は球形状の底面をなす。内外面共に徹底したナデ調整が行われ、精製土器の様相を呈する。胎土は砂質でサンゴを主体に、石英・長石を含む褐色の土器である。底面の厚さは中央部で8mm、胴部は7mmを測る。Q-25、第Ⅱ層の出土。

同図9は底径3.2cmを測る平底である。底径は小さいものの、立ち上がりの部分がシャープなことからこの類に含めた。内面は球形状の底面をなす。内外面共に徹底したナデが施され、いずれも上下に調整されている。精製土器の様相を呈する。胎土は砂質で石英・長石を主体にサンゴを含むもので、内外面は黄褐色、内部は暗褐色を呈する。底面の厚さは12mm、胴部は6mmを測る。P-25、第

Ⅱ層の出土。

同図10は底径3.6cmの平底である。丸底を押しつぶした形状の平底である。立ち上がりは弱くルーズである。内外面共にナデられているが、凹凸を残す粗雑さである。胎土は泥質で角閃石、石英・長石を含む褐色の土器である。P-25、第Ⅰ層の土器。

同図11は底面のみ資料で、底径5.4cmを計る。胴部の立ち上がり部分の接合部から剝離した円盤状の底部である。内外面共に粗雑で、内面の縁辺部には接合部に突起部を残す。胎土は泥質で石英・長石を含む褐色の土器である。底面の厚さは10mmを測る。P-26、第Ⅱ層の出土。

同図12は底径5.6cmの厚手の平底である。底面は丸みをもち、立ち上がりはやや膨らむ。内面は球形の丸底状をなす。断面をみると、丸底に円盤状の粘土を貼り付け、重ねることにより、厚手の平底を形成していることが観察される。外面は丁寧なナデがほどこされるが、内面は粗雑で凹凸を残す。胎土は泥質で角閃石、石英・長石を含む黄褐色の土器である。底面の厚さは18mm、胴部の立ち上がり部は9mmを測る。Q-25、第Ⅱ層の出土。

同図13は底径5cmの平底である。底面は丸みをもち、立ち上がり部分も丸くルーズである。断面をみると、丸底の周囲に粘土帯を貼り付けて平底を形成している。立ち上がり部や内面は丁寧なナデが施されている。胎土は砂質でサンゴを主体に角閃石、石英・長石を含む。内外面は黄褐色をおび、内部は暗褐色を呈する。底面の厚さは12mm、立ち上がり部は7mmを測る。Q-26、第Ⅰ層の出土。

乳房状尖底

同図16は底径2.2cmの乳房状尖底である。底面の中央部に凹部をもち、立ち上がり部は

丸みをもちながら胴部へと開く。断面をみると、丸底の周囲に粘土帯を貼り付けて平面を形成している。内外面共にナデを施すが、内面には擦痕を残す。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む。外面は褐色、内面と内部は暗褐色を呈する。底面は9mm、胴部は7mmを測る。P-26、第Ⅱ層の出土。

同図17は底径3.9cmを測り、やや大きめであるが成形技法から、この種に含めた。断面をみると丸底の先端部に粘土塊を貼り付け、押しつぶされた結果、周辺部に張り出し部を形成している。器面の調整は粗雑で凹凸を残す。胎土は泥質でサンゴを含む。内外面は褐色、内部は暗褐色を呈する。底面の厚さは15mmを測る。Q-25、第Ⅱ層の出土。

同図18は底径3.4cmを測る乳房状尖底である。断面をみると同図17と同様に形成されているが、押しつぶしが弱く、底径が小さい。周辺部は整えられているが、一部指頭痕を残しくびれ部をもつ。胎土は砂質で石英・長石、角閃石を含む黄褐色の土器である。Q-25、第Ⅱ層の出土。

同図19は底径推算2.4cmを測る乳房状の先端部のみの資料である。上面は接合部で剝離している。胎土は砂質で角閃石を主体に石英・長石を含む黄褐色の土器である。P-27、第Ⅱ層の出土。

同図20は乳房状尖底土器の先端部の資料で径は1.2cmを測る。上面は接合部からの剝離である。底面は丁寧なナデが施されている。胎土は砂質で石英・長石、角閃石を含む黄褐色の土器である。Q-25、第Ⅱ層の出土。

同図21～23は乳房状尖底土器の破片である。同図21～23は立ち上がり部がルーズなもので、同図24・25は立ち上がり部に張りをもつものである。いずれも丸底の底面に粘土塊を貼り

付けて形成されている。胎土は同図21～24が砂質、25は泥質で、21はサンゴ、22～24は角閃石、石英・長石、25は石英・長石、赤色粒を含む。色調は21・22が黄褐色、23・25は褐色、24は暗褐色を呈する。21・22はP-27第Ⅱ層、23はP-26第Ⅱ層、24はQ-26第Ⅱ層、25はQ-25第Ⅱ層の出土である。

移入土器

第19図14・15・26・27の土器がこれにあたり、いずれも第Ⅰ層の出土で、弥生土器と考えられる資料である。

同図26は図上復元の可能な資料で、口径推算19.6cmを測る。口縁部は逆L字状に成形されている。内外面共にナデが施されている。胎土は泥質で鮮やかな褐色を呈する。P-20、第Ⅰ層の出土。

同図27はルーズな三角突帯を貼り付けた胴部破片である。外面はナデが施されるが内面はテンパーの露出がみられ、アバタを呈する。胎土は砂質で角閃石や数ミリの石英を多量に含む淡黄褐色の土器である。P-20、第Ⅰ層の出土。

同図14は底径8cmを測る平底である。壺の底部と考えられる資料である。底面の中央部は凹み、上げ底をなす。底面からの立ち上がりはシャープである。内外面は丁寧にナデられている。胎土は中間タイプに属し、数ミリの石英や赤色粒を多量に含むもので、外面は淡褐色、内部は暗褐色を呈する。底面の厚さは18mmを測る。Q-26、第Ⅰ層の出土。

同図15は底径7cmを測る平底である。14と同様に壺の底部と考えられる資料である。底面の中央部は凹み、上げ底をなす。底面からの立ち上がりはシャープである。外面はナデられているが、器面の保持が悪くテンパーの露出がみられ、内面は調整の痕跡がみられ

ぬほど凹凸でテンパーの露出が著しい。胎土は泥質で角閃石や数ミリの石英・長石を多量に含む淡黄褐色の土器である。底面の厚さは23mmと厚い。Q-25、第Ⅰ層の出土。

石 器

P・Qトレンチでは3点の石器が出土した。これらは第Ⅱ層の貝殻層中で一括出土したもので、すべて磨製石斧である。

第20図1は撥形の磨製石斧の完形品である。平面形は台形状の形態で、刃縁は弱い弧をえがく。側面観は刃部の基部が最も厚く2.2cmを測る、頭部にいくにしたがい細くなる。成形は粗い打ち欠き後、全面を研磨によって整えている。刃部は両刃を呈し、両面の刃縁部に使用時のキズが右斜めに残る縦斧である。法量は長さ10.3cm、幅7.2cmを測る。石質は粗粒玄武岩の変成したもので、重量は290gである。

同図2は扁平片刃石斧の完形品である。扁平の石材を用い、周辺部を粗く打ち欠いて成形した後、研磨して整えたものである。刃縁部は弱い弧をえがき、背面のみに使用時の剝離痕を残す横斧である。法量は長さ8.5cm、幅4.2cm、厚さ1.3cmを測る。石質は緑色片岩で、重量は105gである。

同図3は乳棒状石斧の刃部が破損した資料である。全容は円柱状を呈し、正面や背面は研磨を施し両側面には成形の敲打痕を残す。刃部から胴部にかけて正面や背面には大きな、刃縁には細かい剝離痕が残る。法量は長さ8.7cm、幅4.3cm、厚さ2.9cmを測る。石質は粗粒玄武岩の変成したもので、重量は110gである。

貝 製 品

貝製品の総数は11点で、装飾品は6点（未

製品1点を含む）、実用品は5点に分けられる。

装飾品

第21図1はイモガイ（アンボンクロザメ）の螺塔部付近の体層部を横切りにして貝輪製品としたものである。螺塔部を取り除いているが、一部は残る。体層部から螺塔部にいたる肩部は斜めに研磨されている。現存の法量は幅2.5cm、厚さ1.3cmを測る。重量は23.5gである。Q-26、第Ⅱ層の出土。

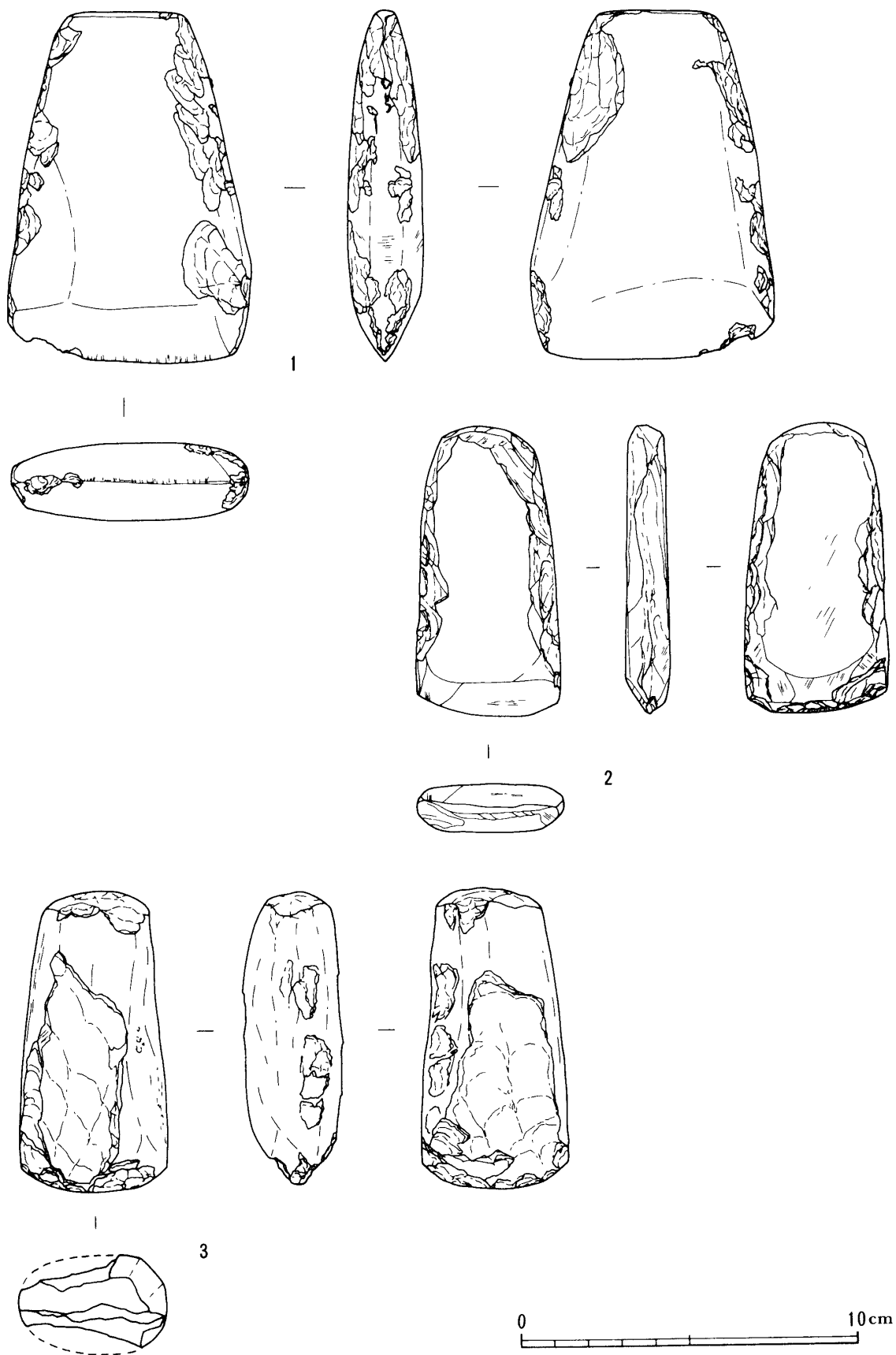
同図2も1と同様の製品である。現存の法量は幅1.8cm、厚さ1.2cmを測る。重量は11.1gである。P-26、第Ⅰ層の出土。

同図4はウミウサギカイを素材とする有孔製品である。貝の殻軸と後水管溝の部分に各2箇所穴を穿っただけのもので、原形をそのまま利用したものである。穴は背部と腹部では方法が異なり、前者はU字状にスリ切り、さらに2～3mmの小孔を穿っているのに対し、後者はV字状にスリ切りのみで孔を穿っている。これらの孔はいずれも外側方向の部分に紐ズレの痕を残す。法量は螺塔の長さ8cm、螺径4.5cmを測る。重量は75gである。P-20、第Ⅱ層最下部の出土。

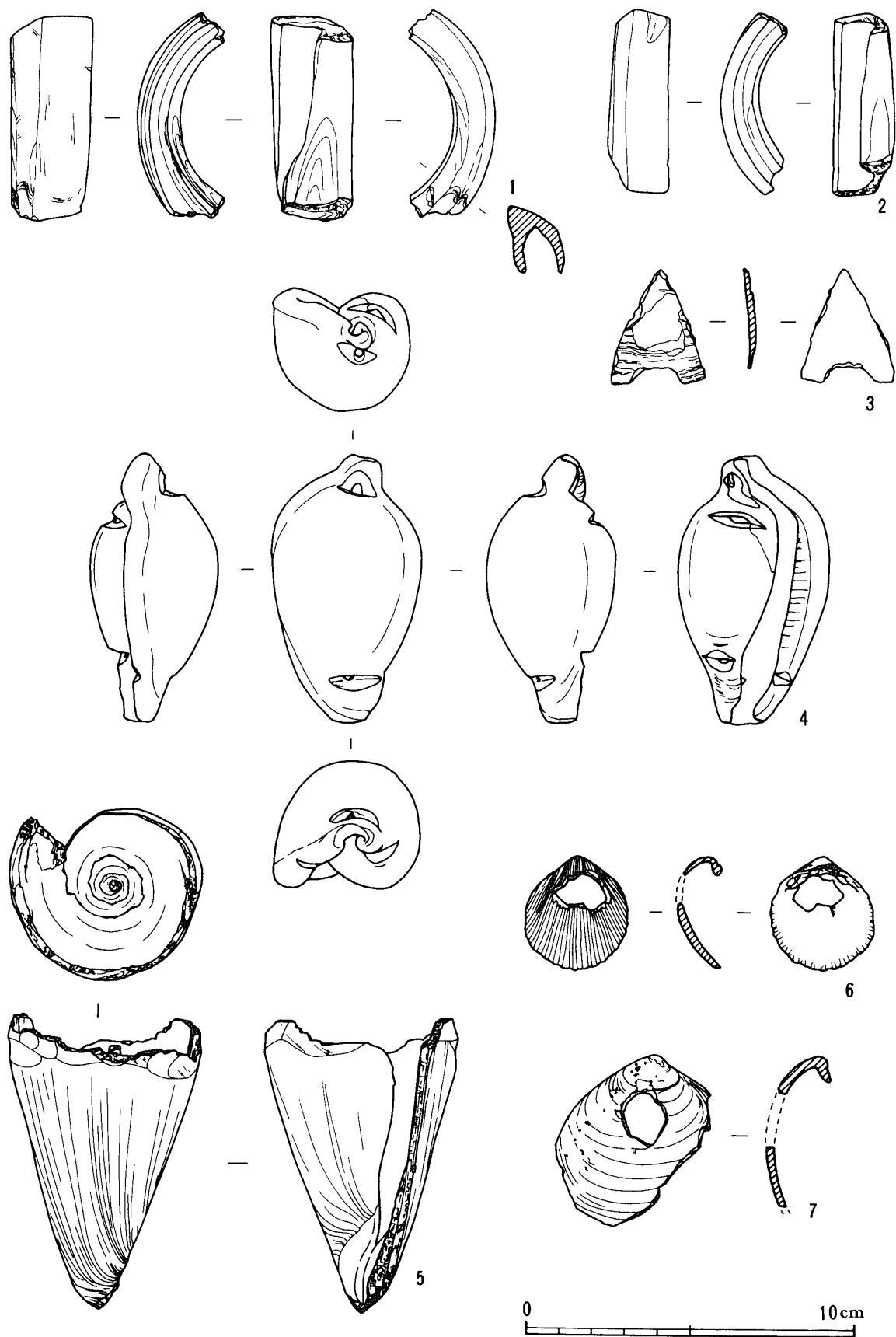
同図5はイモガイ（アンボンクロザメ）の螺頭部・体層上部が切断された資料である。切断面は体層部にそって数回のスリ切り痕がみられるのみで、他に加工痕は見られない。体層上部を利用するために切り落とされ、放棄された部分かと考えられる。法量は殻径5.9cm、殻長9.2cmを測る。重量は110gである。Q-26、第Ⅱ層の出土。

実用品

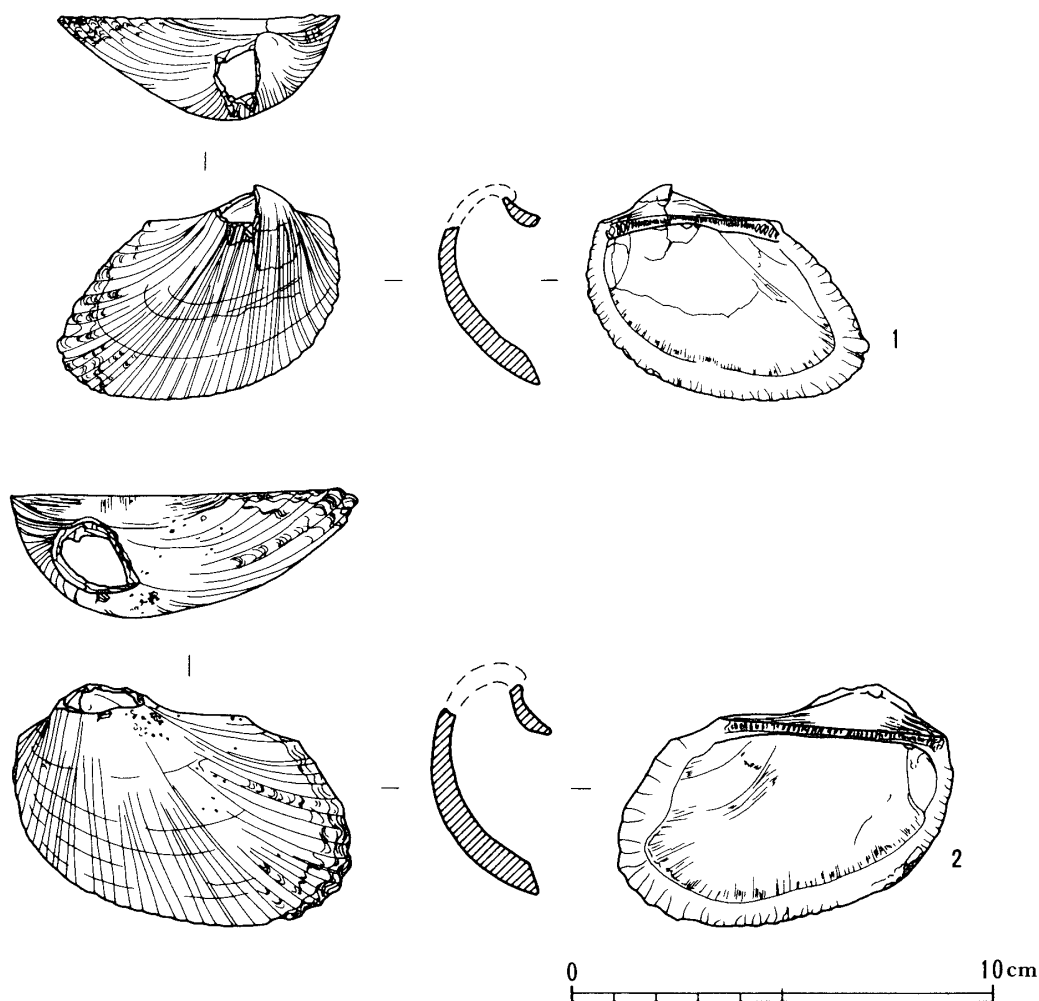
同図3はクロチョウガイ製の無柄鏝の未製品である。貝の腹部を用いたもので、チップングにより二等辺三角形を形づくっている。基部にもチップングにより抉りを施している。



第20図 P・Qトレンチ出土の石器



第21図 P・Qトレンチ出土の貝製品



第22図 P・Qトレンチ出土の貝製品

研磨痕はない。法量は縦3.5cm、横2.9cm、厚さ2mmを測る。重量1.17gである。P-26、第Ⅱ層の出土。

二枚貝有孔製品は第21図6・7、第22図1・2の4点が検出された。いずれも粗孔を一個

有するもので、内側から穿たれている。第21図6、第22図1・2はリュウキュウザルボウ、第21図7はザルカイの貝種である。

法量や詳細については第24表に示した。

(多和田・金城)

図番号	出土地 クリント層	貝種	左右数		孔 (cm) 縦 横		重量 (g)	備考
第21図6		リュウキュウ サルカイ	1			1.5	3.3g	
第21図7	P-29-II	サルカイ		1		1.3	15.5g	
第22図1		リュウキュウ サルボウ	1			0.9	31g	
第22図2		リュウキュウ サルボウ		1		1.7	69g	

第24表 P・Qトレンチの貝製品の法量

f S・Tトレンチの内容

層 序

本区は遺跡の東側への広がりとはP・Qトレンチとの関係を確認するために設定した調査区である。調査の結果、S・T-23・24トレンチの北西隅に若干攪乱がみられる程度で、大半はプライマリーな包含層である。

層序は4枚が認められた。I層は耕作土の表土層、II層・III層・IV層は包含層である。III・IV層からは時期の異なる柱穴を含む遺構が検出された。その中心部は同トレンチ東側にあると思われるが、東側は畑地となっており、グリットを拡張することができなかったため、遺構のプランは次回の調査へゆだねることになった。

第I層

赤褐色混砂土層で、ほぼS・Tトレンチ全面に広がる耕作土である。厚さ25cm～35cmで、緩やかに南方に傾斜する。本来は砂質土壌であるが、北側に隣接する石灰岩台地から赤土が流入し、混土砂層を形成する。先史遺物・後世遺物が僅かにみられ、土器片は細かく、自然遺物はシジミ類、陸産マイマイ類が多い。

第II層

灰褐色砂に細かい珊瑚や貝の破片が混入する灰褐色混礫砂層で、厚さは約20cmである。東側から半円形状に広がり、トレンチの北・南・西側隅では漸次薄くなり、やがて消滅する。

土器は出土量の約半数が本層のものである。他の層に比べて口縁破片が少ない割に、胴部破片や底部資料は相対的に多かった。また、移入土器も0～5cmレベルで2点、10～20cmレベルで3点の計5点が検出された。自然遺物はアンボンクロザメ、マガキ、イソハマグ

リが主体をなす。

第III層

淡灰褐色砂層で、遺構をともしなう層である。T-24の東壁にみられる立位の大形シャコガイを境にして南側に円弧状の掘り込みを描く遺構であるが、全形は不明。比較的厚く、層厚は40cm程である。しかし、南側はかなり薄く、南壁・西壁まで続かず、消滅する。遺物は第II層に比べてかなり減少するが、やや大形の口縁・底部資料が比較的多く検出された。自然遺物は、アンボンクロザメや大形のシャコガイがほとんどである。

第IV層

第IV層は灰褐色砂層。東側で最も厚く、38cm程あり、西側へいくにしたがって薄くなり10cm余をはかる。遺構を伴う層で、柱穴らしきものが確認された。S・T-23・24・25・26の東壁をみると灰褐色の層に黒褐色をおびる部分がみられる。この黒褐色層は中央が厚く北・西壁へ厚さを減じながら消滅する。いわゆるレンズ状の堆積層である。遺物は第V層（地山）の境において大形の土器片（一括遺物）が出土した。自然遺物は二枚貝が主体をなす。本層は遺構の床面と思われる薄い粘土層の所で掘り下げを終了した。

遺 構

本区において第24図に示した遺構が検出され、一部に厚さ数ミリの粘土面が確認されたが、そのプランは判然としない。グリットの東側の壁をほぼ中心に、プランは東西3m、南北5.8mの不定円形をなす。遺構の中央が、鍋底状に凹み、その周辺に柱穴らしきものが検出された。柱穴は直径が20cm～90cmで、深さは一定しておらず、浅いもので38cm、深いものになるとほぼ47cmである。

出土遺物

S・Tトレンチにおいて出土した遺物は自然遺物と人工遺物に分けられ、出土量は前者が圧倒的に多い。自然遺物は動物遺存体のみで、その中では貝殻が主体となっている。

人工遺物は土器・石器・貝製品が得られたが、骨製品は1点も出土していない。出土量は圧倒的に土器が多い。土器はすべて無文で、移入土器も若干含まれる。石器は磨石のみで4点出土したが、全形を知りうる資料はない。貝製品は8点得られ、そのうち実用品が7点で、装飾品は1点のみである。以下、土器・石器・貝製品の順に記述する。

土 器

本区における土器の出土量は第27表及び第28表に見るように、口縁部資料106点、底部資料12点、胴部資料2418点を数え、総数2536点となっている。その中には移入土器とみられるもの（底部1点・胴部8点）も含まれている。器形別の出土状況は第25表の通りである。

鉢形Ⅰ類土器

鉢形Ⅰ類は総数18点あり、そのうちⅠ類Aは12点、Ⅰ類Bに含まれるものは6点である。いずれも第Ⅳ層で多かった。

鉢形Ⅰ類A

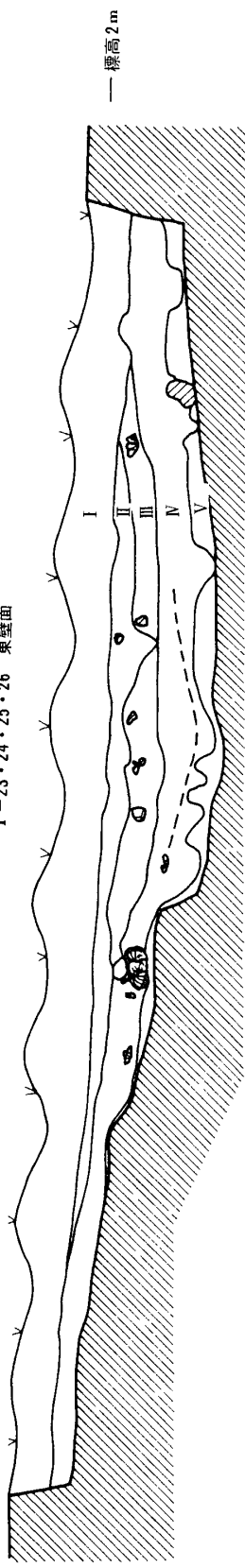
第25図1・図上復元可能な資料で口径は推定32.8cmである。肩部の屈曲は強く明瞭な稜を持つ。口縁部の外反度は大きい。また、肩部下方約4cmの箇所にもルーズな屈曲部を有するがこのような例は全資料中本標品のみである。肩部及び下方の屈曲部はいずれも輪積み接合部に形成されている。口唇部形態は(1)に属するが、一定せず稜の見られる部分

もある。器面調整は主に指ナテによって施されているが、胴上部には斜め方向の擦痕がわずかに残る。胎土は砂質で焼きが良く、混入物として石英・長石を主体に角閃石、赤色粒を含むが、前2者は多量で後者は稀少である。器色は内外面とも暗褐色を基調とするが、部分的に黒褐色を呈する箇所もある。器壁は輪積み接合部の厚い部分で9mm、薄い部分は7mmを測る。第Ⅳ層の出土。

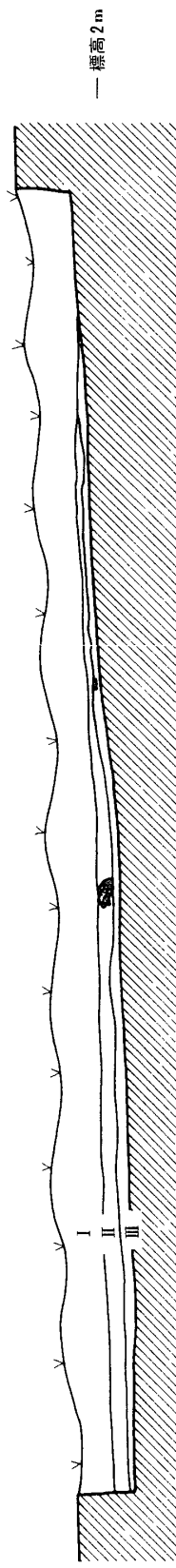
同図2・図上復元をしたもので口径は推定31.4cmである。肩部の屈曲は比較的強めで稜は明瞭である。口縁部はゆるやかに外反し、肩部から胴部へは直線的に移行する。口唇部形態は(1)に属するが強い肥厚はみられず、この肥厚部はヘラ状工具によって調整されている。口縁部は横方向に指ナデされるが、調整痕はほとんど確認できない。屈曲部下方には斜め方向の擦痕が観察できるが、これも不明瞭なものである。内面は全体的に丁寧であるが横方向の擦痕が認められる部分もある。器色は内外面とも茶褐色。胎土は砂質で焼成は良好、混入物は石英・長石を主体に角閃石が見られる。器壁は屈曲部下方が厚く9mmを測り、薄い部分は8mmである。第Ⅳ層の出土。

同図3・復元可能なもので口径は推定24.2cmである。胴部はややふくらみ、肩部の屈曲はやや強めて口縁部の外反度も大きい。屈曲部の稜は器面調整のため部分的に不規則になっている。口唇部形態は表面に強い稜が見られ、(2)に属する。器面調整は内外面ともヘラ状工具及び指ナテによってなされている。調整は主に横方向であるが、胴部あたりは縦方向となる。胎土は砂質に属し若干もろい。混入物は石英・長石を主体に角閃石、サンコ、赤色粒を含む。器色は外面が黄褐色ないし暗褐色、内面は赤褐色を呈する。器壁は厚い部

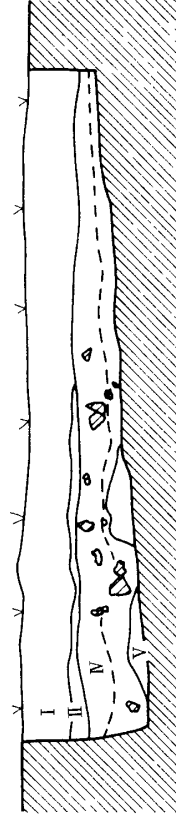
T-23・24・25・26 東壁面



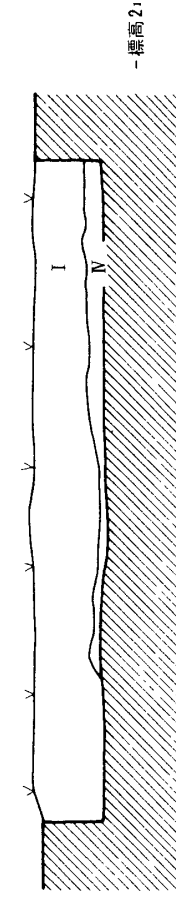
S-23・24・25・26 西壁面



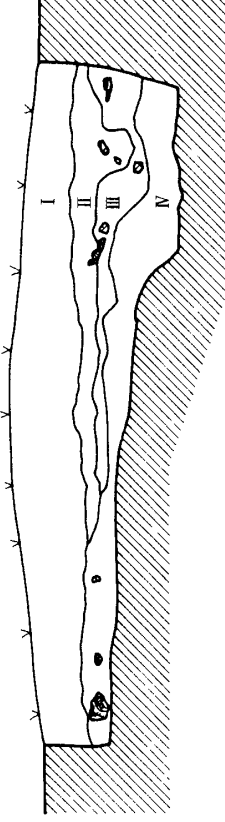
ST-25 北壁面



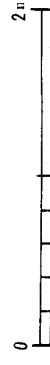
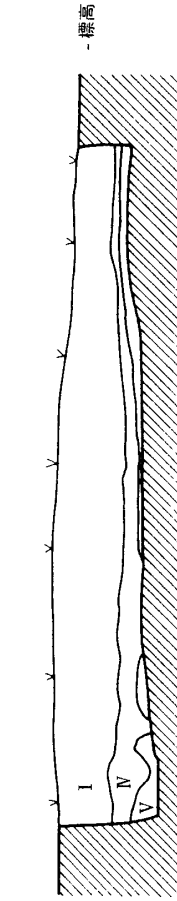
ST-23 北壁面



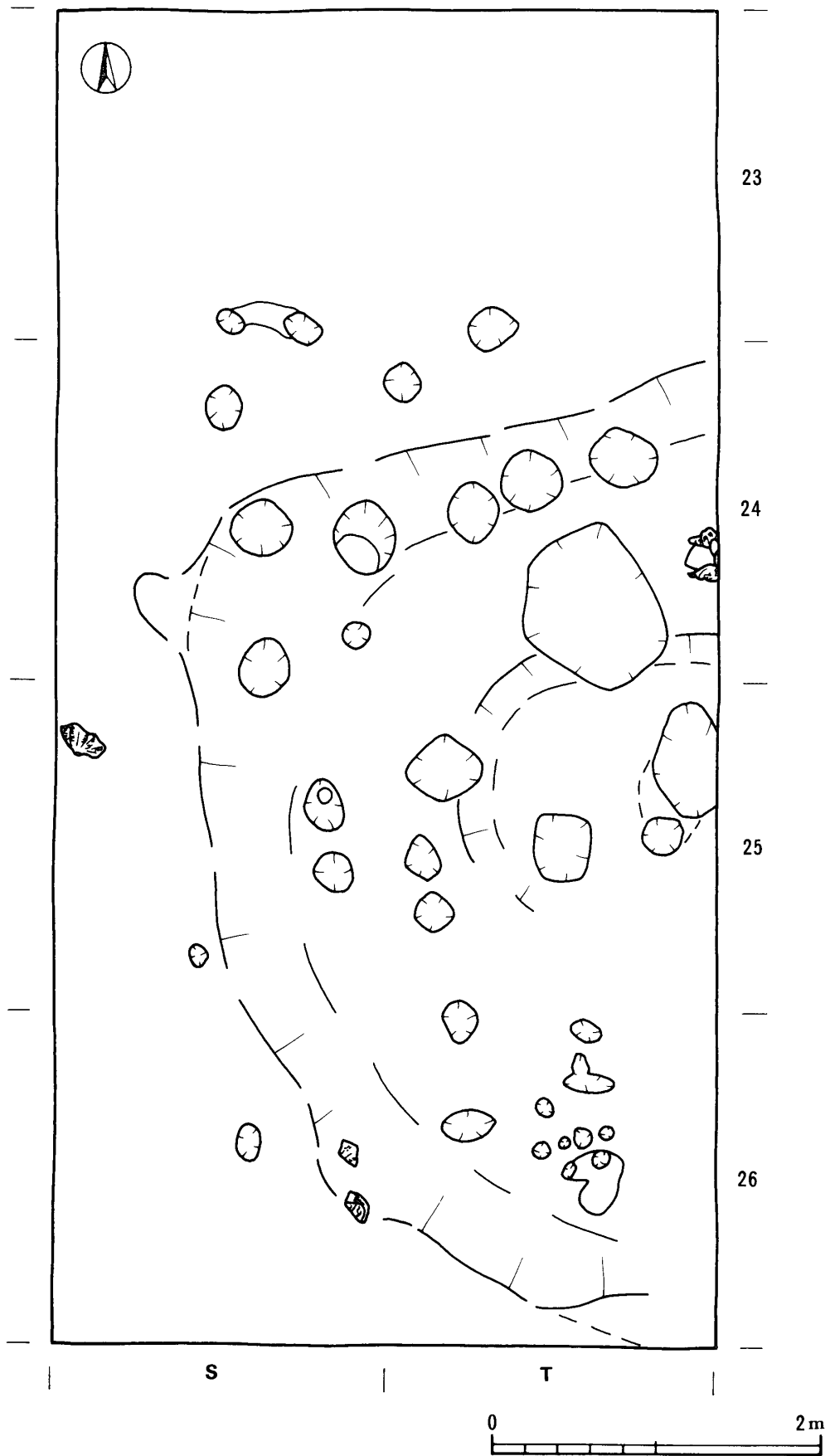
ST-24 南壁面



ST-26 南壁面












第23図 S・Tトレンチの土層断面図



第24図 S・Tトレンチの遺構平面図

器種		層序	I	II	III	IV	合計
鉢形	I 類	A		ニ(3)・ト	ニ・ト	ト・イ(3) ハ・チ	12
		B		ト・イ	ニ(2)	ニ・イ	6
	II 類	C		ニ	ニ(2)	ト・イ(2) ニ(3)・ハ	10
		D			チ		1
	III 類	E					
		F		イ(3)・ニ ト(2)	イ(2)・ニ(3) ト・チ	ニ(3)・イ(2) ハ(3)・トリ	23
		G	ロ・ニ(2)	ト(5)・ニ(2) チ	イ・ニ(4) ト(3)・ヘ	ロ・ニ(3) ト	25
	壺形	H					
		I				ト(2)・ニ	3
	II 類						
マリ形				ニ		ニ(2)・リ	4
合計			3	21	23	38	85

第25表 S・Tトレンチの器種別出土状況

器種 口唇部形態	鉢形	鉢形							壺形			マリ形	合計
		I 類		II 類			III 類		I 類		II 類	III 類	
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	類	類	
イ		3	2	2			6	1					14
ロ								2					2
ハ		1		1			3						5
ニ		4	3	6			7	11		1		3	35
ホ													
ヘ								1					1
ト		3	1	1			5	9		2			21
チ		1			1		1	1				1	5
リ							1					1	2
合計		12	6	10	1		23	25		3		1	85

第26表 S・Tトレンチの口唇部形態と器種別との関係

分が胴部で11mmを測り、薄い部分の頸部は9mmとなっている。第II層の出土。

同図4・これも図上復元を試みたもので、口径はやや小さく推定19.5cmを測る。前の3点に比べ肩部の屈曲は弱く、特に内面においてはそうである。口唇は(イ)に属するが作りは雑な感じをうけ、断面は部分的に方形状を呈するところも見られる。器面調整は外面屈曲部上方はへら状工具によって丁寧にナデられており、光沢を呈する箇所もある。内面及び屈曲部下方はやや雑な仕上げで輪積み痕や指頭圧痕が残る。胎土は砂質で、混入物は角閃石を主体とし、石英・長石、サンゴなどが見られ、焼成は良好である。器色は暗褐色を呈するが内面はやや明るい。器壁をみると、厚い部分で7mm、薄い部分は6mmである。第IV層の出土。

同図5・浅鉢形の可能性をもつ資料である。屈曲部上方はかるい外反を示すが、屈曲部以下は残存部が少ないため、詳細は不明。ただし稜は強めである。内外面とも器面調整は指ナデによって横方向になされており、内面の方がより丁寧である。口唇部形態は(イ)に属する。胎土は泥質で焼成は良好。混入物は角閃石のみであるが、器面調整のためかあまり目立たない。器色は内外とも暗褐色を呈し、器壁をみると、口縁部は薄く7mmを測り胴部にいくにしたがって9mmとなり厚くなる。第IV層の出土。

同図6・同図8と同様、内向する器形で、肩部の屈曲部がわずかに確認できる。口唇部形態は(チ)に属する。胎土は砂質で同図8と同様、ふれると手に粉が付着する。混入物は石英・長石を主体にサンゴが含まれる。器面調整は指ナデによるもので、器色は内外面とも赤褐色を呈し、器壁は7mmと全体的に同じ厚さである。第IV層の出土。

テノパー		層 序	I	II	III	IV	合 計
砂	角	角閃石のみ					
	閃	角>石・長	鉢ⅢGロ・ニ	鉢ⅢFイ・ニ・鉢ⅢGト・平底	鉢ⅢFニ・鉢ⅢGイ	鉢ⅠAイ・鉢ⅢFニ・ハ 鉢ⅢGニ・ト・マリ形リ	14
	石	角>石・長+サ		鉢ⅠAニ・鉢ⅢGチ・乳房状	鉢ⅠBニ	鉢ⅠAハ・鉢Ⅱcニ・鉢ⅢGト	7
	主	角>石・長+赤		鉢ⅠAト・鉢ⅢGト(2)	鉢ⅠAト・鉢Ⅱcニ・鉢ⅡDチ・鉢ⅢGニ・ハ・ト	鉢ⅢFイ・ハ(2)・壺ⅠⅠト	13
	体	角>石・長+赤+サ		鉢ⅢGニ	鉢Ⅱcロ		2
	石	石英・長石のみ					
	英	石・長>角		鉢ⅠBイ・鉢ⅢFト	鉢ⅢFニ・鉢ⅢGニ	鉢ⅠAイ・鉢ⅢFニ・平底	7
	・	石・長>角+サ		鉢ⅢGト	尖底	鉢Ⅱcト・鉢ⅢFト	4
	長	石・長>角+赤		平底	鉢ⅠBニ・鉢ⅢFト・鉢ⅢGニ(2)	鉢ⅠAト・鉢ⅠBイ・鉢ⅢFリ	8
	石	石・長>角+赤+サ		鉢ⅠAニ・鉢ⅠBト・鉢ⅢGト・マリ形ニ	鉢ⅢGト	鉢ⅢFニ	6
	主	石・長>赤				鉢ⅢFイ	1
	体	石・長>サ	鉢ⅢGニ			鉢ⅠAチ	2
	質	サンコのみ				鉢ⅢGニ	1
	・	サ>石・長				平底	1
	主	サ>角+石・長			鉢ⅢFイ	鉢ⅠBニ・鉢Ⅱcニ(2)・ハ	5
	赤	赤>角+石・長					
	色	赤>角+サ					
	粒	赤>角+石・長+サ					
	主						
中	角	角閃石のみ					
	閃	角>石・長		乳房状			1
	石	角>石・長+サ		鉢ⅠAニ			1
	主	角>石・長+赤		鉢ⅢFト			1
	体	角>石・長+赤+サ					
	石	石英・長石のみ		鉢ⅢGニ			1
	英	石・長>角				平底	1
	・	石・長>角+サ			鉢ⅢFト		1
	長	石・長>角+赤					
	石	石・長>角+赤+サ			鉢ⅢFイ		1
	主	石・長>赤					
	体	石・長>サ					
	質	サンコのみ					
	・	サ>石・長					
	主	サ>角+石・長		尖底			1
	赤	赤>角+石・長				壺ⅠⅠト	1
	色	赤>角+サ					
	粒	赤>角+石・長+サ					
	主						
泥	角	角閃石のみ				鉢ⅠAイ・マリ形ニ	2
	閃	角>石・長					
	石	角>石・長+サ					
	主	角>石・長+赤		鉢Ⅱcニ・鉢ⅢFイ		壺ⅠⅠニ・壺Ⅲチ	4
	体	角>石・長+赤+サ					
	石	石英・長石のみ					
	英	石・長>角			鉢ⅢFニ		1
	・	石・長>角+サ				マリ形ニ	1
	長	石・長>角+赤					
	石	石・長>角+赤+サ		平底			1
	主	石・長>赤					
	体	石・長>サ					
	質	サンコのみ					
	・	サ>石・長			鉢ⅢFチ		1
	主	サ>角+石・長				鉢ⅢGニ	1
	赤	赤>角+石・長			鉢ⅠAニ	鉢Ⅱcイ(2)・鉢ⅢGロ	4
	色	赤>角+サ					
	粒	赤>角+石・長+サ					
	主						
合 計			3	27	24	41	95

第27表 S・Tトレンチの口縁部・底部の胎土別出土状況

層 序			I	II	III	IV	S-30表土	不 明	合 計
テンパー									
砂	角閃石主体	角閃石のみ	1	11	2				14
		角>石・長	28	170	38	24	3		263
		角>石・長+サ	5	329	63	43			440
		角>石・長+赤	10	47	6	6			69
		角>石・長+赤+サ	2	61	18	16			97
	石英・長石主体	石英・長石のみ	5	26	3	4			38
		石・長>角	40	161	31	14	2	3	251
		石・長>角+サ	13	154	44	31	3	1	246
		石・長>角+赤	6	49	7	8			70
		石・長>角+赤+サ	3	52	25	18			98
	質	石・長>赤		9	1	1	1		12
		石・長>サ	3	31	3	1			38
		サンコのみ	1	26	7	7			41
		サ>石・長	1	30	10	8			49
		サ>角+石・長	4	123	46	34	4		211
	赤色粒主体	赤>角+石・長		32	4	4			40
		赤>角+サ		7	3	1			11
		赤>角+石・長+サ		6	1				7
	小 計		122	1324	312	220	13	4	1995
中	角閃石主体	角閃石のみ		2		4			6
		角>石・長	1	7	2	20			30
		角>石・長+サ	1	6	5	15			27
		角>石・長+赤		6		7	1		14
		角>石・長+赤+サ		3	2	4			9
	石英・長石主体	石英・長石のみ		2	3	4			9
		石・長>角	1	5	2	12		3	23
		石・長>角+サ	3	8	6	18		2	37
		石・長>角+赤	2	4	6	5		1	18
		石・長>角+赤+サ	2	7	2	8			19
	間	石・長>赤			2	6			8
		石・長>サ	1	2	1	2			6
		サンコのみ	1	6	3	17			27
		サ>石・長	1	6	2	7			16
		サ>角+石・長	1	11	7	11		1	31
	赤色粒主体	赤>角+石・長		9	3	4			16
		赤>角+サ		1	2	13			16
		赤>角+石・長+サ	1		1	2			4
	小 計		15	85	49	159	1	7	316
泥	角閃石主体	角閃石のみ				1			1
		角>石・長	1		2	3			6
		角>石・長+サ	1	5	2	5			13
		角>石・長+赤			7	2			9
		角>石・長+赤+サ		2	6	5			13
	石英・長石主体	石英・長石のみ					1		1
		石・長>角	1		4	2			7
		石・長>角+サ		3	5	5			13
		石・長>角+赤		5	4	1			10
		石・長>角+赤+サ			2	1			3
	質	石・長>赤		1	1				2
		石・長>サ			1	2			3
		サンコのみ			5				5
		サ>石・長							9
		サ>角+石・長		2		7			9
	赤色粒主体	赤>角+石・長			4	1			5
		赤>角+サ			3	1			4
		赤>角+石・長+サ		1	2				3
	小 計		3	19	48	36	1		107
	合 計		140	1428	409	415	15	11	2418

第28表 S・Tトレンチの胴部の胎土別出土状況

同図7…口縁部は微弱な外反を呈し、口唇部形態は(=)に属する。器面調整は横方向に指ナデが施され、内外とも丁寧な仕上げとなっている。器色は内外とも黄褐色を呈する。胎土は砂質で混入物は角閃石を主体に石英・長石、サンゴが見られるが、量的には少ない。器壁は6mmとほぼ同じ厚さとなっている。第Ⅱ層の出土。

同図8…口縁が内向する器形で直線的にのびる。器面調整は内外面ともヘラ調整後ナデを施したと思われ、擦痕の方向は外面が横、内面は斜め方向となっている。胎土は砂質で、ふれると粉が手に付着する。混入物には角閃石を主体に石英・長石が見られる。口唇部形態は明瞭ではないが(イ)に属する可能性がある。器色は内外とも黄褐色で、器厚は口唇部が厚く8mmで、下部にいくにしたがって薄くなり6mm前後となっている。第Ⅳ層の出土。

同図9…口縁部は外反を示す器形で、口唇部形態は(=)に属する。器面調整はヘラ状工具を使用したと思われるが、ナデによって消されており、確認は困難である。調整方向は斜めあるいは横方向と不規則である。内外とも暗褐色を呈し、胎土は泥質で、焼きは良い。混入物は赤色粒を主体に石英・長石、角閃石を含むが、胎土のせいか外面ではあまり観察できない。器壁は口唇部が6mm、他は7mmである。第Ⅲ層の出土。

同図10…同図11と同一個体に属するものと思われるもので、外側に大きく傾く。口唇部形態は(ト)に属するが若干稜が見られる。胎土は砂質できめが細かく、混入物は角閃石を主体に石英・長石、赤色粒が見られる。器面調整はナデによって丁寧になされているが内面はいくぶん雑である。器色は内外とも黄褐色だが、内面では灰褐色を呈する部分も見ら

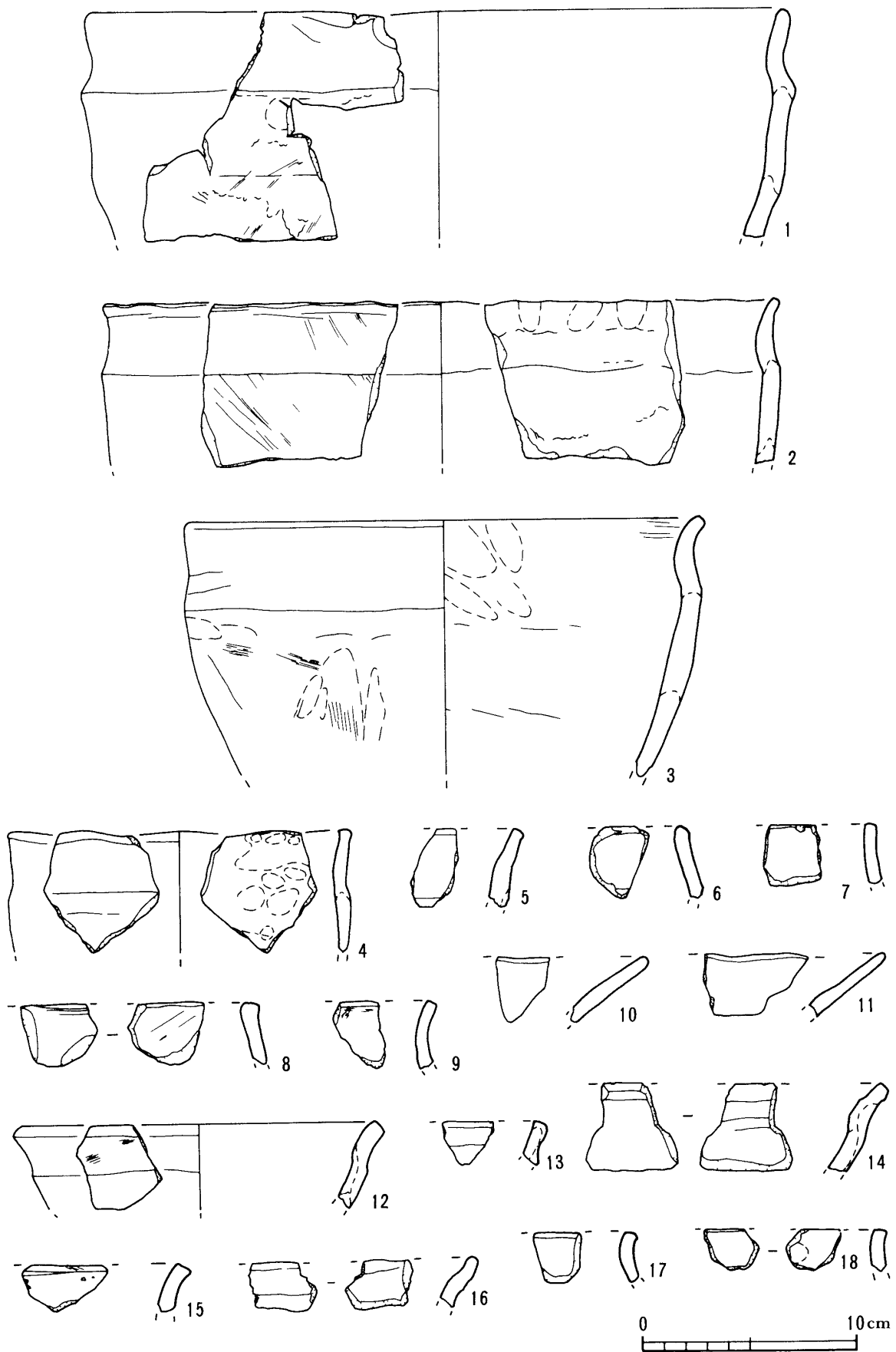
れる。器壁は同図11と同じく5.6mmで薄手である。第Ⅲ層の出土。

同図11…外側に大きくひらくタイプと考えられるものである。口唇部形態は(ト)に含められるが、やや丸みをおびる。器面調整はとても丁寧なナデによってなされている。ただし内面には若干凹凸が見られる。胎土は砂質だが他の土器に比べるときめは細かいようである。混入物は多量に含まれ、角閃石を主体に石英・長石、赤色粒が見られる。器色は外面が黄褐色、内面は灰褐色を呈する。器壁は口唇部が5mm、下部にいくにしたがい6mmとやや厚くなっているが、他の資料に比べると薄い。第Ⅱ層の出土。

同図15…口縁が外反するタイプである。器面調整はヘラ状工具によって施されていると思われるが、その後指ナデによってナデ消されているためはっきりしない。口唇部は(=)に属するが、雑な作りである。胎土は中間タイプだがやや泥質に近く、焼成は良好である。混入物として角閃石を主体に石英・長石、サンゴを含むが、全般的に少量である。器色は内外とも赤褐色を呈する。器壁は全体にほぼ同じ厚さで8mmを測る。第Ⅱ層の出土。

鉢形Ⅰ類B

第25図12…図上復元可能な資料で口径は推定17.2cmである。肩部に明瞭な屈曲を持ち、やや外反する資料である。しかし、内面は稜が弱い。傾きからすると浅鉢形で、口唇部形態は(=)に属する。器面調整は主に指ナデによるが、口唇部付近にわずかに擦痕も観察される。また、内面に指頭圧痕が顕著に見られる。胎土は砂質で、焼成は良好。多量のサンゴを主体に石英・長石、角閃石を混入する。器色は外面が暗褐色で内面は黄褐色を呈する。器壁は全体的に同じで7mmを測る。



第25図 S・Tトレンチ出土の土器

第Ⅳ層の出土。

同図13…外側に若干傾く資料で、口唇部は(=)に属する。口唇部の接合部を見ると、粘土をはりつけて形を作っている。器面調整は口唇部及び外面は横方向に、内面は縦方向に擦痕が見られ、内外とも光沢がみられる程でいねいに調整がなされている。胎土は砂質で混入物はやや粗粒の石英・長石を主体として角閃石、赤色粒が見られる。器色は暗褐色を呈するが内面はやや明るい。器壁は7.5mmで、「く」の字状を呈する箇所は6mmを測る。第Ⅲ層の出土。

同図14…浅鉢形の可能性がある資料である。外面は胴上部から口縁へゆるやかにのび、屈曲の稜は不明瞭である。しかし、内面は3本の強い稜が見られ、その部分は段を有する。この稜は器面調整の段階でヘラ状工具によってなされたと思われ、光沢を有する程ナデられている。調整方向は内外とも横方向である。口唇部の断面はかまぼこ状を呈し、(イ)に属する。胎土は砂質で焼成は良好。混入物は粒のやや大きい石英・長石を主体に角閃石、赤色粒が見られる。器色は暗褐色を呈し、器壁は屈曲部の稜の部分は8mmを測り、屈曲部下方は7mmとなっている。第Ⅳ層の出土。

同図16…同図14と同様浅鉢形の可能性がある資料である。肩部にはわずかに屈曲が見られ、この屈曲部から口縁にかけて若干内向する器形である。口唇部は粘土を内側におりまげてつくられており、形態は(ト)に属する。器面調整は内外面とも横方向にナデられている。胎土は砂質で、手ざわりはザラザラしており、焼成は良好である。混入物は石英・長石を主体に角閃石、赤色粒、サンゴを含むが、他の土器に比べ量的に少ない。器色は内外とも暗褐色を呈し、器壁は8mmである。第Ⅱ層の出土。

同図17…口唇部が外反するタイプで、口唇部形態は(イ)に属する。器面調整は指ナデによってなされている。胎土は砂質で脆い。混入物は石英・長石を主体とし、角閃石が含まれる。器色は内外とも黄褐色を呈する。器壁は6mmである。第Ⅱ層の出土。

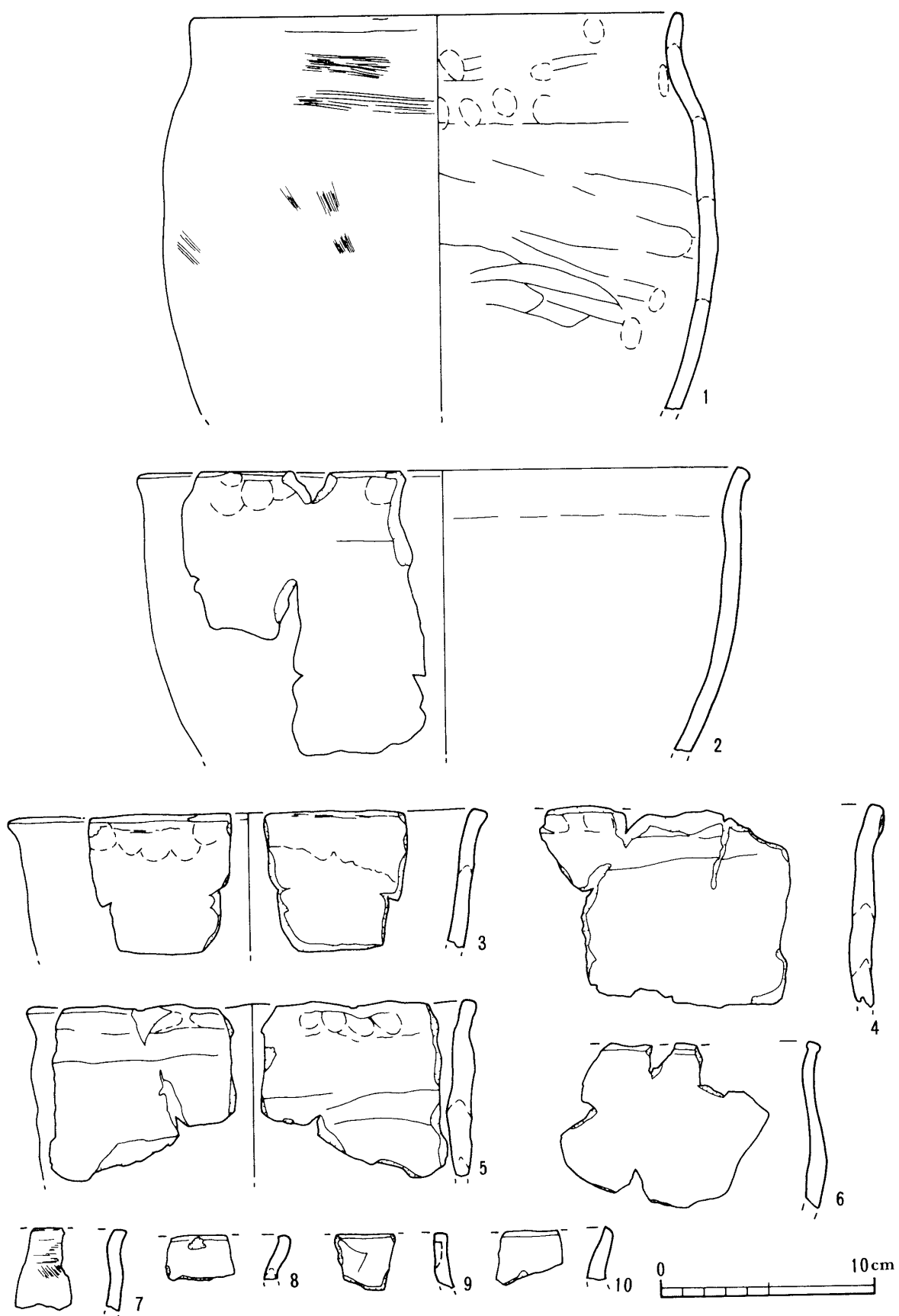
同図18…口縁部は内彎し、口唇部形態は(=)に属する。器面調整は全面指ナデによってなされている。胎土は砂質に属し、若干もろい。混入物は角閃石を主体とし、石英・長石、サンゴを含む。器色は内外とも黄褐色を呈し、器壁は7mmを測る。第Ⅲ層の出土。

鉢形Ⅱ類土器

鉢形Ⅱ類は総数11点あり、そのうちⅡ類Cは10点含まれ、Ⅱ類Dは1点のみである。

鉢形Ⅱ類C

第26図1…復元可能な資料で口径は推定23.1cmである。胴部が若干ふくらみ頸部はわずかにくびれ、そのまま直線的に口縁へ至る。肩部の屈曲はルーズで稜は見られない。輪積み接合部は約4.5cm幅で4か所見られる。口唇部形態は(ト)に属するが、調整の際にできた稜がみられる部分もある。器面調整としては口縁部から肩部あたりまでは横方向の擦痕がみられ胴部は左上から右下へと斜めに施される。この部分は擦痕が部分的で主に指ナデによってなされている。内面についても同様に、口縁部が横方向で胴部は斜めとなっている。胴部ではヘラ状工具による調整痕が顕著にみられるが、口縁部では指頭圧痕が主で、胴部においても散見される。胎土は砂質で焼きが良く、混入物として石英・長石を主体に角閃石、サンゴを含み、粒は一般的に細かい。器色は内外とも黄褐色ないし赤褐色を呈する。器壁は口縁部や胴部は8mmを測り、



第26図 S・T トレンチ出土の土器

頸部はわずかにくびれ 7mm を測る。第Ⅳ層の出土。

同図 2 …図上復元可能な資料で口径は推定 28.6 cm である。肩部に屈曲はみられず、胴部から口縁部へかけてゆるやかに傾き、口唇部で若干外反する。肩部には屈曲はみられないが、弱い稜が観察され、外面よりも、内面に強い。口唇部形態は(イ)に属する。器面調整は内外面ほとんどが指ナデと思われるが、胴部に横あるいは斜め方向の擦痕が散見できる。口縁部外面には指頭圧痕が見られる。胎土は泥質で焼きは非常に良く、混入物に赤色粒を主体とし、石英・長石、角閃石を含むが量的に少ない。器色は外面が赤褐色を基調とし、部分的に黄褐色を呈し、内面は黄褐色となっている。器壁は口縁部から胴部にかけてほぼ同じ厚さで 9mm を測る。第Ⅳ層の出土。

同図 3 …これも図上復元を試みたものである。同図 1 と同一個体に属すると思われるが口径が推定 22.4cm とやや小さい。胴部から口縁へゆるやかに立上がり、口唇部で若干外反する。口唇部形態は(イ)に属する。同図 1 と同様、内面に稜がみられ、外面には観察できない。器面調整は主に指ナデによって調整されているが、外面の口唇部には擦痕が確認できた。胎土は泥質で焼成は良好。混入物も赤色粒を主体に石英・長石、角閃石等が含まれる。器色は内外とも黄褐色を基調とするが、外面に部分的に暗褐色を呈する箇所もある。器壁は同図 1 と同様、ほぼ同じ厚さで 8mm を測る。第Ⅳ層の出土。

同図 4 …胴上部から口縁にかけて若干外反する器形で胎土、混入物等から同図 5 と同一個体に属するものである。口唇部形態は(ニ)に属する。頸部を指頭による凹面が囲繞し稜をなす。わずかに残る口縁部外面には左右両側から指頭によって力が加えられ、中央部はこ

ぶ状に盛上がる。器面調整は外面が主にナテ仕上げ、内面は部分的に縦あるいは斜め方向の擦痕が観察される。調整はあまり丁寧ではなく、輪積み接合部分が顕著にみられる。胎土は砂質で、焼成はやや良好。混入物に多量の粗粒サンゴのほか、石英・長石、角閃石等も含まれる。この土器も、同図 3 同様、後二者の混入物は少量で粒は細かい。器色は内外面とも黄褐色を呈するが、外面の胴部付近は暗褐色となっている。器壁は厚い箇所では 12 mm を測り指頭による凹面の部分は 9mm となっている。第Ⅳ層の出土。

同図 5 …図上復元したもので口径は推定 21 cm である。肩部の屈曲はみられないが、指頭圧痕が頸部を囲繞し、それによって比較的明瞭な稜が形成される。口唇部形態は(ニ)に属するが、指頭によって凹面が作られ、つぶれている箇所もある。器面調整で外面は頸部下方の器面がはがれて観察不可能となっているが、残存部は指頭圧痕及び擦痕がみられる。内面は頸部上面が指ナデ、頸部下方はへら状工具によって横方向に調整され、稜がみられる。胎土は砂質で焼成はやや良好。混入物は多量の粗粒サンゴを主体に、石英・長石、角閃石が含まれるが、後者の 2 種は微量である。器色は内外とも黄褐色を呈する。器壁は輪積み接合部分が 11mm、他は 9mm を測る。第Ⅳ層の出土。

同図 6 …胴上部が若干ふくらみ、「く」の字状の弱い屈曲をつくり口縁部へ至る。口縁部の外反は弱く、口唇部形態は(イ)に属する。器面調整は外面全体に細かい擦痕がみられ、調整も丁寧であるが、内面はやや雑で指頭圧痕のみみられる。胎土は砂質で焼成は不良である。混入物に、同図 3・4 より細かいサンゴを主体に石英・長石、角閃石を含む。量的にはやはりサンゴが多く、後 2 種は微量であ

る。器色は内外面とも暗褐色を呈し、器壁をみると頸部あたりは6mmで、胴部近くになると10mmを呈する。第Ⅳ層の出土。

同図7・頸部に弱いくびれがみられ、口縁はわずかに外反する。口唇部形態は(ニ)に属する。器面調整の擦痕は内面では横方向であるのに対し、外面の頸部では横方向、胴上部は斜め方向に施されている。胎土は泥質で焼成は良好。混入物は角閃石を主体に石英・長石、赤色粒等がみられるが、量的には少ない。器色は内外面とも黄褐色を呈し、器壁は頸部が6mmで、他は7mmを測る。第Ⅱ層の出土。

同図8・外側に大きく開くタイプで、胴部が脹らみをもつものと考えられる。口唇部形態は、内面に稜がみられ、(ニ)に属する。器面調整をみると、外面は横方向の擦痕がうすくみられ、とても丁寧になされているが、内面はかるくナデた程度である。胎土は砂質で焼きは良く、混入物としては角閃石を主体に石英・長石、サンゴがみられる。器色は外面の口唇部付近は暗褐色を呈し、その下部は黄褐色となり、内面は橙褐色となる。器壁は全体的に7mmを測る。第Ⅳ層の出土。

同図9・口縁が内向する器形でやや直線的にのびる。内面の一部に指頭によって作られた凹面がみられ、その部分の口唇部形態は(ロ)のようになっているが、それ以外の部分は(ニ)に属する。外面は内面に比べて器面調整は丁寧である。胎土は砂質に属し、焼成は良好。混入物は多量に含まれ、角閃石を主体に石英・長石、サンゴ、赤色粒がみられる。器色はやや暗い黄褐色で、器壁は6mmを測り、指頭によって作られた凹面の部分は3mmとなっている。第Ⅲ層の出土。

同図10・口縁部は微弱な外反を示し、口唇部形態は内面に強い稜がみられ、(ロ)に属する。

器面調整は内外ともヘラ調整後、指ナデによってなされていると思われる。この土器も内面より外面が丁寧な仕上げである。器色は外面が暗褐色、内面は黄褐色を呈する。胎土は砂質で焼きはやや良好。混入物として角閃石を主体に石英・長石、赤色粒を含む。器壁は口唇部分が5mmで、徐々に厚くなり最大で8mmを測る。第Ⅲ層の出土。

鉢形Ⅱ類D

Ⅱ類Dに属するものは第27図1のみである。復元可能な資料で、口径は推定25.5cmである。肩部の稜は部分的に明瞭である。胴上部から口縁にかけてはほぼ直線的で口唇部分で弱く外反する。口唇部形態は(ナ)に属するが、部分的に指によってつぶされたり、方形状を呈する箇所もみられる。器面調整は、ナデも擦痕も全面横方向である。外面には、稜上部に擦痕がめだち、それが口唇部までのびる。稜下部は指ナデのためか、擦痕はみられない。内面の擦痕は外面程ははっきりとは観察できない。ヘラ状工具で調整後、ナデを施したと思われる。また、部分的に指頭圧痕もみられる。胎土は砂質で、焼成はかなり良好である。混入物に角閃石を主体に石英・長石、赤色粒がみられるが、全体的に量は少ない。器色は内外面とも暗茶褐色である。器壁は口縁部付近は8mmで胴部は10mmを測る。第Ⅲ層の出土。

鉢形Ⅲ類土器

鉢形Ⅲ類は最も多くみられる器形で、総数48点ある。そのうちⅢ類Fは23点、Ⅲ類Gは25点である。

鉢形Ⅲ類F

第27図2・図上復元可能な資料で口径は

推定 24.3cm である。胴上部から弱く外反する器形である。口唇部形態は(=)に属する。器面調整は内外面の調整差がはげしく、外面は部分的に横方向の擦痕がみられ、また本標品下部に輪積みのための弱い稜があり、その部分は斜めの擦痕が散見され、内面は擦痕などみられず、指頭圧痕が全面にみられ、凹凸が著しい。胎土は砂質で焼きは良く、混入物に細かい角閃石を主体に石英・長石が認められる。器色は外面がやや暗い黄褐色であるが、口唇部分は明るい。内面は全体的に黄褐色となっている。器厚はほぼ一定しており、9mm である。第Ⅳ層の出土。

同図 3 …本標品も図上復元可能な資料で、口径は推定 30.5cm を測る。直線にかかるく外へ開く器形だが、上端の口唇部も外反している。口唇部形態は(イ)に属するが、部分的に肥厚のみられない(=)のタイプの筒所もみられる。器面調整は頭指によって丁寧にナデられ、内外面に引摺ったような指頭圧痕がみられる。胎土は中間タイプで焼成は堅緻である。混入物は石英・長石を主体に角閃石、赤色粒、サンゴ等がみられ、石英・長石、サンゴは角閃石、赤色粒に比べ大粒である。器色は内外面とも赤褐色を呈するが、内面は部分的にやや暗褐色をおびる箇所もみられる。器壁は厚い部分で 9mm を測り、胴部近くの薄い部分は 6mm となっている。第Ⅲ層の出土。

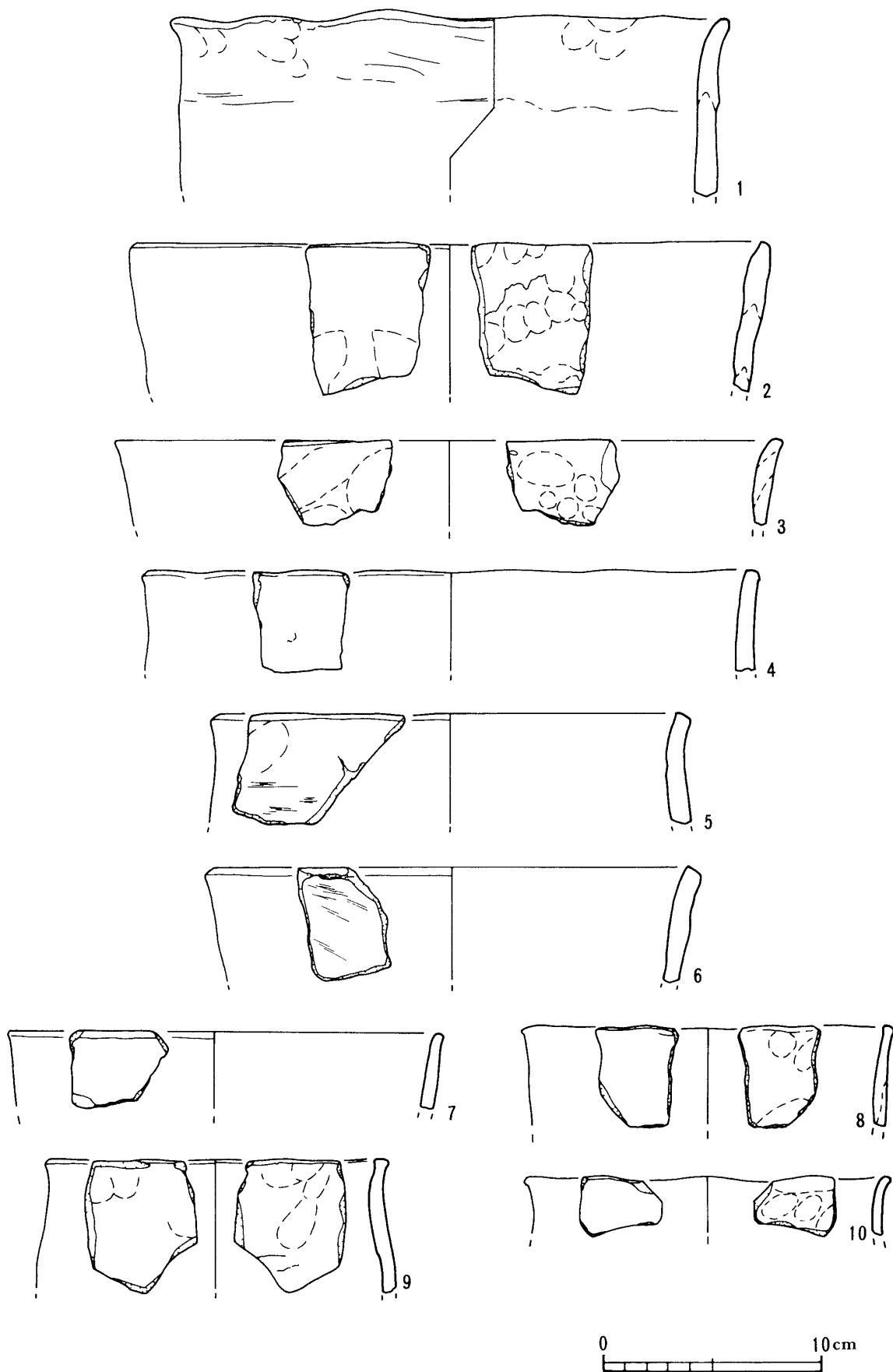
同図 4 …図上復元が可能で口径は推定 28.7 cm である。輪積み接合部から破損しており、本標品は口縁部のみが軽く外反する。口唇部の作りは雑であるが、形態は(イ)に属する。器面調整をみると、内外面ともかすかに擦痕が観察されるが、混入物がぬけおちポーラス状となっているため、調整は雑な感じをうける。砂質で、混入物はサンゴを主体に、石英・長

石、角閃石がみられる。器色は内外面とも黄褐色を基調とし、内面の一部は黒褐色を呈する。器壁は口縁部付近が 6mm で下部にいくにしたがい厚くなり 2mm の差がある。第Ⅲ層の出土。

同図 5 …他の資料に比べ口縁部の外反は強く、図上復元を試みると口径は推定 21.9cm となる。口唇部形態は(=)に属する。外面の器面調整としては部分的に横方向の擦痕がみられ、口唇付近の一部に指頭圧痕がみられる。口縁部内面には斜めの指頭圧痕がみられるが、口唇部は横方向となっている。器色は黄褐色を基調とし、内外面共に部分的に黒褐色となっている。胎土は砂質で、混入物は石英・長石を主体とし、角閃石、赤色粒、サンゴ等が含まれる。器壁はほぼ一定しており 8 mm を測る。第Ⅳ層の出土。

同図 6 …本標品も、図上復元可能な資料で、口径は推定 22.8cm である。胴部から口縁にかけて微弱な開きがみられる。口唇部はそのままのび、形態は(=)に属する。器面の調整は内外面とも丁寧に、外面は横方向の擦痕がみられ、内面は横方向の擦痕及び部分的に指頭圧痕が観察される。器色は暗褐色だが外面はやや明るい。混入物は石英・長石を主体に角閃石が含まれるが、量は全体的に少ない。胎土は砂質で、手ざわりはざらざらしており粉が手に付着する。器壁は 8mm であるが、指頭痕の部分は 1mm の差がある。第Ⅳ層の出土。

同図 7 …図上復元を試みた資料で、口径は推定 19.9cm を測る。第 14 図 6 同様、胴部から直線的にひらく器形である。口唇部は外面に弱く肥厚し、(イ)に属する。器面調整は内外面とも丁寧に擦痕などはみられない。胎土は砂質で焼成は堅緻である。混入物は角閃石を主体に石英・長石、赤色粒を含む。器色は内



第27図 S・Tトレンチ出土の土器



第28図 S・T トレンチ出土の土器

外面ともに黄褐色を呈するが、外面はやや赤っぽい。器壁は7mmを測り、薄い部分は6mmを測る。第Ⅳ層の出土。

同図8・同図8も同じく図上復元を試みたもので、口径は推定17.1cmを測る。器形は胴部から直線的に口唇部を開く。口唇部形態は(イ)に属するが、同図2よりは張り出しが弱い。胎土は砂質で、焼成は堅緻である。外面の器面調整は丁寧にナテられ擦痕や指頭圧痕はみられない。しかし、内面は指頭圧痕のため凹凸がめだつ。混入物は角閃石を主体とし、石英・長石、赤色粒を含む。角閃石、石英・長石は多量に混入され、赤色粒はかなり微量である。器色は内外面とも暗褐色であるが、部分的に黄褐色・茶褐色を呈する。器壁は8mmであるが、口縁部分は5mmと薄くなっている。第Ⅳ層の出土。

同図9・図上復元したもので、口径は推定15.8cmで胴径より小さい。頸部あたりで若干くびれ、口唇部は軽く外反する。口唇部形態は(イ)に属する。外面の器面調整は、口唇部付近が横てそれ以外は縦の擦痕がかすかに残り、部分的に指頭圧痕もみられる。内面は口縁部に縦長の指頭圧痕がみられ、頸部の一部が若干えぐられたような状態で擦痕が観察される。胎土は砂質で焼成は良好だが、ふれると粉が付着する。混入物として角閃石を主体に石英・長石が含まれるが全体的に少量である。器色は暗褐色を基調としているが、外面は部分的に黄褐色となっている。器壁は厚い部分で8mmを測り、口唇部付近が5mm、指圧痕部分は7mmとなっている。第Ⅳ層の出土。

同図10・小破片ではあるが、図上復元が可能である。口径は推定16.8cmを測る。現資料を観察すると、他の資料よりやや外反は強い。口唇部形態は(イ)に属する。器面調整は外

面に横方向の擦痕がわずかにみられるが、丁寧で、内面は口唇部分が横方向、それ以下は斜めの指頭圧痕となり、若干凹凸がみられる。器色は外面が橙褐色で、内面はやや暗い黄褐色を呈する。胎土は砂質で、混入物は角閃石を主体に石英・長石が含まれる。器壁は一定しており6mmとやや薄手である。第Ⅱ層の出土。

第28図1・同図2と同様の器形で、頸部で若干くびれ、口唇部で弱く外反する。口唇部形態は(イ)に属する。器面調整は内外面ともに指頭圧痕が顕著にみられ、また、輪積み接合部分の調整は雑である。器色は外面が黄褐色、内面が赤褐色及び暗褐色を呈する。胎土は砂質で焼成は良好である。混入物は石英・長石を主体に角閃石が含まれるが、両者ともに全体的に量は少ない。器壁は口縁部付近で6mm、胴部付近の厚い部分で9mmを測る。第Ⅲ層の出土。

同図2～14・小破片のため、図上復元が不可能な資料である。同図5・6・8・11は口唇部に弱い外反がみられるが、他はほとんど直線的である。口唇部形態をみると、(イ)に属するものが2点(5・9)、(イ)に属するものが同図10の1点、(イ)に属するものが3点(2・3・11)、(ト)に属するものが5点(4・6・7・12・13)、(チ)に属するものが同図8の1点、(リ)に属するものが同図14となっている。器面調整は全体的に擦痕よりも指頭圧痕がめだち、調整は内面よりも、外面が丁寧である。器色は黄褐色を基調とし、同図4・10の外面、13・14の外面が暗褐色を呈する。器壁は同図6・10・12が5mmとうすく、他は6～8mmを測る。出土は、第Ⅱ層から同図3・4・6・9、第Ⅲ層から2・7・8・11・13、第Ⅳ層から5・10・12・14となっている。

鉢形Ⅲ類G

第28図15…Ⅲ類Gの口縁部資料の中で、図上復元が可能な唯一の資料である。口径は推定20.6cm。器形は胴上部から口縁部まで直線的で、口唇部形態は(t)に属する。器面調整は外面が弱い指頭圧痕及び横方向の擦痕が施され、内面には指頭圧痕がかかるが残る。胎土は砂質で焼成は良好。混入物は角閃石を主体に石英・長石、赤色粒等を含む。器色は内外面とも黄褐色を呈し、器壁は口縁部付近は6mmで、他は8mmを測る。第Ⅱ層の出土である。

同図16～39…すべて破片で、現存部の器形は直線的となっている。他に特徴的なものを取りあげると、同図16は口縁部よりやや下方に孔があげられている。観察すると、焼成後に穿たれたと思われる。同図18は内面に帯状の粘土が付けられ、同図27も指頭圧痕で若干くぼんだ部分に縦長の粘土が張付けられている。器面調整をみると、同図17は他の資料に比べて丁寧である。外面にはヘラ状工具による浅い過擦痕が一本斜めにはしっている。他の資料は外面に比べ内面に指頭圧痕がめだつが擦痕はあまり見受けられない。口唇部形態は同図16が(i)に属し、同図17・18は(□)に属する。(=)に属するものは同図19～29の11点で最も多い。また、同図32～39はすべて(t)に属している。(チ)に属するものは同図30、(へ)に属するものは同図31のみである。器色は黄褐色あるいは黒褐色である。胎土はほとんどが砂質に属し、同図29が中間タイプ、同図17・19が泥質で、中間タイプ・泥質は少ない。焼成はほとんどが良好である。器壁は平均して7mmであるが、同図29が10mmと極端に厚いものもみられる。出土が最も多い層は第Ⅲ層で9点となっており、ついで第Ⅱ層が7点（同図21・29・30・32・34・35・

38）、第Ⅳ層が5点（同図17・19・24・25・36）第Ⅰ層からは3点（18・23・28）の出土である。

壺形Ⅰ類土器

壺形Ⅰ類は総数3点みられ、すべてがⅠ類Ⅰに含まれる。Ⅰ類Hの頸部に稜が明瞭にみられる器形は本区では出土していない。

壺形Ⅰ類Ⅰ

第29図1…図上復元可能なもので、口径は推定6.7cm。同図2に比べやや小さめである。口縁部の外反は微弱で、頸部以下は不明。口唇部形態は(t)に属する。胎土は砂質で、焼成は堅緻である。混入物は角閃石を主体として石英・長石、赤色粒を含み、他の壺形土器破片に比べ、混入量が多い。器色は内外とも暗褐色を呈する。器面調整はナデが施されているが、やや雑である。器壁は7mmである。第Ⅳ層の出土。

同図2…図上復元を試みたもので、口径は壺形の中では大きく、推定13.5cmを測る。口唇部形態は(=)に属し、やや外反する。胎土は泥質で焼成は良好。混入物は角閃石を主体に石英・長石、赤色粒を含む。器色は外面が黄褐色、内面が暗褐色を呈する。器面調整は内面がやや雑で、外面及び口唇部には横方向の擦痕が薄くみられ、丁寧である。器壁は9mmを測る。第Ⅳ層の出土。

同図3…図上復元は不可能だが径の小さい器形かと思われる。口縁部の外反は強く、頸部あたりのしまりはみられない。口唇部形態は(t)に属する。器面調整をみると、外面は器面がはがれたような状態になり、内面は外面に比べ丁寧で、縦方向の擦痕が観察される。胎土は中間タイプで、この土器も焼成は良好である。混入物は赤色粒を主体に角閃石、石

英・長石が含まれる。器色は内外面とも黄褐色を呈し、器壁は7.5mmである。第Ⅳ層の出土。

壺形Ⅲ類土器

Ⅲ類に属するものは第29図4の1点のみである。

第29図4…胴部が大きく脹らみ、頸部はわずかにくびれ、口唇部は若干外反する。口径は推定9.6cm。口唇部形態は(チ)に属する。外面の器面調整はナテのあとに擦痕を施し、全体に横方向となっている。擦痕をみると6mm幅のヘラ状工具を使用したと思われる。内面は外面に比べ雑で擦痕もあまりみられず部分的に指頭圧痕が残る。胎土は泥質で焼成は良好。混入物には角閃石を主体として石英・長石、赤色粒がみられる。器色は内外面とも暗褐色を呈する。器壁は平均的で7mm。第Ⅳ層の出土。

マリ形土器

マリ形土器は総数4点出土したが、ほとんどが小破片で、図上復元可能な資料は1点のみであった。

第29図5…マリ形土器の中で図上復元可能な資料である。口径は推定13.5cmで、口縁はやや内彎し、胴部に最大径がみられる。口唇部形態は(ニ)に属するが、部分的につぶれている箇所もある。胎土は泥質で焼成は良好だが、内面に若干亀裂がみられる。混入物は角閃石のみ。器色は外面が黒褐色を呈し、内面は黄褐色となっている。外面の器面調整は雑で、指頭圧痕が目立つが、横方向の擦痕が口縁部に若干みられる。それに対し、現存部の内面は全面に擦痕がみられる。器壁は口縁部や胴部あたりは6mmで、破片の中央部分が9mmを測る。第Ⅳ層の出土。

同図6…碗状となるが、同図7に比べ外面にひらく器形である。外面の口縁部はヘラ状工具によって調整され、そのため一段の稜がみられる。内面は縦方向の擦痕が若干見受けられる。口唇部形態は(ニ)に属する。器色は黄褐色を基調とし、外面はやや暗い。胎土は泥質で焼成は良好。混入物に石英・長石を主体として角閃石、サンゴが含まれる。器壁は9mmである。第Ⅳ層の出土。

同図7…同図5とは若干異なり、やや碗状となり、口唇部形態は(ニ)に属する。胎土は砂質で焼成はやや弱く、混入物は石英・長石を主体に角閃石、赤色粒、サンゴを含む。器面調整は内外面とも丁寧なナテである。器色は内外ともに黄褐色を呈し、器壁はやや厚く10mmを測る。第Ⅱ層の出土。

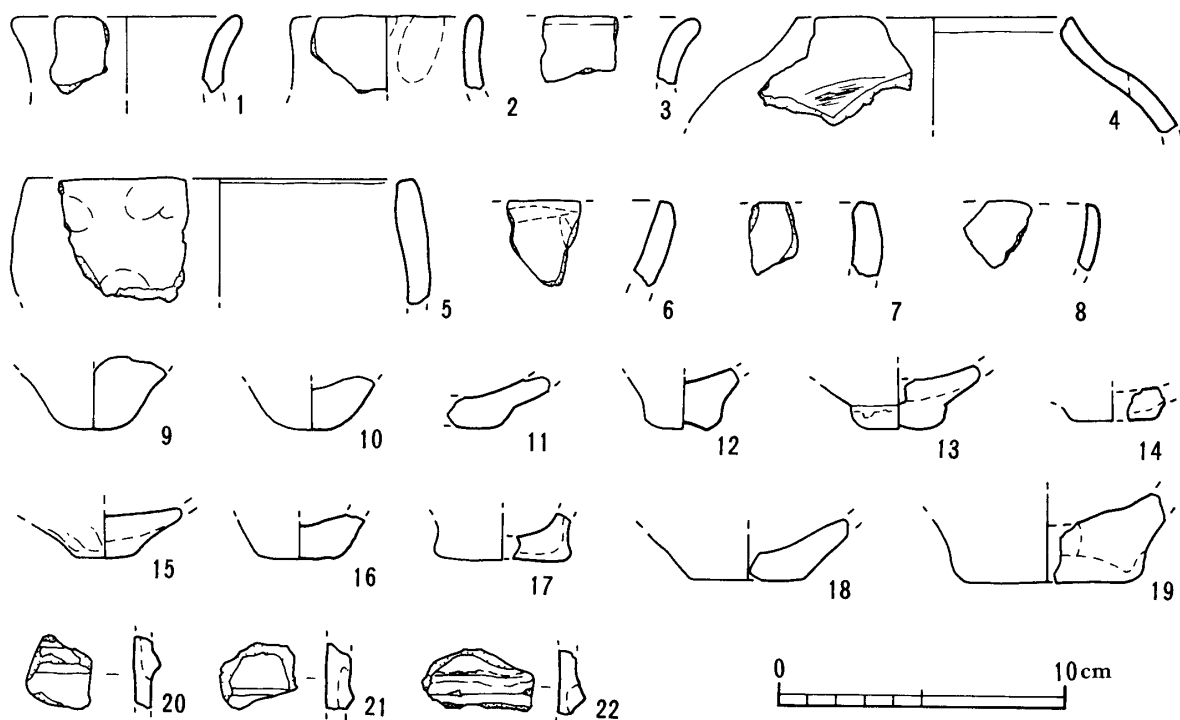
同図8…直線的で口唇部はやや内向する。口唇部形態は(リ)に属する。器面調整は外面が丁寧にナテられている反面、内面は指頭圧痕残り、雑である。胎土は砂質で焼成は同図5より脆く、外面に細かい亀裂が若干みられる。胎土にはサンゴを主体として角閃石、石英・長石が混入される。器色は内外面とも暗褐色を呈し、器壁は5mmを測る。第Ⅳ層の出土。

底 部

底部は総数12点得られ、その内訳は平底6点、尖底2点、乳房状尖底2点である。2点是小破片のため割愛した。胎土・混入物についても口縁部と同様に分類をおこなった。以下、平底・尖底・乳房状尖底の順に記述する。

平 底

第29図14…小破片であるが、図上復元を試みたもので、底径は推定2.8cmである。これも丸底に帯状の粘土を加え平底を作った



第29図 S・T トレンチ出土の土器

もので、弱く外反しながら胴部へ移行すると思われる。胎土は泥質で焼成は良好。混入物は石英・長石を主に角閃石、赤色粒、サンゴが含まれる。器壁の厚さは破損がいちじるしいため不明である。第Ⅱ層の出土。

同図15…図上復元を試みると、底径は小さく、推定2.1cmを測る。同図18と同様、胴部へ大きく開くが、立ち上がりの部分は若干ゆるやかである。胎土は砂質で、焼成は良好。混入物は角閃石を主体として石英・長石が含まれる。器面調整は内外面ともナデで丁寧に調整されているが、外面は指頭圧痕が残る。器色は灰褐色を基調とし、外面は部分的に橙褐色となっている。底面の厚さは15mmである。第Ⅱ層の出土。

同図16…小形の底部で底径は3cmを測る。底面から胴部へゆるい外彎状のカーブを描く。胎土は砂質で、混入物は石英・長石を主体に角閃石を含み、焼成は堅緻である。器面調整

はナデによると思われるが、あまり丁寧ではなく、底面には棒状の圧痕が残っている。器色は内外面とも暗褐色を呈する。底面の厚さは11mm。第Ⅳ層の出土。

同図17…底径は推定4.9cmで、同図19に比べ立ち上がり部は急な外反を示しながら胴部へ移行する。胎土は中間タイプで焼成は良好。混入物は石英・長石を主体に角閃石を含む。器面調整は丁寧なナデ仕上げだが、側面の一部がつぶれている。器色は外面では黄褐色だが、内面は黒褐色を呈する。底部の厚さは9mmを測る。第Ⅳ層の出土。

同図18…底径は推定4cm。底面端から胴部へ大きく開く器形で、器面調整はナデによって丁寧であるが、内面は若干雑である。内外面とも焼成が悪いため、部分的に器面がはがれている。器色は外面が黄褐色で内面は暗褐色を呈する。砂質で、混入物はサンゴを主体に石英・長石が認められる。底面の厚さは

11mm。第Ⅳ層の出土。

尖 底

同図9・3点の中では大形でゆるく内彎しながら胴部へいたる。胎土は砂質で、もろく、器面はざらさらする。器面調整はナテと思われるが、部分的にはがれているため、はっきりしない。混入物は石英・長石を主体として角閃石、サンゴが含まれる。器色は外面が赤褐色で、内面は灰褐色を呈する。器壁の厚さは約25mmである。第Ⅲ層の出土。

同図10・丸底に近い尖底であるが、破損がいちじるしい。胎土は中間タイプに属し、焼成は良好である。混入物は赤色粒を主体に石英・長石、角閃石が含まれる。器色は外面が橙褐色、内面が灰褐色を呈する。器面調整は内外面ともナテが施されているが、内面はやや雑である。底面の厚さは13mmを測る。第Ⅱ層の出土。

乳房状尖底

同図12・底部は約2.7cmで、底面が凹状にくぼむものである。立ち上がりからゆるやかに胴部へいたる。器面調整はナデによってやや丁寧に施されるが、側面は若干器面がはがれた状態となっている。胎土は砂質で、焼成はもろくざらさらしている。混入物は角閃石を主体に・石英・長石、サンゴが含まれる。器色は内外面とも黄褐色を呈する。器面の厚さはくぼんだ箇所13mmを測る。第Ⅱ層の出土。

同図13・図上復元可能な資料で底径は推定3.3cmである。丸底に粘土を加えて乳房状尖底を形作っており、同図11に比べ側面の稜がはっきり観察される。これも胴部への移行がゆるやかである。器面調整は外面をみると、ヘラによって丁寧に調整されているが、

粘土の接合部分も見受けられる。胎土は中間タイプで、焼成は堅緻である。混入物は角閃石を主体として石英・長石がみられる。器色は黄褐色を基調とし、底面が赤褐色を呈する。底面の厚さは18mm。第Ⅱ層の出土。

移入土器

胴部は総数2418点得られた(第28表)。その中で移入と思われる土器が8点含まれ、その中の3点(第29図20~22)は断面三角の凸帯が施されている。もう一点は大形の平底(第29図19)である。

第29図21・胎土は砂質に属するが、他の2点と異なりやや粗く、焼成は良好。外面の器面調整は横方向の擦痕で、浅く丁寧に施されている。内面は外面とは対症的に雑な仕上げとなっている。胎土には石英・長石を主体として角閃石、サンゴが含まれる。器色は内外面とも淡黄褐色であるが、内面に暗褐色を呈する部分もみられる。器壁は8~10mmを測る。第Ⅱ層の出土。

同図20・22・移入と思われる胴部破片である。胎土は砂質に属し、焼成は良好である。器面調整は内外面とも丁寧なナデであるが、同図22は断面三角形凸帯の接合部分あたりが完全に消されておらず雑な感じを受ける。2点とも器色は内外面とも赤褐色を呈する。混入物は石英・長石を主体に角閃石、サンゴ、金色の雲母などである。器壁は同図22が6~10mmで、同図20は6~9mmを測る。2点とも第Ⅱ層の出土。

第29図19・底径は推定6.6cmの大形の平底で移入土器である。円盤状の粘土板の周辺に粘土を加えて形成している。立ち上がり部分は弱く内彎し、内面の中央は剥落し、浅い凹面をつくる。胎土は砂質で焼成は良好。混

入物は石英・長石を主体に角閃石、赤色粒を含む。器面は著しく摩耗し、そのため器面調整の方法等は知りえない。器色は内外面とも灰褐色を呈する。底部の厚さは21mm。第Ⅱ層の出土。

石 器

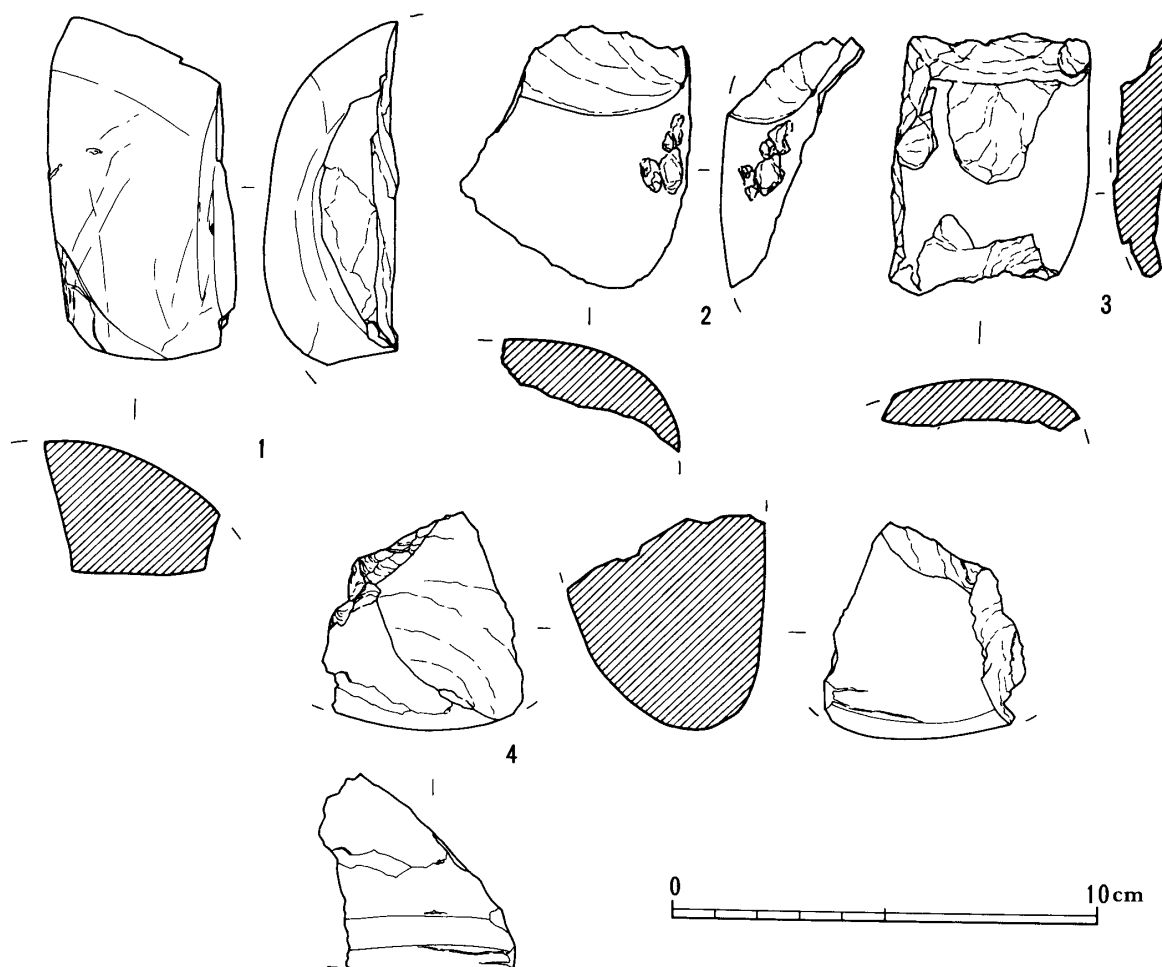
石器は4点得られた。全て小破片であるが、磨面の特徴から磨石と考えられるものである。

第30図1は破損のいちじるしいもので、現存部の表面は光沢を有するほど磨かれていいる。磨面のカーブの状況からすると、やや大型の丸味のある形態が推察される。重量は140g。石質は嘉陽層の砂岩で、第Ⅲ層の出土である。

同図2…同図3と同様、表面及び側面の一部を残すものである。他の3点の資料に比べ磨面は不良である。原形は石けん状になると思われる。石質は砂岩で、重量は55gである。第Ⅰ層の出土。

同図3も前者と同じく、表面及び側面の一部を残す。破損がいちじるしく、器面の残る部分が少ない。しかし、器面は全体的によく磨かれ、光沢を有する部分もある。原形は石斧の可能性が大きい。重量50g。石質は輝緑岩で、第Ⅲ層より出土する。

同図4…3面の研磨は良好で、全面光沢を有する。特に側面には上下の幅約1cmの稜がわずかに確認できる。最大厚5.4cm。重量110gで石質は粗粒玄武岩の変成したものである。第Ⅱ層の出土。



第30図 S・T トレンチ出土の石器

貝 製 品

貝製品は総数 8 点検出された。これらは用途によって実用品と装飾品に大別でき、前者が 7 点、後者が 1 点である。

装飾品

貝輪（第 31 図 1）

第 31 図 1 はイモガイ（アンボンクロザメ）の螺塔部付近の体層部を横切りにしたものである。螺かい部と頭部をとりのぞいているが、螺かい部は完全に除去されておらず一部を残している。体層部から螺塔部にいたる肩は角張り、研磨が施される。研磨は数回にわたっておこなわれているため、タイアモントカット状に多面体を作りだし、そのため研磨部の形状は一定しない。本標品は未製品の段階で放棄されたものと考えられる。

外径推定 3.8cm、幅 2.9cm、重量 40g を測る。第 I 層より検出された。

実用品

二等辺三角形形状製品（第 31 図 2）

同図 2 はクロチョウカイをもちい、現存部

の長さ 3.6cm、最大幅 2.2cm、厚さ約 2mm、重量約 3g の未製品で、先端を欠く。ほぼ二等辺三角形を呈し、一方の側面は刃を研ぎ出した形跡があり、鏃の未製品の可能性がある。粗孔を穿つが、研磨は認められない。第 IV 層の出土。

貝製利器（第 31 図 4）

第 31 図 4 はホラカイ系の殻軸の先端部（図の下端）を両面から研磨したもので、刃部は破損し、摩耗している。磨面は表裏とも横位の擦痕が著しい。重量は 45g、長さ 9.4 cm で、第 II 層からの出土である。

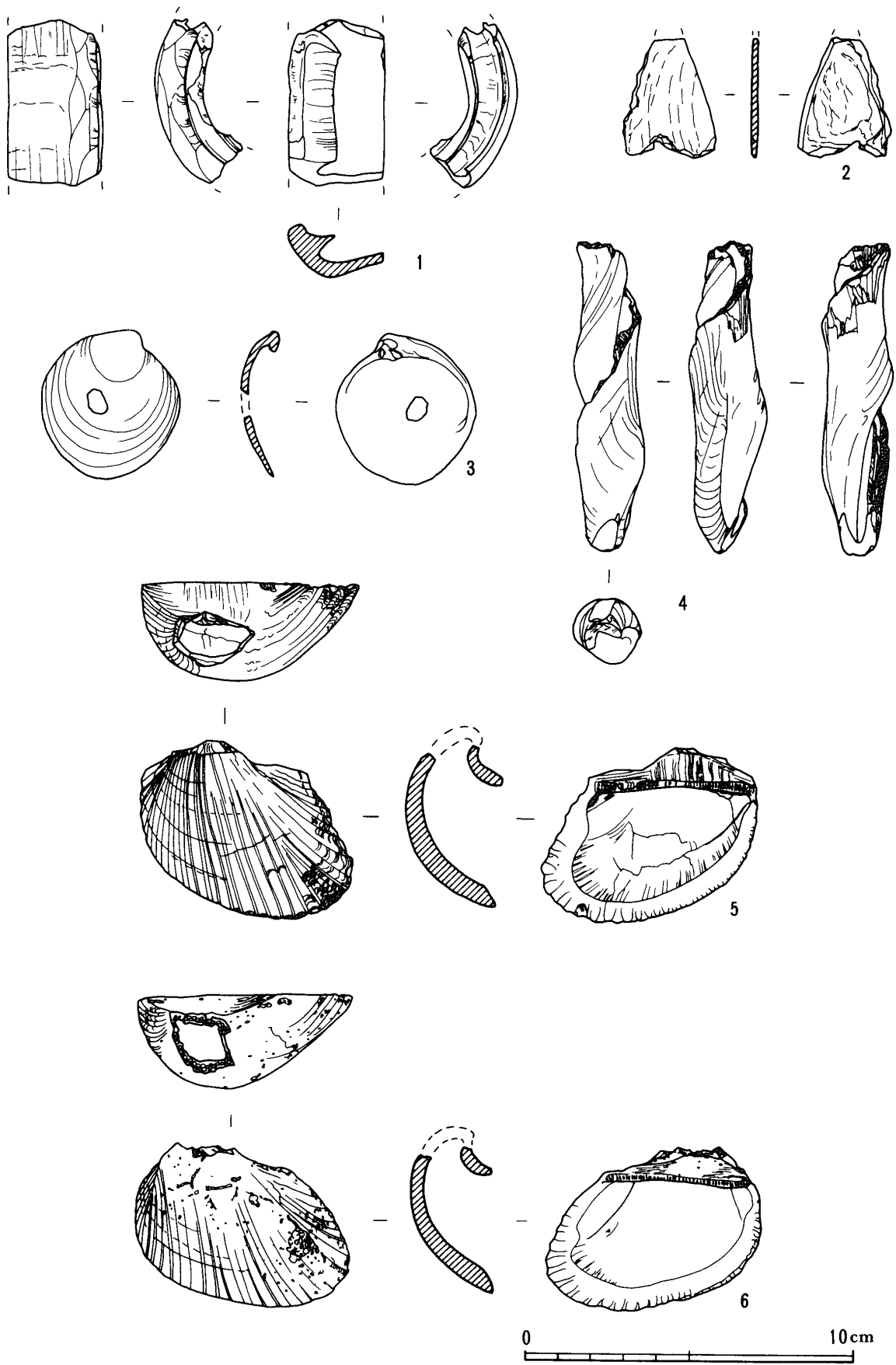
貝錘（第 31 図 3・5・6、第 32 図 1）

本区において 4 点出土しており、いずれも粗孔を一個有するものである。第 31 図 3 は背面部に、穿孔しており、他は殻頂部である。孔は 3 点とも内側からあけられている。

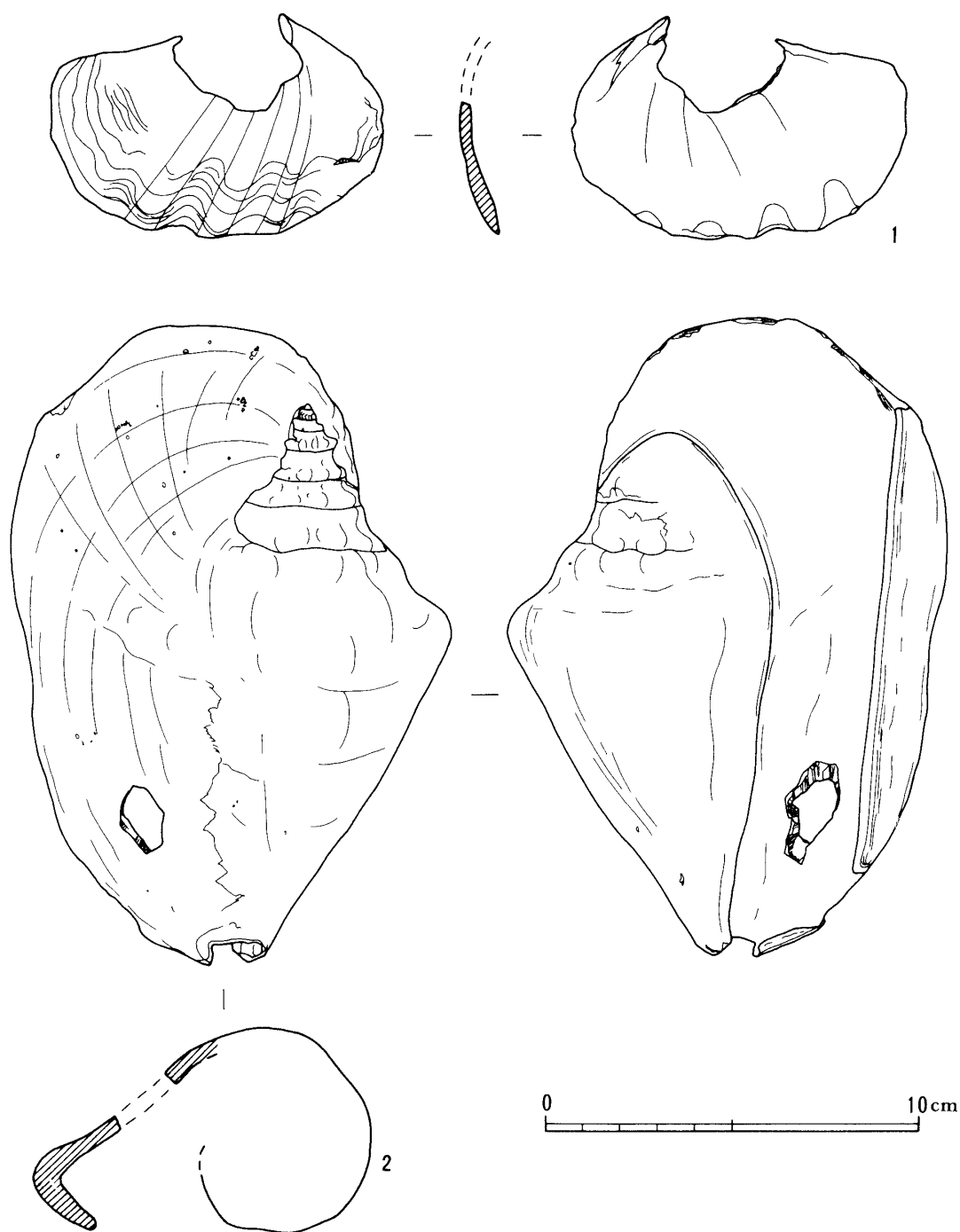
第 31 図 5・6 はリュウキュウサルボウ、第 32 図 1 はヒメシャコ、第 31 図 3 はオキシシミである。4 点とも腹縁部の加工はみられない。詳細は第 29 表に示した。

図番号	出 土 地 ク リ ッ ト 層	貝 種	左右殻	孔 (cm) 縦 横	重 量 (g)	備 考
第 31 図 3	Ⅱ	オキシシミ	右	0.8 0.6	5.96	孔はやや円形 割れが新しい
5	I	リュウキュウ サルボウ	右	1 2.3	54	孔は雑てやや 方形
6	Ⅲ	リュウキュウ サルボウ	右	1.2 1.9	31	風化がいちじ るしい 孔は方形
第 32 図 1	Ⅲ	ヒメシャコ	左	— 3.3	40	磨耗がいちじ るしい

第 29 表 S・T トレンチの貝錘一覧



第31図 S・Tトレンチ出土の貝製品



第32図 S・T トレンチ出土の貝製品

ゴホウラ有孔製品（第32図2）

本区では第32図2の一点のみである。螺背面の前溝付近に粗孔を有する。孔は長径1.9

cm、短径1.6cmでやや楕円形を呈する。孔は表から穿たれ、他に加工痕は認められない。重量は360gで、第Ⅳ層の出土である。

（金城）

4. 自然遺物

検出された自然遺物は、貝殻・魚骨・獣骨等の動物遺存体のみで、最も多く検出されたのは貝類であった。貝類以外は未同定であるので、本文では貝類についてのみ報告する。

貝 類

貝類の分類は種別にまとめ、棲息地を記号で示した。

個体数の算出は、巻貝の場合は完形貝や殻頂を有する破片については $\frac{2}{3}$ 以上残存しているものを1個体とし、殻頂部の欠損した貝や細片貝に関しては重量のみ記した。また、二枚貝については、左殻と右殻に分け多い方を最少個体数とした。

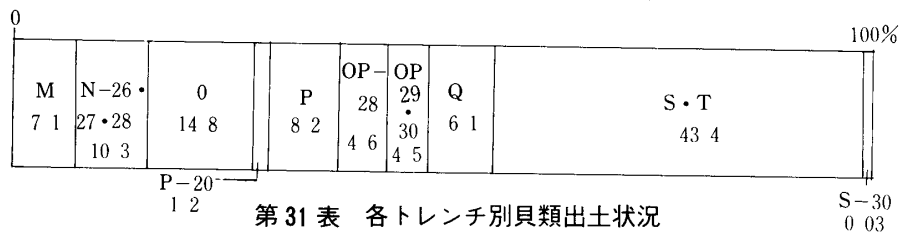
貝類の総数は19432個体である。内訳は、

第30表に示したとおりで、各グリット・各層位ごとに集計した。トレンチ別には第31表のようになり、S・Tトレンチの出土が最も多い。

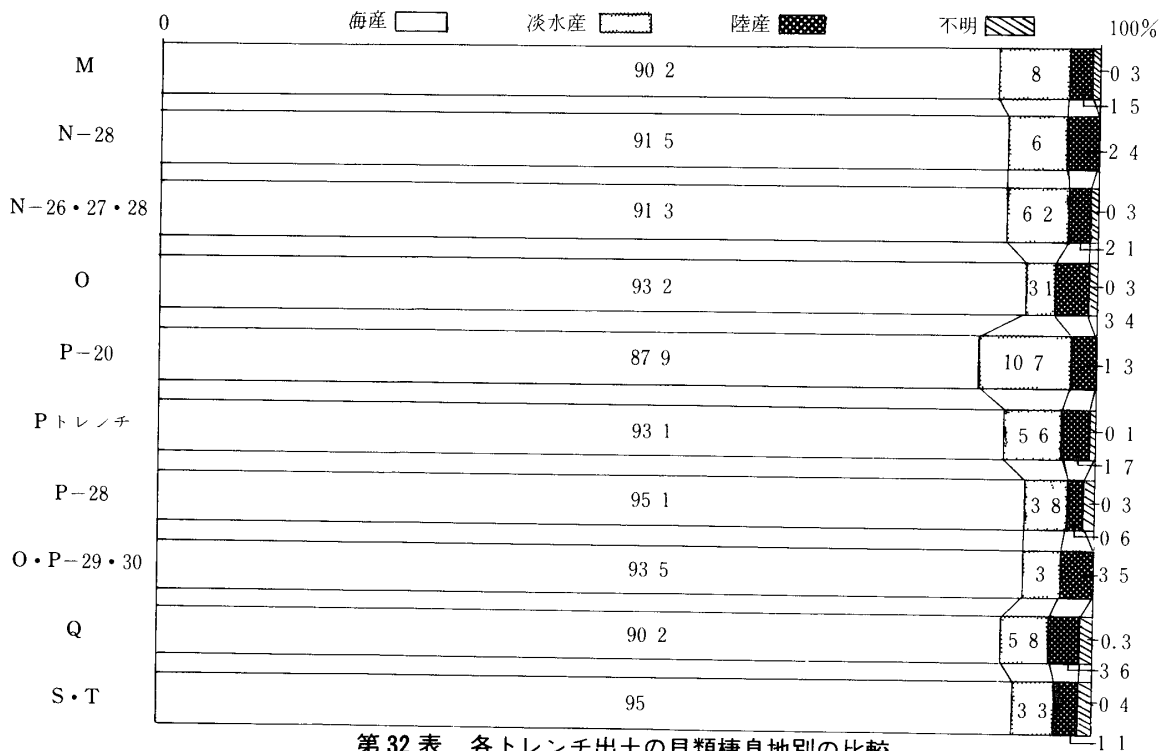
分類した結果、貝類の内訳は、海産貝107種(92.8%)、淡水産貝8種(4.5%)、陸産貝2種(2.3%)種不明の貝は5科(0.3%)となっている。また、腹足綱と斧足綱では前者が32.4%、後者が67.6%と、圧倒的に斧足綱が多い。

層序別には、ほとんどの貝種がⅡ層に集中してみられたのに対し、Ⅳ層ではチトセボラが94%を占めていた。

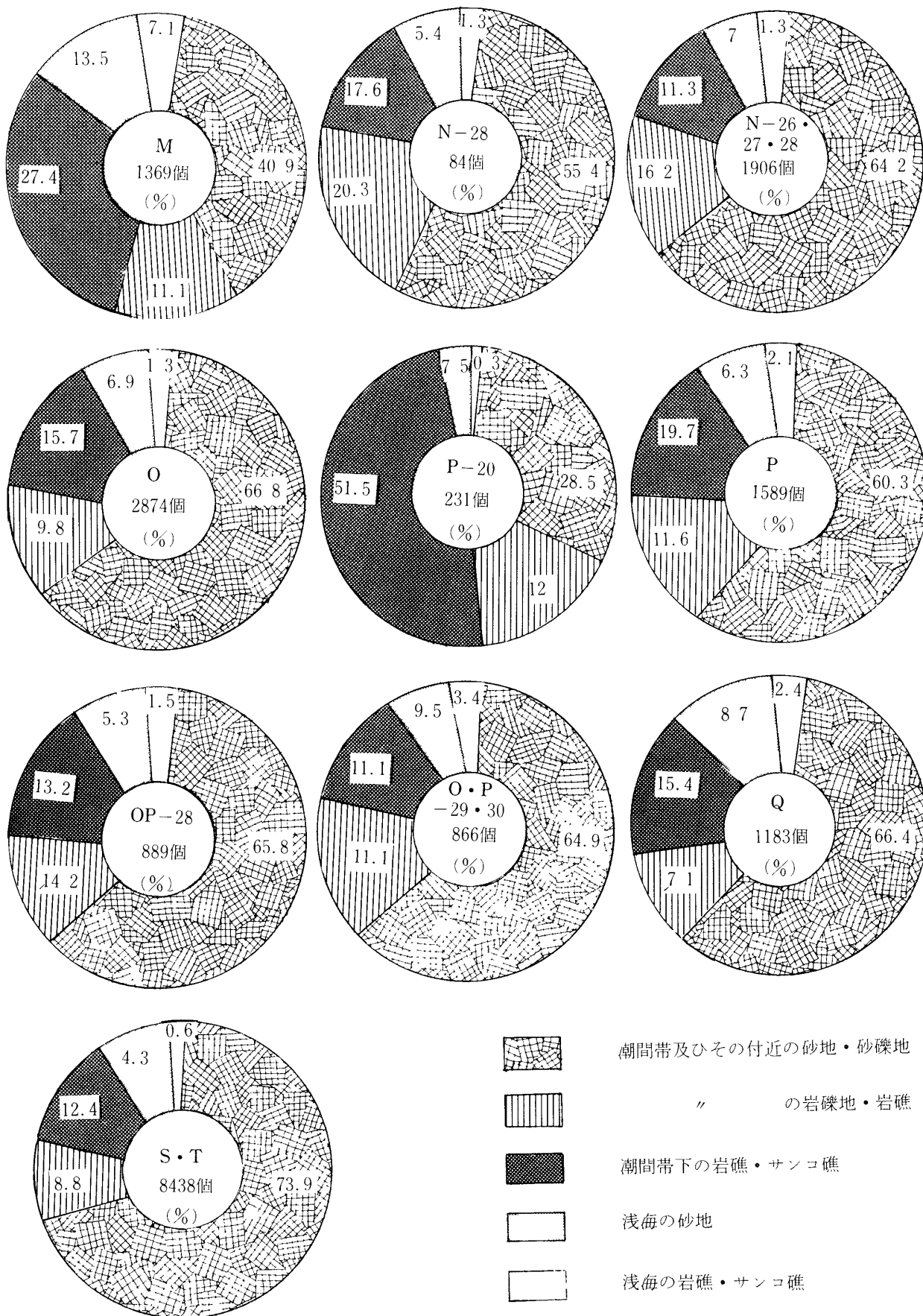
棲息地別にみると、各グリットの全体的な出方は第32表のようになっている。陸産貝



第31表 各トレンチ別貝類出土状況



第32表 各トレンチ出土の貝類棲息地別の比較



第 33 表 海産貝棲息地別の比較

はアフリカマイマイ、オキナワヤマタニシの二種のみで、前者はプライマリーな層では出土しておらず、攪乱層のみで見られ、1930年代に沖縄本島に持込まれたことが明らかであり（注1）、層位的出土もそのことをよく示している。後者は全グリットにおいて、層序に関係なく全体的に散見でき、食料とは考えられず何らかの理由で自然堆積したものと思われる。

淡水産貝のなかでは、オキシジミが圧倒的に多く、グリット・層序別にみると、N-26・27・28グリット、S・Tトレンチに多く、また、層序別では、Ⅱ・Ⅲ層に集中する。他の7種類は、貝が小さく、数も219個体と少なく、オキシジミの出土となっており、グリ

ット・層序に関係なく散布していることから、これらは食用と考えるより環境との関わりが強いように思われる。

貝類の中で、主体となる海産貝は海岸地形別にみても第33表のようになる。全体的に潮間帯及びその付近の砂地・砂礫地からの採取が多いが、特に後者との関わりが強い。貝種をみると、第34表でもわかるように、イソハマグリやマガキガイなど比較的採取しやすい貝が圧倒的で、なかにはホラガイのような深海の貝もみられる。

本遺跡は後原川をはじめ湧泉はシーナガー、クンカーなど多くの河川にめぐまれているにもかかわらず、淡水産貝は、数種類のみで、数にしても、多いものでオキシジミが832

層 序 貝 種	層 序					全体数 (個)
	I 層 個 (%)	II 層 個 (%)	III 層 個 (%)	IV 層 個 (%)	V 層 個 (%)	
イソハマグリ	1033 (12.9)	5088 (63.4)	943 (11.7)	928 (11.6)	22 (0.3)	8014
マガキガイ	803 (31.2)	1431 (55.6)	268 (10.4)	28 (1.08)	41 (1.6)	2571
オキシジミ	103 (12.4)	566 (68)	75 (9)	82 (9.9)	6 (0.7)	832
シレナシミ	76 (11.6)	404 (62.3)	83 (12.7)	76 (12)	9 (1.4)	648
ヒメシヤコ	86 (16.2)	342 (64.5)	52 (9.8)	43 (8.1)	7 (1.3)	530
ホラガイ	2 (0.4)	484 (98.7)	2 (0.4)	3 (0.5)	0	491
オキナワヤマタニシ	42 (10)	274 (65.3)	57 (13.5)	45 (10.7)	2 (0.5)	420
スタレモノ	76 (20.5)	205 (53.8)	43 (10.4)	55 (14.4)	2 (0.5)	381
アラスシケマンカイ	73 (20.2)	201 (52.4)	36 (9.8)	56 (15)	6 (2.6)	372
シラナミ	53 (16.1)	196 (59.6)	46 (13.9)	31 (9.4)	3 (0.9)	329
サラサハティ	64 (21)	169 (55.4)	37 (12.1)	35 (11.5)	0	305
ヒレシヤコ	41 (16.6)	138 (55.9)	33 (13.4)	30 (12.1)	5 (2.02)	247
リュウキュウサルカイ	12 (5.3)	49 (21.6)	56 (24.7)	87 (38.3)	23 (10.1)	227
	2464 (16)	9547 (62.1)	1731 (12.8)	1499 (9.8)	126 (0.8)	15367

第34表 貝種別出土状況

個体という少なさである。このことから本遺跡は淡水産貝の依存度は低く、海産貝の依存度が高いといえよう。

地荒原貝塚（注2）、ナガラ原西貝塚（注3）、古座間味貝塚（注4）、宇堅貝塚群・アカシャンカー貝塚（注5）などから出土する貝類と本遺跡の貝類の出方を比較してみたところ（資料は省略）、貝はいずれにおいても多種多様だが、総じていえば海産貝の個体数が上位を占める特徴がある。（金城）

註

- 註1 沖縄タイムス社 『沖縄大百科事典』（上巻） 1983年
- 註2 沖縄県・具志川市教育委員会 『地荒原貝塚－個人住宅建築工事に係る発掘調査報告－』 1986年3月
- 註3 伊江村教育委員会 『ナガラ原西貝塚緊急調査報告書』 1979年
- 註4 沖縄県教育委員会 沖縄県文化財調査報告書第43集 『古座間味貝塚範囲確認調査報告書』 1982年3月
- 註5 沖縄県具志川市教育委員会 『宇堅貝塚群・アカシャンカー貝塚発掘調査報告書』 1980年3月

参考文献

- 白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』1977年 新星図書。
- 波部忠重・小管貞男共著、標準原色図鑑全集3『貝』1981年 保育社。
- 平田義浩・仲宗根幸男・諸喜田茂充共著『沖縄の貝・カニ・エビ』昭和48年 風土記社

ま と め

宇地泊兼久原遺跡は数メートルの石灰岩段丘を背後にもち、南斜面の海岸砂地に形成された低地遺跡である。

1984年、1985年の2次にわたる発掘調査の結果、遺跡の大部分が採砂やその他の開発で消失、残存部でも上部層が削除されたり、周辺は著しく変貌していたが、O・P・Qトレンチ、S・Tトレンチでは幸い、プライマリーな包含層を確認することができた。O・P・Qトレンチの第Ⅱ層、S・Tトレンチの第Ⅱ層、第Ⅲ層（覆土、Ⅰ）、第Ⅳ層（覆土、Ⅱ）がこれにあたり、単一の文化層であることが判明した。また、層位や覆土の上下関係から、土器の前後関係がみとめられた。

O・P・Qトレンチの第Ⅱ層では、中央部の全面に大型貝殻の集中する拡がりが見られ、その貝殻散布面を基準に分層が可能であり、土器においても同様な差異が見られた。S・Tトレンチの遺構内においては、2枚の覆土を確認することができた。

遺構については、P・Qトレンチの中央部に径約1mほどの不整形の落込みや、南西隅に数個のピットが確認されたが、遺物の出土もなく、性格を特定するにいたらなかった。S・Tトレンチでは、東側の畦を軸として径約4mほどの半円形のプランが、ややずれた状態で、二重の重なりが確認された。落込みのプランやピットの配置、東壁面にみられる基盤層の黄褐色砂層を掘込んだラインや柱穴ピット、さらに、覆土の中央部下面にみられる数ミリの薄い粘土層などから、円形竪穴住居址の可能性が高いと考えられるが、畦以東側のプランの確認をまって、再考したい。

自然遺物は貝殻、獣骨、魚骨の動物遺存体のみであり、その内、貝殻が主体であった。

貝は海産貝が主流であり、潮間帯の砂礫地や砂地からの採集が多く、なかでも砂礫地への依存度の強いことが判明した。このことはリーフ内（イノー）の貝種が捕食の対象であることを推知させ、その行動の一端をかいま見ることができる。

人工遺物では土器、石器、貝製品の出土がみられたが、土器が最も多く、総数6453点を数え、貝製品は未製品を含め30点、石器は9点と極めて少なかった。

土器は一見、混在しているように見受けられたが、土器の一部にみられる貼り付け突帯の弥生土器は総て、攪乱部や第Ⅰ層からの出土であり、プライマリーな包含層とは一線を引くことができ、区別できた。

O・P・QトレンチやS・Tトレンチのプライマリーな層では、おおまかな土器の傾向をつかむことができた（第2表）。これらを元に、土器を器形、器種、胎土やテンパーなど個別的に分類し、相互の関係を組み立てた結果、以下のことが明らかになった。

当遺跡出土土器の特徴の一つである胎土は、砂質5201点（80.5%）、中間タイプ601点（9.3%）、泥質651点（10%）と、圧倒的に砂質の鉋物を含む土器の多いことがわかる。胎土は砂質で全体の80%を占め、石英・長石や角閃石などの細かな鉋物を混和材に用いる資料は浜屋原遺跡・古座間味貝塚などを始め、十数箇所の遺跡で知られているものの、宇佐浜式期以前の土器には見られないものであり、砂丘遺跡のこの時期から在地化するものと考えられる。

器種では口縁部229点の内、鉢形が88.2%、マリ形は5.7%、壺は6.1%であり、鉢形はさらに鉢Ⅰ類（17.1%）、鉢Ⅱ類（18.3%）、鉢

Ⅲ類 (50.2%) 浅鉢 (2.6%) に分類される。土器は鉢を主体に浅鉢、マリ形、壺の器種のセットがみられ、しかも、口縁部から肩部にかけての屈曲部をもつ鉢形Ⅰ・Ⅱ類の特徴は、縄文晩期の土器の特質を保持している。なかでも、第12図1や第16図1の土器は九州縄文晩期の黒川式土器の概念でとらえることができるものである、との所見を熊本県文化課の島津義明氏からいただき、第17図11の口縁部下に穴を穿ったマリ形土器の技法は孔列土器であろうとの見解を北九州市歴史博物館の武末純一氏からいただいた。また、孔列土器は黒川式土器期に朝鮮半島から搬入し、夜臼式土器期まで西九州に点在するという、示唆に富んだ教えをいただいた。このことは、南九州の縄文晩期終末期の伝播とみなすことができる。

土器の底部をみると、総数41点の内、尖底土器2点、乳房状尖底土器24点、平底15点（平底の内、5点は弥生土器で攪乱部からの出土であり、器壁も厚く、胎土も異なる。）で、乳房状尖底土器が主体をなす。尖底や乳房状尖底土器は九州地方になく、在地の技法かと考えられる。しかし、第19図7・8・11の底部は、底径は5cm前後と小さいものの、円盤貼り付けの技法を用いて形成されており、しかも、第19図7・8は研磨と認めていい技法も見受けられる。

地区別に細かにみていくと（第35表、以下略）、P・Qトレンチ第Ⅱ層の貝殻層中の土器は、前述の鉢Ⅰ類の黒川式土器（67）、浅鉢（70、71）、孔列土器（73）、円盤貼り付け土器（74～76）などで、本遺跡のなかで最も黒川式土器の特徴を保持しているものである。第Ⅱ層上部の土器は、口縁部から頸部にかけての幅の短い鉢に特徴があり、U字状にそり返るもの（54）、口縁部が垂直に立ち上がる

もの（55）、逆ハの字に開くもの（56）など、すべて泥質の土器であり、前記第Ⅱ層の貝殻層中のものに比べると、器形や胎土に変化がみられる。左隣のOトレンチ第Ⅱ層の土器を形式的にみると、同様な様相を呈している。

S・Tトレンチ第Ⅳ層（覆土、Ⅱ）は、（113～116）のようにP・Qトレンチ第Ⅱ層の貝殻層中の土器に類似した手法を保持しているものと、外面は丁寧なナデを施すが、内面は指頭痕を止める調整で手法をもつタイプ（102～112）が新たにみられ、出土量も増加の傾向がみられる。しかも104のように接合面を顕著に残す資料が目につき、同トレンチの第Ⅲ層（覆土、Ⅰ）では一般的となる（96、101）。これらは、砂丘遺跡に出土例がみられる浜屋原Cタイプ土器の出自を暗示するものと考えられ、内面に指頭痕を止める土器群に後続するものと思われる。

形式的にまとめると、O・P・Qトレンチ第Ⅱ層下部（貝殻層）→S・Tトレンチ第Ⅳ層（覆土、Ⅱ）の古式グループ（113～116）、O・P・Qトレンチ第Ⅱ層上部→S・Tトレンチ第Ⅲ層（覆土、Ⅰ）のように、流れを追うことが可能かと考えられる。

ただ、M・Nトレンチの攪乱部の資料のもの（3、8、16、17、19）にはこれまでにないものもあり、特に3のように口縁部に条痕文をもち、しかも頸部に段を形成する古式の土器や、8の口唇部に突起をもつもの、16・17の鉢、19のヘラ研磨により口唇部に方形の肥厚部をもつ全面研磨の壺など、どの位置にあてはまるものか、検討の余地の残る資料もある。

以上のことから、宇地泊兼久原遺跡の土器は、器種のセットや、口縁部から肩部にかけての屈曲部の特徴、器面に研磨を施す技術や鉾物を含む砂質の胎土から、九州の縄文晩期の黒川式土器の特徴を保持しているものと考

えられる。しかし、底部にみられるような尖底あるいは乳房状尖底器形のごとく、在地の特徴も併用している。これらのことから、当遺跡の土器は黒川式土器の南下後、在地の土器との接触により変容したもので、いわゆる黒川式土器の在地土器としてとらえられるものと考えられ、南島に伝播した黒川式土器の終末の一時期として設定が可能かと考えられるが、詳しくは今後、資料の増加を待って再考したい。

石器については、石斧 3 点、磨石 4 点、敲石 2 点と少ない。いずれも P・Q トレンチ、S・T トレンチからの出土である。特に石斧 3 点は P-26 グリット第Ⅱ層の貝殻層中から一括出土したものであり、第 20 図 1～3 がそれにあたる。磨製の撥形石斧、扁平片刃石斧、乳棒状石斧のセットである。これらの石器組成は沖縄先史時代前 V 期の特徴でもあり、宮城島シヌグ堂遺跡や那覇市識名石田遺跡などで知られており、また、九州縄文後・晩期の石器組成でもある。数は極めて少ないものの、セット関係でみた場合、縄文期の特徴を保持していると考えられる。

貝製品は、利器としてイトマキボラ製のノ

ミ状利器 2 点、クロチョウガイ製の貝鏃は 5 点（3 点は未製品）に対し、装飾品はアンボシクロザメの貝輪 5 点、サラサバテイの貝輪 1 点、クロミナシガイ、ウミウサギガイのペンダント各 1 点の計 8 点、容器としてはゴホウラの体層部を用いた皿状器 2 点、未製品 3 点の計 15 点である。

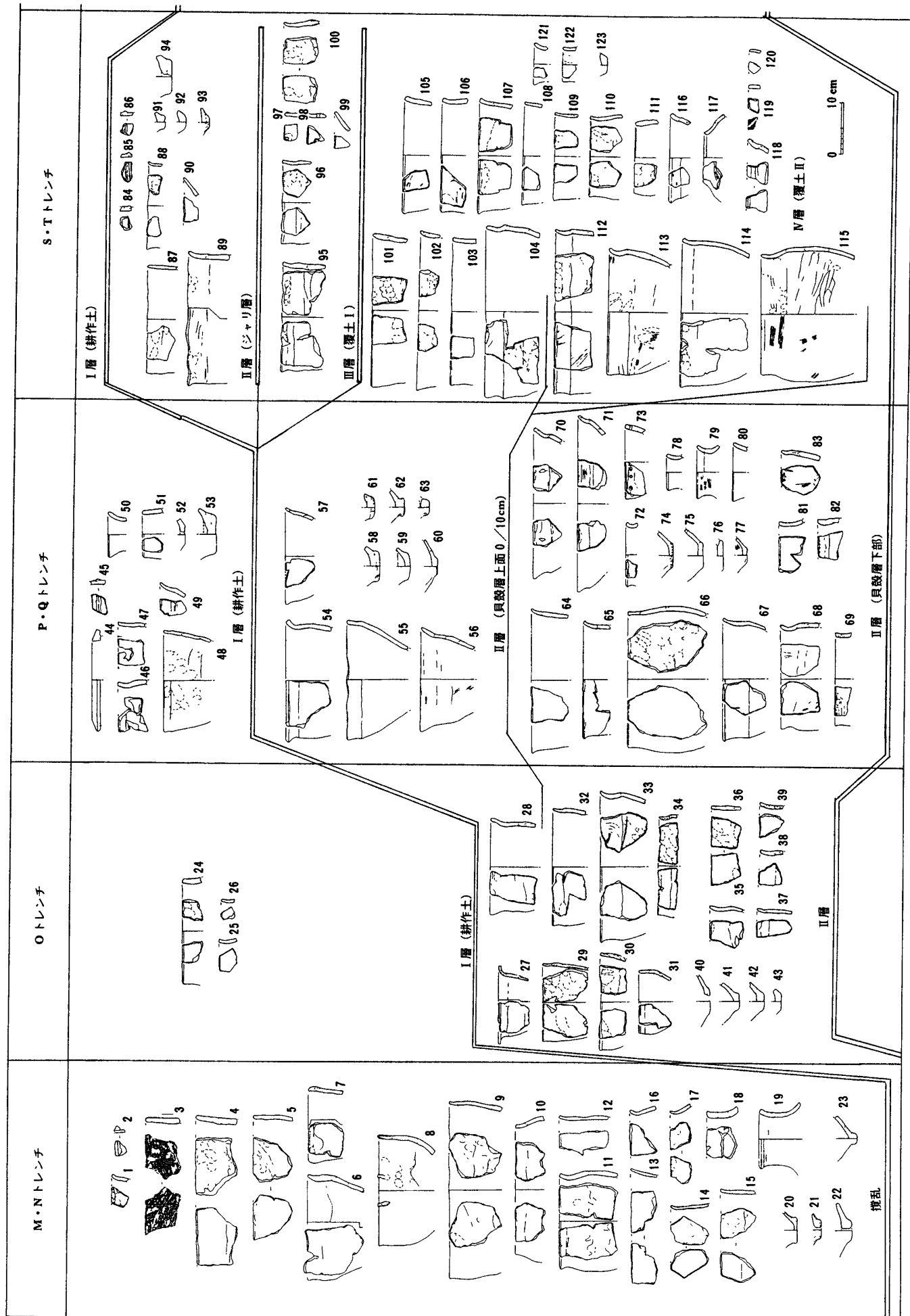
中でも、クロチョウガイ製の貝鏃は第 21 図 3 のように、基部に抉りを入れることから、打製石鏃の模倣と考えられる。また、アンボシクロザメの貝輪や体層部を切断したものの存在などから、貝輪の製作工程を知る手掛かりとなり、類例遺跡をふくめ、沖縄諸島で製作されていたことを示唆する資料として興味深い。

以上のことから、宇地泊兼久原遺跡は砂地に形成された前 V 期の遺跡で、黒川式土器の影響を受けた在地土器の遺跡として判断される。石器組成や貝製品のあり方も、それを補強するであろう。ただ、遺跡の保存状態が悪く、攪乱層から検出された弥生土器が本遺跡とどう関りあうか、今回は確認できなかったもので、今後の課題としたい。

参考文献

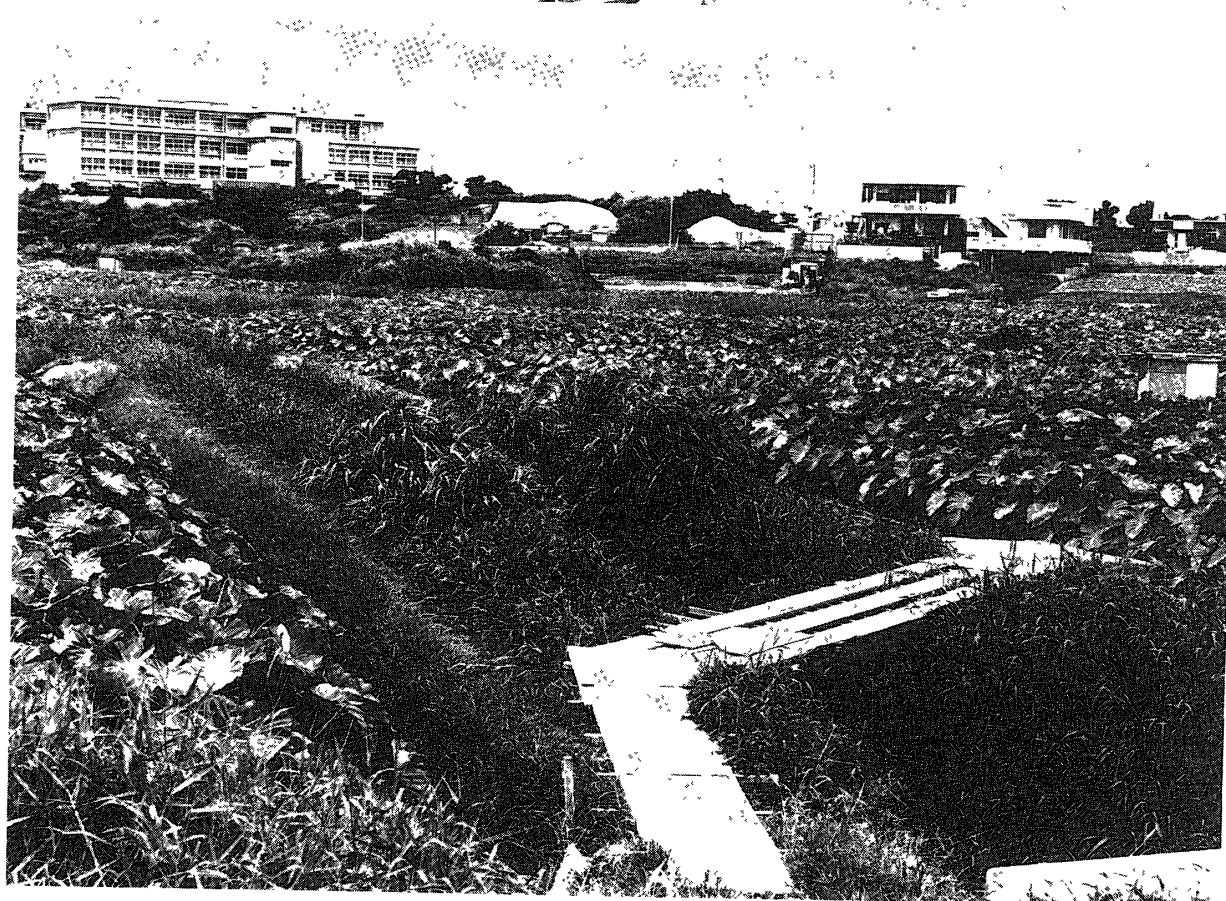
沖縄国際大学考古学研究会 「浜屋原第一・二・三次発掘調査報告書」『島嶼の考古』創刊号 1977 年
沖縄県教育委員会 『古座間味貝塚』 沖縄県文化財調査報告書 第 48 集 1983 年
沖縄県教育委員会 『シヌグ堂遺跡』 沖縄県文化調査報告書 第 67 集 1985 年
高宮廣衛 「石田遺跡」『那覇市史』第 1 巻 1968 年

宮内克己 「磨製石斧小考」『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念論集 同明社 1987 年
高宮廣衛 「城嶽と明刀銭」『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念論集 同明社



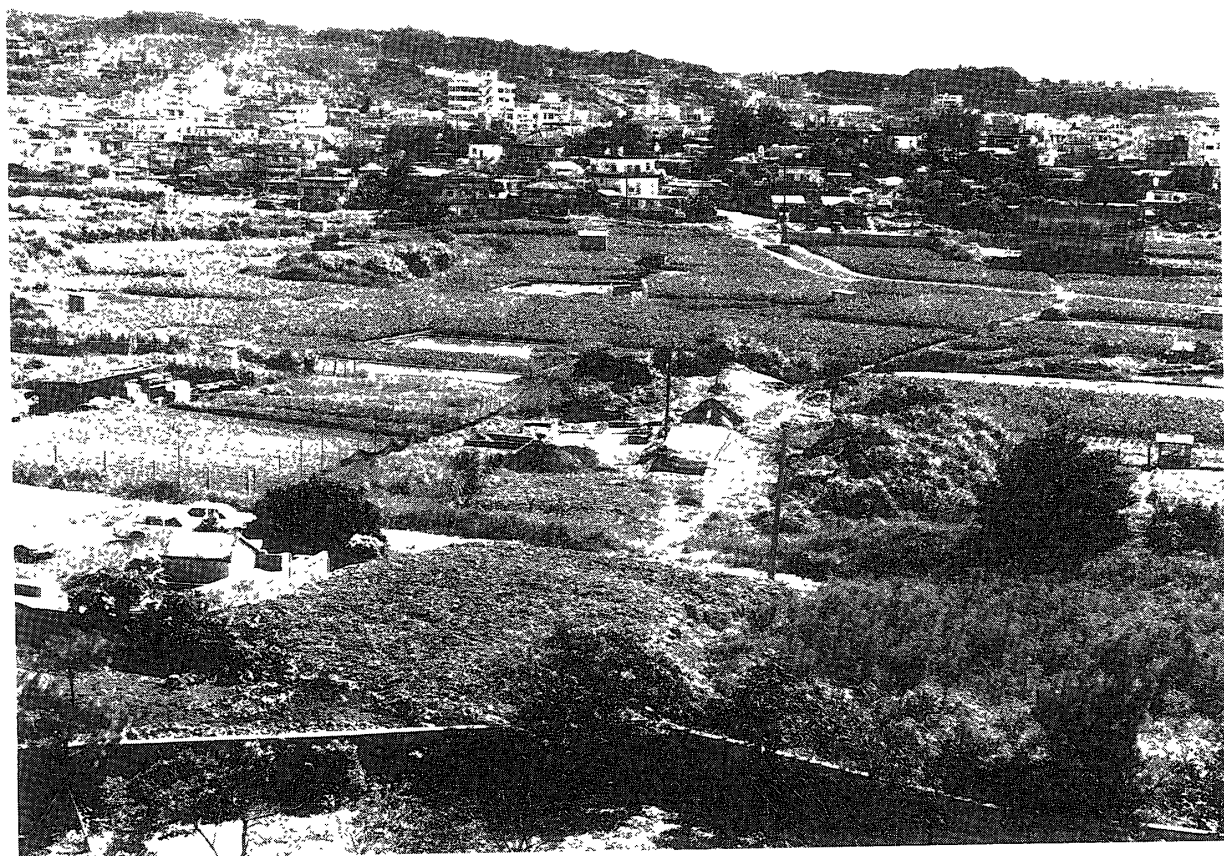
第35表 各グリット土器出土状況と土器変遷概念

版 図



上 宇地泊兼久原遺跡遠景（北側より）

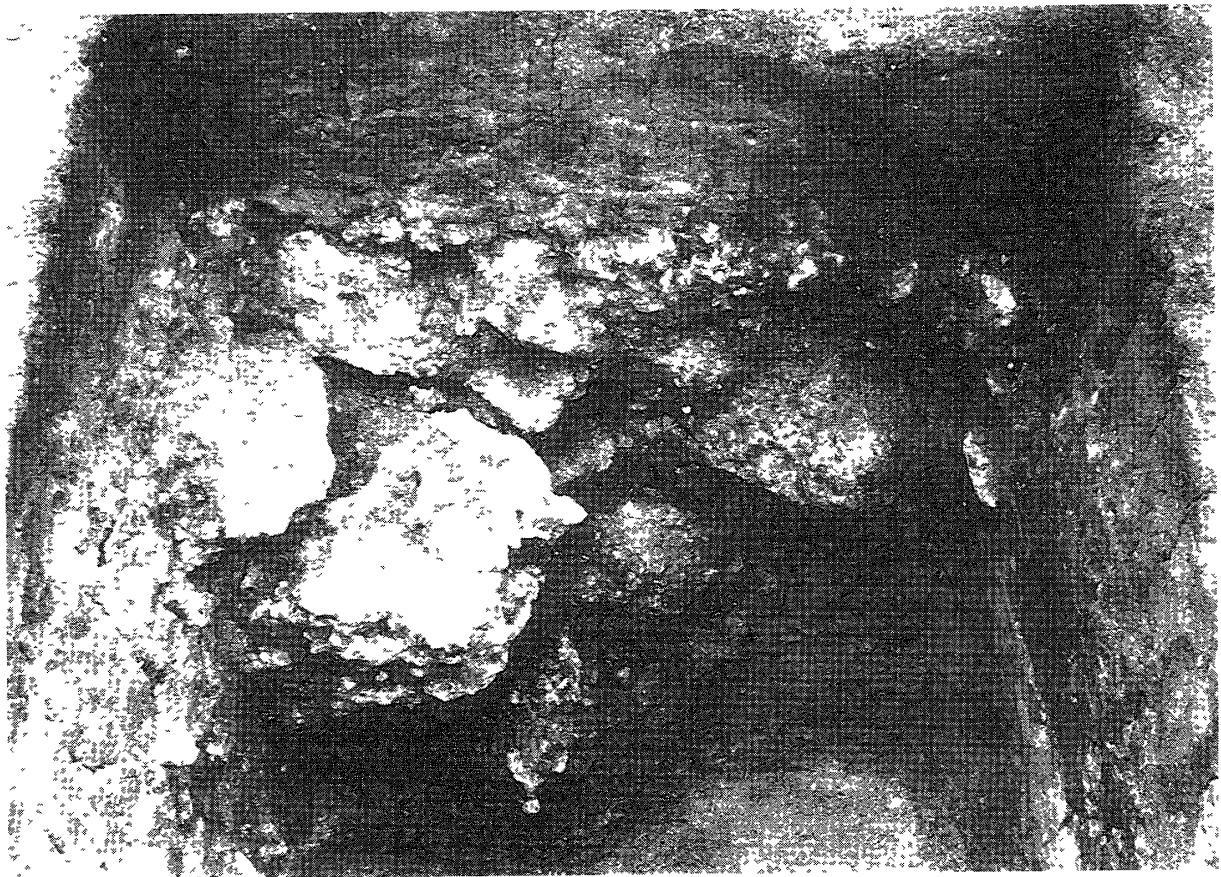
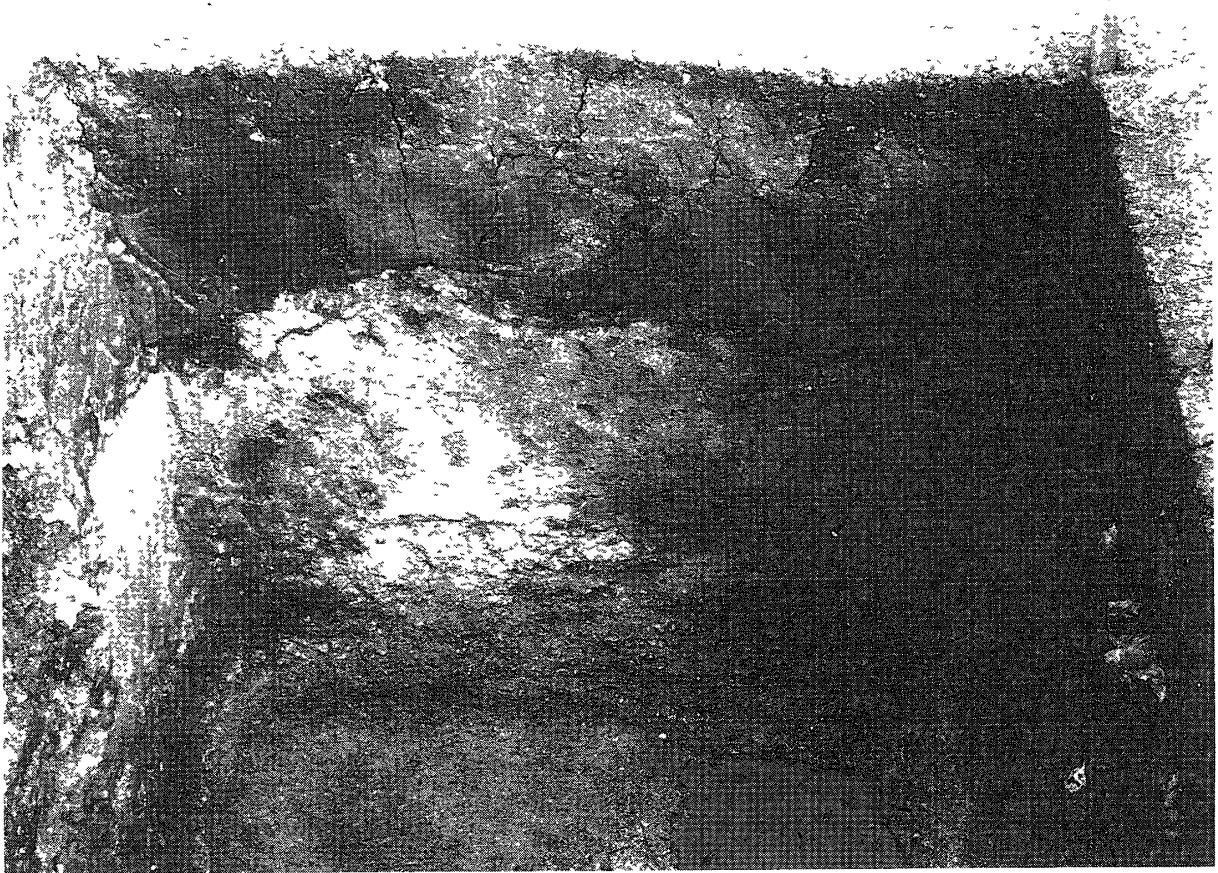
下 宇地泊兼久原遺跡遠景（南側より）



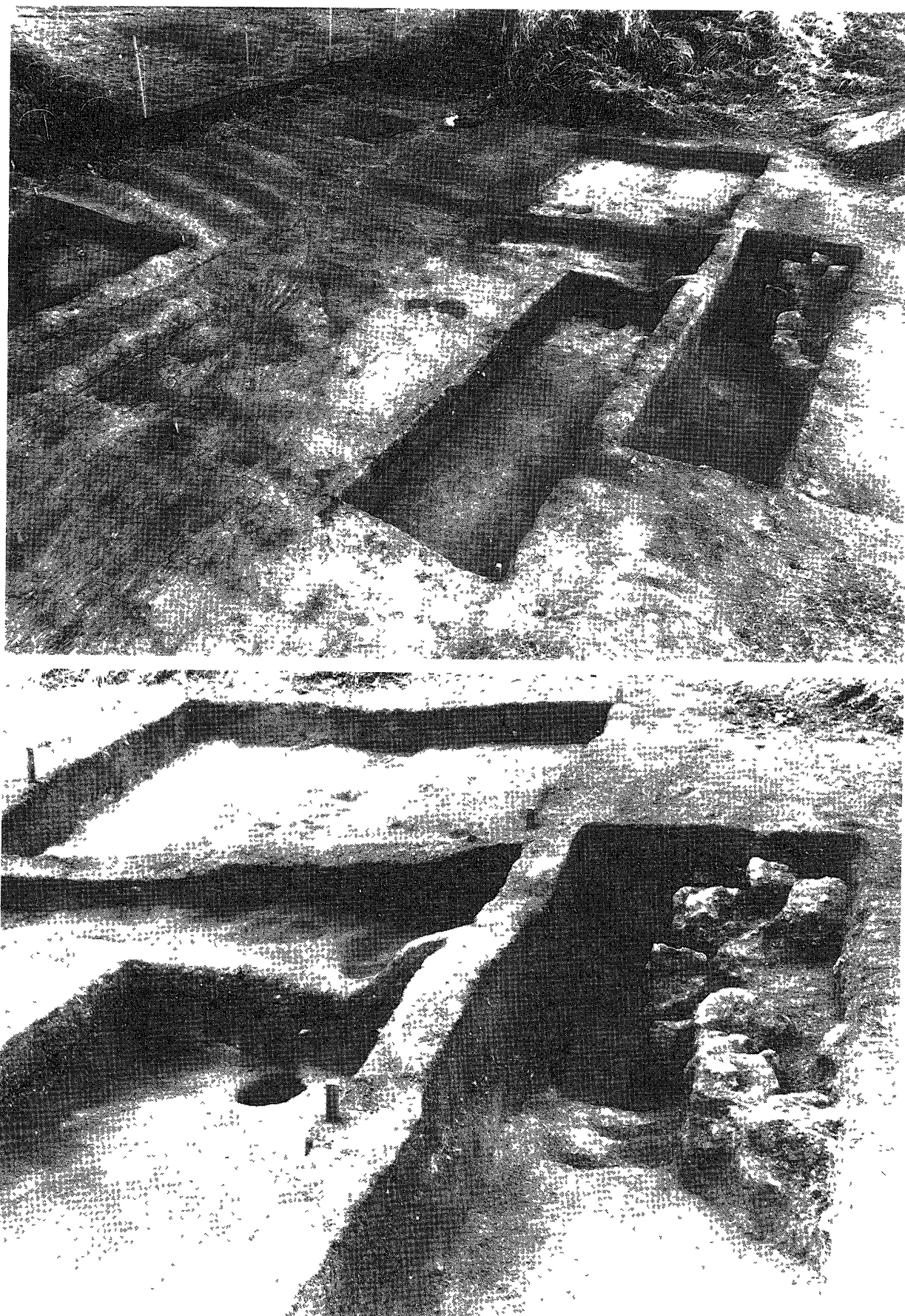
上 宇地泊兼久原遺跡近景（北側より） 下 宇地泊兼久原遺跡近景発掘状況（北側より）



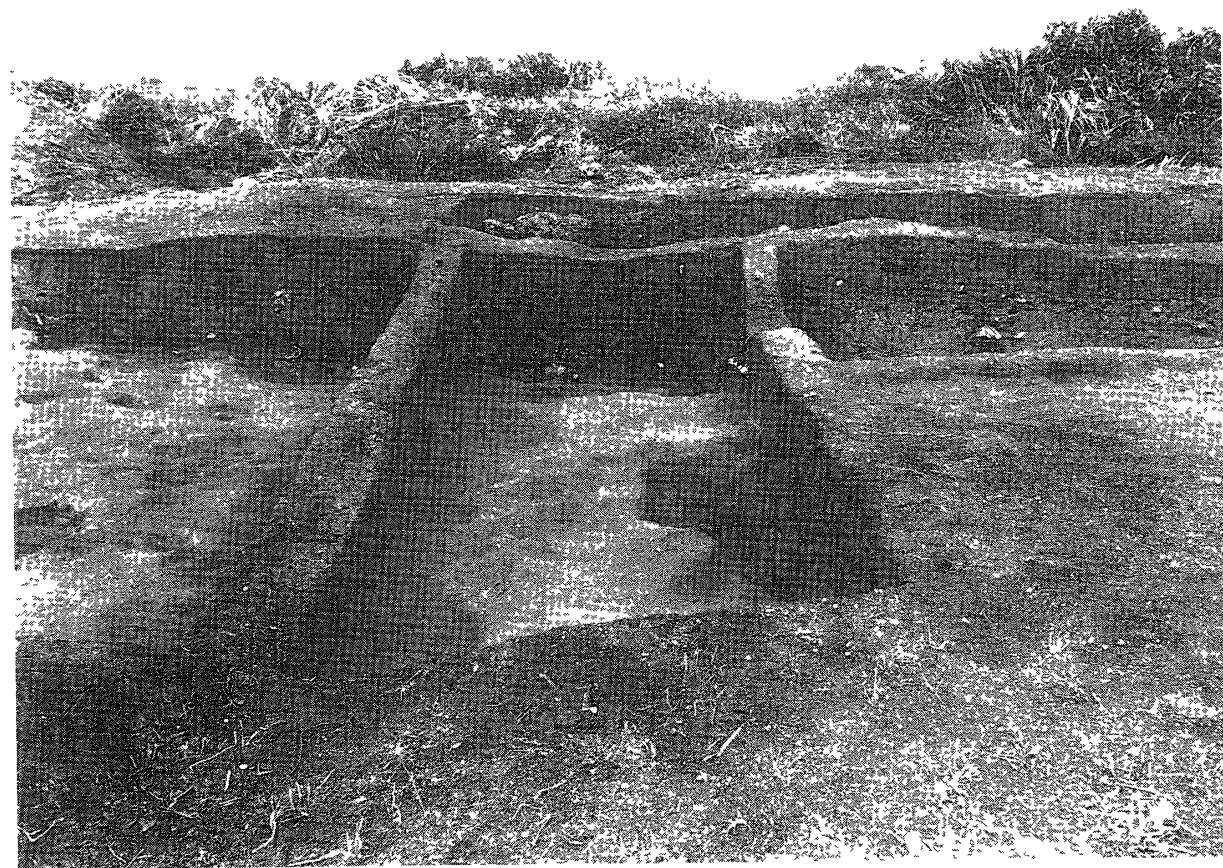
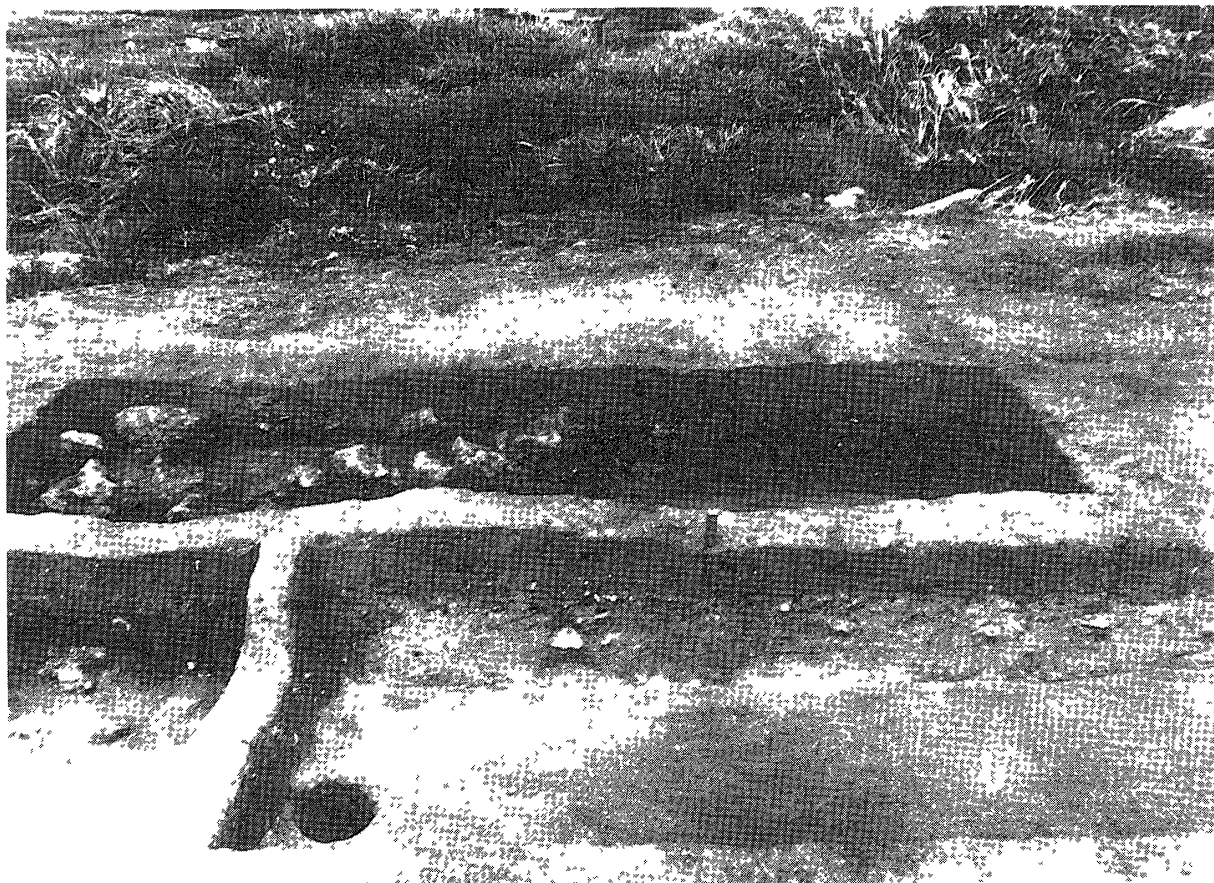
上 宇地泊兼久原遺跡近景（北東側より） 下 伐採後の状況



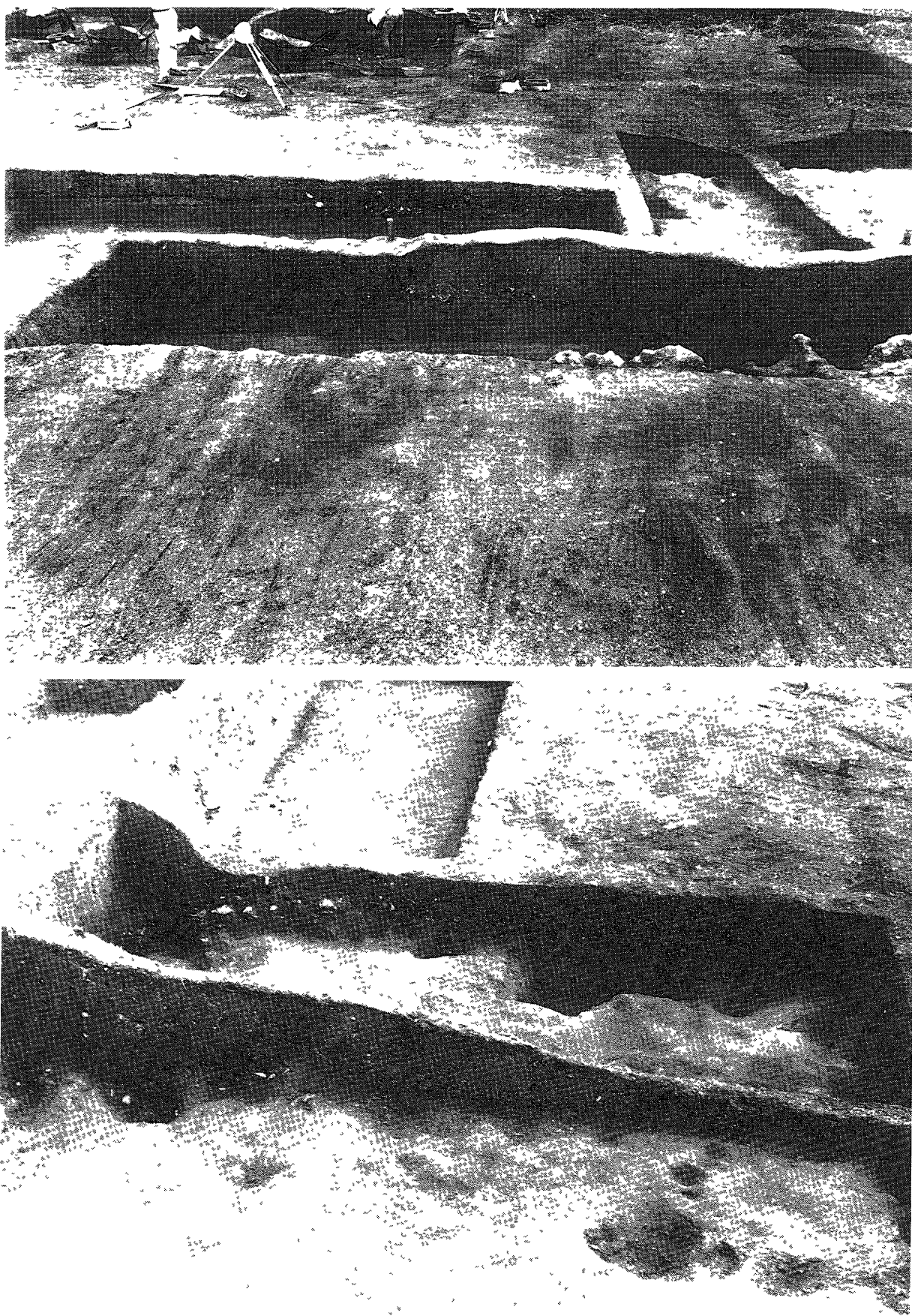
上 M-31 トレンチ東壁面 下 M-33 トレンチ西壁面



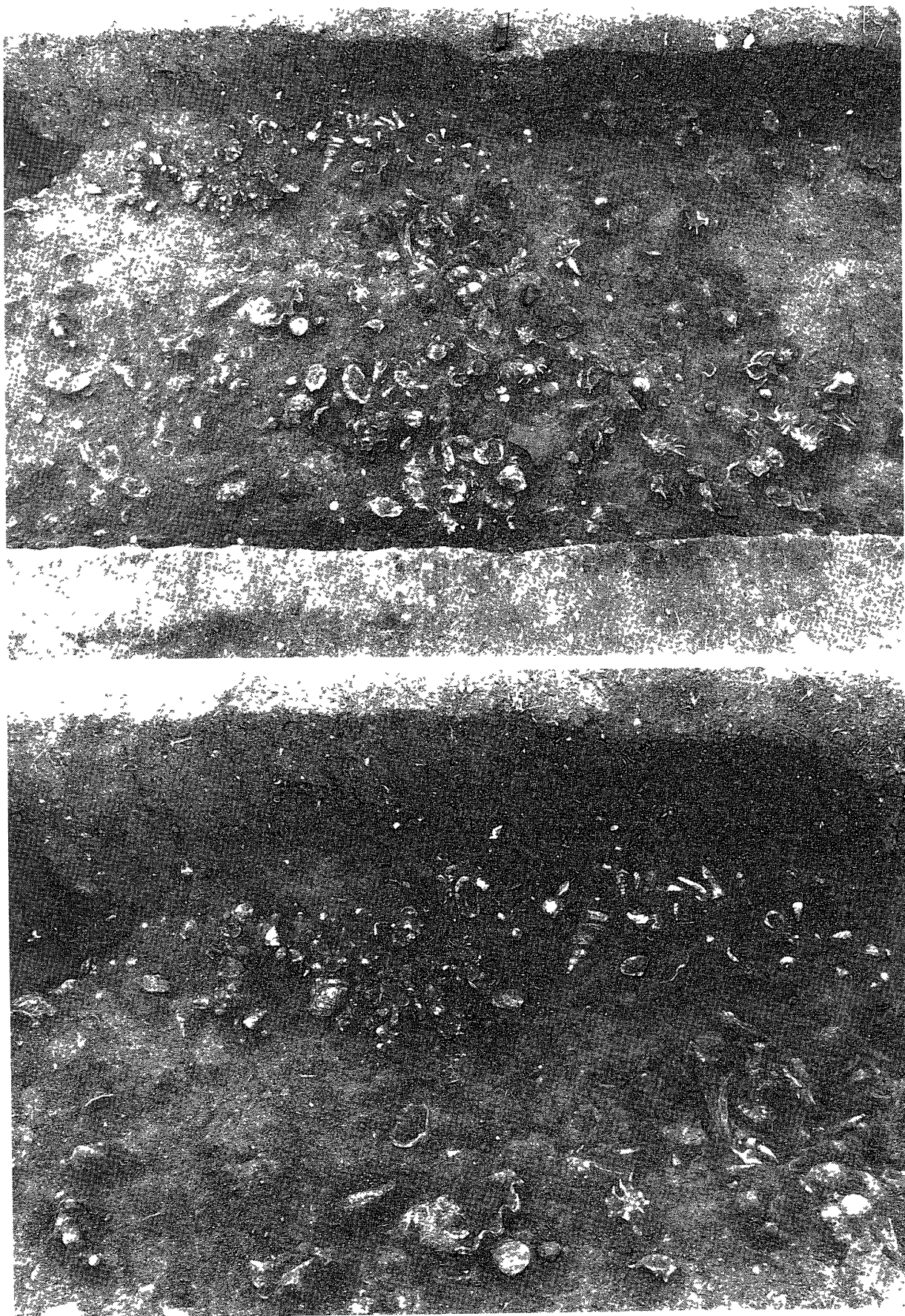
上 N~T トレンチ発掘区状況 下 N・O・P トレンチ壁面と攪乱状況



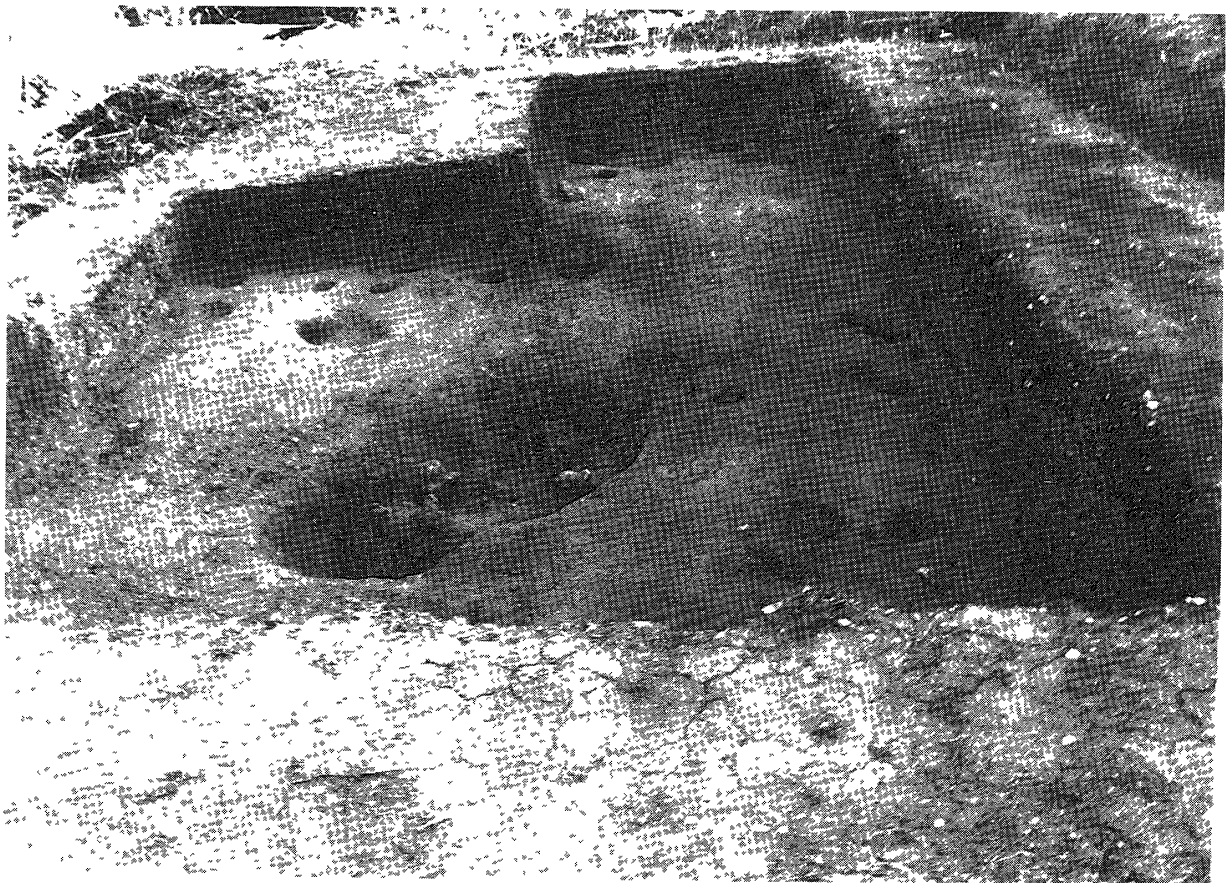
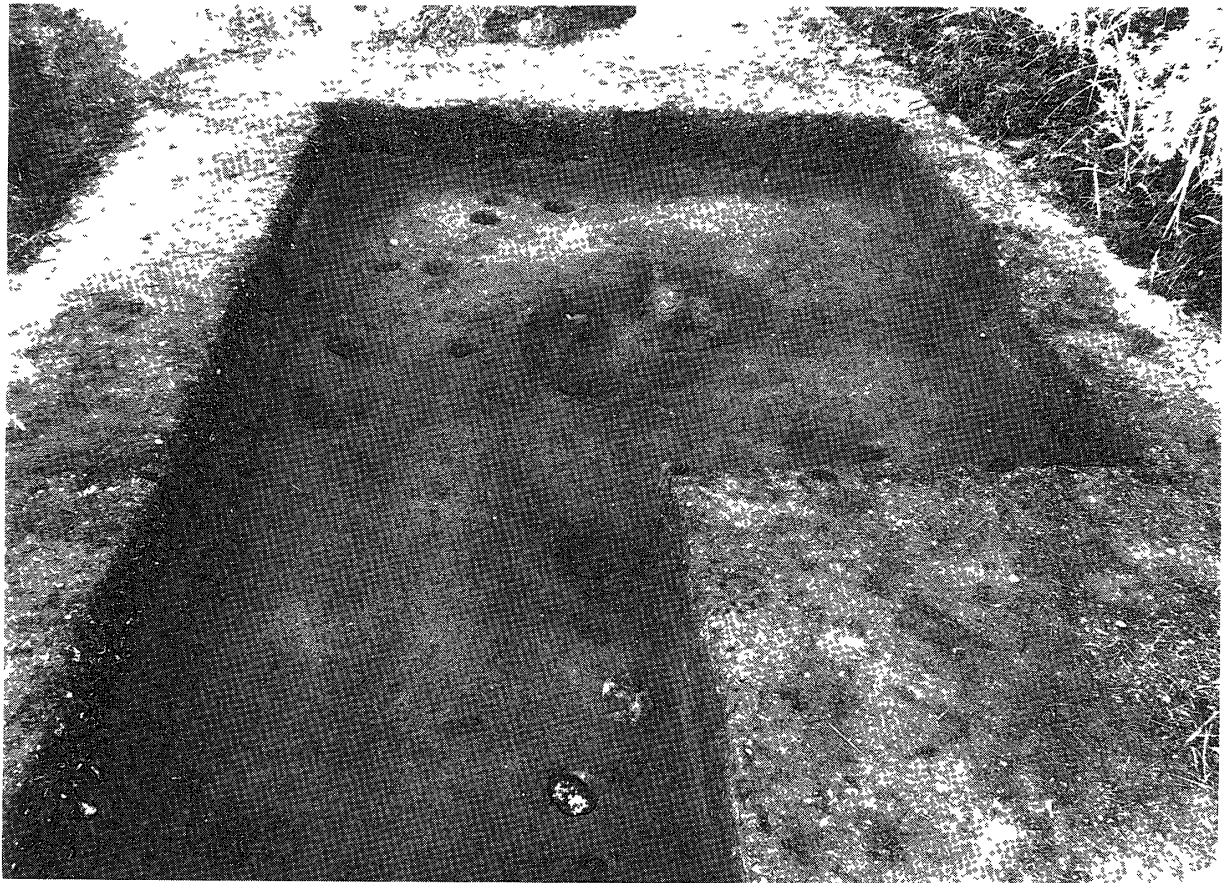
上 O トレンチ西壁面 下 O トレンチ西壁面



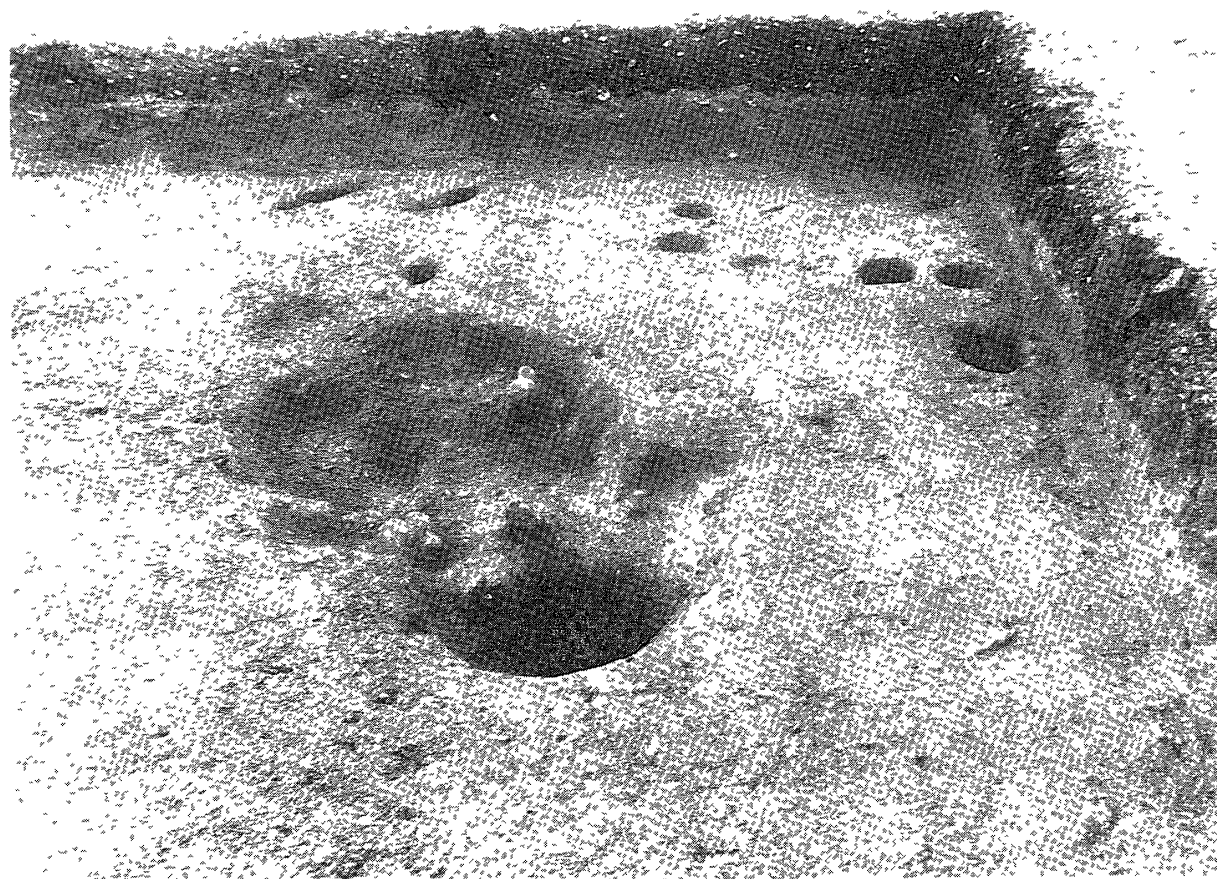
上 O・P トレンチ東壁面 下 O・P トレンチ北壁面



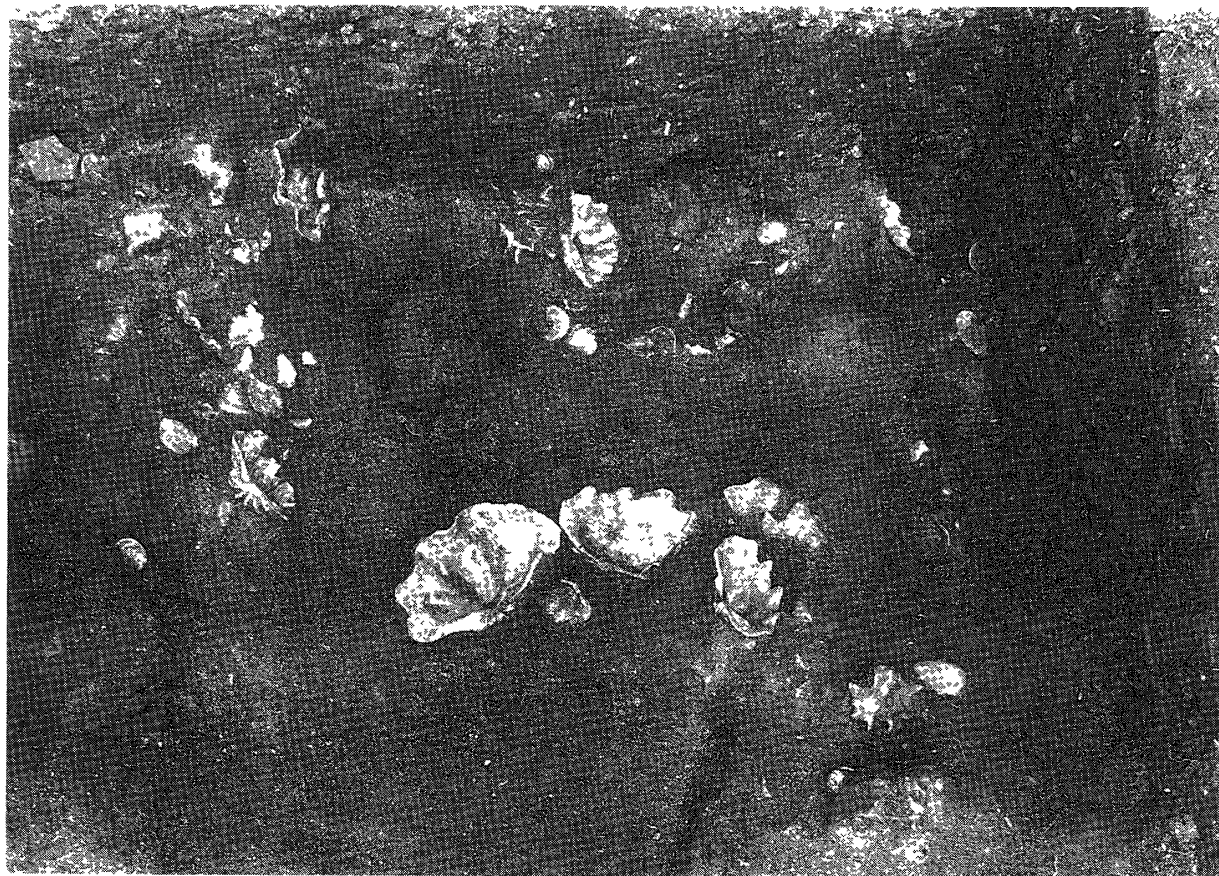
上 ○ トレンチ貝殻集中状況 下 ○ トレンチ貝殻集中状況



上 P・Qトレンチ完掘状況 下 P・Qトレンチ遺構状況（北側より）



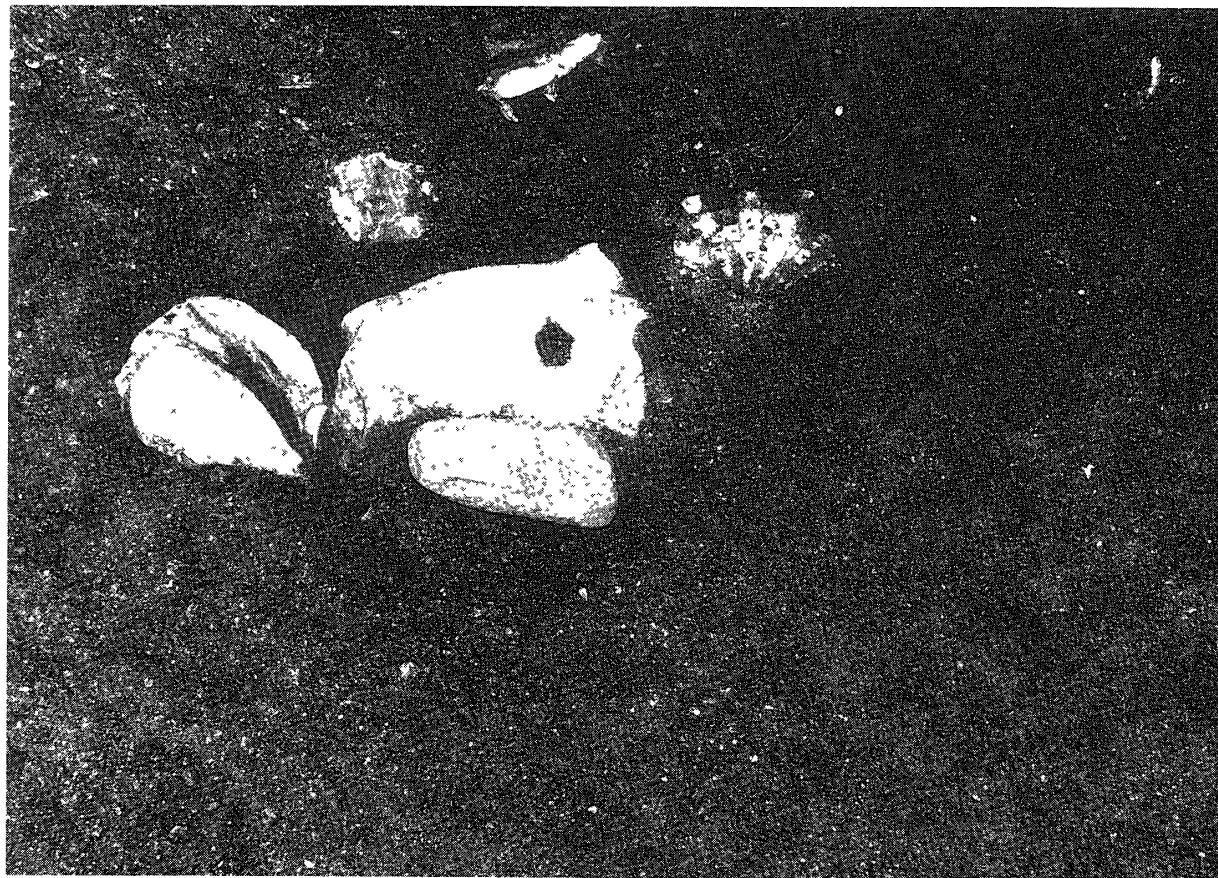
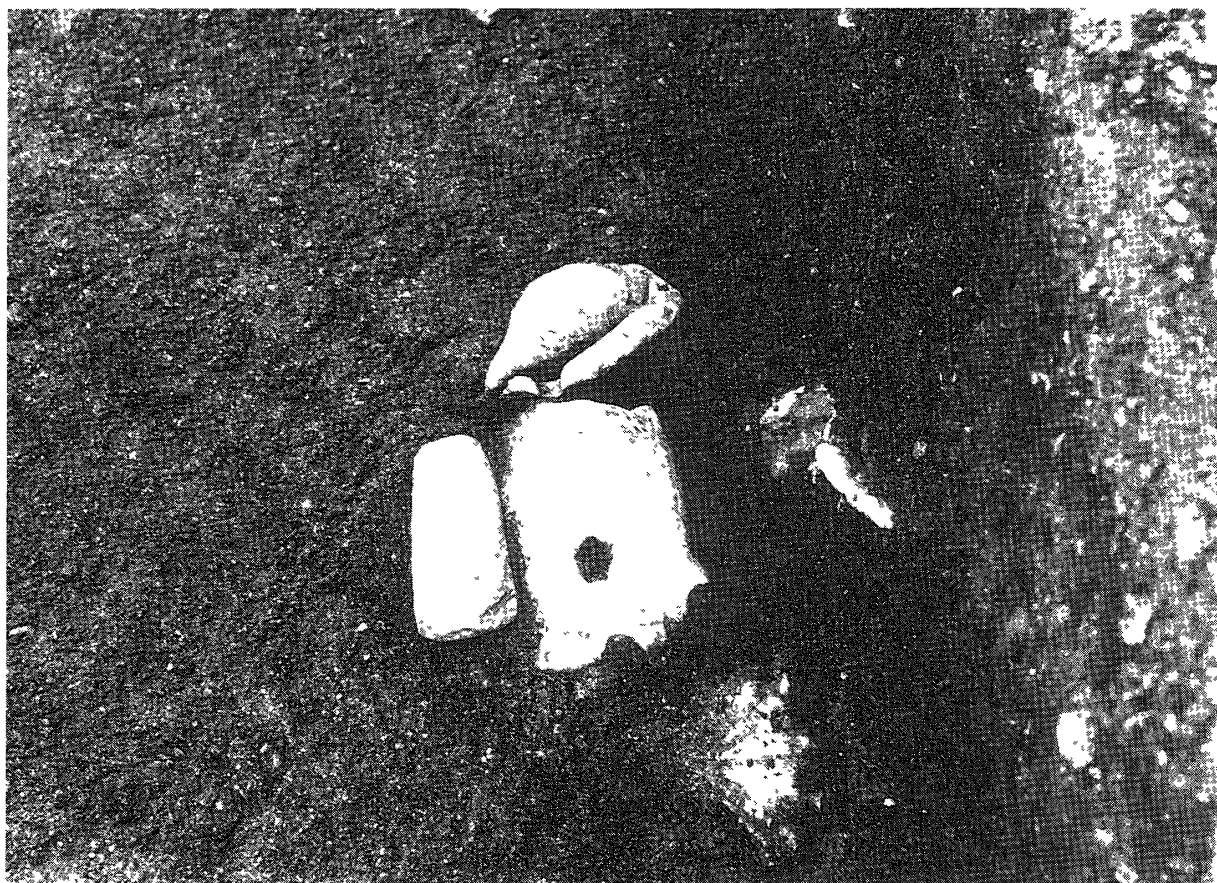
上 P・Q トレンチ遺構と周辺ピットの状況（南側より） 下 P・Q トレンチ遺構状況（東側より）



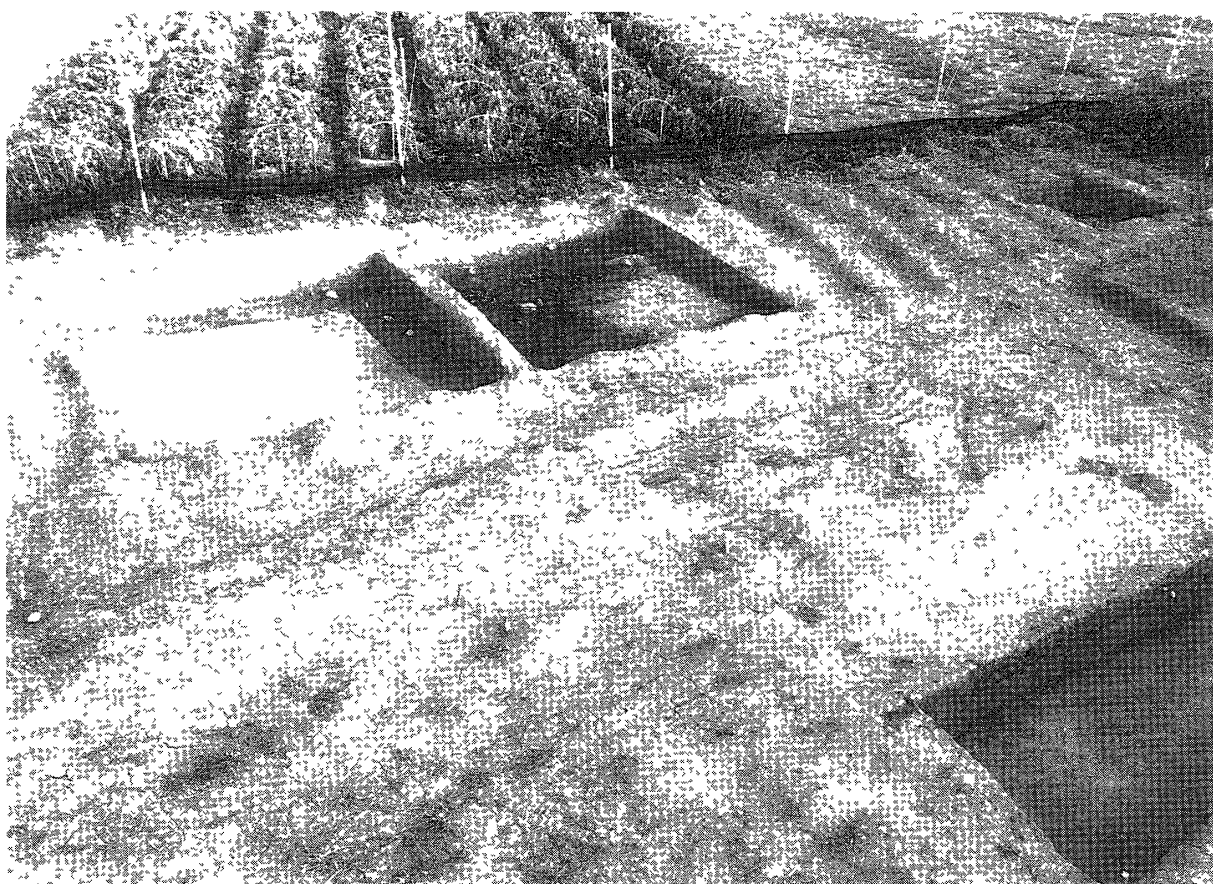
上 Pトレンチ貝殻集中状況 下 P-26クリット出土土器の状況



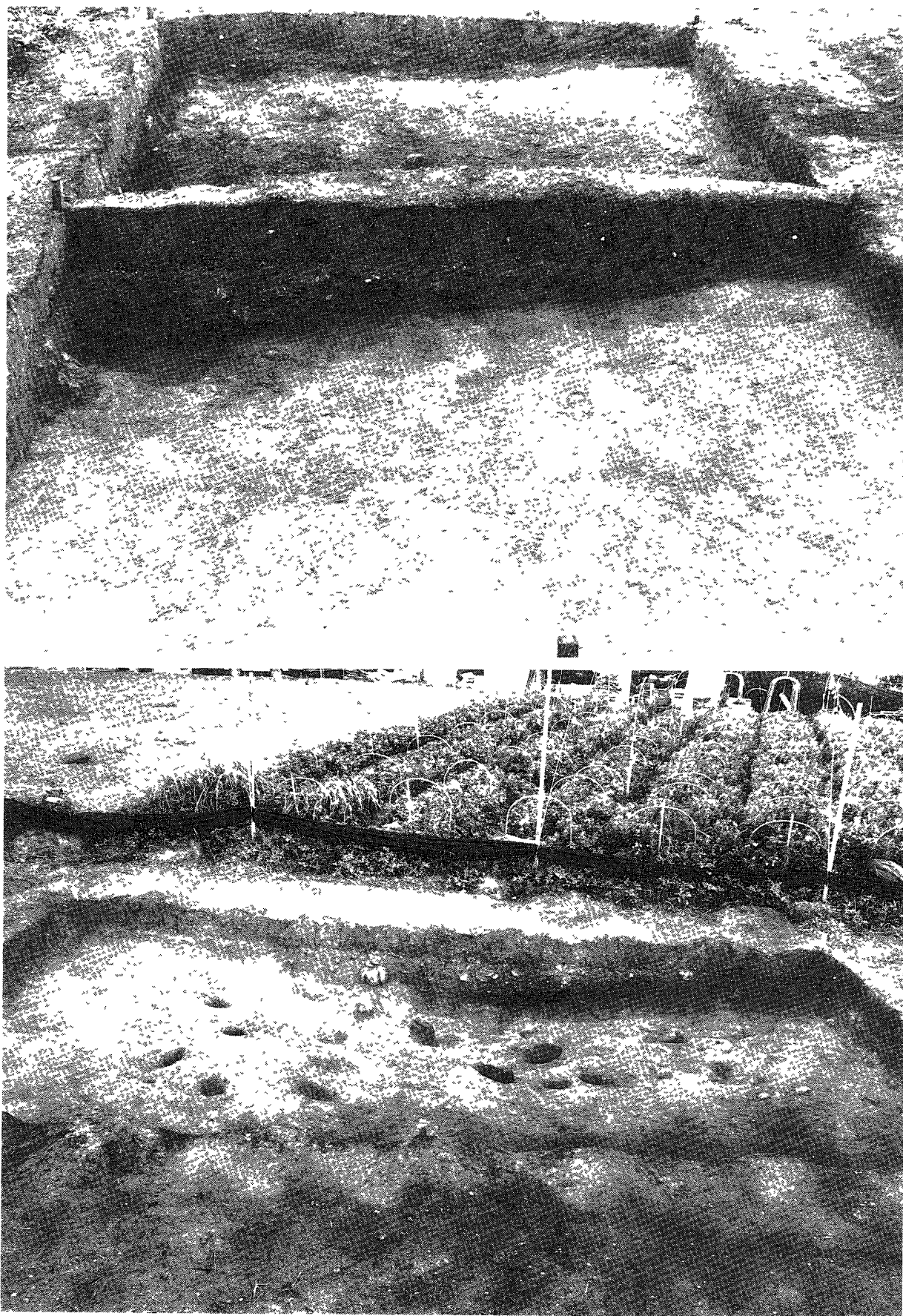
上 P-25クリット出土石斧の状況 下 P-26クリット出土石斧の状況



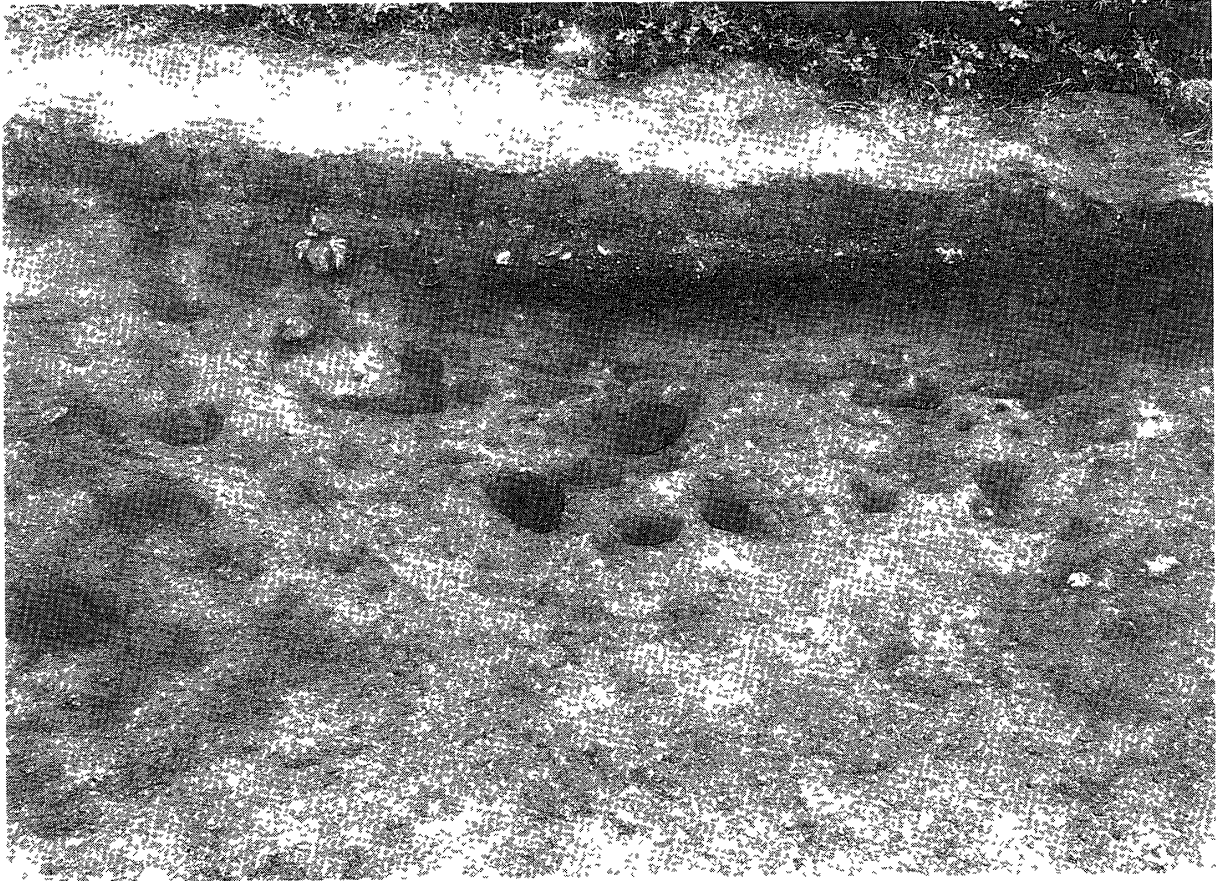
上 P-26クリット出土石斧・コホウラの状況 下 同上（南側より）



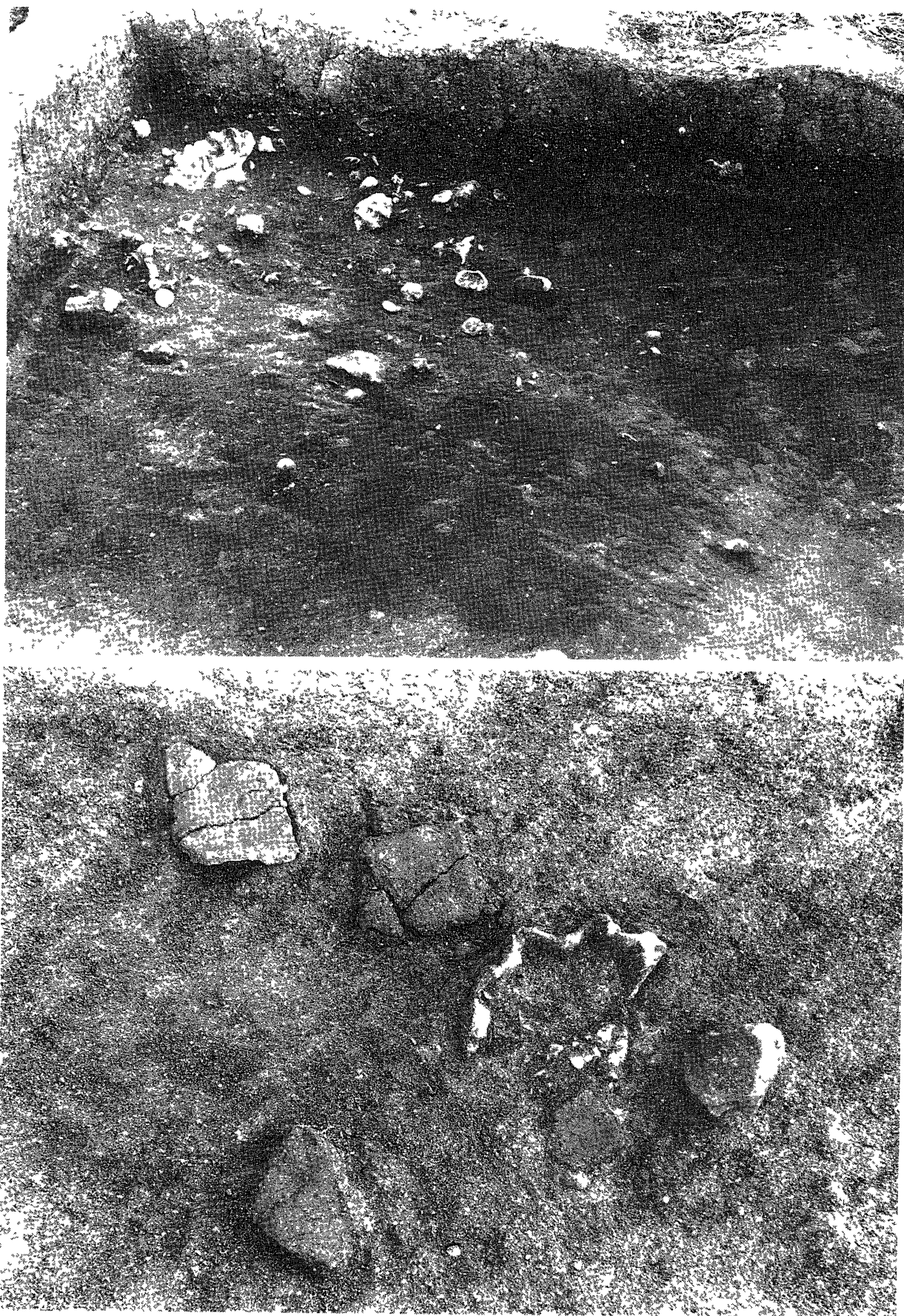
上 S・T トレンチ発掘区状況 下 S・T トレンチ完掘状況



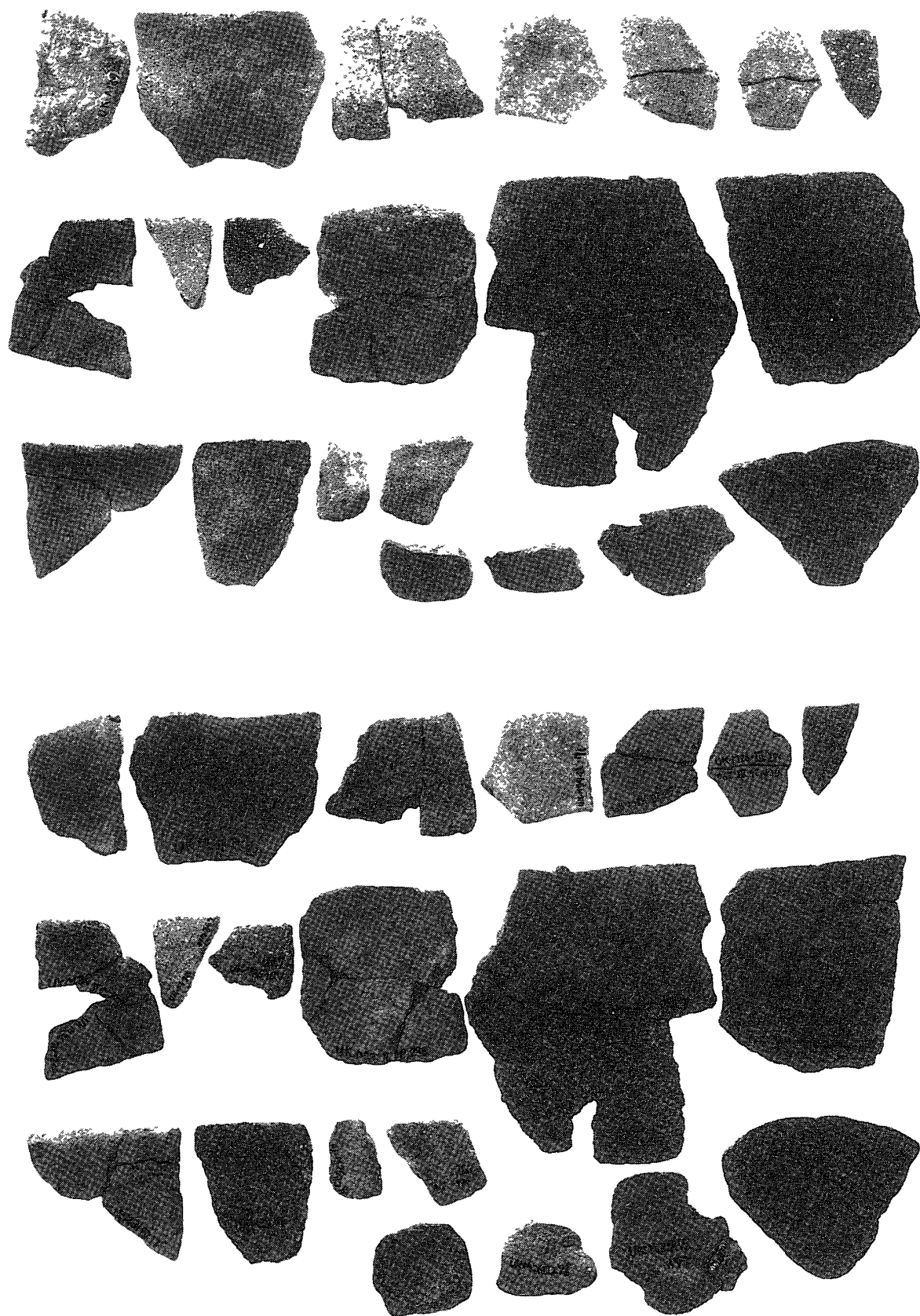
上 S・T-24クリノト南壁面 下 T-23~26クリノト東壁面



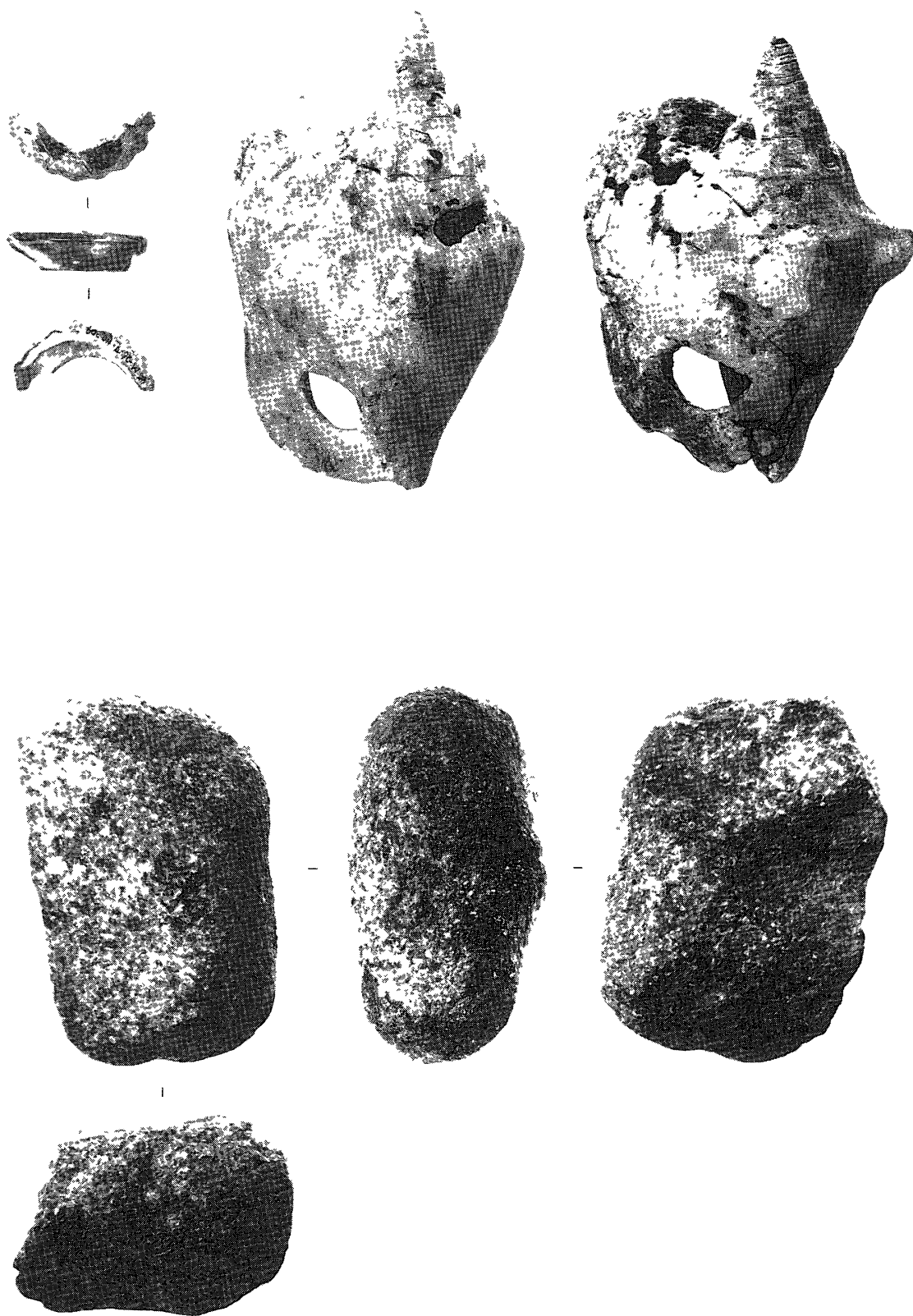
上 S・T トレンチ遺構状況（西側より） 下 S・T トレンチ遺構状況（南側より）



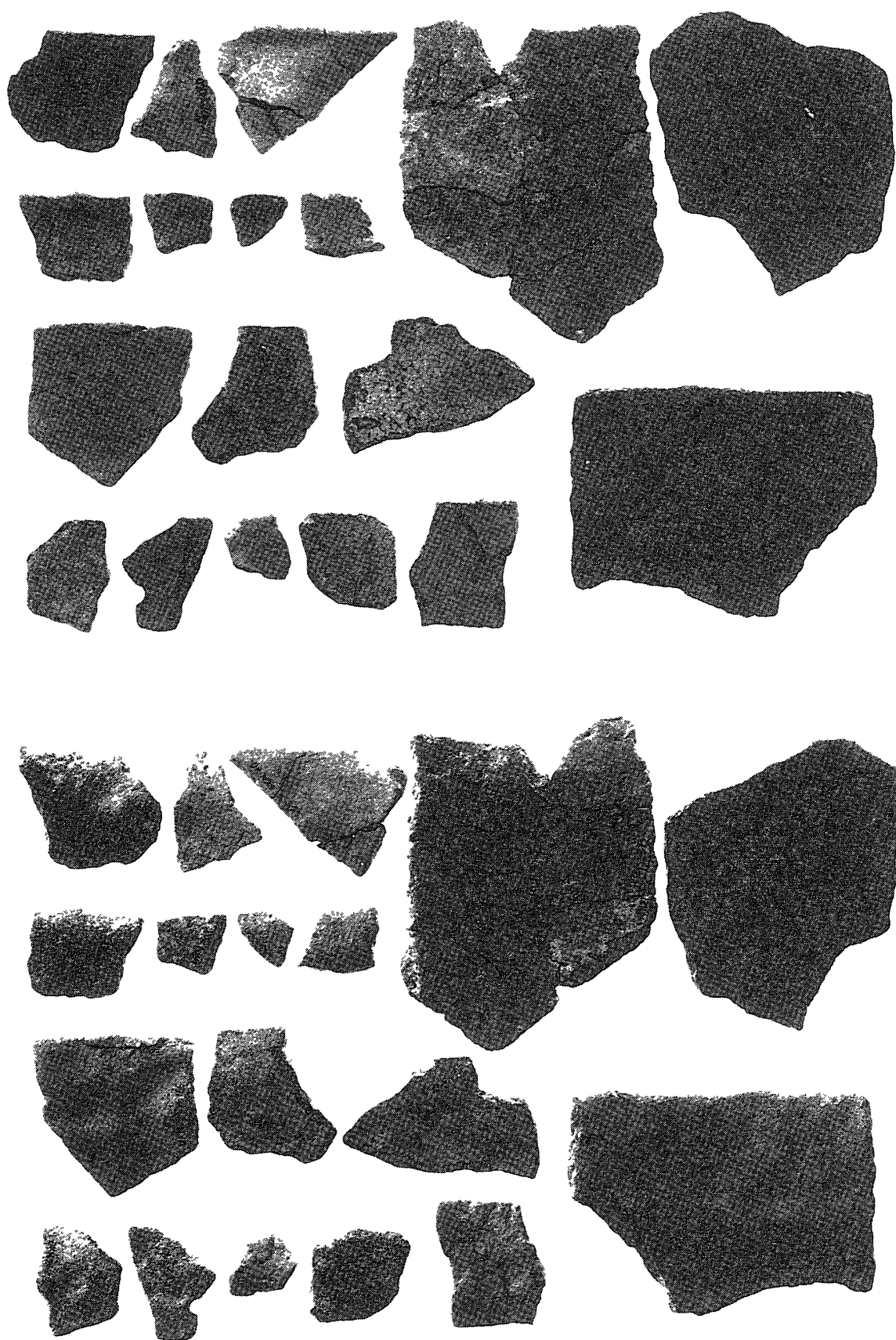
上 T-25クリノト遺構上面の貝殻集中状況 下 出土土器の状況



上 H・M トレンチ出土の土器（外面） 下 同上（内面）



上 H・M トレンチ出土の貝製品 下 N トレンチ出土の石器



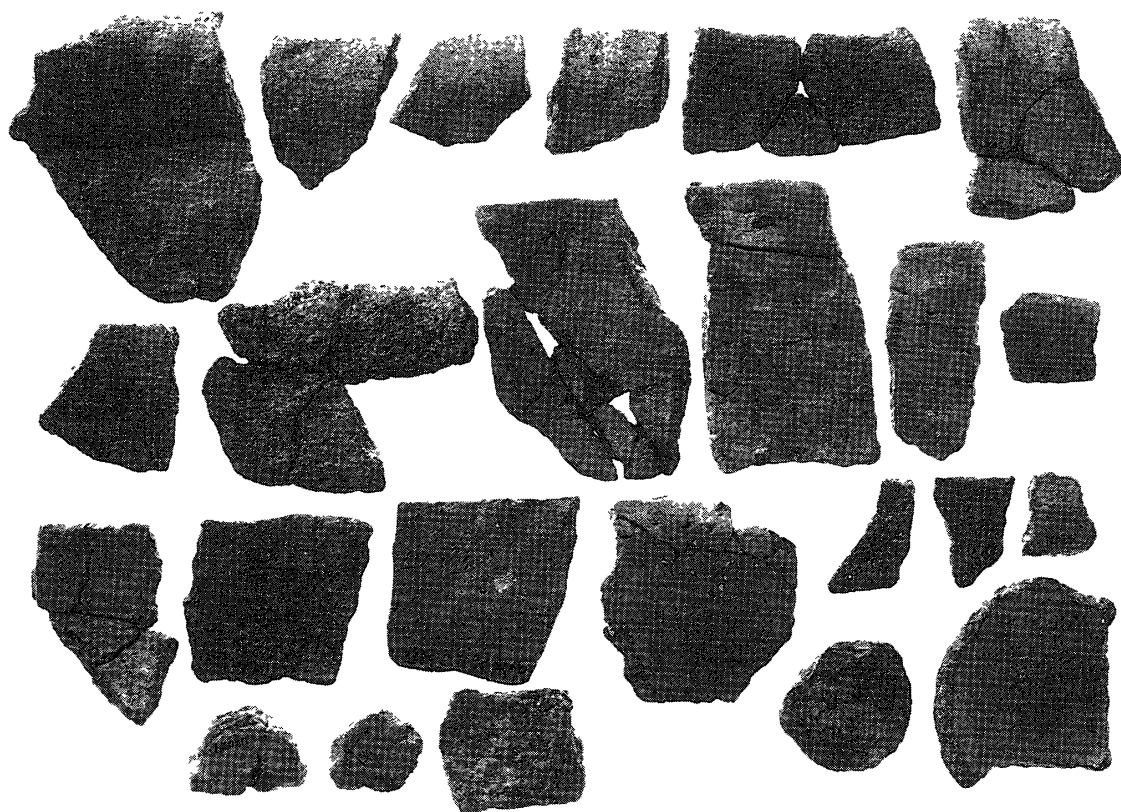
上 N トレンチ出土の土器（外面） 下 同上（内面）



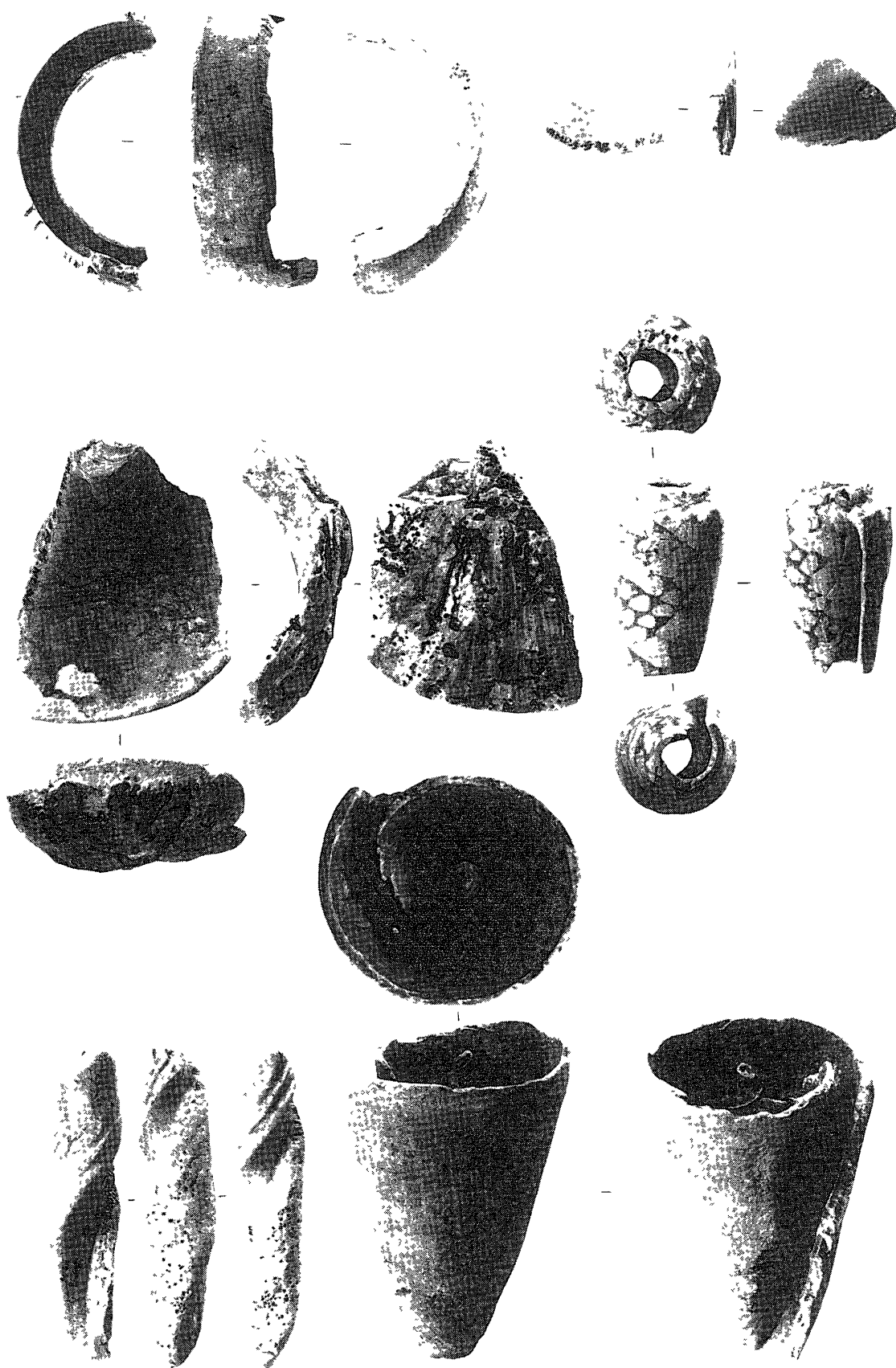
上 N トレンチ出土の土器（外面） 下 同上（内面）



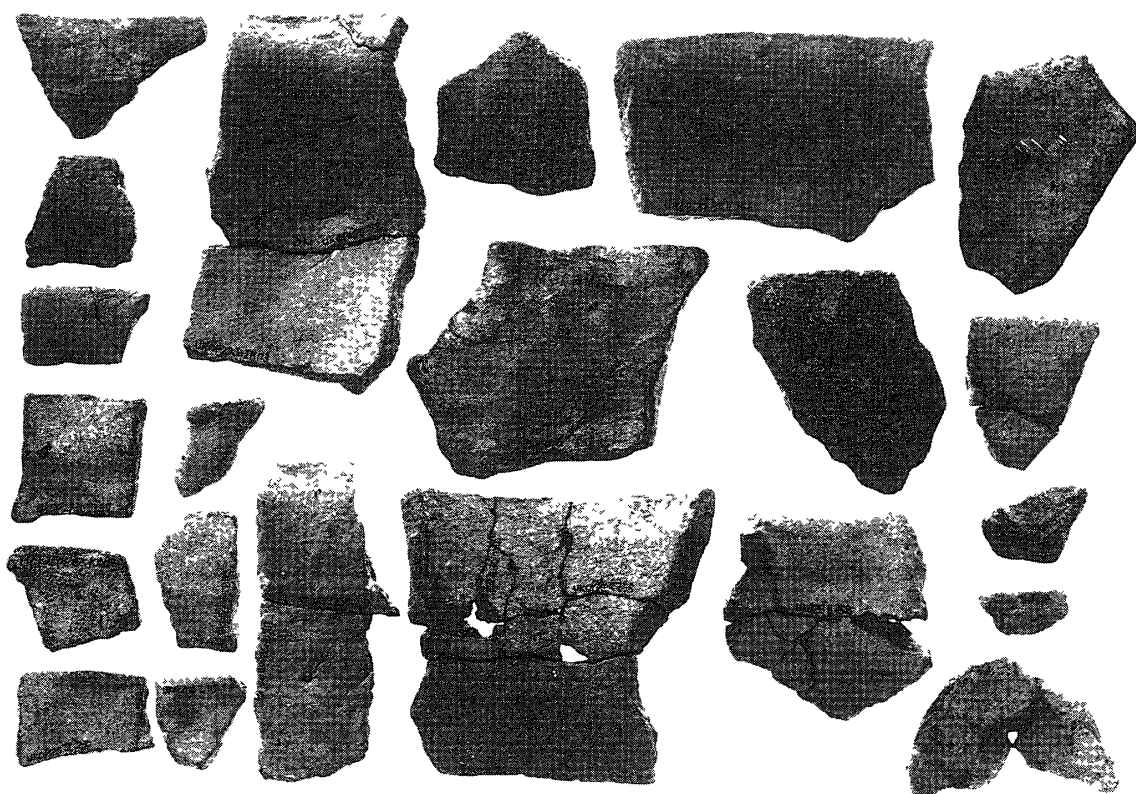
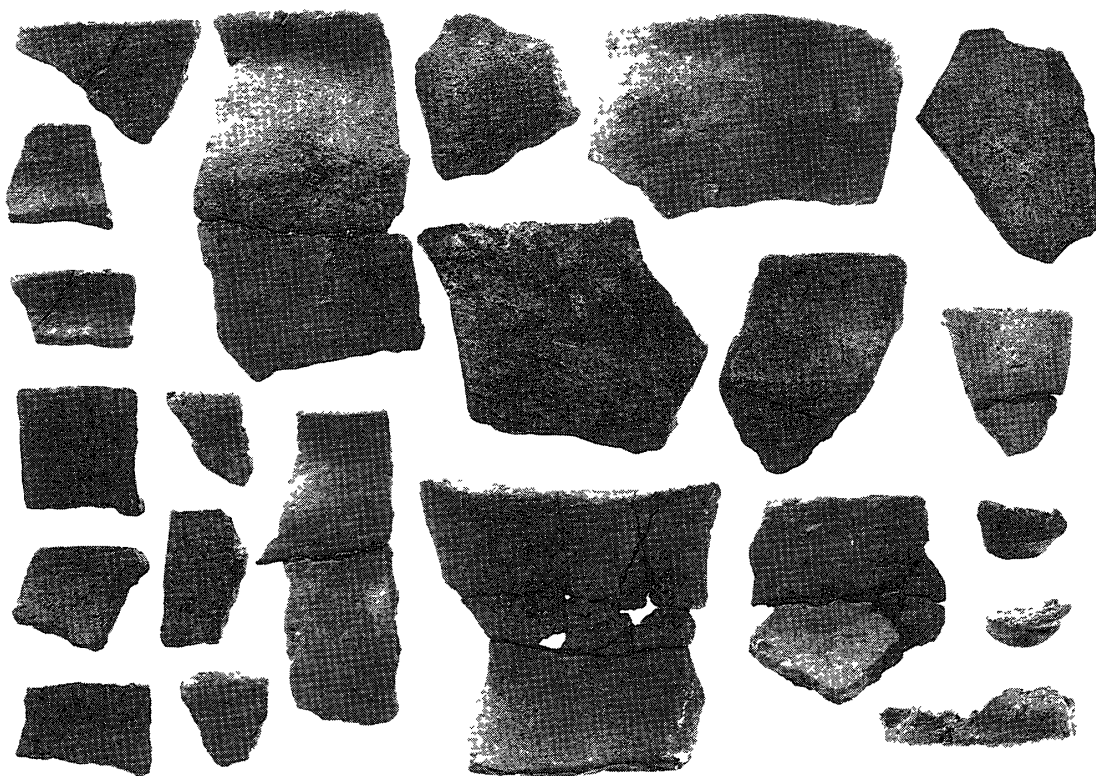
N トレンチ出土の貝製品



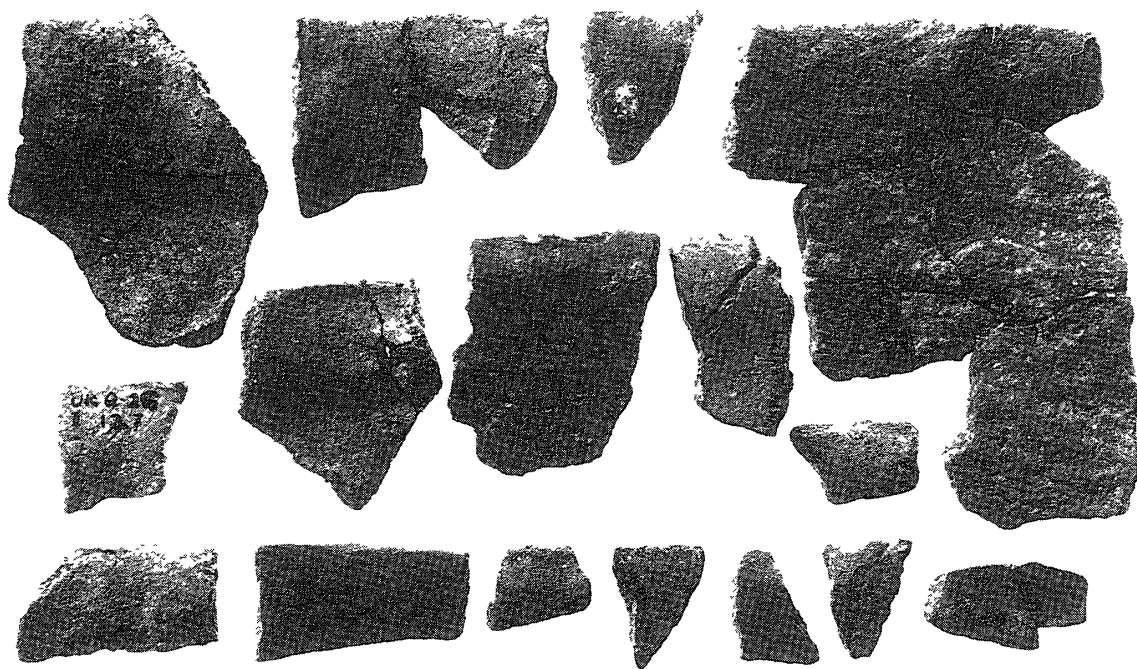
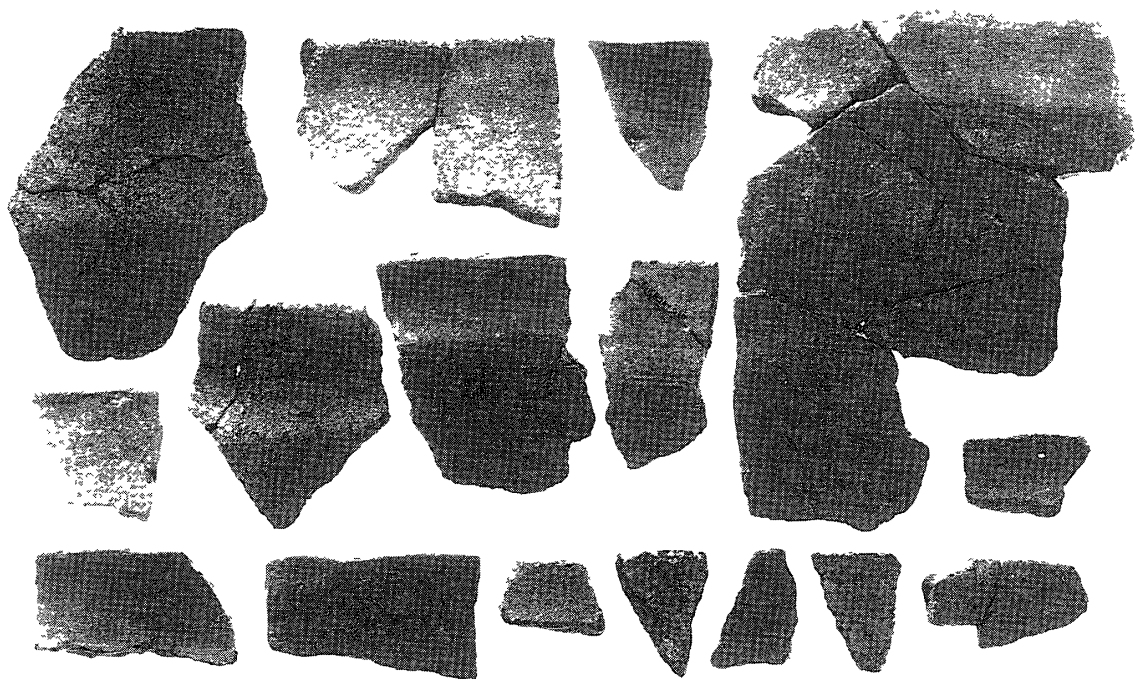
上 O トレンチ出土の土器（外面） 下 同上（内面）



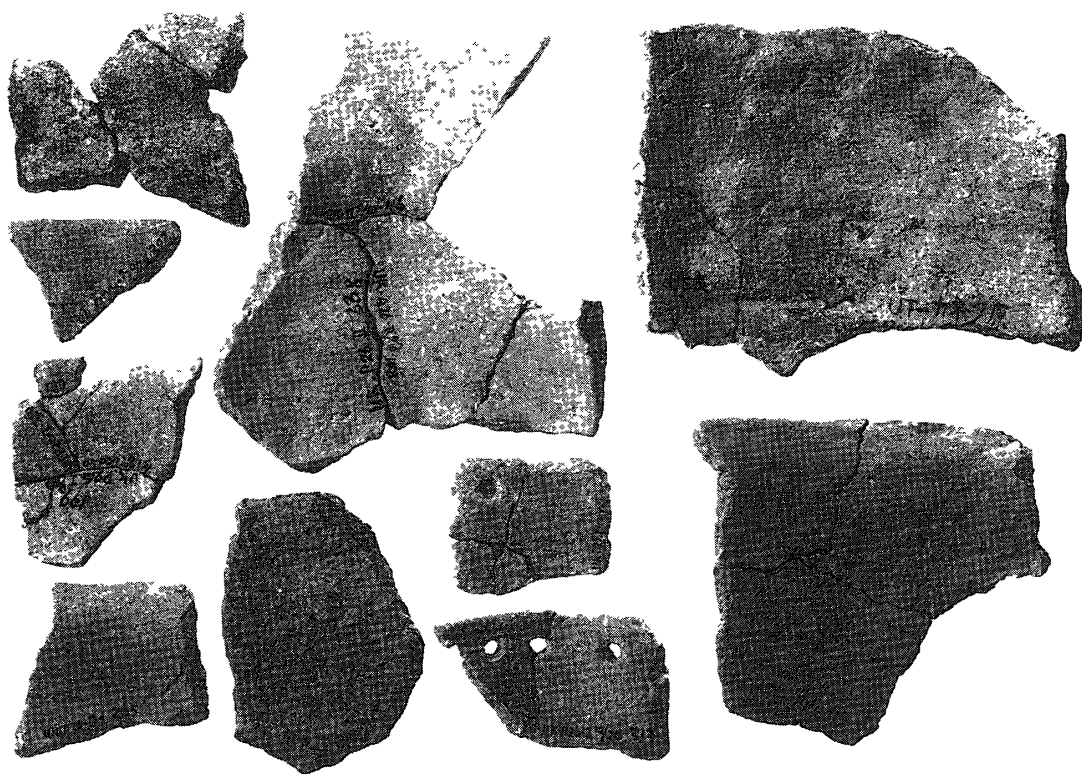
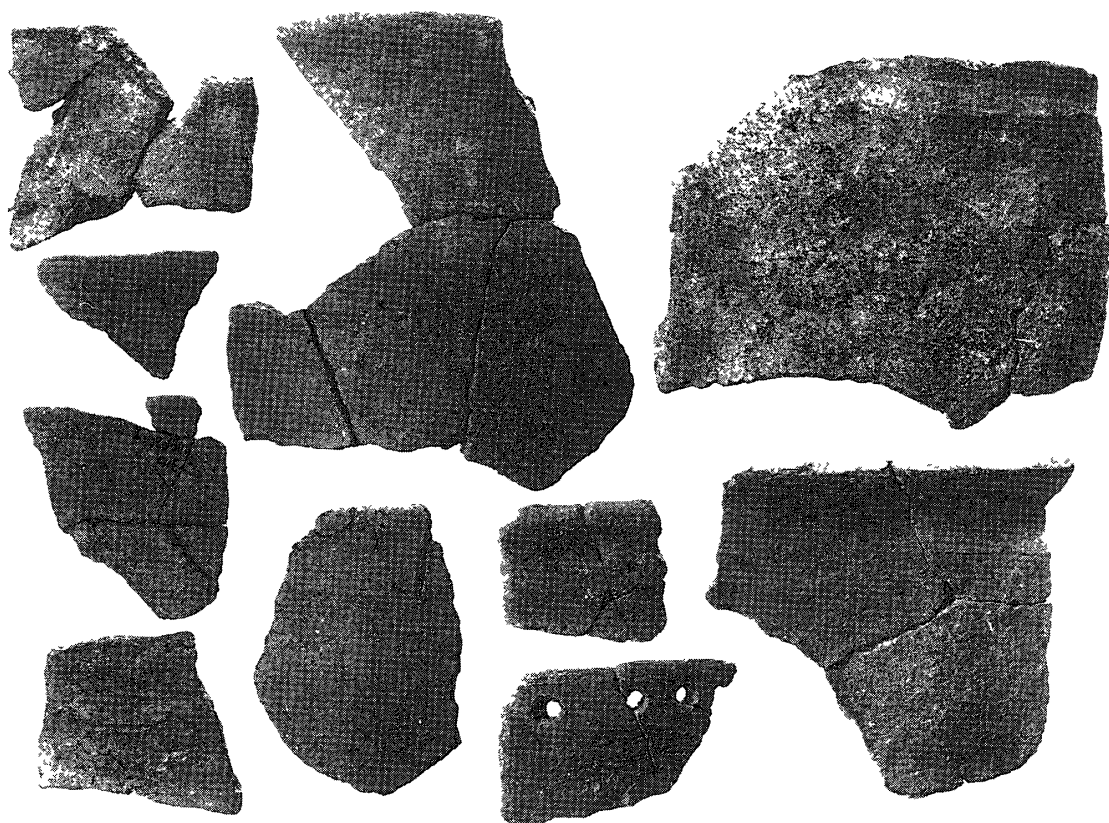
○ トレンチ出土の貝製品



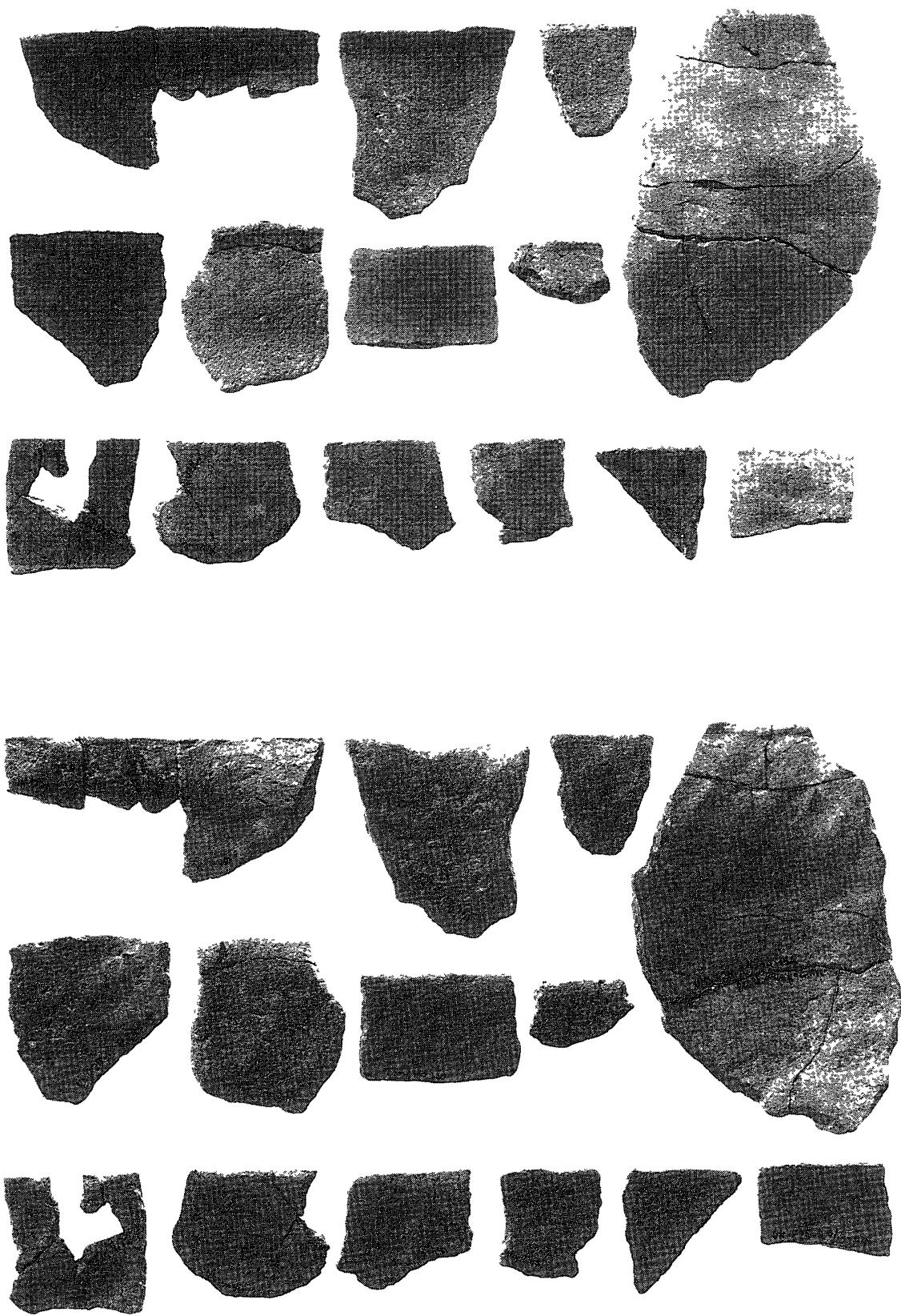
上 O・P トレンチ出土の土器（外面） 上 同上（内面）



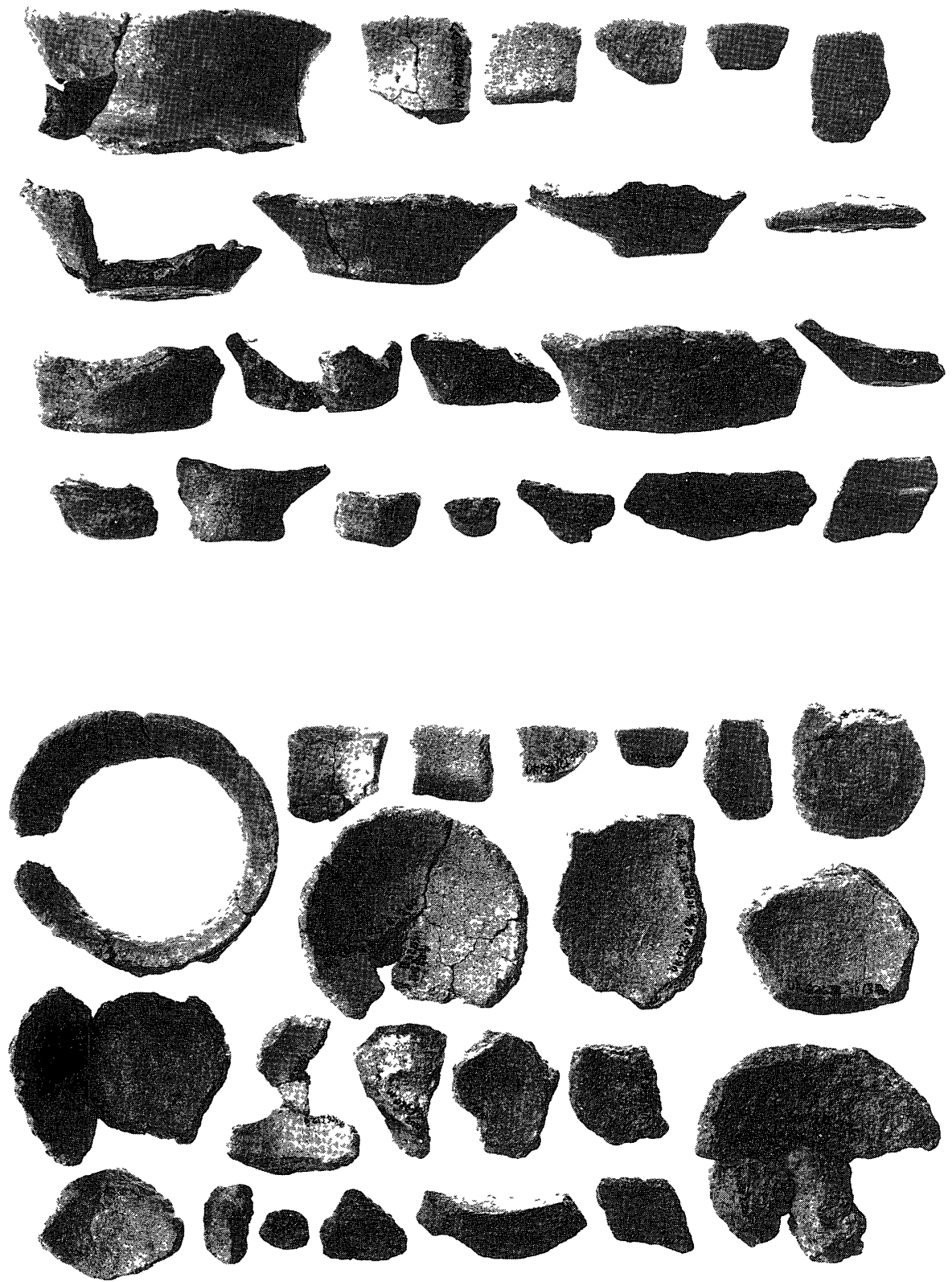
上 P・Q トレンチ出土の土器（外面） 下 同上（内面）



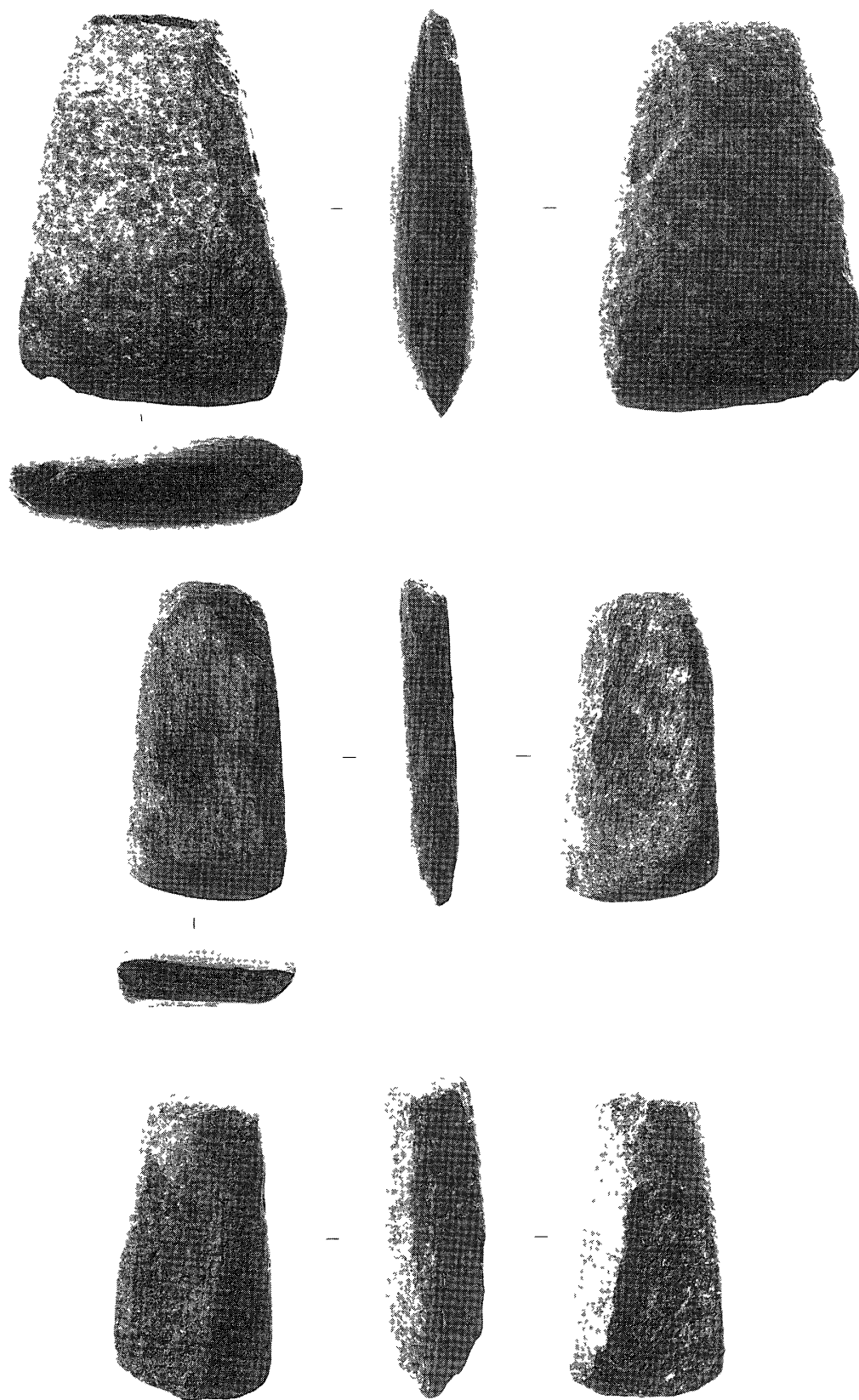
上 P・Q トレンチ出土の土器（外面） 下 同上（内面）



上 P・Q トレンチ出土の土器（外面） 下 同上（内面）



上 P・Q トレンチ出土の土器（外面） 下 同上（内面）



P・Q トレンチ出土の石器

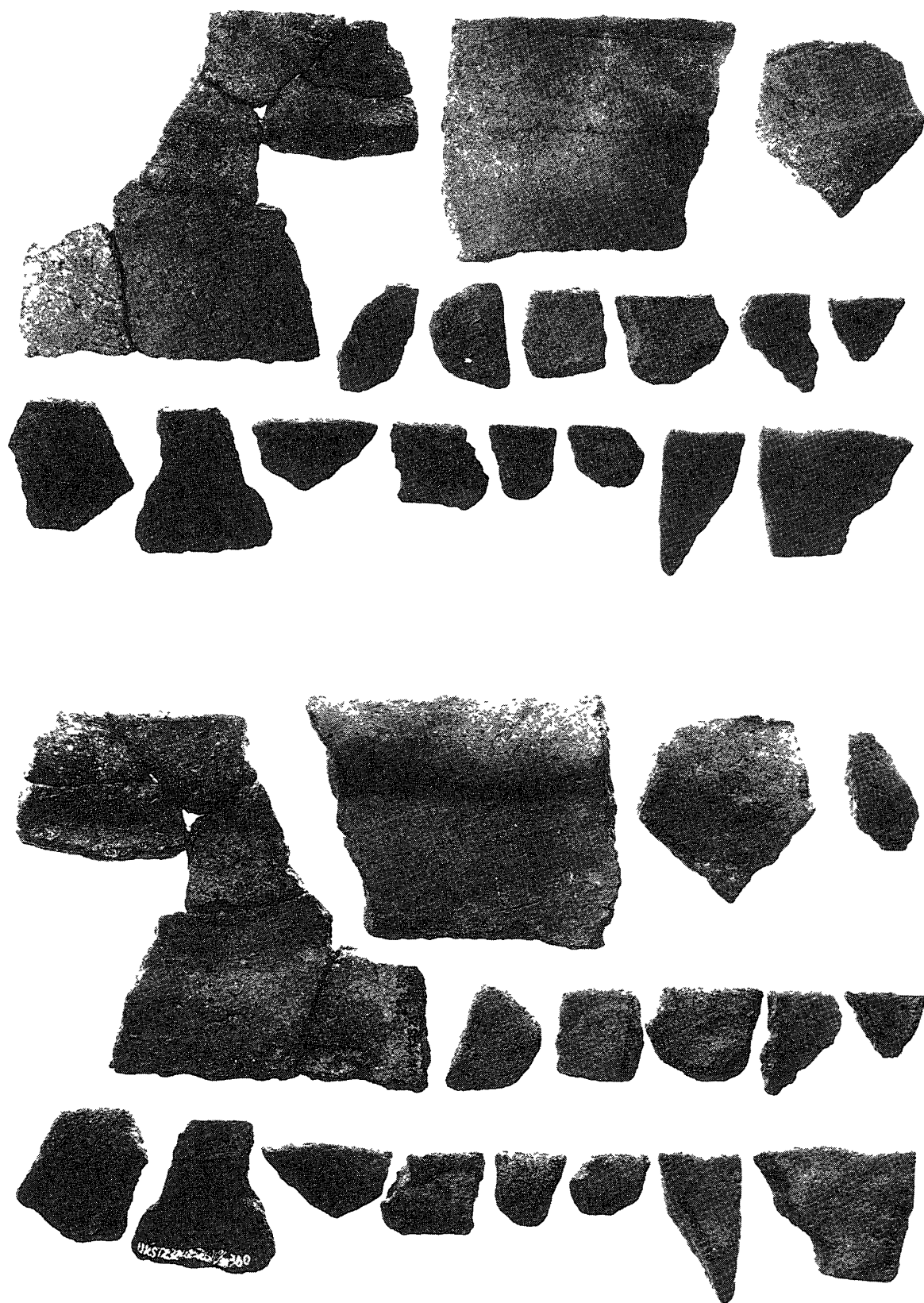


P・Q トレンチ出土の貝製品

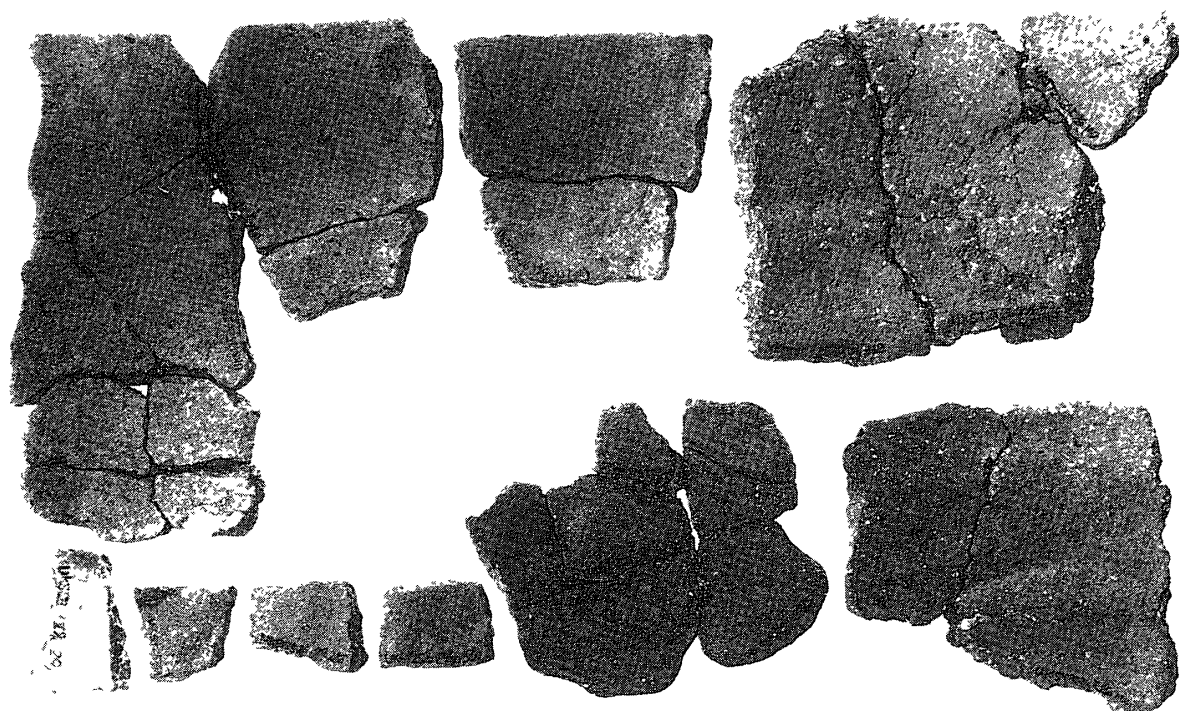
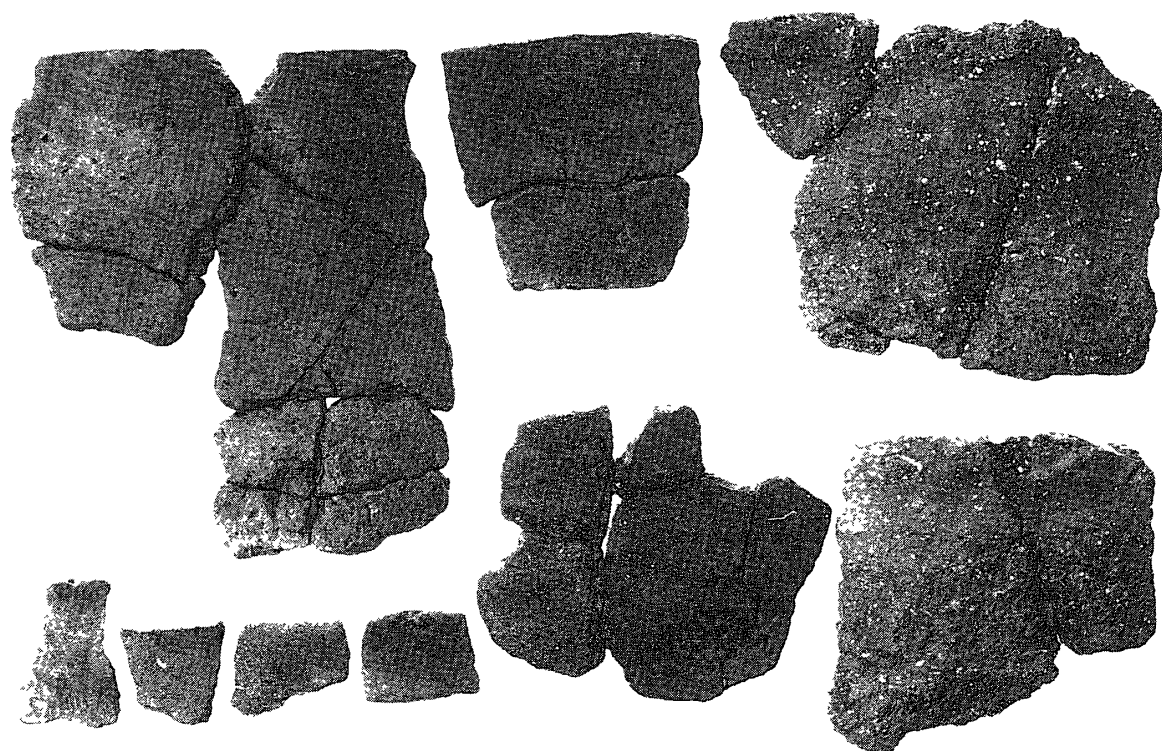


上 P・Q トレンチ出土の貝製品

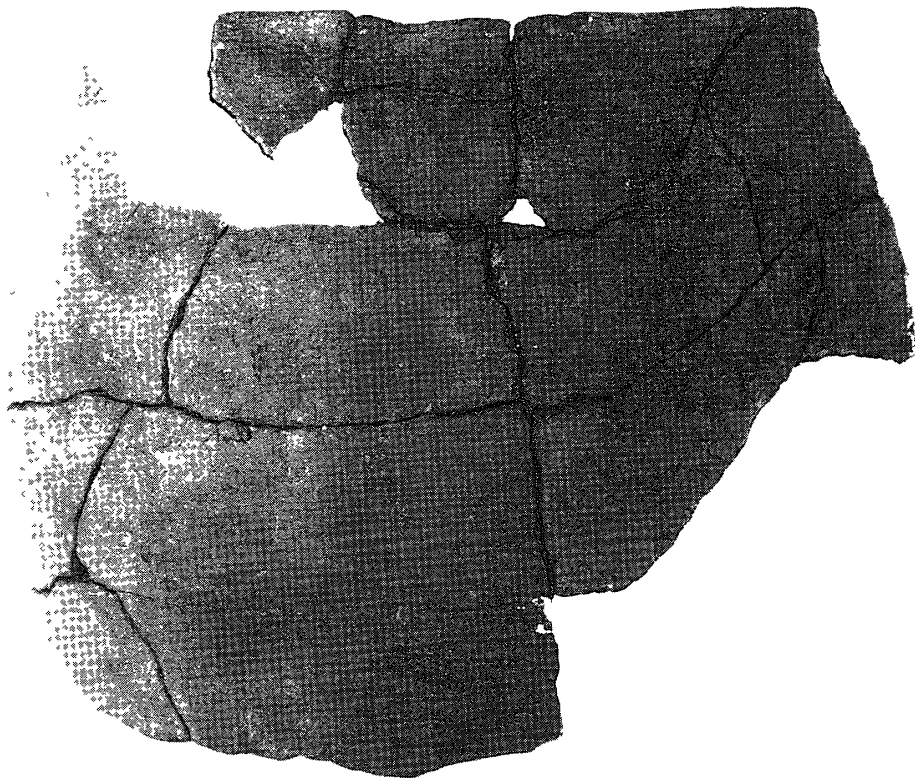
下 S・T トレンチ出土の貝製品



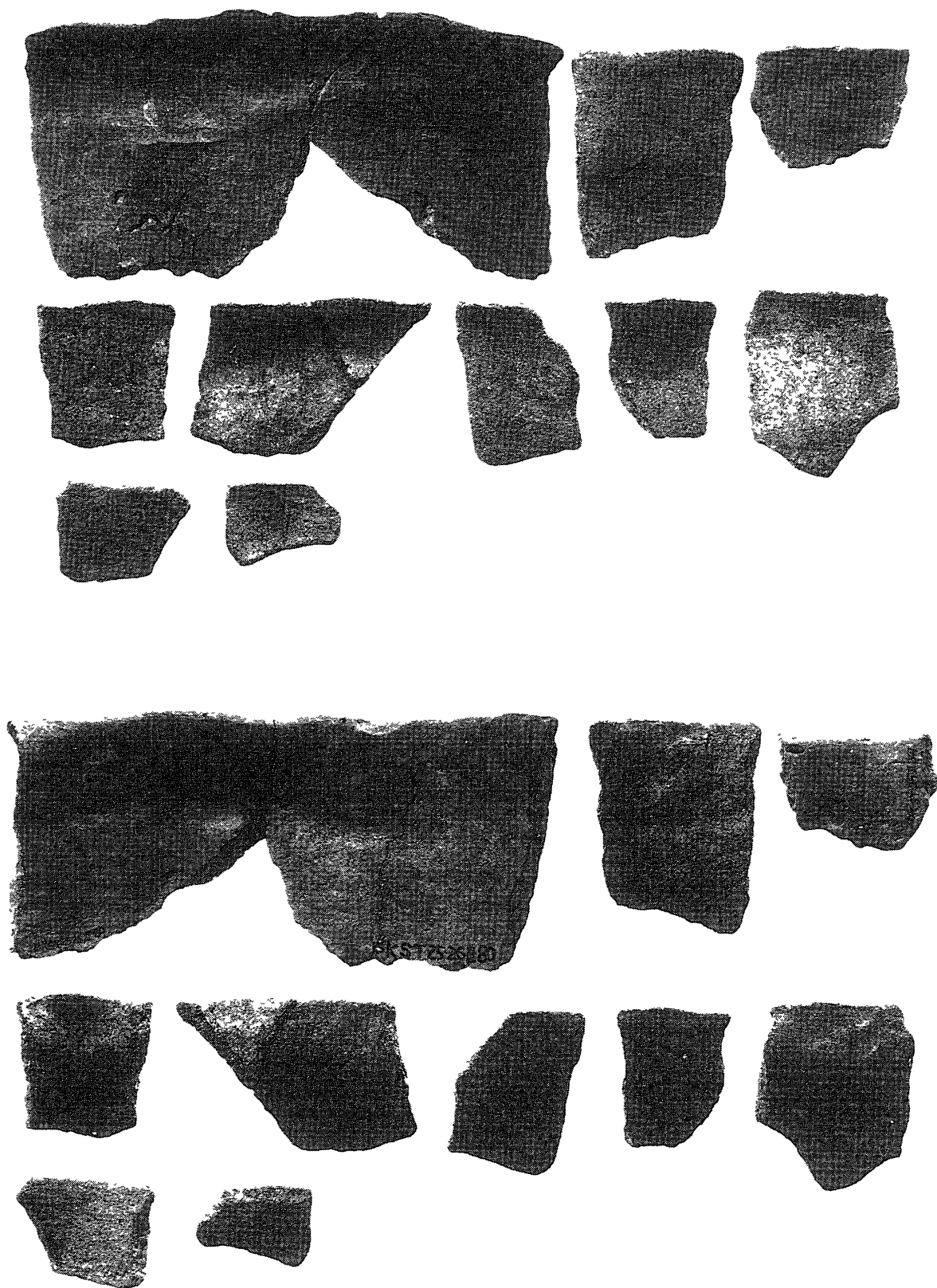
上 S・T トレンチ出土の土器（外面） 下 同上（内面）



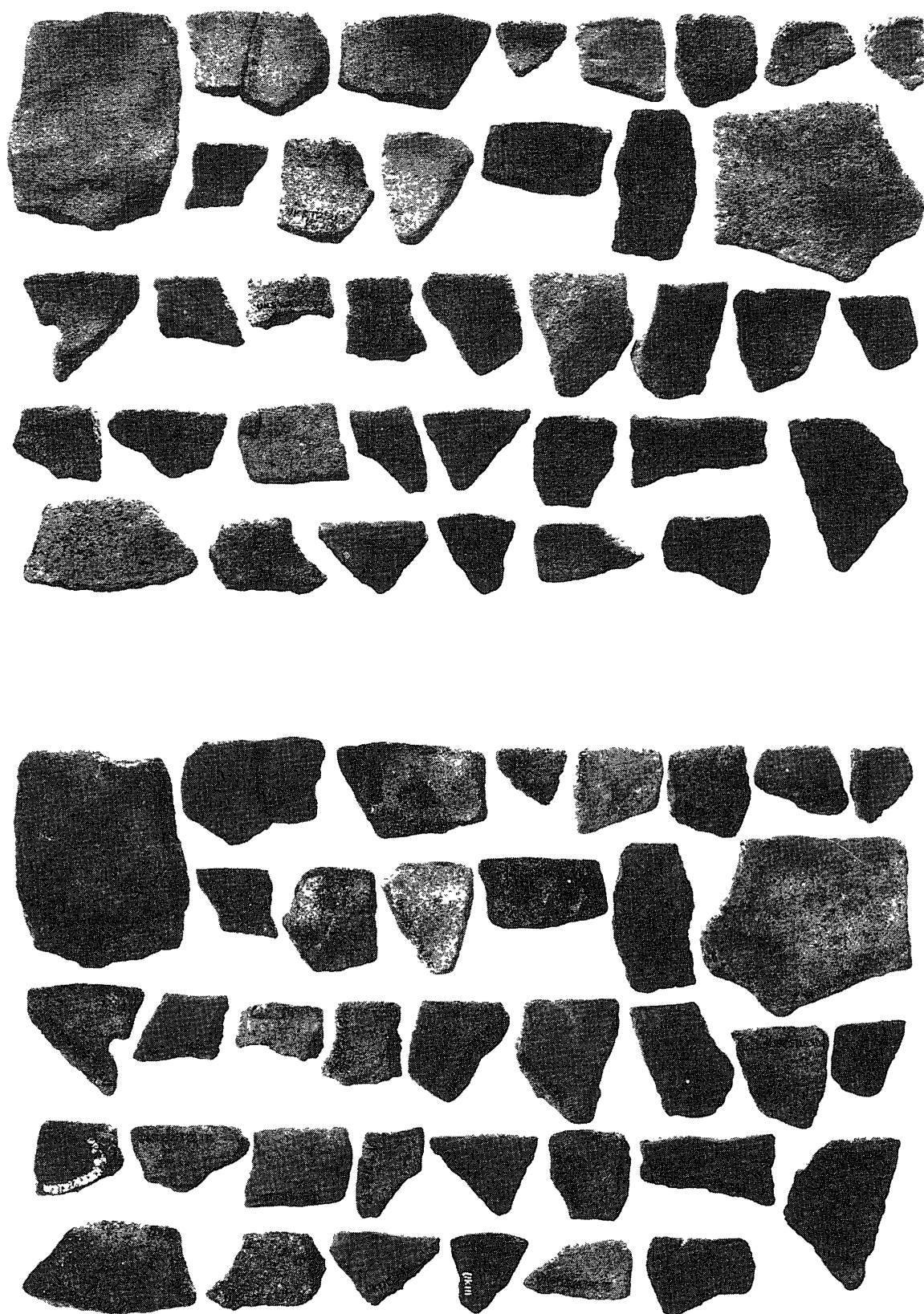
上 S・T トレンチ出土の土器（外面） 下 同上（内面）



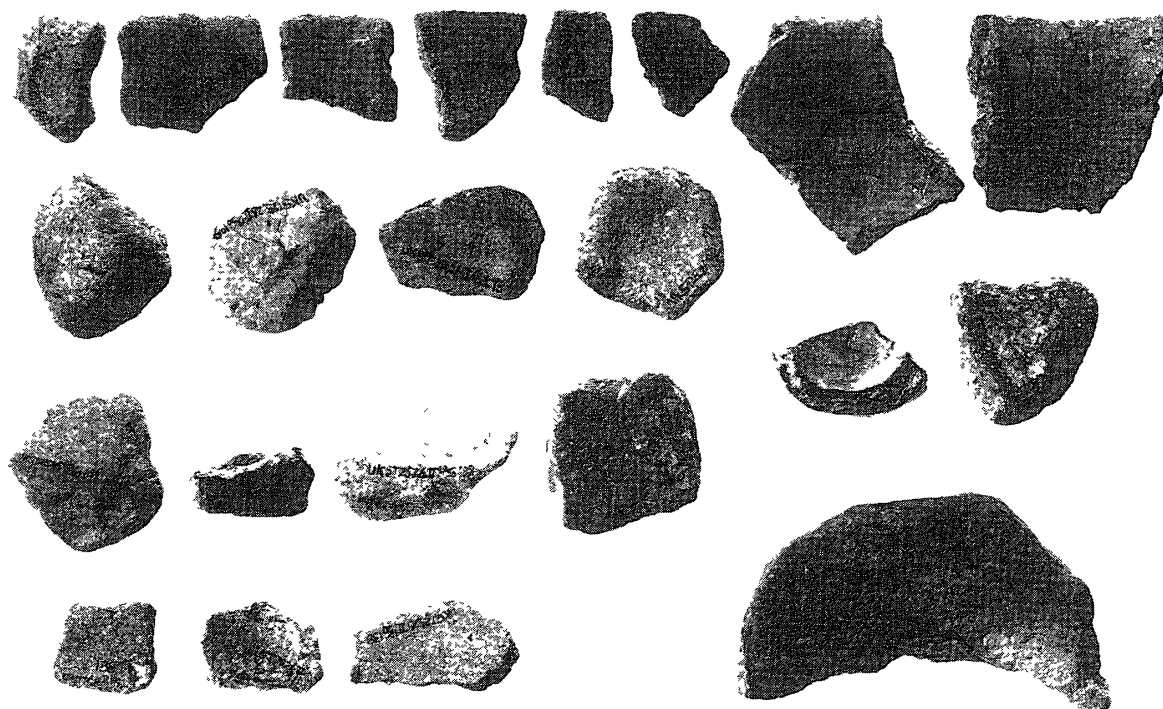
上 S・T トレンチ出土の鉢Ⅰ類A土器 下 S・T トレンチ出土の鉢Ⅱ類C土器



上 S・Tトレンチ出土の土器（外面） 下 同上（内面）

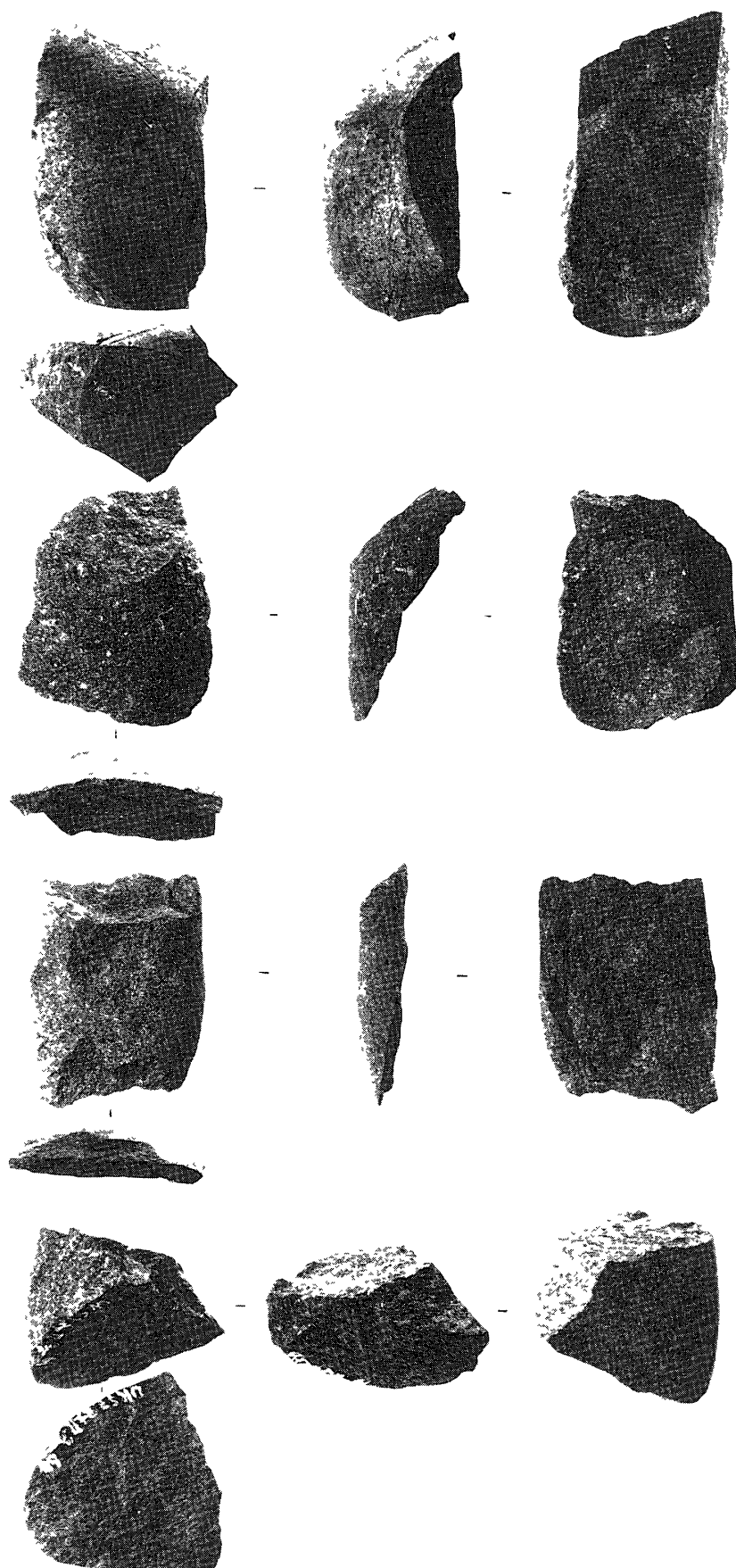


上 S・Tトレンチ出土の土器（外面） 下 同上（内面）



上 S・T トレンチ出土の土器（外面）

下 同上（内面）



S・T トレンチ出土の石器



S・Tトレンチ出土の貝製品